

西山ノ上遺跡(1・2次調査)

福岡県八女市大字室岡所在遺跡の調査報告書

八女市文化財調査報告書 第70集

2004

八女市教育委員会

序

八女市の西部、室岡丘陵を中心とした周辺地域には数多くの弥生時代の遺跡が所在しており、その様相はさながら弥生の街並と言っても過言でない状況のようです。

室岡丘陵における本格的な発掘調査の開始は古く、昭和38年の亀ノ甲遺跡に始まります。亀ノ甲遺跡は、福岡県教育委員会・八女市教育委員会・九州大学考古学教室が主体となって調査が行われており、弥生時代の環濠や墳墓が多数発見され脚光を浴びた遺跡です。

この台地の重要性が内外に知れ渡った最初の発見でした。

その後も農地の地下げや住宅の建設等により小規模な発掘調査が幾度か行われ、ほぼ台地全域に遺跡が広がっている事が確認されました。

しかし近年、市内の各種開発は中心域の商業地だけではなく、市西部の当台地周辺にまで押し寄せて来ており、私たちを取り巻く環境が一段と慌ただしくなった昨今の状況の中、このまま貴重な遺跡を現状で保存してゆくのは非常に困難な事であり、八女市教育委員会では現在、事業地における事前発掘調査を行い、遺跡を記録として保存し後世に伝えていく事業を行っています。

今回、発掘調査を実施した西山ノ上遺跡（1次・2次調査）は室岡遺跡群として周知の遺跡ではありましたが、内容について白紙に近い状況でしたので発掘調査を行いました。

詳細な経過や調査結果の内容につきましては本文の項に譲りますが、予想を上回る大きな成果がありました。その成果を一冊の冊子としてまとめるにあたり、本報告書が当該遺跡、そして八女市にある全ての文化財に対する、愛護の心を育む一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本調査に格段のご協力をいただきました（株）大石茶園様をはじめ、地元の町内会や住民の皆様には並々ならぬご理解と心からの応援を戴きました。

深く御礼を申し上げますとともに、今後の文化財行政につきまして、これまで以上の暖かいご声援を賜われますよう重ねてお願い申し上げます。

平成16年3月31日

八女市教育委員会

教育長 中島清志

例 言

- 1 本書は八女市教育委員会が、株式会社 大石茶園 代表取締役社長 大石剛司より委託を受けて八女市教育委員会が実施した八女市大字室岡に所在する弥生時代後期を中心とした西山ノ上遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が主体となり実施した。
又、発掘現場における調査は13年度（1次調査）・14年度（2次調査）に行い、整理作業及び報告書作成については平成15年度に一括して行った。
- 3 発掘調査で検出した各遺構は、その種類毎に記号を付し、堅穴式住居（又は建物）及び堀立柱建物をSB、溝状遺構をSD、土壇をSK、ピットをSP、周溝状遺構や不明遺構をSXと表記した。
- 4 本書に使用した測量図の作成は国土地理院の設定する第Ⅱ座標系を基準とし、大塚を中心に参加者で分担して行った。各種測量図の浄書、及び、出土遺物の実測図作成・浄書は岩戸山歴史資料館において行った。
- 5 本書に使用した写真は、空中写真を（有）空中写真企画に委託した。遺構については現地で大塚が撮影し、出土遺物の撮影は岩戸山歴史資料館において大塚が行った。
- 6 本書使用の方位については、全て磁北である。
- 7 本書の執筆は、Ⅵを（株）九州テクノリサーチの大澤正己氏が行い、その他を大塚が行った。
また、本書の編集は大塚が担当した。
- 8 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は、現在八女市の岩戸山歴史資料館において保管、収蔵している。

本文目次

I	調査の経過	
1	調査に至る経過	1
2	調査体制	1
II	遺跡の立地と歴史的環境	4
III	調査の内容	
1	発掘調査の概要	7
2	1次調査	
1)	遺構と出土遺物	7
3	2次調査	
1)	遺構と出土遺物	89
IV	まとめ	
1	竪穴式住居（建物）等出土土器概観	126
2	竪穴式住居（建物）出土土器の時期について	127
3	出土土器による竪穴式住居（建物）の時期的区分について	128
4	鍛冶関連遺構について	127
V	結語	129
VI	西山ノ上遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査	130

図版 (P L A T E S)

挿 図 目 次

第 1 図	西山ノ上遺跡 (1・2次調査) 周辺の遺跡分布図	[1/25, 000]
第 2 図	西山ノ上遺跡 1・2次調査 位置図	[1/5, 000]
第 3 図	西山ノ上遺跡 1次調査 遺構配置図	[1/500]
第 4 図	1号竪穴式建物 中央炉実測図	[1/40]
第 5 図	1号竪穴式建物 実測図	[1/80]
第 6 図	2号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 7 図	3号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 8 図	4号竪穴式建物 実測図	[1/80]
第 9 図	5号竪穴式建物 実測図	[1/80]
第 10 図	6号竪穴式建物 実測図	[1/80]
第 11 図	7号竪穴式建物 実測図	[1/80]
第 12 図	8号竪穴式建物 実測図	[1/80]
第 13 図	11号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 14 図	12号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 15 図	13号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 16 図	14号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 17 図	15号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 18 図	16号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 19 図	17号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 20 図	18号竪穴式建物 A・D区実測図	[1/80]
第 21 図	第1次床面時被熱硬化面及び土層断面実測図	[1/40]
第 22 図	第2次床面時炉跡土層断面実測図	[1/40]
第 23 図	18号竪穴式建物 A・D区南北主柱穴断面土層実測図	[1/40]
第 24 図	18号竪穴式土壌 (B・C区) 実測図	[1/80]
第 25 図	18号竪穴式土壌 (B・C区) 土器出土状況実測図	[1/80]
第 26 図	18号竪穴式土壌 (B・C区) 鉄片集中部平面実測図	[1/4]
第 27 図	19号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 28 図	20号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 29 図	21号竪穴式建物 実測図	[1/80]
第 30 図	被熱硬化面実測図	[1/40]
第 31 図	23号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 32 図	24号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 33 図	25号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 34 図	26号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 35 図	27号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 36 図	28号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 37 図	29号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 38 図	30号竪穴式建物 実測図	[1/80]
第 39 図	31号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 40 図	32号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 41 図	42号竪穴式住居 実測図	[1/80]
第 42 図	1・2・3号竪穴式住居 (建物) 出土土器実測図	[1/4]
第 43 図	4~7号竪穴式住居 (建物) 出土土器実測図	[1/4]

- 第 44 図 8・11号竪穴式住居(建物)出土土器実測図 [1/4]
第 45 図 12・14・15号竪穴式住居 出土土器実測図 [1/4]
第 46 図 16~18号竪穴式住居(建物)出土土器実測図 [1/4]
第 47 図 18号竪穴式土壇(B・C区)出土土器実測図 [1/4]
第 48 図 18号竪穴式土壇(B・C区), 19号竪穴式住居(建物)出土土器実測図 [1/4]
第 49 図 19~21号竪穴式住居(建物)出土土器実測図 [1/4]
第 50 図 21・23号竪穴式住居(建物)出土土器実測図 [1/4]
第 51 図 23・24号竪穴式住居 出土土器実測図 [1/4]
第 52 図 25~28号竪穴式住居 出土土器実測図 [1/4]
第 53 図 29~32号竪穴式住居(建物)出土土器実測図 [1/4]
第 54 図 42号竪穴式住居 出土土器実測図 [1/4]
第 55 図 1・4~6号竪穴式住居(建物)出土土器実測図 [1/4]
第 56 図 7・8・11・14~17号竪穴式住居(建物)出土土器実測図 [1/4]
第 57 図 18・19・21・23号竪穴式住居(建物)出土土器実測図 [1/4]
第 58 図 24・26~28号竪穴式住居 出土土器実測図 [1/4]
第 59 図 1・4号竪穴式建物 出土鉄器実測図 [1/2]
第 60 図 4~6号竪穴式建物 出土鉄器実測図 [1/2]
第 61 図 7・8号竪穴式建物 出土鉄器実測図 [1/2]
第 62 図 15・16号竪穴式住居・18号竪穴式土壇(B・C区)出土鉄器実測図 [1/2]
第 63 図 18号竪穴式土壇(B・C区)出土鉄器実測図 [1/2] その1
第 64 図 18号竪穴式土壇(B・C区)出土鉄器実測図 [1/2] その2
第 65 図 18号竪穴式土壇(B・C区)出土鉄器実測図 [1/2] その3
第 66 図 21号竪穴式建物 出土鉄器実測図 [1/2] その1
第 67 図 21号竪穴式建物 出土鉄器実測図 [1/2] その2
第 68 図 21号竪穴式建物 出土銅鏡実測図 [1/1]
第 69 図 9・33~36・39号掘立柱建物実測図 [1/80]
第 70 図 37・38・40号掘立柱建物実測図 [1/80]
第 71 図 41・44~46号掘立柱建物実測図 [1/80]
第 72 図 9・10・35~38・40・41号掘立柱建物出土土器実測図 [1/4]
第 73 図 10号掘立柱建物出土土器実測図 [1/4]
第 74 図 1・2号土壇実測図 [1/40]
第 75 図 3~8・10・12・14~17号土壇実測図 [1/40]
第 76 図 11号土壇実測図 [1/40]
第 77 図 18・20~22・24・27・31・36~39号土壇実測図 [1/40]
第 78 図 13・25・28・29・34・35号土壇実測図 [1/40]
第 79 図 26号土壇実測図 [1/40]
第 80 図 30号土壇実測図 [1/40]
第 81 図 1・2・6~8・12・13・25・26号土壇(墓)出土土器実測図 [1/4]
第 82 図 26号土壇出土土器実測図 [1/4]
第 83 図 30・32・37号土壇出土土器実測図 [1/4]
第 84 図 2号土壇出土土器実測図 [1/2]
第 85 図 26号土壇出土土器実測図 [1/4]
第 86 図 37号土壇出土土器実測図 [2/3]
第 87 図 2号溝Dトレンチ北東土層断面実測図 [1/40]
第 88 図 3号溝土層断面実測図 [1/40]
第 89 図 2号溝出土土器実測図 [1/2]
第 90 図 2・3号溝出土土器実測図 [1/4]

- 第 91 図 1号周溝状遺構実測図 [1/80]
第 92 図 8号周溝状遺構実測図 [1/80]
第 93 図 2号周溝状遺構実測図 [1/80]
第 94 図 1・2・4号周溝状遺構出土土器実測図 [1/4]
第 95 図 8号周溝状遺構出土土器実測図 [1/4] その1
第 96 図 8号周溝状遺構出土土器実測図 [1/4] その2
第 97 図 2号周溝状遺構出土土器実測図 [1/4]
第 98 図 2号周溝状遺構出土土器実測図 [1/3]
第 99 図 14号ピット(小穴)出土土器実測図 [2/3]
第100 図 検出時表面採集石器実測図 [2/3]
第101 図 排出土中出土土器実測図 [1/2]
第102 図 西山ノ上遺跡 2次調査 遺構配置図 [1/500]
第103 図 3号竪穴式住居実測図 [1/80]
第104 図 7号竪穴式建物実測図 [1/80]
第105 図 8・13号竪穴式住居実測図 [1/80]
第106 図 9号竪穴式住居実測図 [1/80]
第107 図 10号竪穴式住居実測図 [1/80]
第108 図 11号竪穴式住居実測図 [1/80]
第109 図 12号竪穴式住居実測図 [1/80]
第110 図 14号竪穴式住居実測図 [1/80]
第111 図 15号竪穴式住居実測図 [1/80]
第112 図 16号竪穴式住居実測図 [1/80]
第113 図 17号竪穴式住居実測図 [1/80]
第114 図 3号竪穴式住居出土土器実測図 [1/4]
第115 図 8~13号竪穴式住居出土土器実測図 [1/4]
第116 図 13~15号竪穴式住居出土土器実測図 [1/4]
第117 図 16号竪穴式住居出土土器実測図 [1/4]
第118 図 16・17号竪穴式住居出土土器実測図 [1/4]
第119 図 3・7~9・12・15号竪穴式住居(建物)出土土器実測図 [1/4]
第120 図 15~17号竪穴式住居出土土器実測図 [1/4]
第121 図 1号掘立柱建物実測図 [1/80]
第122 図 2号掘立柱建物実測図 [1/80]
第123 図 5号掘立柱建物実測図 [1/80]
第124 図 6号掘立柱建物実測図 [1/80]
第125 図 18号掘立柱建物実測図 [1/80]
第126 図 5・6号掘立柱建物出土土器実測図 [1/4]
第127 図 5号土塋実測図 [1/40]
第128 図 1~4・6~9号土塋(墓)実測図 [1/40]
第129 図 12~18・23号土塋墓実測図 [1/40]
第130 図 19~22・25~30・32~34号土塋墓実測図 [1/40]
第131 図 35号土塋実測図 [1/80]
第132 図 36号土塋実測図 [1/40]
第133 図 38号土塋実測図 [1/40]
第134 図 31・40~43号土塋実測図 [1/40]
第135 図 44~46号土塋実測図 [1/40]
第136 図 5・7・16・24・36号土塋出土土器実測図 [1/4]
第137 図 38・40・42号土塋出土土器実測図 [1/4]

- 第138図 5・38号土城出土石器実測図 [1/4]
 第139図 1号溝E土層断面実測図 [1/40]
 第140図 2号溝B土層断面実測図 [1/40]
 第141図 1・3・5号溝土層断面実測図 [1/40]
 第142図 1号溝出土土器実測図 [1/4]
 第143図 2号溝出土土器実測図 [1/4]

表 目 次

- 第 1表 西山ノ上遺跡 1次調査 竪穴式住居(建物)一覧表
 第 2表 西山ノ上遺跡 1次調査 掘立柱建物一覧表
 第 3表 西山ノ上遺跡 1次調査 土壌一覧表
 第 4表 西山ノ上遺跡 1次調査 出土土器観察表
 第 5表 西山ノ上遺跡 1次調査 出土石器観察表
 第 6表 西山ノ上遺跡 1次調査 竪穴式建物等 出土鉄器観察表
 第 7表 西山ノ上遺跡 2次調査 竪穴式住居一覧表
 第 8表 西山ノ上遺跡 2次調査 掘立柱建物一覧表
 第 9表 西山ノ上遺跡 2次調査 土壌一覧表
 第10表 西山ノ上遺跡 2次調査 出土土器観察表
 第11表 西山ノ上遺跡 3期区分別土器対応表
 第12表 西山ノ上遺跡 時期区分表
 第13表 弥生時代後期 竪穴式住居(建物)等 時期別一覧表 (1次調査分)
 第14表 鍛冶関連遺構等 時期別一覧表
 第15表 鍛冶関連遺構別 出土鉄片類一覧表

図 版 目 次

- PL 1 西山ノ上遺跡 (1次・2次調査)空撮
 PL 2~PL11 西山ノ上遺跡 1次調査
 PL12~PL15 西山ノ上遺跡 2次調査
 PL16 西山ノ上遺跡 1次調査出土 鉄器・鉄片類

I 調査の経過

1 調査に至る経過

八女市の西部に位置する室岡台地周辺は、亀ノ甲遺跡や室岡山ノ上遺跡をはじめ、八女市内でも最も弥生遺跡の密集度が高い地域として、かねてから注目を集めていた。

周辺地域では店舗や工場の建設、住宅の建築などの事業が進み、これを原因とした発掘調査が行われた結果、当該地域の古代における実態がわずかながら把握出来るようにはなったものの、開発の波は台地本体に及びつつあることが予測されるようになった。

この様な状況の中、これまで大規模な開発がほとんど入る事の無かった室岡台地に調査のきっかけが発生したのは、八女市を東西に貫く国道442号線のバイパス建設事業であった。

当該事業は、現442号線の約700m北方に現国道と同じく東西方向に片側2車線のバイパスを建設するものであり、この路線には室岡台地を横断する計画も含まれていた。

この計画地内には株式会社 大石茶園の敷地一部が含まれており、平成12年 9月19日付けにより、株式会社 大石茶園 代表取締役社長 大石研二（当時）より店舗及び工場移転に伴う遺跡包蔵の確認調査依頼（12八生文第228号）が提出された。

八女市教育委員会では、ただちに今後の対応について地権者と協議を行った。地権者に対し、事業対象地周辺には数多くの遺跡が存在している事、対象地内に多量の弥生式土器が散乱している事等を伝え、その保存対策等については随時協議する事となった。その結果、新店舗兼工場部分を南北2工区に分け、北側を1次調査（平成13年度）、南側を2次調査（平成14年度）として発掘調査を行い、遺跡の記録保存に努める事となった。

その後、平成13年 6月20日付け（13八生文第107号）で埋蔵文化財発掘調査依頼が提出され、平成13年 6月28日付けで埋蔵文化財発掘調査に係る協定書及び委託契約書を交わした。

2 調査体制

【平成13年度】（1次調査）

〔事業者〕

株式会社 大石茶園 代表取締役社長 大石研二

〔調査主体〕

八女市教育委員会

教育長	樋口 欽一
生涯学習課長	諸富 和生
同 参事	川島 敏雄
同課長補佐	佐野 正義
同参事補佐	鹿野 耕一
文化財係長	赤崎 敏男
同 係員	中川寿賀子
同 係員	大塚 恵治（調査担当）

同 嘱託 山田 朗子(調査担当)
同 嘱託 小杉山大輔(平成13年11月から14年3月まで)

【平成14年度】 (2次調査)

〔事業者〕

株式会社 大石茶園 代表取締役社長 大石研二

〔調査主体〕

八女市教育委員会

教育長	中島 清志
生涯学習課長	諸富 和生
同 参事	今村 求
同課長補佐	鹿野 耕一
同参事補佐	佐野 正義
文化財係長	赤崎 敏男
同 係員	中川寿賀子
同 係員	大塚 恵治(調査担当)
同 嘱託	安武 寛文(平成14年6月から)
同 臨時	藤川 広美(平成14年4月から同年12月まで)
同 臨時	池田 仁美(平成15年1月から同年3月まで)

【平成15年度】 (発掘調査報告書作成)

〔事業者〕

株式会社 大石茶園 代表取締役社長 大石剛司

〔調査主体〕

八女市教育委員会

教育長	中島 清志
生涯学習課長	諸富 和生
同 参事	今村 求
同課長補佐	鹿野 耕一
同参事補佐	佐野 正義
同参事補佐	飯田せつ子
文化財係長	赤崎 敏男
同 係員	中川寿賀子
同 係員	大塚 恵治(整理担当)
同 嘱託	安武 寛文
同 臨時	中園みどり(平成15年4月から平成15年11月まで)

調査作業（五十音順）

浅田広子、浅田身鈴途、石井勇、牛島茂雄、江上ミサキ、江上ヤヨイ、大石ミツ子、大塚啓子、茅島トシ子、川島徳江、楠トシ子、境秀代、椎葉和美、柴田雪代、田島和代、鶴賀久博、中山ヨシ江、橋村照子、原野左智子、平島チヨカ、平島トシミ、藤本祐子、藤本幸恵、政次シメノ、三角和子、南健太郎、室園弘子

整理作業（五十音順）

茅島トシ子、金納イツエ、佐田良子、仁田原美幸、野中恵美、藤井智

なお、発掘調査にあたり、地権者である大石研二、大石剛司様をはじめとし、株式会社 長野建設 様には剥ぎ取り作業を行った遺構の運搬に御尽力いただき、又、八女土木事務所の関係各位、近隣に居住される住民の皆様、そして室岡地区の方々には多大なるご配慮とご理解を戴きました。

調査にあたり、皆様のご声援は我々の大変な励みとなりました。末筆ながら、感謝の意を表します。

また、以下の方々には並々ならぬ御指導、御教示、御協力を受けました。記して感謝いたします。

（順不同、敬称略）

大澤正己（たたら研究会委員）、甲元眞之（熊本大学教授）、村上恭通（愛媛大学助教授）、中山光夫（中間市歴史民俗資料館長）、松井和幸（北九州市立自然史博物館学芸員）、佐々木四十臣（福岡県文化財保護指導委員）、木下修、佐々木隆彦、伊崎俊秋、兄玉真一（福岡県教育委員会）、吉留秀敏、長家伸、屋山洋（福岡市教育委員会）、山口譲治、比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）、山村信栄（太宰府市教育委員会）、下川可容子（太宰府ふれあい館）柳田康雄、橋口達也、小田和利、加藤和蔵、横田義章（九州歴史資料館）、小川泰樹（南筑後教育事務所）、坂井義哉（大牟田市教育委員会）、白木守、小沢太郎（久留米市教育委員会）、塚本映子（三瀬町教育委員会）、尾崎源太郎（広川町教育委員会）、永田寧（立花町役場）、永見秀徳、小林勇作、上村英士、立石真二（筑後市教育委員会）、柴田剛（伊万里市教育委員会）、江口寿高（筑後考古学研究会）、平本邦雄（共同通信社）、田中洋子、長野建設の皆さん

II 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

八女市は福岡県の南部地区に所在し、西に筑後市、東に上陽町・黒木町、北に広川町、南に立花町・瀬高町と、一市五町と境を接し、主に農業を基幹産業としている。その立地は、耳縄山地南緩斜面より西に延びる八女台地（八女丘陵）と、福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字形に囲まれ、釈迦岳山地に源を発し、黒木盆地を経て平野部を西流する矢部川によって形成された扇状地上にある。

今回発掘調査の対象となった室岡・西山ノ上地区は八女市の西部に位置しており、台地上にあるが扇状地である平野部との境付近の先端部近くに所在している為、そこからの眺望は素晴らしく、眼下には広々とした田園風景や市街地、そして平野部を囲む山々が眼前に広がり、南筑後地域のほとんどが一望出来るようになっている。

交通事情の観点から見ると、八女市内には国道442号線が東西に走り、近年ではその交通需要の増大に伴い、国道442号線バイパスの建設が急ピッチで進められている。又、九州地方の大動脈である九州縦貫自動車道や国道3号線が市内を南北に貫くなど、八女地方の交通の要衝となっている。特に縦貫道においては、既存の八女インターチェンジのみならず現在では広川インターチェンジも開通しており、八女地方の交通需要は今後ますます増加してゆくものと予想される。

【歴史的環境】

西山ノ上遺跡は八女市大字室岡字西山ノ上に所在している。

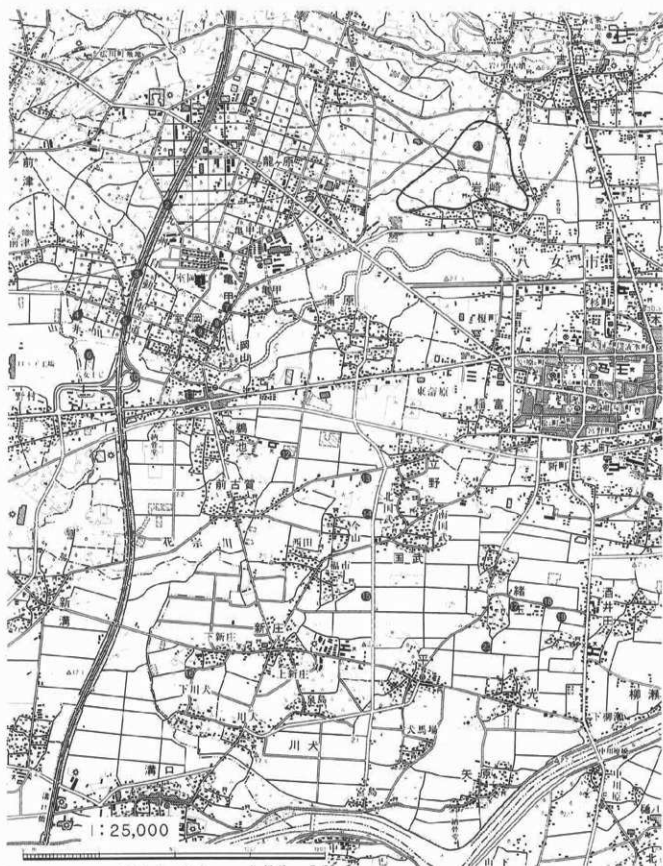
当該遺跡周辺は、以前から発掘調査等の成果により、弥生時代遺跡の一大密集地区であることが先学により指摘されていた。ここでは、西山ノ上遺跡が所在する室岡遺跡群をより理解する為、これまでに発掘調査を受けた周辺の遺跡を中心に、八女市西・南西部における弥生時代遺跡についての概略を記述する。

現在、当地域における弥生時代最古段階の遺跡は亀ノ甲遺跡と宿町遺跡、立野大坪遺跡が挙げられる。3遺跡とも弥生時代前期後半頃の環濠遺跡であるが、宿町遺跡（単環濠）と立野大坪遺跡（二重環濠）は直径が100m前後と比較的小規模な上に貯蔵穴専用環濠と考えられるのに対し、亀ノ甲遺跡（単環濠？）は推定直径200mの規模を有し、未確認ながら環濠集落的な内容を十分にもつ遺跡である。市内では未だ当該期にかかる本格的な稲作遺跡は発見されていないが、稲作と環濠遺跡はセット関係になることが多く、前期後半以前には稲作が定着していたものと考えられる。

中期に入ると、これまで見られた様相とは異なった状況が展開する。中期前半から中頃にかけては竪穴住居が散発的にしか存在しないようになり、環濠のような大規模な土木工事を伴う遺構は全く確認出来ないようになる。ところが中期後半頃になると、六反田遺跡のように大規模な集落域と墳墓域がセットになって出現するなど、再び大規模な土木工事を伴うべき大集落形成の萌芽が見られるようになる。また、前述した立野大坪遺跡等から鉄器が出土するようになるなど、その普及と相前後し、変化の著しい時代様相の到来が看取できる。

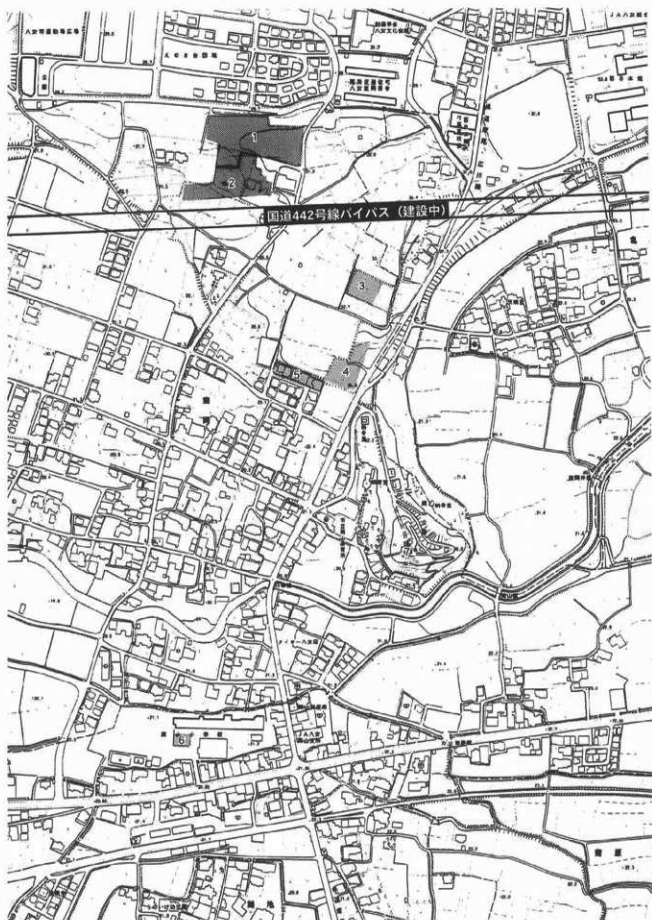
後期に入ると、各地で大規模な集落が形成されるようになる。室岡地区では野口遺跡や道添遺跡、室岡工業団地内遺跡等があり、後二者からは鉄器や砥石が数点出土している。矢部川に面した南部地区では、現在のところ大規模集落は発見されていないが、アモメ遺跡では非常に規模の大きな貯蔵穴群域があり、近くには墳墓域も存在することから、近接した区域に大規模な集落が存在するものと思われる。また、同地区内に所在する茶ノ木ノ本遺跡の甕棺墓群からは内行花文鏡、深樋式銅剣、鉄戈が出土しており、これらの事象は在地有力者の台頭とともに大規模集落同士の統合が進んでいることを示唆している。

今回報告を行う西山ノ上遺跡はこの弥生時代後期に属し、大規模な環濠集落を形成しつつ集落内における鉄器の製作等、周辺の他集落とは隔絶した動向を見せながら、激動する時代の中、地域を牽引していたものと思われる。



1. 西山ノ上遺跡 1・2次調査 2. 西中沢遺跡 3. 坊野遺跡 4. 弥五郎遺跡 5. 野口遺跡 6. 室岡工業団地内遺跡
7. 山ノ上遺跡 8. 亀ノ甲遺跡 8. 北小路遺跡 10. 道添遺跡 11. 岡山小学校校庭遺跡 12. 樋の口遺跡 2次
13. 立野大坪遺跡 14. 篠原遺跡 15. 中里遺跡 16. 六反田遺跡 17. 野田遺跡 18. 深田遺跡 19. 京田遺跡
20. 宿町遺跡 21. 岩崎遺跡群

第 1 図 西山ノ上遺跡 (1・2次調査) 周辺遺跡分布図 [1/25, 000]



1. 西山ノ上遺跡 1次調査 2. 西山ノ上遺跡 2次調査 3. 山ノ上遺跡
 4. 亀ノ甲遺跡 5. 北小路遺跡 6. 岡山小学校校庭遺跡 7. 岡山公園古墳
 第 2 図 西山ノ上遺跡 (1・2次調査) 位置図 [1/5,000]

〔1 次調査〕

Ⅲ 調査の内容

1 発掘調査の概要

今回の発掘調査の発端は、福岡県八女土木事務所を事業実施者とした国道442号線バイパス建設事業の計画区域内に株式会社 大石茶園の本店及び工場部分の一部が計画線上に立地していたことから、店舗及び工場部分の北側隣接地への移転及び新規建設が必要となった事による。

株式会社 大石茶園（以下、事業者）の当初計画によると、まず第一段階として移転事業前にお茶畑であった北側隣接地に既存の住宅と茶業専用の大型冷蔵庫を移転し、第二段階として既存の店舗及び工場を解体し、北側隣接地に新たに建設。跡地には駐車場を新設するとの内容であった為、八女市教育委員会では第一段階部分を1次調査、第二段階部分を2次調査とし現地調査を進めていく事となった。

1次調査は、事業地内の最も標高の高い東側端部より開始した。バックホウにより表土を除去しつつ、除去後の遺構表出面を人力により丁寧に遺構の検出に努め、表土の除去が完全に終了するまでこの作業を繰り返し行った。調査途中、2次調査予定地であった事業地西側の一部を1次調査に加えて欲しいとの要望が事業者より出され、一部発掘調査委託契約を変更し、1次調査に加える事となった。

2次調査は、1次調査の隣接部分から調査を開始した。調査の進行過程は1次調査と同様であるが、バイパス建設事業の進展状況や大石茶園の店舗、工場部分の解体状況等を見ながら調査を進めていった。

以下においては、各次調査の結果について報告を行う。

2 【1次調査】

概要

1次調査区内は面積が広く、弥生時代前期（不確定ではあるが縄文時代も含まれるか）から平安時代にいたる遺構が検出された。検出された遺構は竪穴式住居（建物）、掘立柱建物、環濠、溝溝状遺構、土壕、溝、落とし穴状遺構の他、時期不明の竪穴土壕、トロコレール敷設跡、等がある。

特記すべきは、調査区東側で群を形成している鍛冶関連遺構の検出であろう。弥生時代後期に属する竪穴式建物内から多量の鉄片や砥石が出土し、建物内部中央附近や若干壁面に寄った位置に非常に強く被熱した赤褐色の硬化面が検出された。また、建物群に隣接した位置に、多量の被熱した大型石材や破損鉄器、小鉄片が投棄された掘り鉢状の大型土壕が検出され、注目される。

調査区西側には南北方向に軸をとる環濠があり、これより西側では弥生時代に属する遺構の殆どが姿を消し、ここが遺跡の西端であることを示唆している。

なお、本文中2-（1）において「竪穴式住居」・「竪穴式建物」の表記があるが、後者は主に鍛冶関連遺構を指しており、「住居」ではなく「兼作業場」との観点から「建物」と記した。

1) 遺構と出土遺物

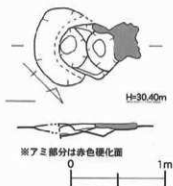
（1）竪穴式住居（建物）

1号竪穴式建物（SB-01）〈第4・5図〉

調査区東端附近で検出した長方形の竪穴式建物である。規模は5.4m×4.62m、深さ0.25mを測る。主柱穴は不明。中央部及び南西壁寄りに3箇所の被熱硬化面があり、最も中央に近い被熱硬化面が中央部の地炉を切り込んでいる。周辺からは小鉄片が確認されている。建物南側壁面には1.8m×1.0mの屋内土壕があり、土壕内から多くの片岩破片が弥生土器と共に出土した。出土遺物は小鉄片の他、弥生後期の甕、壺、器台、鉢土器、砥石、石包丁及び未製品が出土した。

2号竪穴式住居（SB-02）〈第6図〉

調査区北東端附近で検出した楕円形の竪穴式住居である。規模は直径



第4図 1号竪穴式建物
中央炉実測図 [1/40]



第 7 図 3号竪穴式住居実測図
[1/80]

6.2m～6.64m、深さ0.4mを測る。主柱は10本で、住居長軸の東西側各2穴の柱間が1.8mあり、他の柱間よりやや広がっている。中央部には1.2m×0.8mの中央土壌があり、その南北に小ピットが付設する。床面には広範囲に硬化面が広がっており、柱穴等の遺構はこの面を切り込んでいる。出土遺物は弥生前期の甕（直口縁を含む）が出土した。中期初頭か。

3号竪穴式住居

(SB-03) 〈第7図〉

調査区東側で検出した隅丸方形の竪穴式住居である。規模は3.36m×2.74m、深さ0.1mを測る。主柱穴は不明。屋内土壌やベッド状遺構なども認められず、また遺構そのものの遺

存状況も悪いことから、本来住居として機能していたかどうか疑わしい。中央部に約40cmの柱穴があり、貯蔵穴としての機能を考えるほうが妥当性があるか。出土遺物として後期の甕が出土した。

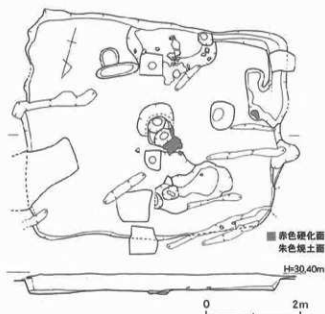
4号竪穴式建物 (SB-04) 〈第8図〉

調査区北東端附近で検出した長方形の竪穴式建物である。規模は現状で5.46m+a×3.6m+a、深さ0.45～0.5mを測る。主柱穴は不明。遺構内には1号屋内土壌（西側）・2号屋内土壌（東側）があり、双方が約10cmの段差をもつことから、それぞれ異なる建物に属していたと考えられる。仮に西側建物をA建物、東側建物をB建物とすると、Bの2号屋内土壌には泥岩質の平滑な砥石が出土し、建物内に鉄片等が出土しないことから、やや弥生中期的な様相を帯びているのに対し、Aでは鑄造鉄片を含む小鉄片が多数出土しており、後期的な様相が色濃い。事実A建物の1号屋内土壌からは後期前半頃の甕が出土しており、また、4号竪穴式建物がかかる調査区壁面の土層観察でもA建物がB建物を切り込んでいる。

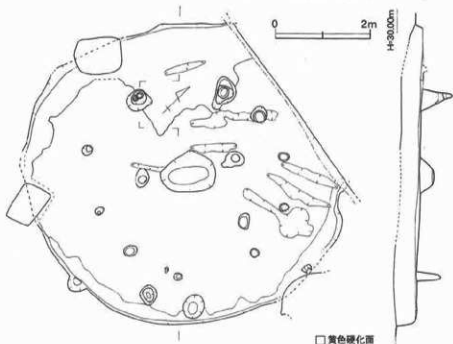
出土遺物は小鉄片、鑄造鉄片の他、弥生後期の甕、鉢型土器、砥石が出土した。

5号竪穴式建物 (SB-05) 〈第9図〉

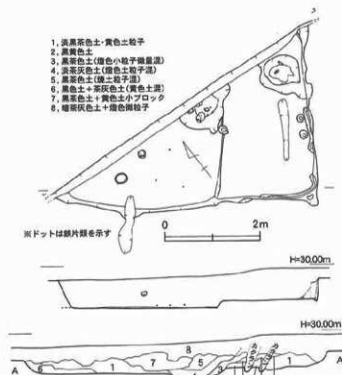
調査区東側で検出した正方形の竪穴式建物である。規模は3.94m×3.6m、深さ0.2mを測る。主柱



第 5 図 1号竪穴式建物実測図 [1/80]



第 6 図 2号竪穴式住居実測図 [1/80]



第 8 図 4号竪穴式建物実測図 [1/80]

穴は不明。中央部には地炉を掘り込んでおり、軟質焼土粒子と黒色土が充填していた。炉周辺からは多量の鉄小片が確認されており、2箇所ある集中域のうち北東部の中心には砥石があり、南西部には削り出しのベッド状遺構がある。出土遺物は鉄小片の他、弥生後期の甕、壺、高坏、鉢形土器、砥石が出土した。

6号竪穴式建物 (SB-06) <第10図>

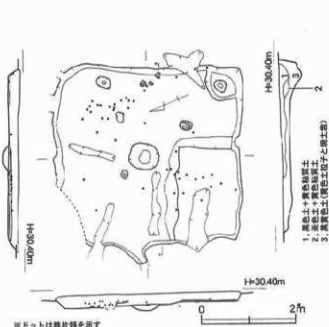
調査区東側で検出した長方形の竪穴式建物である。規模は現状で $4.4\text{ m} + \alpha \times 2.24\text{ m} + \alpha$ 、深さ 0.18 m を測る。主柱穴は不明。SX-02 及び SB-07 に切られ建物の大半を失っており、本来あるべき姿は留めていない。出土遺物は、南東端の住居コーナー付近から鉄小片の他、弥生後期の土器、長方形の大型砥石が出土した。

7号竪穴式建物 (SB-07) <第11図>

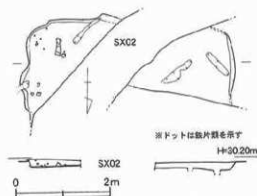
調査区東側で検出した長方形の竪穴式建物である。建物東側を SX-02 に切られており、1/3 程を欠損している。規模は現状で $3.86\text{ m} + \alpha \times 3.34\text{ m}$ 、深さ 0.26 m を測る。主柱は本来2本存在していたものと思われるが、主柱穴1個の確認に留まった。建物南壁中央付近に屋内土壌が付設される。建物内部からは中央部に1箇所と南端部に2箇所の被熱硬化面が検出された。基盤土を掘り込んでおらず、床面直上での作業が考えられる。周辺からは多量の鉄小片が確認されており、2箇所ある集中域のうち南西部には比較的大きな鉄器片が含まれていた。出土遺物は鉄小片の他、弥生後期の甕、壺、高坏、鉢形土器、投弾、砥石が出土した。

8号竪穴式建物 (SB-08) <第12図>

調査区東側で検出した長方形の竪穴式建物である。建物東側を SX-02 に切られており、1/4 程を欠損している。規模は現状で $4.88\text{ m} + \alpha \times 4.36\text{ m}$ 、深さ $0.1 \sim 0.26\text{ m}$ を測る。建物中央部には地炉状の掘込みが認められるが焼土や炭化物の出土は無く、炉としての機能を有していた可能性は低いと



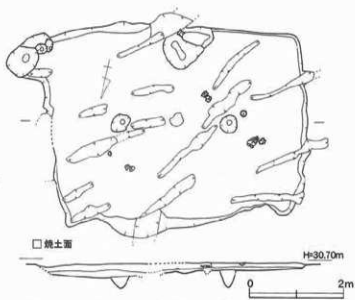
第 9 図 5号竪穴式建物実測図 [1/80]



第10図 6号竪穴式建物実測図 [1/80]



第11図 7号竪穴式建物実測図 [1/80]



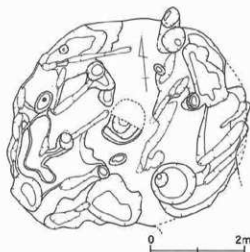
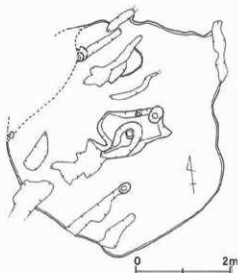
考えられる。この掘込み内には深さ35cm程の柱穴があり、この柱穴が建物のほぼ中心に位置している事や、他に類似する柱穴の存在が確認出来ない事などから、本柱穴が主柱穴であると判断したい。建物南壁中央付近に屋内土壌が付設され、東西コーナーにはやや大きめのベッド状遺構がある。建物中央付近に1箇所、小規模な被熱硬化面が検出された。基盤土を掘り込んでおらず、床面直上での作業が考えられる。周辺には少数の小鉄片と共に大型石材が床面上に確認されている。出土遺物は小鉄片の他、弥生後期の甕、鉢形土器、石鏃が出土した。

11号竪穴式住居 (SB-11) 〈第13図〉

調査区東端部で検出した長方形の竪穴式住居である。規模は5.4m+α×4.22m、深さ0.15m~0.25mを測る。主柱は東西方向に2本である。中央部に直径30cm程の焼土が認められるが、地炉状の掘込みは無い。屋内土壌は南壁中央部付近にある。ベッド状遺構は認められなかった。攪乱著しく、詳細が不明な点が多かった。出土遺物として、弥生後期の甕、鉢形土器、器台、砥石、被熱石が出土した。

12号竪穴式住居 (SB-12) 〈第14図〉

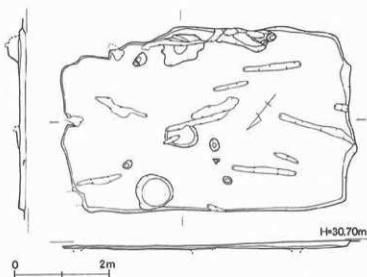
調査区東端部で検出した不整形の竪穴式住居としているが、攪乱が著しい事に加えて担当者の誤認があり、本報告中ではその可能性だけ記したい。規模は5.0m×4.46m、深さ5cmを測る。主柱穴及びその他施設については不明。出土遺物として、弥生前期末の甕土器が出土した。



13号竪穴式住居 (SB-13)

〈第15図〉

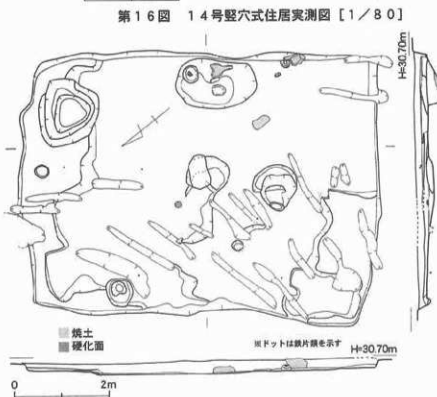
調査区北東端附近で検出した楕円形の竪穴式住居である。規模は直径4.6m～5.3mを測る。遺存状況は極めて悪く、壁面は全て削平されていた。主柱は6本で、住居長軸の東西側各2穴の柱間が1.6m～1.8mあり、他の柱間よりやや広がっている。建て替え等に係るピットの重複は認められなかった。中央部には1.0m×0.75m、深さ30cmの中央土壌がある。出土遺物は弥生前期の土器が出土したが、細片の為図示出来なかった。



14号竪穴式住居 (SB-14)

〈第16図〉

調査区東端部で検出した長方形の竪穴式住居である。規模は6.24m×3.84m、深さ0.15mを測る。主柱穴は不明確ではあるが、本来4本であった可能性がある。調査では3本までの確認にとどまった。中央部やや北寄りには70cm×50cm程の地炉状の掘込みが認められ、内部には少量の炭化物と焼土が確認出来た。焼土は底面に貼り付いた状況であった。南東壁中央部には屋内土壌が付設されるが、ベッド状遺構は認められなかった。出土遺物として、弥生中期の甕形土器、石包丁、サヌカイト製石鏃が出土した。前期末～中期初頭か。

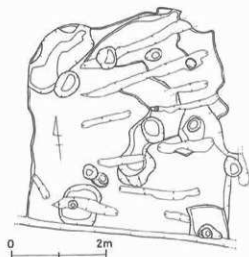


15号竪穴式住居 (SB-15)

〈第17図〉

調査区東側で検出した長方形の竪穴式住居である。当該遺跡中、最大規模の住居で床面積は40㎡を超える。規模は7.54m×5.46m、深さ0.3mを測る。主柱は本来2本以上存在していたと思われるが、詳細は不明。建物南東壁中央付近に規模の大きな屋内土壌が付設されており、内部には焼土・炭化物塊の広がりが見られた。又、土壌南側には壁面に正置された長頸甕に焼土塊が覆い被さる状況が見られ、周辺で非日常的な行為があった事を示唆している。北壁沿い及び南西コーナー部には削り出しのベッド状遺構が検出された。ともに北西壁側が一部長方形に挟まれる特異な形状を呈している。住居内部からは中央部北西寄りに1箇所、基盤土を掘り込まない被熱硬化面が検出されたが、鉄片類や製作関連工具の少なからず鍛冶関連遺構とは判断しなかった。出土遺物は甕、鉄鏃の他、弥生後期の甕、甕、鉢形土器、ガラス玉、石匙が出土した。

第17図 15号竪穴式住居実測図 [1/80]



第18図 16号竪穴式住居実測図 [1/80]

16号竪穴式住居 (SB-16) 〈第18図〉

調査区南東端部で検出した長方形の竪穴式住居である。掘削が著しく、詳細については不明と言わざるを得ない。規模は現況で4.6m×4.46m、深さ7cmを測る。主柱穴及びその他施設についての詳細は不明であるが、主柱は4本。出土遺物として、弥生後期の高坏、鉢形土器、砥石が出土した。

17号竪穴式住居 (SB-17) 〈第19図〉

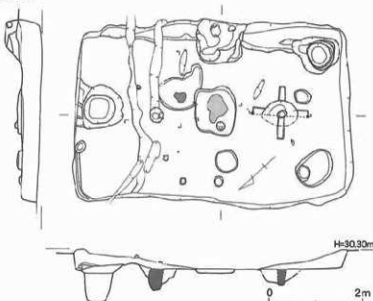
調査区南東側で検出したやや不整形に丸みを持った竪穴式住居である。住居南側は調査区外に延びており詳細不明。規模は現況で5.62m×4.32m、深さ0.2mを測る。住居中央からやや北東寄りに炉状の遺構を検出した。1m×1mの隅丸土壇状の盛土中央に直径16cm程の小穴があり、小穴壁面及び周辺は暗赤褐色に硬化していた。底部分の硬化度は弱かった。残念ながら遺構切り取りに失敗し、断面図等の記録が取れなかった事が悔やまれる。主柱穴の詳細は不明だが2本柱ではないかと考えられる。屋内土壇やベッド状遺構は認められなかった。出土遺物は弥生中期の甕形土器、支脚、サヌカイト製ドリルが出土した。

18号竪穴式建物 (SB-18 A・D区) 〈第20図〉

調査区東側中央寄りで検出した長方形の竪穴式建物である。規模は5.9m×3.7m、深さ0.3mを測る。主柱は2本。建物中央部にやや硬質の焼土及び炭化物を含む地炉状遺構を検出。北東寄りには黒紅色硬化面を検出した。前者が新、後者が古の関係にあり、前者



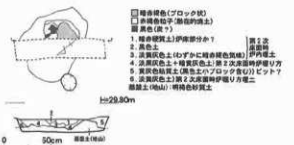
第19図 17号竪穴式住居実測図 [1/80]



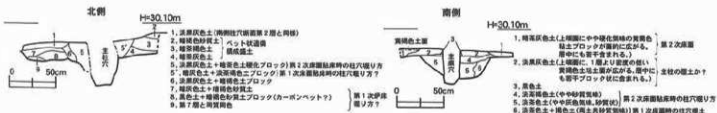
第20図 18号竪穴式建物 A・D区実測図 [1/80]



第21図 第1次床面時被熱硬化面及び土層断面実測図 [1/40]



第22図 第2次床面時伊勢土層断面実測図 [1/40]



第23図 18号竪穴式建物A・D区 南北主柱穴断面土層実測図 [1/40]

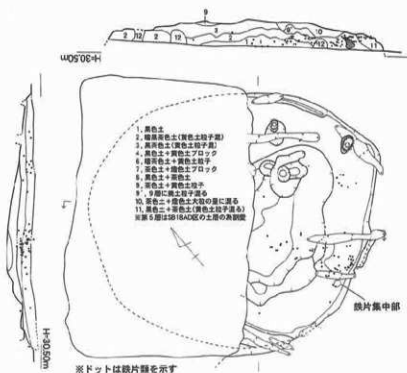
の床面は軟質土であるのに対し、後者の床面は硬質床面であることに特徴がある。南東壁中央には1.05m×0.9cmを測る規模の大きな屋内土壌が付設されている。又、北東壁中央部及び南西壁間コーナーにはピット状の土壌が付設されている。北東壁沿いにはベッド状遺構が検出された。鍛冶関連遺構としての建物と判断したが、鉄片類の出土が認められない等、やや弱い感があるが、しっかりと硬化床面上に直接乗る黒紅色硬化面の存在は、これまで検出していた鍛冶関連遺構との比較でも遜色はない。出土遺物は弥生後期の甕、甕、鉢形土器、器台、石包丁、砥石が出土した。

18号竪穴式土壌

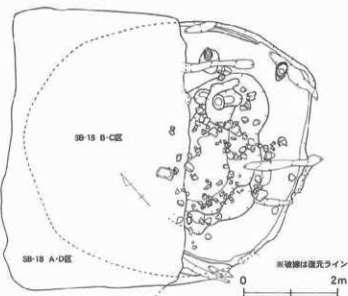
(SB-18 B・C区) 〈第24図〉

調査区東側中央寄りで検出した楕円形の竪穴式土壌である。当初、検出面の状況から隅丸長方形を呈した竪穴式住居と考えA～Dの4区画調査を進めたが、進行の過程でA・D区とB・C区に該当する部分が全くの別遺構であると分かり、遺構名はそのままに、A・D区、B・C区の名称を附随させ別々の遺構としてその後の調査を行う事とした。本来なら土壌として別項に掲載すべきだが、今回は建物の遺構番号を付与した事もあり、別項に掲載した事によって生じる混乱を防ぐ観点からも、あえて同項で取り扱う事とした。

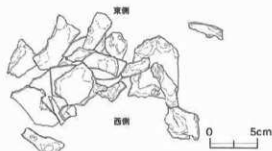
規模は推定直径5.34m、深さ0.6mを測る。土壌断面は掘り鉢状を呈しているが、壁面から60cm～80cmの間には平坦なフラット面が存在し、断面は2段構造になっている。フラット面は恐らく全周していたものと考えられ、南東側からは多量の鉄器・鉄片類が出土した。鉄器・鉄片類の出土状況は大きく3パターンあり、①土壌の床面直上に存在するもの、②第2層に包含され、やや浮いた状況を呈するもの、③第1層に包含され、土壌上層部に浮いているもの、がある。土壌からはその他にも弥生式土器、大型石材、砥石、被熱石、蛤刃石斧、石包丁未製品、等多量の出土遺物をみたが、その大半はフラット面からではなく土壌中心部付近であった。これらの状況から当時の投棄状況を推察すると、「土壌掘削から一定期間経過した後第3層以下の覆土によって土壌下段部分が埋まり、南東部にある鉄片集中部付近から石器や土器が中心部に向かって投棄される。同時に鉄器・鉄片類をこぼすように投棄(西側からも少量の投棄がある)。第2層の堆積が終了し、第1層の堆積が開始した直後に



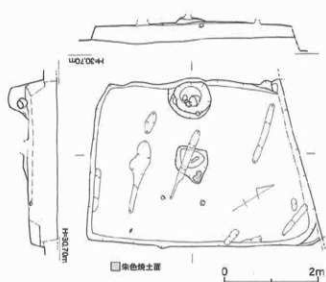
第24図 18号竪穴式土壌 (B・C区) 実測図 [1/80]



第25図 18号竪穴式土壌 (B・C区) 土器出土状況実測図 [1/80]



第26図 18号竪穴式土壌 (B・C区) 鉄片集中部平面実測図 [1/4]



第27図 19号竪穴式住居実測図 [1/80]

投棄に由来しない数個の鉄片類が流入する。」という状況が考えられる。この推察に
対し賛否あるものと考えるが、いずれにせよ弥生時代後期において同様の廃棄土壌は全国的にも頻例に乏しく、更なる事例の増加に期待したい。廃棄の時期は後期後半頃と思われる。

19号竪穴式住居 (SB-19) 〈第27図〉

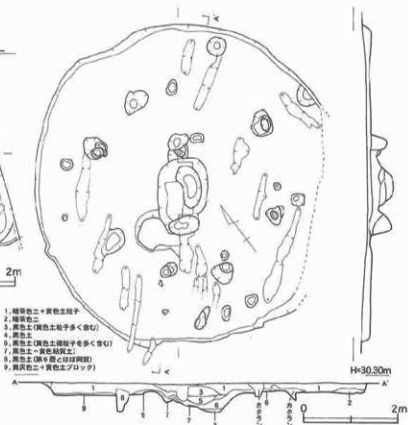
調査区東側中央付近で検出した長方形の竪穴式住居である。規模は4.8m+α×3.5m、深さ0.4mを測る。南側の一部は調査区外に延びている。主柱穴は不明。中央部に85cm×70cm程の地炉状の掘込みが認められ、内部には少量の焼土が確認出来た。焼土は底面や壁面に貼り付いた状況であった。壁面の焼土はやや硬質。南東壁中央部には円形の室内土壌が付設されている。ベッド状遺構は南西コーナーに一部が見られるが、遺構全体の形状は確認出来なかった。出土遺物として、弥生後期の甕、鉢形土器、支脚、手づくね風大型器台、石包丁、石包丁未製品、サヌカイト製剥片鏃が出土した。

20号竪穴式住居 (SB-20)

〈第28図〉

調査区東側中央付近で検出した楕円形の竪穴式住居である。規模は直径6.7m、深さ0.2mを測る。主柱は7本で、住居長軸の北東側各2穴の柱間が2.8mあり、他の柱間より際立って広がっている。入り口側と想定すべきか。中央部には1.2m×1.05mの中央土壌があり、その南北両端に小ピットが付設する。床面には広範囲に硬化面が広がっており、柱穴等の遺構はこの面を切り込んでいる。主柱穴及び中央土壌付設小ピットはいずれも切り合いが存在し、少なくとも1回の建て替えを行っていると思われる。

出土遺物は弥生前期の甕形土器が出土した。



第28図 20号竪穴式住居実測図 [1/80]



第29図 21号竪穴式建物実測図 [1/80]

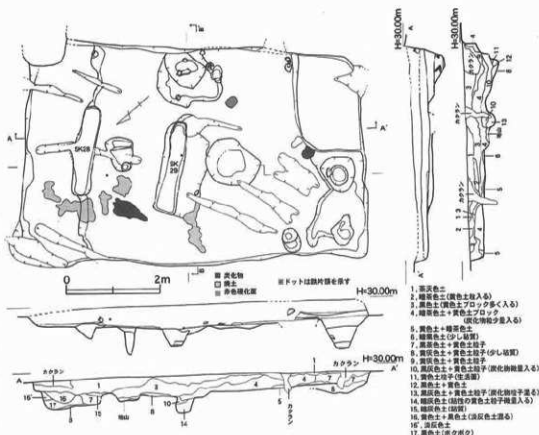


第30図 被熱硬化面実測図

[1/40]

21号竪穴式建物
(SB-21)
〈第29図〉

調査区東側中央付近で検出した縦長長方形の竪穴式建物である。規模は4.96m×4.44m、深さ0.1~0.2mを測る。主柱穴は確認出来なかったが、建物の形状から本来2本柱の構造であったと推測する。建物中央付近に非常に弱い被熱面が検出された。基盤土を掘り込んでおらず、床面直上での作業が考えられる。周辺からは多量の小鉄片、大型鉄

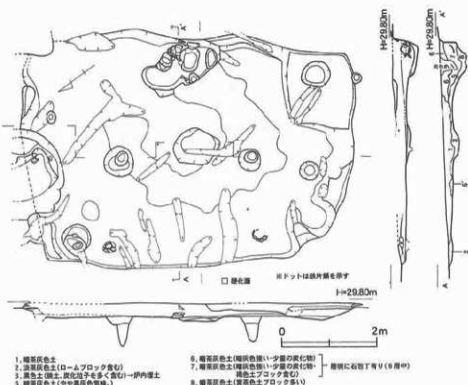


第31図 23号竪穴式住居実測図 [1/80]

器片が確認されており、特に東壁中央付近に非常に密集度の高い集中域が認められる。出土した鉄片数は120点を超えている。鉄器の集中域よりややずれた南西部の床面上10cmにおいて後漢鏡の破片(雲雷文連弧文鏡)が2点出土した。2点は同一個体で一部を研摩する、いわゆる破鏡である。出土遺物は鉄片類や銅製品、弥生後期の甕、甗、高坏、鉢、甌形土器、砥石、不明石材多数が出土した。

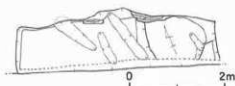
23号竪穴式住居
(SB-23) 〈第31図〉

調査区中央で検出した横長長方形の竪穴式住居である。弥生時代中期後半頃と思われる土壌墓3基(SK-13・28・29)を切る。当該遺



第32図 24号竪穴式住居実測図 [1/80]

跡中3番目の規模を有する住居で、床面積は32㎡を超える。規模は7.22m×4.52m、深さ0.46mを測る。主柱は本来2本存在していたものと思われるが、攪乱に破壊され詳細は不明。北東側の主柱穴は僅かに痕跡を留めているが、住居に比して柱穴規模が小さい。住居中央南西寄りに1.2m×1.0mの中央土壌があるが、内部からは焼土、炭化物等は確認出来なかった。南東壁中央付近に規模の大きな屋内土壌が付設されており、底面付近からは丸礫や角礫が出土した。



第33図 25号竪穴式住居
実測図 [1/80]

北壁沿い及び南東コーナー部には削り出しのベッド状遺構が検出された。両ベッド状遺構周辺には焼土や炭化物塊が散在しており、火災により消失した住居であると考えられる。出土遺物は鉄片類の他、弥生後期の甕、壺、高坏、鉢形土器、支脚、石包丁、石包丁未製品、甕・壺類の胴部を利用した円盤形土製品が出土した。

24号竪穴式住居 (SB-24)

〈第32図〉

調査区中央で検出した横長方形の竪穴式住居である。弥生時代中期前半頃と思われる土壌1基 (SK-26) を切る。当該遺跡中2番目の規模を有する住居で、床面積は35㎡を超える。規模は7.08m×5.02m、深さ0.3mを測る。主柱は2本で、住居中央にある地炉を挟み長軸線上に並ぶ。炉の周囲を硬化面が馬蹄形状に巡っており、柱穴はこれを切っている。南東壁中央付近に規模の大きな屋内土壌が付設されており、土壌内からは現代のサラダボールにも用いられそうな広口の浅鉢形土器や角礫が出土した。南東コーナー部にはベッド状遺構が付設されている。特記事項として西壁沿いにパレレルに立つ土器2個体がある。これらは住居長軸に対しほぼ直角の位置にあり、それぞれの起点は南北の主柱が担っている。北側の土器Dは壺形土器の口縁部を打ち欠き、胴部上半のみを正置させたもので、南側の土器Cは甕形土器の上半部のみを倒置させたものであった。その行為そのものが何を意図したものであるかは定かではないが、その特殊性や置かれた位置関係から家屋の「大黒柱」たる2本の主柱に対する祭祀行為であると推定した。

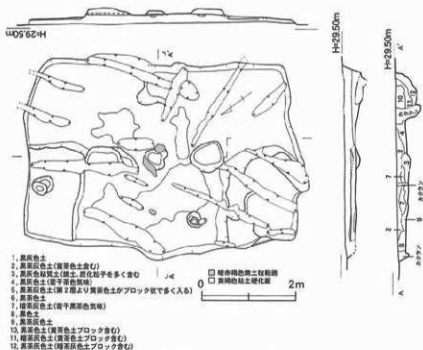
出土遺物は鉄器類の他、弥生後期の甕、壺、大型浅鉢形土器、石包丁が出土した。

25号竪穴式住居 (SB-25) 〈第33図〉

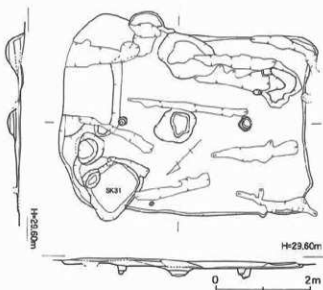
調査区中央で検出した竪穴式住居である。住居の大半は調査区外に延びており詳細不明。規模は現状で4.3m×1.06m、深さ0.35mを測る。北壁の一部に壁溝状の痕跡が認められる。出土遺物には甕、壺形土器があった。

26号竪穴式住居 (SB-26) 〈第34図〉

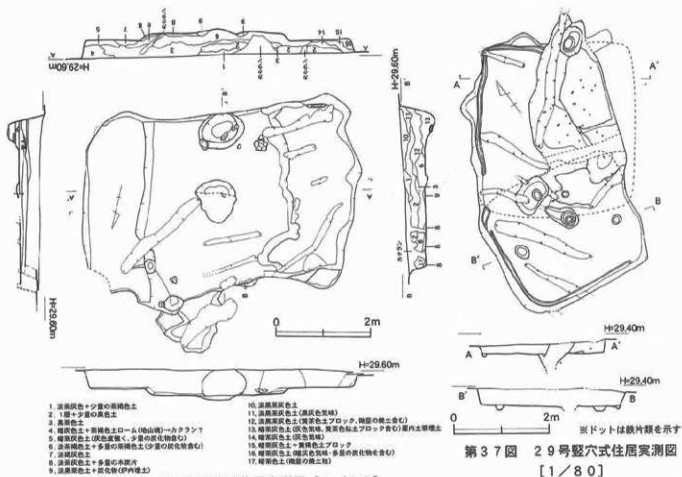
調査区中央で検出した横長方形の竪穴式住居である。規模は5.62m×3.96m、深さ0.15mを測る。主柱は2本であるが極めて浅い。住居中央にある地炉を挟み長軸線上に並ぶ。炉の周囲を硬化面が断片的に巡っている。南東壁中央付近にやや未発達な屋内土壌が付設されているが、一般的にはベッド状遺構が付設される壁側に造られる事が多く、当住居とは逆になる。屋内土壌には付設される方向性に一定のルール



第34図 26号竪穴式住居実測図 [1/80]



第35図 27号竪穴式住居実測図 [1/80]



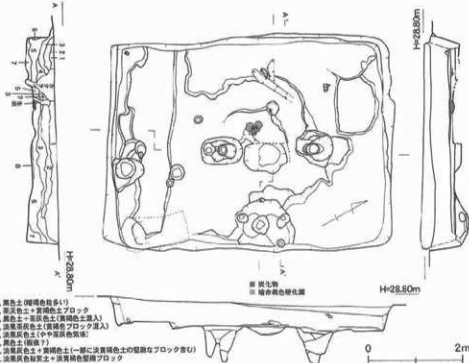
第36図 28号竪穴式住居実測図 [1/80]

第37図 29号竪穴式住居実測図 [1/80]

が存在するようだ。屋内土壌の対面する北西壁の両コーナー部にはベッド状遺構が付設されている。出土遺物は弥生後期の甕、鉢形土器、蓋が出土した。

27号竪穴式住居 (SB-27) 〈第35図〉

調査区中央で検出した横長方形の竪穴式住居である。縄文時代の所産と思われる落とし穴状土壌1基(SK-31)を切る。規模は5.16m×3.84m、深さ0.2mを測る。主柱は2本であるが浅く、住居中央にある地炉を挟み長軸線上に並ぶ。南西側主柱穴に隣接し別の柱穴痕がある。未掘ではあるが、位置から建て替え時の柱痕跡と思われる。南東壁中央付近にやや未発達な屋内土壌が付設され、北東壁の東側コーナー部にはベッド状遺構が付設されている。出土遺物は弥生後期の甕、鉢形土器、石包丁が出土した。



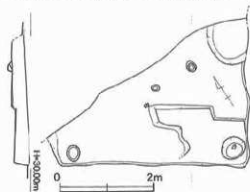
28号竪穴式住居

(SB-28) 〈第36図〉

調査区中央で検出した横長方形の竪穴式住居である。

第38図 30号竪穴式建物実測図 [1/80]

弥生時代前～中期の所産と思われる貯蔵穴1基（SK-30）を切る。規模は5.8m×3.64～4.08m、深さ0.5mを測る。主柱は不明。住居中央にある地炉を挟み、東西壁に沿ってベッド状遺構が付設される。西側の一部には赤褐色硬化面がベッド状遺構に沿って帯状に広がっていた。この赤褐色硬化面付近からは、床面からかなり浮いてはいるがソケット端部を折り返し鍛接した袋状鉄斧が出土した。南壁中央付近には屋内土壌が付設され、底面付近からは10cm大の丸礫が出土。他住居にも同様の石材が散見される事か



第39図 31号竪穴式住居実測図 [1/80]

ら、注意を要す石材の1つである。出土遺物は上記遺物の他、弥生後期の甕形土器が出土した。

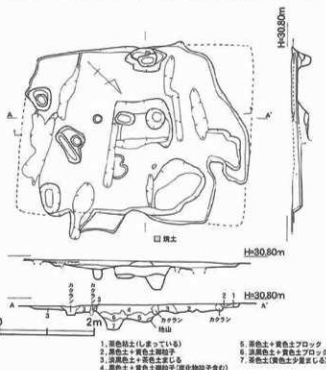
29号竪穴式建物（SB-29）〈第37図〉

調査区北東端附近で検出した不整形の竪穴式建物である。規模は現状で約5.7m×2.46m～3.14m、深さ0.2～0.4mを測る。調査開始当初、ややびつな長方形プランを持つ住居跡と考えていたが、調査開始後しばらくして別個体の遺構が切り合いを持って存在している事が判明。本文中では別々の遺構ではあるが、北側遺構を竪穴式建物A、南側遺構を竪穴式建物Bとして同時に報告を行う。竪穴式建物Aは推定規模3.6m×3.2m、深さ0.2mを測る。主柱穴と思われる柱穴が長軸方向の両端にやや軸をずらして存在する。室内土壌や中央土壌等は確認出来なかった。北西～北東壁には板状痕跡が認められた。埋土中からは数十点の小鉄片が出土したが、ほぼ全てが床面から10cmほど浮いており、東側からの流入と考えられる。竪穴式建物Bは推定規模3.0m×2.6m、深さ0.4mを測る。主柱穴は建物中心部にある深さ40cmの柱穴1穴で、支柱穴と思われる柱穴が長軸方向の両端にやや軸をずらして存在する。室内土壌や中央土壌等は確認出来なかった。南西～南壁には板状痕跡が認められた。両建物を通じた出土遺物は小鉄片の他、弥生後期の甕、鉢型土器、鋸歯石鏃が出土した。

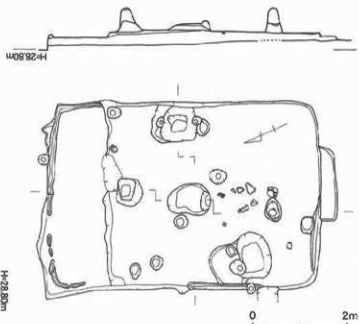
30号竪穴式建物（SB-30）

〈第38図〉

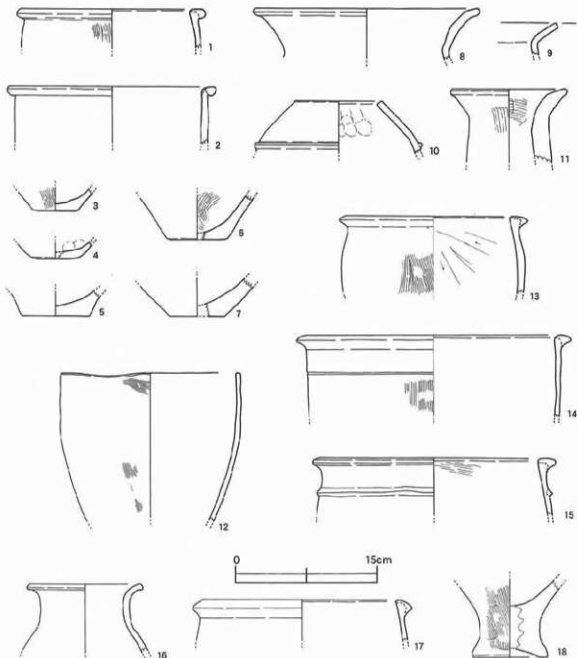
調査区中央北寄りで検出した横長長方形の竪穴式建物である。規模は5.9m×4.58m、深さ0.66mを測る。主柱は2本。深さは床面から80cm程あり、しっかりと立っている。建物中央部東寄りに硬質度が非常に高い黒紅色硬化面が検出され、その硬化面直上には東西方向を向いた炭化材がそのまま残されていた。本硬化面は淡黄褐色土により僅かに



第40図 32号竪穴式住居実測図 [1/80]



第41図 42号竪穴式住居実測図 [1/80]



第42図 1・2・3号竪穴式住居（建物）出土土器実測図〔1/4〕

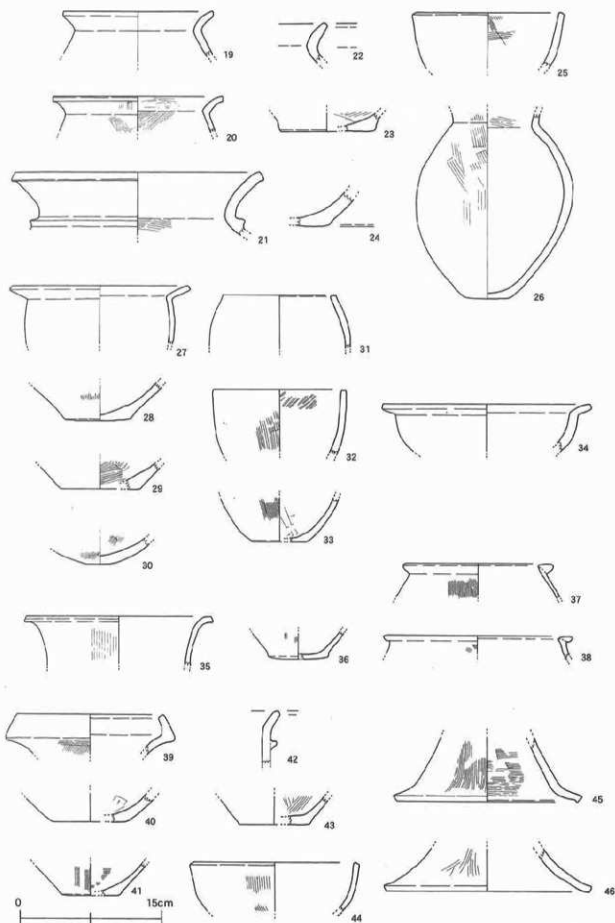
盛り上げられた段上に存在しており、この盛土は建物の中央部にあった地炉を被覆していた。鍛冶関連遺構としての建物と判断したが、鉄片類の出土が認められない等やや弱い感があるが、やや還元気味の黒紅色硬化面の存在とその直上に遺存する炭化材の存在は、これまで検出していた鍛冶関連遺構との比較でも遜色はない。東壁中央には屋内土壌、南壁沿いには粘土のベッド状遺構が付設されている。屋内土壌には南北両端に小ビットがあるが、筑後地方伝統のスタイルである。建物南東隅には1.4 m×0.6 mの長方形土塀があるが、時間的都合により途中で断念せざるを得なかった。筆者の怠慢として自戒したい。出土遺物は弥生後期の甕、壺、鉢形土器、器台、大型の扁平円形丸礫が出土した。

31号竪穴式住居（SB-31）〈第39図〉

調査区西側で検出した竪穴式住居である。住居の大半はSD-02に切られており詳細不明。規模は現状で3.0 m + a × 4.32 m、深さ0.25 mを測る。南壁の一部にベッド状の高まりが認められる。北東端の落ちは屋内土壌か。出土遺物には弥生中期の甕、鉢形土器があった。

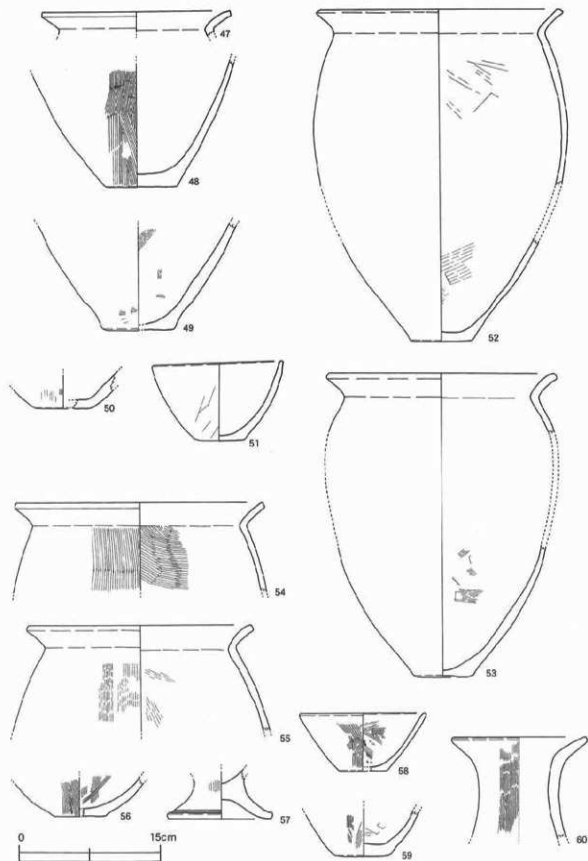
32号竪穴式住居（SB-32）〈第40図〉

調査区南東端部で検出した長方形の竪穴式住居である。攪乱が著しく、詳細については不明と言わざるを得ない。規模は現況で約4.8 m×3.56 m、深さ0.1 mを測る。主柱穴及びその他施設についての詳細



第43図 4～7号竪穴式住居（建物）出土土器実測図〔1/4〕

は不明であるが、主柱は2本か。住居内中央に1.2 m×0.9 mの方形土壇があるが、地炉か否かの判断は出来なかった。北西壁及び南東壁にはベッド状遺構があったものと思われる。出土遺物として、弥生中期か

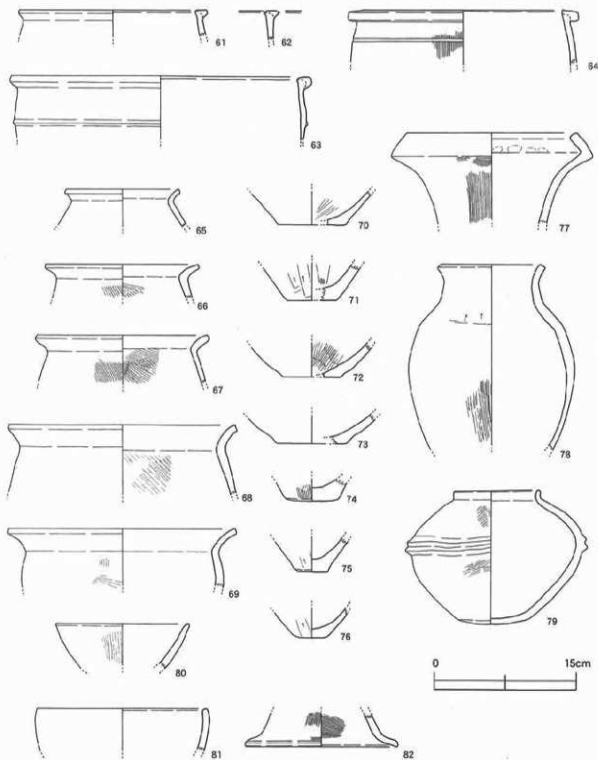


第44図 8・11号竪穴式住居（建物）出土土器実測図〔1/4〕

ら後期の甕、壺形土器が出土した。

42号竪穴式住居（SB-42） 〈第41図〉

調査区南側東端で検出した横長長方形の竪穴式住居である。規模は5.76m×3.86m、深さ0.3mを測る。主柱は2本。やや長軸線上からずれる。中央部に90cm×60cm程の地炉状の掘込みが認められ、内部には少量の焼土が確認出来た。東壁中央部には隅丸方形の屋内土壇が付設され、南北両端に小ピットを併



第45図 12・14・15号竪穴式住居出土土器実測図 [1/4]

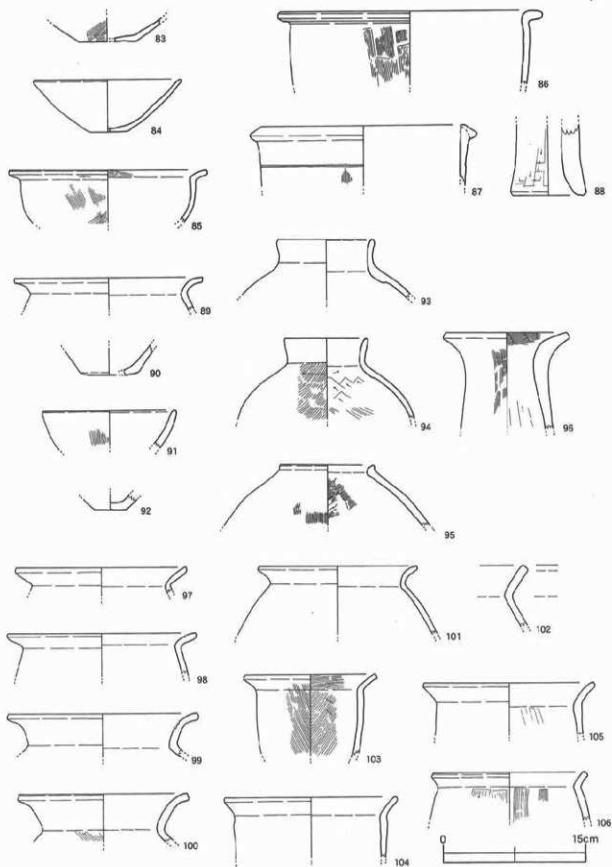
せ持つ。ベッド状遺構は北壁沿いに付設される。全壁面には断片的に板状痕跡が認められ、矢板状に巡っていたのかもしれない。中央伊南側の土器集中部では免田式の長頸壺も見られた。出土遺物として、弥生後期の甕、壺、鉢形土器、支脚、器台、ミニチュア土器が出土した。

竪穴式住居（建物）出土遺物 〈第42図～54図〉

土器

1～11はSB-01出土土器で、1・2・9は甕形土器の口縁部で、3～7は甕又は鉢形土器の底部破片。8・10は壺形土器で10は無頸壺。11は器台。

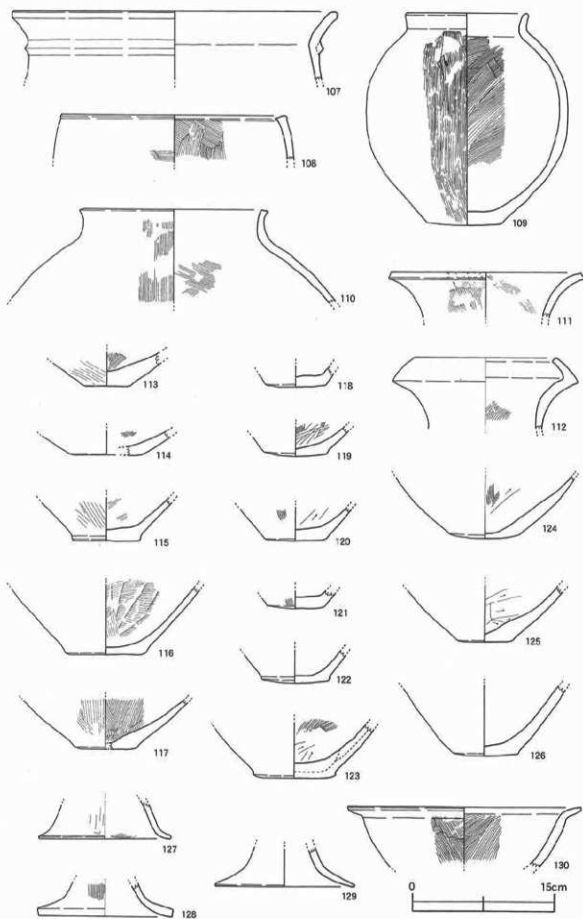
12～15はSB-02出土土器で、12は深鉢形をなす。弥生時代前期末～中期初頭の土器群。



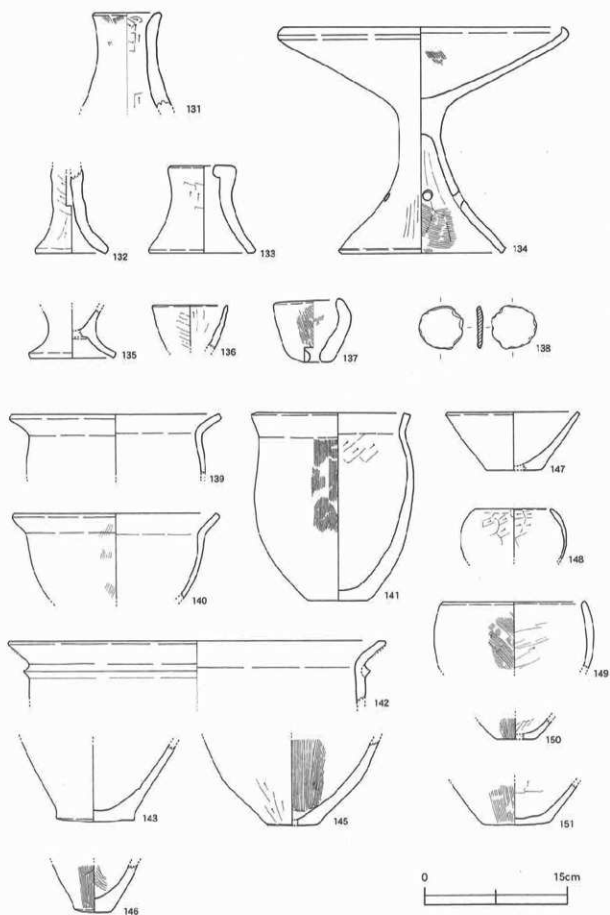
第46図 16~18号竪穴式住居(建物)出土土器実測図 [1/4]

※89~96はSB-18 A・D区出土土器

97~106はSB-18 B・C区出土土器

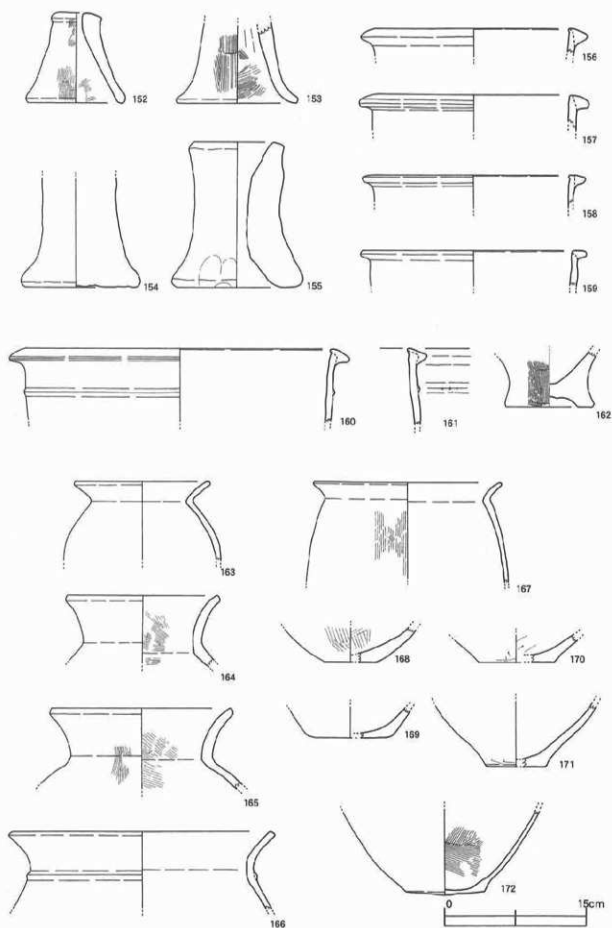


第47图 18号竖穴式土城(B·C区)出土土器实测图[1/4]

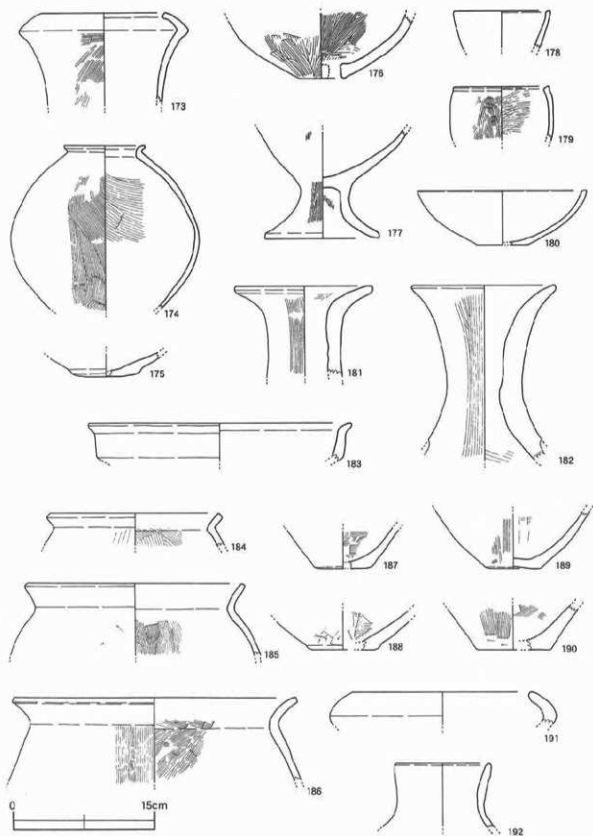


第48図 18号竪穴式土壇 (B・C区) (131~138)

19号竪穴式住居 (建物) 出土土器実測図 [1/4]



第49图 19~21号竖穴式住居(建物)出土土器実測图 [1/4]



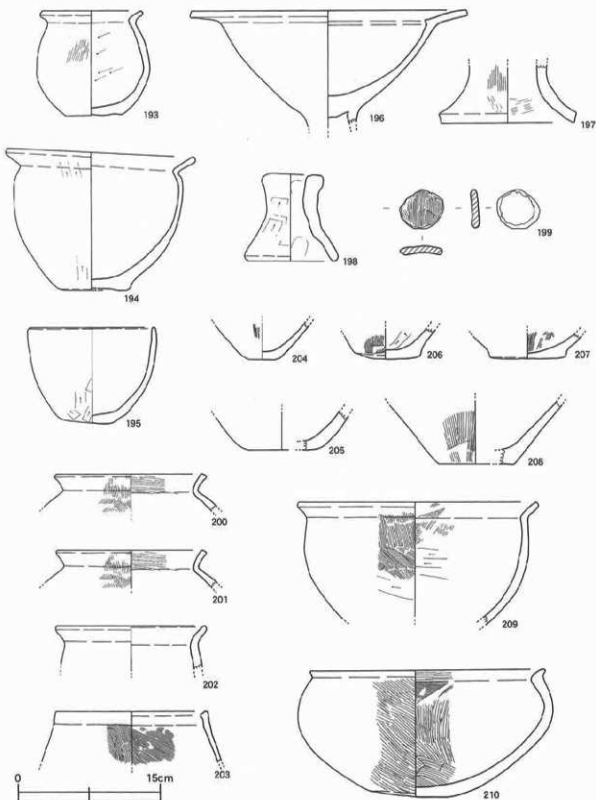
第50図 21・23号竪穴式住居（建物）出土土器実測図【1／4】

16～18はSB-03出土土器で、16は甕形、17・18は甕形土器。

19～26はSB-04出土土器で、19～24は甕形土器破片で、口縁部内側の稜線は明確なものはない。25は鉢形土器。26の甕形土器は1号屋内土壇からの出土である。

27～34はSB-05出土土器で、27～29は甕形土器で、29は中期の様相をもつ。30・31は甕形土器で、後期中頃を示す。32・33は鉢形土器。34は脚部欠失の高坏。

35～38はSB-06出土土器で、35は甕形、36は鉢形土器で後期前半～中頃を示す。



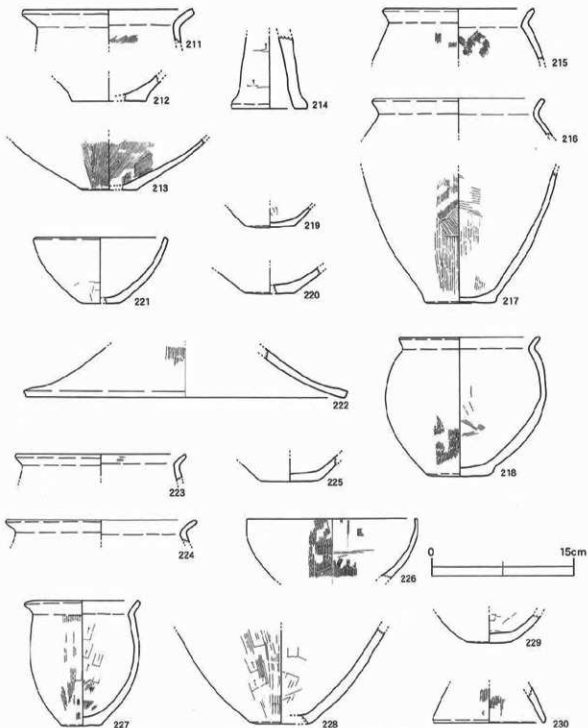
第51図 23・24号竪穴式住居出土土器実測図【1/4】

39～46はSB-07出土土器で、39・40は壺形土器、41～43は甕形土器、44は鉢形土器、45・46は高坏脚部。

47～51はSB-08出土土器で、47～49は甕形土器で後期前半頃を示す。50は壺形、51は鉢形土器。

52～60はSB-11出土土器で、52～55・57は甕形土器で、57は中期の土器。56・59は壺形土器、60は器台。主に後期中頃を示す。

61・62はSB-12出土土器で、甕形土器。63・64はSB-14出土土器で、甕形土器。



第52図 25～28号竪穴式住居出土土器実測図 [1/4]

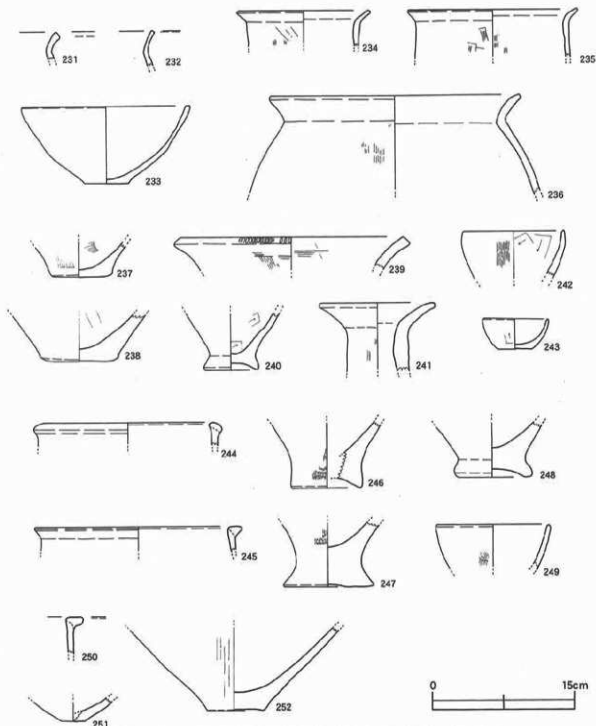
65～82はSB-15出土土器で、65～69は甕形土器の口縁部。70～76は底部破片で70・71は甕形、72・73は壺形。74～76は底部径小さくミニチュア土器か。77～79は壺形土器で、79は南東壁際で焼土が被覆していた土器。80・81は鉢形土器。82は高坏脚部。

83～85はSB-16出土土器で、83・84は鉢形、85は高坏。

86～88はSB-17出土土器で、86・87は甕形、88は器台脚部。

89～138はSB-18出土土器で、89～96はA・D区出土。97～138はB・C区出土。

89は甕形、90～92は鉢形、93～95は壺形で93・94は口縁部が直立気味に立ち上がる。96は器台。97～107・111は甕形土器で、口縁部を肥厚させる(97)ものや、口縁端部を外に屈曲させる(99・100)もの等があり、口縁部が直立気味に立ち上がるものが多くなる。108～110・112は壺形土器で、109の肩部はやや撫肩。113～126は甕形・壺形土器の底部破片。一部に鉢形土器も含

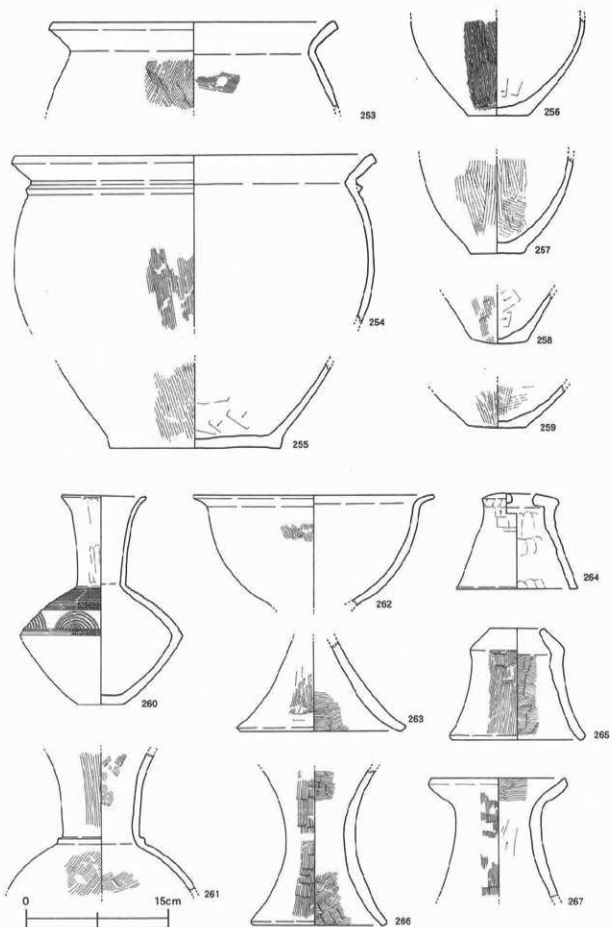


第53図 29～32号竪穴式住居（建物）出土土器実測図〔1／4〕

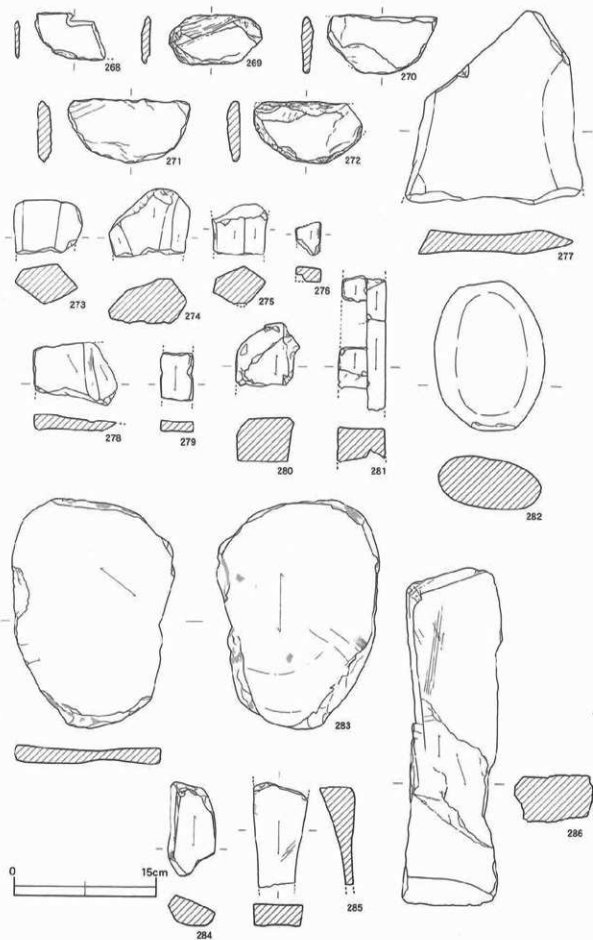
まれる。若干、レンズ状の底部が見られる。127～130・134は高坏で、134は後期後半頃のもので、東九州系。131は器台。132・133は支脚。135は脚付甕の脚部か。136は鉢形土器のミニチュア。137はミニチュア土器と考えていたが、支脚かもしれない。138は甕形又は壺形土器の胴部破片を利用し、周辺部を打ち欠いた円盤形の土製品である。

139～155（144は欠番）はSB-19出土土器で、139・141～143・145・146は甕形土器で、直立気味の口縁部にやや幅の狭い底部を有す。140・147～150は鉢形土器で、148はヘラケズリを内外面に施す。151は壺形の底部か。152は支脚。153～155は器台で、154・155は器壁が極めて厚く、生焼け状態で非常にもろい。通常使用の器台ではなく、祭祀に係わる遺物と思われる。

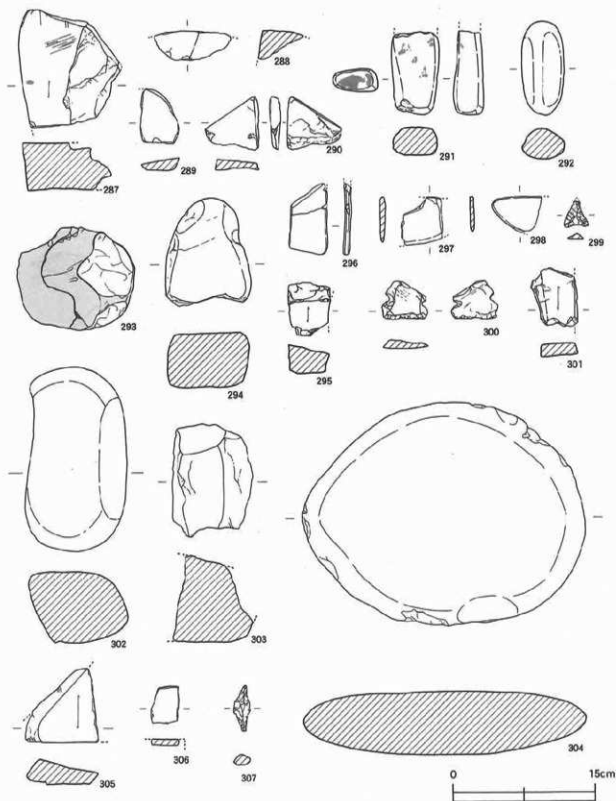
156～162はSB-20出土土器で、全て甕形土器である。161には刻目もあるが、概ね弥生時代中期初頭～前半頃を示している。



第54图 42号竖穴式住居出土土器実測図 [1/4]



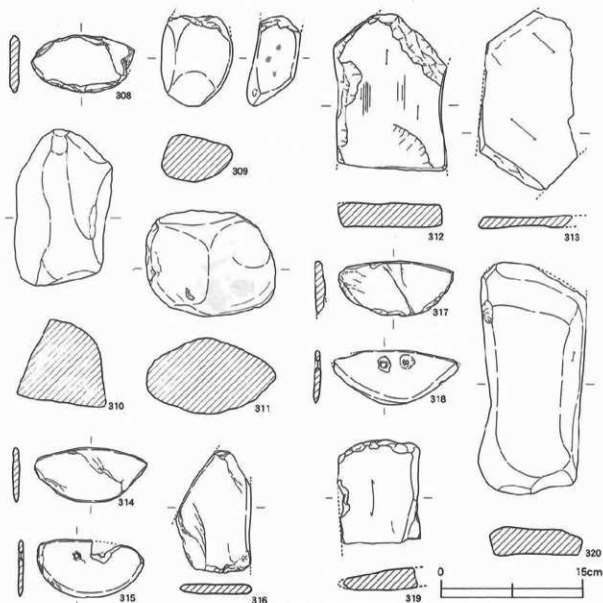
第55图 1·4~6号竖穴式住居(建物)出土石器实测图 [1/4]



第56図 7・8・11・14～17号竪穴式住居（建物）出土石器実測図 [1/4]

163～182はSB-21出土土器で、163～172は甕形土器で、底部から胴部へのくびれが明瞭なものと、そうでないものがある。173～175は壺形土器で、173の頸部はあまり締まらない。176は底部を突孔した甕形土器か。177・183は高坏。178～180は鉢形土器で、180は碗形に近い。181・182は器台。

184～199はSB-23出土土器で、184～190は甕形土器。191～193は壺形土器。194・195は鉢形土器。196・197は高坏で、196は中期のもの。198は支脚で、199は甕形又は壺形土器の胴部破片を利用し、周辺部を打ち欠いた円盤形の土製品である。



第57図 18・19・21・23号竪穴式住居（建物）出土石器実測図【1/4】

200～210はSB-24出土土器で、200～202は甕形土器。200と201は同一個体か。203は甕形土器。204～208は甕形又は甕形土器の底部破片。若干レンズ状底部気味のものが含まれる。209・210は鉢形土器で、210は屋内土壌出土の浅鉢である。現代のサラダボールに似た形状が特異である。

211～214はSB-25出土土器で、211・212は甕形土器、213が甕形土器、214は支脚である。甕形土器の口縁部は屈曲が強く、底部幅も広い。

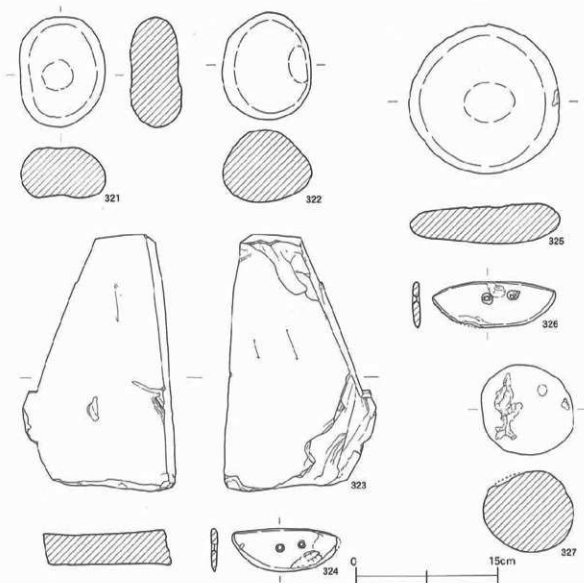
215～222はSB-26出土土器で、215～217は甕形土器で、底部くびれは明瞭。218～221は鉢形土器である。220は甕形土器底部か。222は高坏脚部で、大型品である。

223～226はSB-27出土土器で、223～225は甕形土器。口縁部の屈曲は強い。226は鉢形土器である。

227～230はSB-28出土土器で、227・228は甕形土器、229は甕形土器で底部はやや丸味を帯びてくる。230は器台脚部か。

231～233はSB-29出土土器で、231・232は甕形土器口縁部破片、233は鉢形土器である。底部幅は狭い。

234～243はSB-30出土土器で、234～240は甕形土器である。口縁部の屈曲もやや強めで、底部のくびれも明瞭。一部の口縁端部には刻み目が施されている。241は器台、242・243は鉢形土器で、243は小型のもので、現代の猪口に近い。



第58図 24・26～28号竪穴式住居出土石器実測図【1/4】

244～249はSB-31出土石器で、244～248は菱形土器で弥生時代中期前半を示す。249は鉢形土器。

250～252はSB-32出土石器で、250は菱形土器、251・252は壺形土器である。

253～267はSB-42出土石器で、253～258は菱形土器で口縁部は長く外側に屈曲する。255は底部径が非常に大きく、特異である。259～261は壺形土器で、260は免田式の優品である。262・263は高坏。264・265は支脚。266・267は器台。266は混入品か。

石器 〈第55図～58図〉

268～277はSB-01出土石器で、268～272は石包丁未製品。片岩製。273～277は砥石で、274・275は砂岩製。276は泥岩製。277は片岩製。

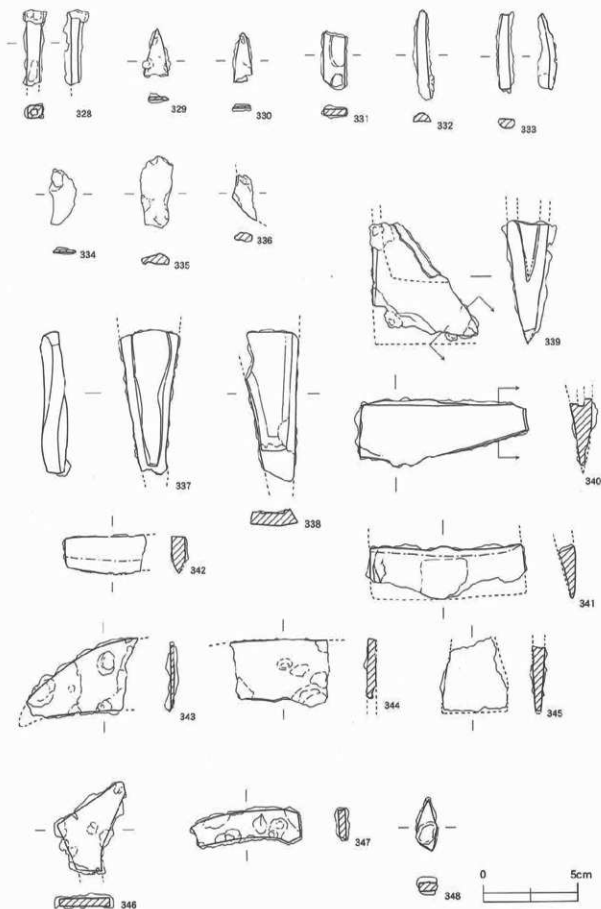
278～282はSB-04出土石器で、278～281は砥石。278は片岩製、279は砂岩製、280・281は泥岩製。282は下部に敲打痕を残す叩き石。

283～285はSB-05出土石器で、全て砥石。283は片岩製、284は泥岩製、285は砂岩製。286はSB-06出土石器で、片岩製の砥石。表面大半が風化で剥離している。

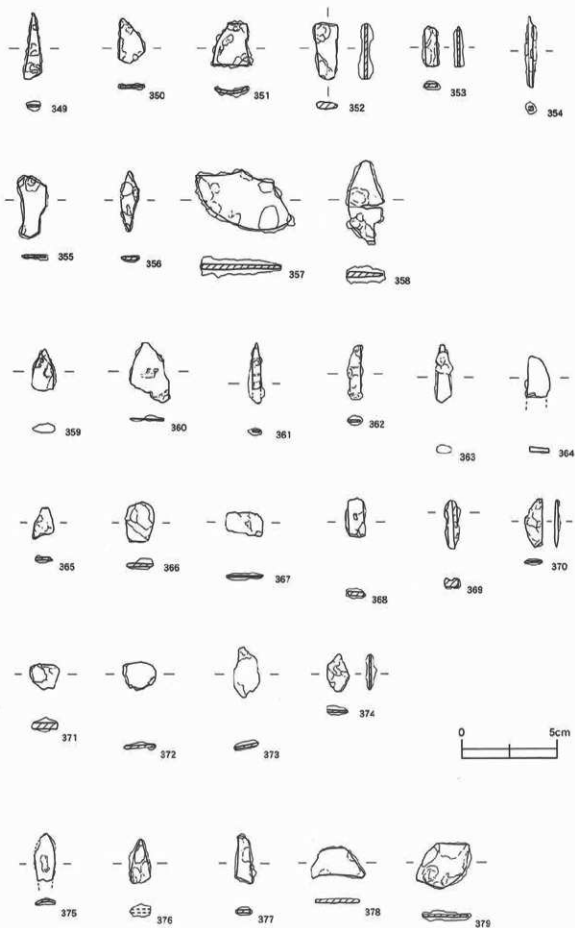
287～292はSB-07出土石器で、287～289は砂岩製の砥石。290は片岩製で背部分に平滑面。291は錆の貫入が著しい。292は3面に平滑面。

293はSB-08出土石器で、表面は赤黒色に被熱している。

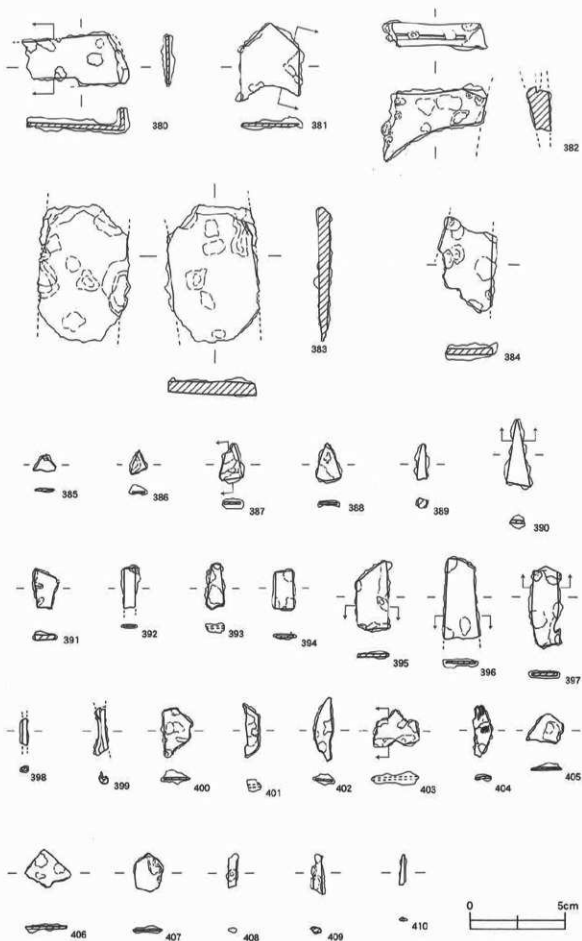
294・295はSB-11出土石器で、両者とも砥石。295は片岩製。



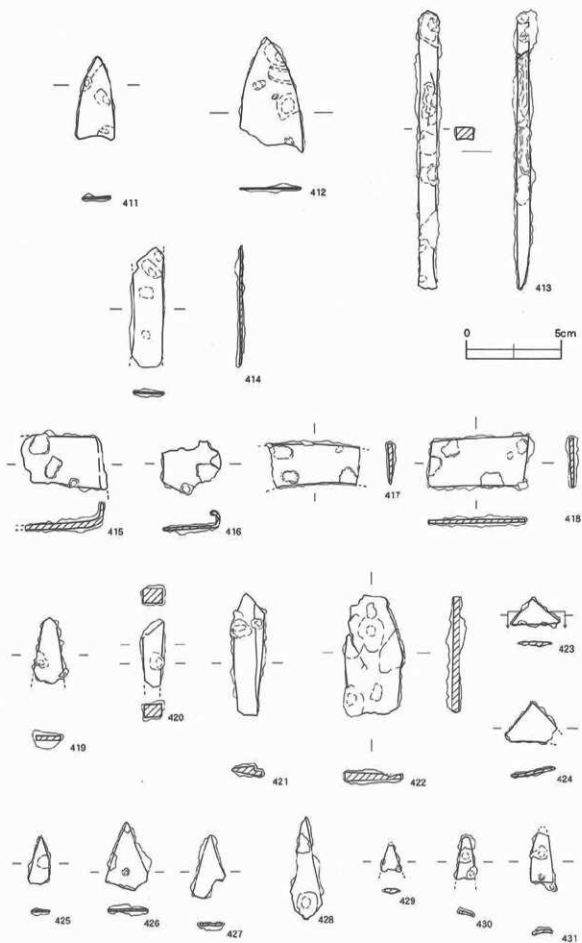
第59圖 1・4号豎穴式建物出土鉄器実測図〔1／2〕



第60图 4~6号竖穴式建物出土鉄器実測図 [1/2]

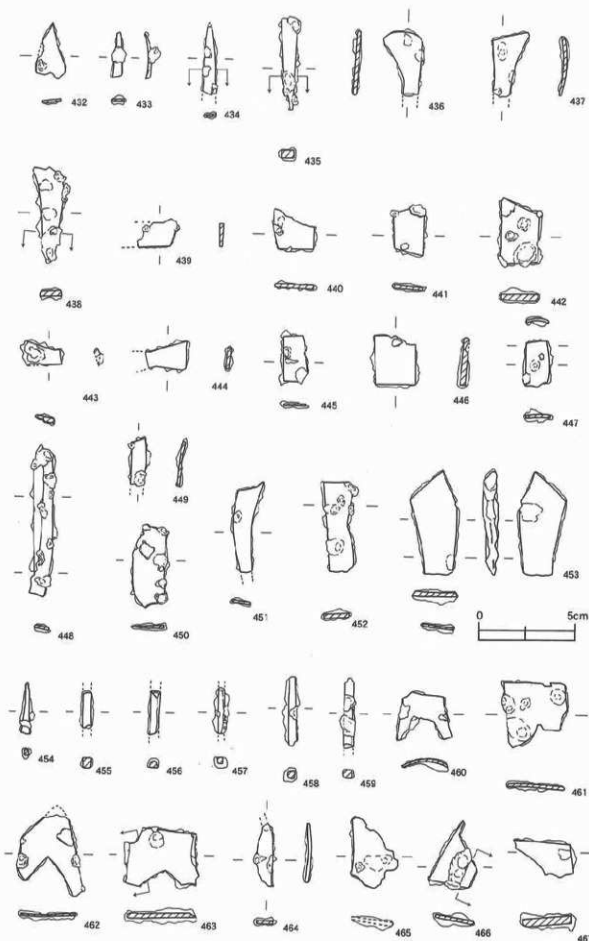


第 6 1 图 7·8 号竖穴式建物出土铁器实测图 [1/2]

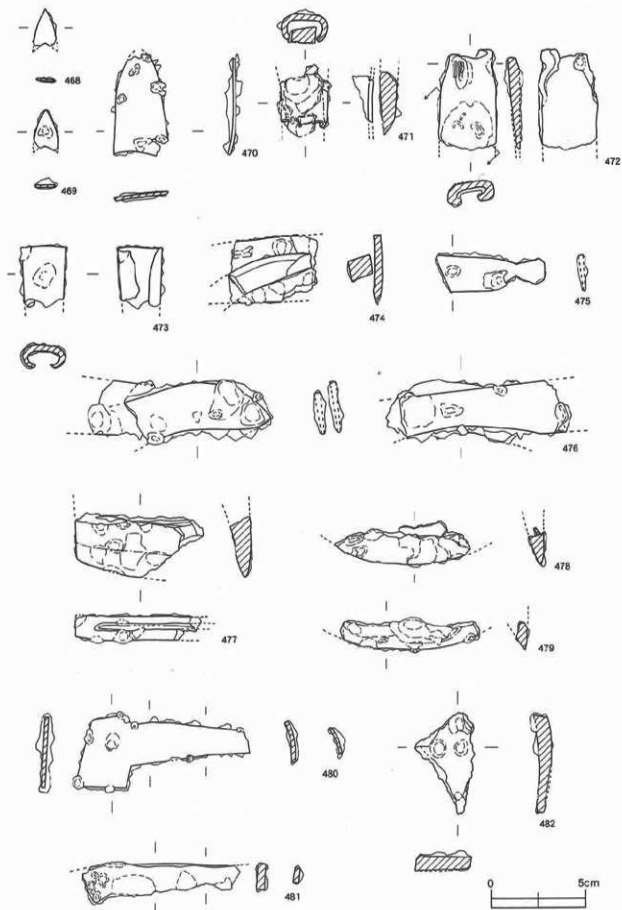


第62図 15・16竪穴式住居・18号竪穴式土壇出土鉄器実測図 [1/2]

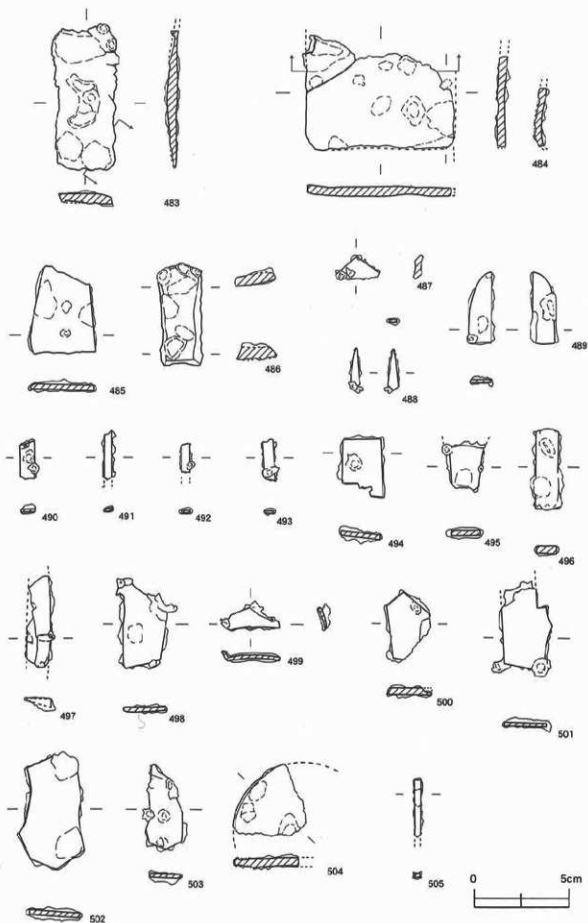
※SB-18出土鉄器は全てB・C区出土



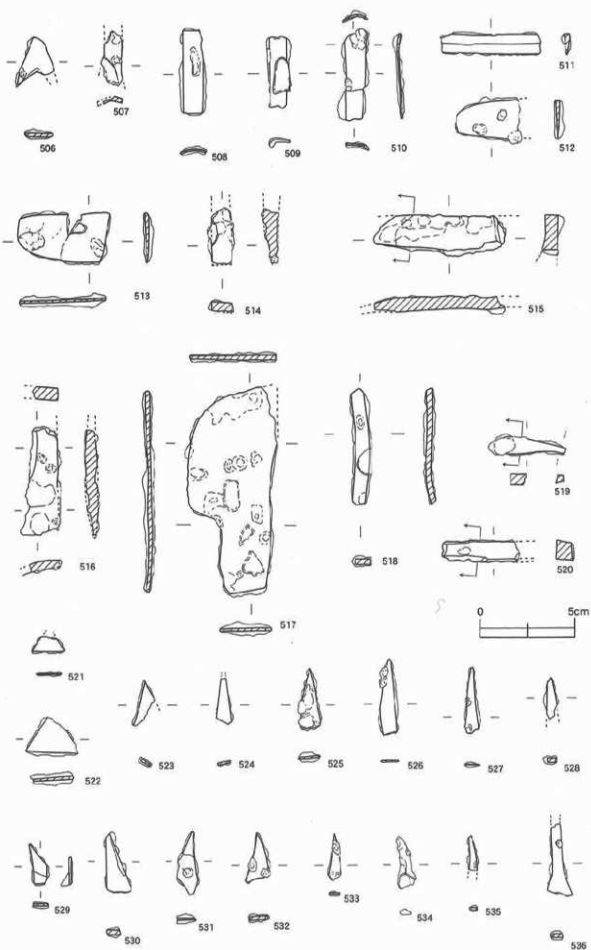
第63図 18号竪穴式土坑(B・C区)出土鉄器実測図[1/2] その1



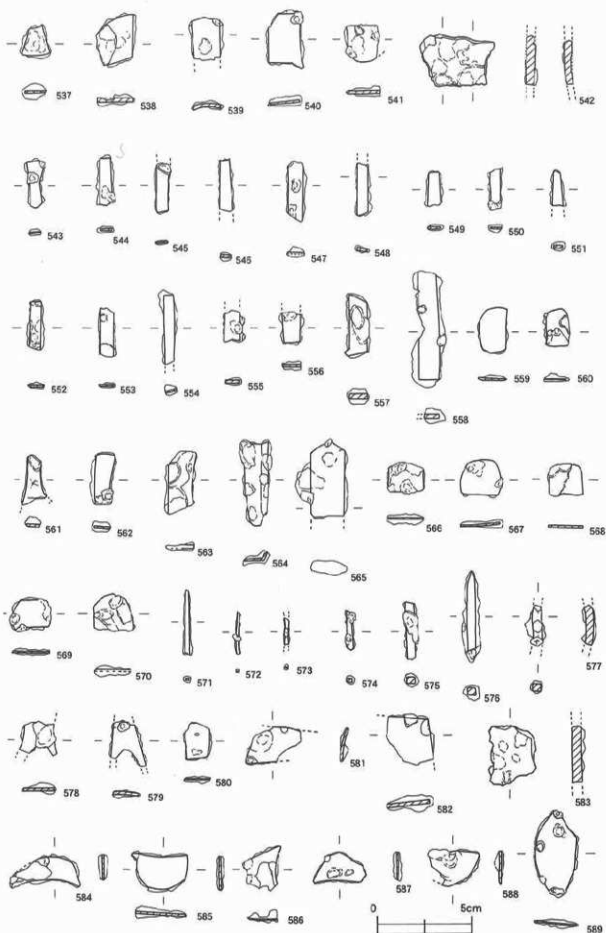
第64図 18号竪穴式土壌（B・C区）出土鉄器実測図〔1／2〕 その2



第65図 18号竪穴式土坑 (B・C区) 出土鉄器実測図 [1/2] その3



第66図 21号竪穴式建物出土鉄器実測図 [1/2] その1



第67図 21号竪穴式建物出土鉄器実測図 [1/2] その2

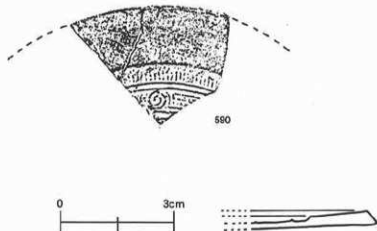
296～299はSB-14出土石器で、296は側面に鏽の貫入が見られる。砥石か。297は石包丁破損品。298は未製品。299はサヌカイト製の三角形鏢。

300～305はSB-15出土石器で、300は石匙、301・305は砥石で301は泥岩製。302・304はすり石で、302は3面に使用が認められる。

306はSB-16出土の砥石。307はSB-17出土のサヌカイト製ドリル。

308～313はSB-18出土石器で、309・313はA・D区出土品。308は石包丁未製品、310は側面3面に鏽の付着が見られる。311は被熱石で、312は砂岩製砥石。309は砥石か。一部に鏽の付着が見られる。313は片岩製砥石。

314・315はSB-19出土石器で、314は石包丁未製品、315は一部欠損品。両者とも片岩製。



第68図 21号竪穴式建物出土銅鏡実測図 [1/1]

316はSB-21出土石器で、片岩製の砥石表裏2面の使用痕。

317～320はSB-23出土石器で、317は石包丁未製品、318はほぼ完形品。両者とも片岩製。319・320は砥石で、319は表裏2面、320は表2面・裏1面の3面の使用痕をもつ。共に砂岩製。

321～324はSB-24出土石器で、321は両面に使用痕のあるくぼみ石。322は叩き石か。323は大型の砥石で表裏2面に使用痕がある。片岩製。324は片岩製の石包丁。

325はSB-26出土石器で、表1面使用のくぼみ石。326はSB-27出土の石包丁。片岩製。327はSB-28出土の石器で、敲打石か。

金属性遺物

鍛冶関連遺物 (第59図～67図)

本調査では鍛冶関連遺構から多量の鉄器・鉄片資料が出土した。各資料の個別説明は別表で示す事とし、本項ではその分類概念を提示する。

資料は大きく製品類と鉄片類に分け、前者は製品と不明鉄器片(板状・棒状)に分類。後者は、形状から大分類、辺部特徴から中分類、外見所見等から小分類と3分類を行った。大分類では、三角形状(A)、四角形状(B)、針状(C)、棒状(D)、二又状(E)、不整形(F)と設定。更に形態上の差からAをA1(正三角形状)とA2(長三角形状)に、BをB1(正四角形状)とB2(長四角形状)、B3(台形状)に細分した。中分類では、側辺部分が直線的なもの(a)、内外湾するもの(b)、両者共通のもの(c)、これら以外のもの(d)、とし、小分類では、細身で薄いもの(1)、厚いもの(2)、幅広で薄いもの(3)、厚いもの(4)、端部の一部が「L」字に屈曲したもの(5)、とした。

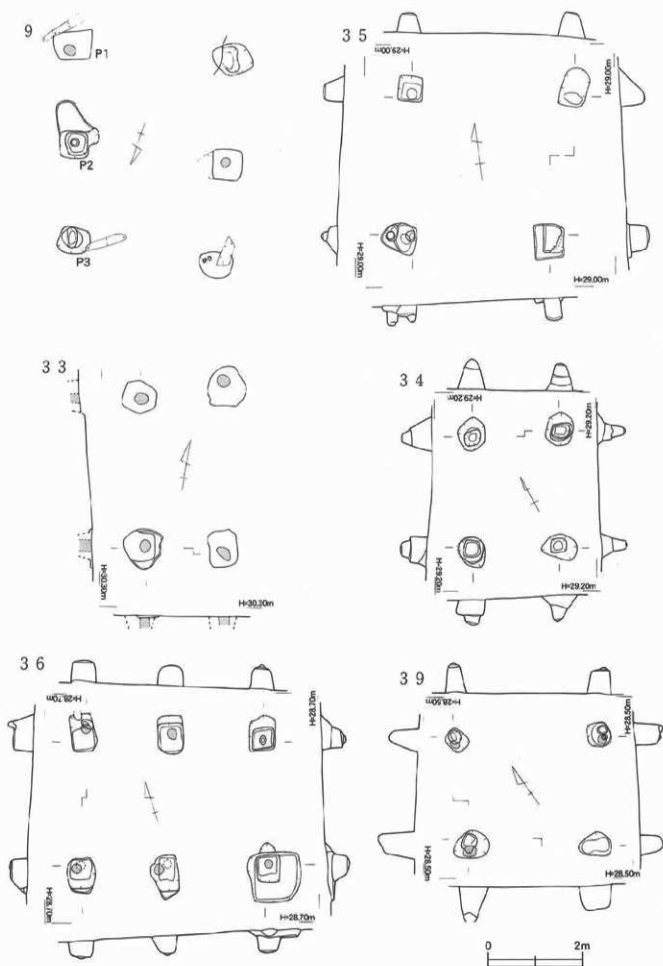
銅製品 (第68図)

590はSB-21より出土した後漢時代の雲雷文帯連弧文鏡(内行花文鏡)である。復元径は11.7cmを測る。鏽上がりは良好で、文様も鮮明に確認出来る。文様帯には朱が付着している。破片の4辺中3辺に研摩痕があり、破鏡と思われる。突孔は見当たらない。弥生時代後期中頃以降の所産と考えられる。

(2) 掘立柱建物(SB)

9号掘立柱建物(SB-09) (第69図)

調査区東端附近で検出した6本柱の掘立柱建物である。SB-01を切る。長軸方位をN-14°-Wに取る1間×2間の掘立柱建物である。SB-10との時代的關係は不明であるが、長軸方向の同一性から建て替わりに伴うものと考えられる。規模は4.0m×3.2m、床面積12.8m²を測る。柱穴堀方プランは隅丸方形で、東側柱がやや規模が大きい。柱痕跡は判然としない。柱穴堀方より小型の鉢形土器が出土した。



第69图 9号·33号~36号·39号 掘立柱建物実測図 [1/80]

10号掘立柱建物 (SB-10)

調査区東端附近で検出した6本柱の掘立柱建物である。SB-01を切る。長軸方位をN-14°-Wに取る1間×2間の側柱建物である。規模は4.0m×3.2m、床面積12.8㎡を測る。柱穴掘方プランは隅丸方形で、SB-09と比較するとやや小さい。柱痕跡は判然としない。柱穴掘方より甕形土器細片が出土した。

33号掘立柱建物 (SB-33)

〈第69図〉

調査区東端附近で検出した4本柱の掘立柱建物である。長軸方位をN-10°-Wに取る1間×1間の建物である。長軸に比して短軸が非常に短い。規模は3.1m~3.6m×1.8m、床面積6.0㎡を測る。柱痕跡は判然としない。柱穴掘方より甕形土器細片が出土したが図示していない。

34号掘立柱建物 (SB-34)

〈第69図〉

調査区南側の掘立柱建物群内で検出した4本柱の掘立柱建物である。長軸方位をN-28°-Eに取る1間×1間の建物である。規模は2.4m×1.8m、床面積4.3㎡を測る。柱痕跡は判然としない。柱穴掘方より甕形土器細片が出土したが図示していない。

35号掘立柱建物 (SB-35)

〈第69図〉

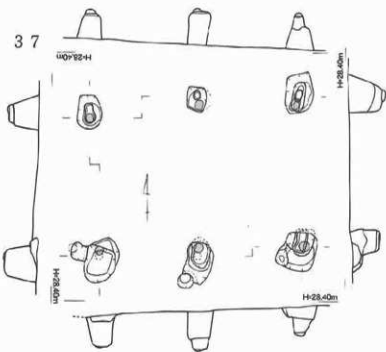
調査区南側の掘立柱建物群内で検出した4本柱の掘立柱建物である。長軸方位をN-6°-Eに取る1間×1間の建物である。南西緩斜面に対し、やや斜角を取る。4つの柱穴中、北東側の柱穴がやや位置をずらし建物全体としての直角を崩している。規模は3.0m×3.0m、床面積9.0㎡を測る。一部に柱痕跡、柱圧痕が残る。柱穴掘方より甕形土器細片が出土した。

36号掘立柱建物 (SB-36)

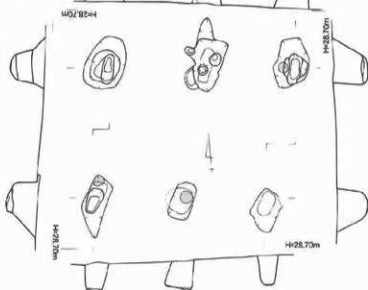
〈第69図〉

調査区南側の掘立柱建物群内で検出した6本柱の掘立柱建物である。南東部の柱穴をSP-80に切られる。長軸方位をN-73°-Wに取る1間×2間の側柱建物である。南西緩斜面に対し、やや斜角を取る。規模は4.06

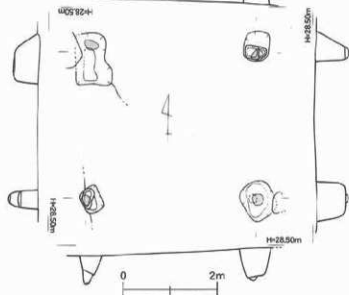
37



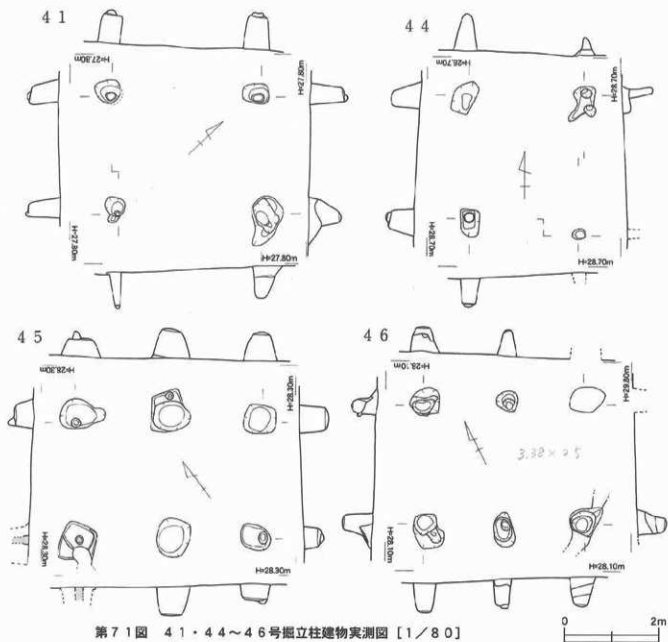
38



40



第70図 37・38・40号
掘立柱建物実測図 [1/80]



第71図 41・44～46号掘立柱建物実測図 [1/80]

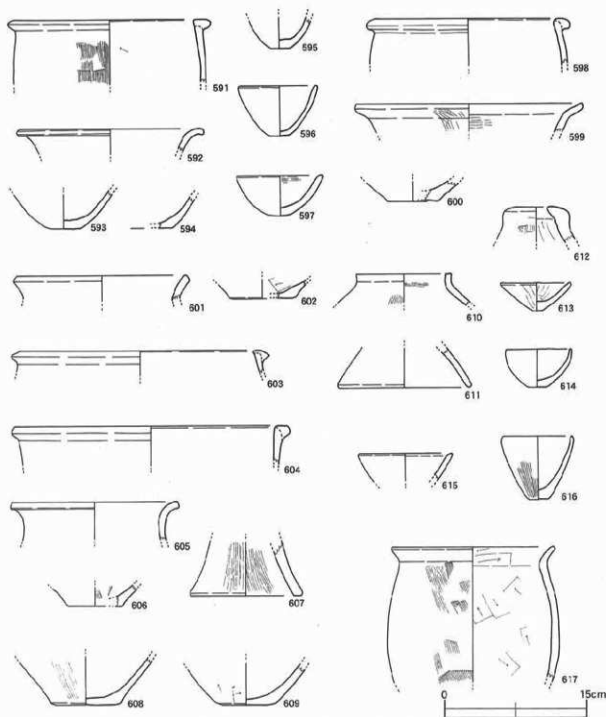
$m \times 2.6m \sim 2.96m$, 床面積 $11.3m^2$ を測る。短軸の間隔は3対とも若干ずれており、ややいびつな長方形を呈している。柱穴掘方プランは隅丸長方形で、底面には柱痕跡、柱圧痕が残る。柱穴掘方より甕・壺形土器・器台が出土した。

37号掘立柱建物 (SB-37) 〈第70図〉

調査区南側の掘立柱建物群内で検出した6本柱の掘立柱建物である。長軸方位を東西に取る1間×2間の側柱建物である。南西緩斜面に対し、ほぼ直角を取る。規模は $4.4m \times 3.2m$ 、床面積 $14.1m^2$ を測り、調査区内検出の掘立柱建物中、最大規模を有している。短軸の間隔は3対とも若干ずれており、建物平面プランはやや「ハ」の字形の長方形を呈している。柱穴掘方プランは隅丸長方形で、底面には柱痕跡、柱圧痕が残る。南側側柱列の規模がやや大きい。柱穴掘方より甕土器細片が出土した。

38号掘立柱建物 (SB-38) 〈第70図〉

調査区南側の掘立柱建物群内で検出した6本柱の掘立柱建物である。長軸方位を $N-83^{\circ}-W$ に取る1間×2間の側柱建物である。南西緩斜面に対し、やや斜角を取る。規模は $3.94m \times 2.7m$ 、床面積 $10.6m^2$ を測り、調査区内検出の掘立柱建物中、最大規模の柱穴を有している。建物平面プランはやや菱形の長方形を呈している。柱穴掘方プランは隅丸長方形又は長円形で、一部底面では柱圧痕が残る。北面の側柱列には柱穴の重複が見られ、建て替えの可能性がある。柱穴掘方より甕形土器、高坏脚部、支脚、ミニチュア土器、白灰色の壁材状の粘土塊が出土した。



第72図 9・10・35~38・40・41号掘立柱建物出土土器実測図 [1/4]

39号掘立柱建物 (SB-39) <第69図>

調査区南側の掘立柱建物群内で検出した4本柱の掘立柱建物である。南西柱穴がSD-05を切る。長軸方位をN-55°-Wに取る1間×1間の建物である。南西緩斜面に對し、やや斜角を取る。北面柱列に對し南面柱列がやや狭まっており、若干台形状を呈している。規模は3.16m×2.2m、床面積7.0m²を測る。北東の柱穴には柱穴の重複が見られた。柱痕跡、柱圧痕が残る。明確な遺物は確認出来なかったが、柱掘方中より白灰色の壁材状の粘土塊が出土した。

40号掘立柱建物 (SB-40) <第70図>

調査区南側の掘立柱建物群内で検出した4本柱の掘立柱建物である。南西面柱穴がSX-08を切る。長軸方位を東西に取る1間×1間の建物である。南西緩斜面に對し、直角を取る。柱穴の配置が各柱間とも直角を呈し、正四角形となる。又、建物検出面の柱痕跡と掘り下げ後の痕跡がほぼ一致する事から、主柱は直立柱であった事がわかる。規模は3.48m×3.06m、床面積10.6m²を測る。柱痕跡、柱圧痕が残る。柱穴掘方より浅・深鉢形のミニチュア土器、白灰色の壁材状の粘土塊が出土した。

41号掘立柱建物 (SB-41) 〈第71図〉

調査区南側の掘立柱建物群内中最も標高の低い場所で検出した4本柱の掘立柱建物である。長軸方位をN-37°-Eに取る1間×1間の建物である。南西緩斜面に對し、やや斜角を取る。規模は2.96m×2.48m、床面積7.3㎡を測る。4柱穴中3穴に柱圧痕が残る。柱穴掘方より甕形土器が出土した。

44号掘立柱建物 (SB-44) 〈第71図〉

調査区南側の掘立柱建物群内で検出した4本柱の掘立柱建物である。長軸方位を東西に取る1間×1間の建物である。南西緩斜面に對し、やや斜角を取る。建物柱穴がSB-38の内側に全て収まる事や軸方向がほぼ同一である事から、時期の異なる同一の建物と考えたい。規模は2.6m×2.46m、床面積6.4㎡を測る。柱穴の一部に柱圧痕が残る。出土遺物は確認出来なかった。

45号掘立柱建物 (SB-45) 〈第71図〉

調査区南側の掘立柱建物群内で検出した6本柱の掘立柱建物である。長軸方位をN-55°-Wに取る1間×2間の側柱建物である。南西緩斜面に對し、やや斜角を取る。規模は3.9m×2.48m、床面積9.7㎡を測る。6柱穴中3穴に柱痕跡や圧痕が残る。出土遺物は確認出来なかった。

46号掘立柱建物 (SB-46) 〈第71図〉

調査区南側の掘立柱建物群内で検出した6本柱の掘立柱建物である。南東柱穴がSD-05を切る。長軸方位をN-64°-Wに取る1間×2間の側柱建物である。南西緩斜面に對し、やや斜角を取る。規模は3.38m×2.5m、床面積8.5㎡を測る。一部に柱圧痕が残る。出土遺物は確認出来なかった。

掘立柱建物出土遺物

土器 〈第72図〉

591~597はSB-09出土土器で、591は甕形土器、592は甕形土器、593・594は甕形、又は、鉢形土器の底部。595~597は小型の鉢形土器である。591は流れ込みか。

598~600はSB-10出土土器で、598は甕形、600は甕形土器底部。

601・602はSB-35出土土器で、甕形土器。

603~607はSB-36出土土器で、603・604は甕形土器、605は甕形土器、606は鉢形土器か。607は器台。

608・609はSB-37出土土器で、甕形、又は甕形土器の底部である。

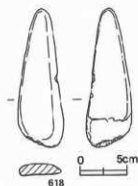
610~614はSB-38出土土器で、610は甕形土器。611は高坏か。613・614は小型の鉢形土器で、同一ビット出土である。

615・616はSB-40出土土器。共に鉢形土器で、616は蛸壺状に深い。

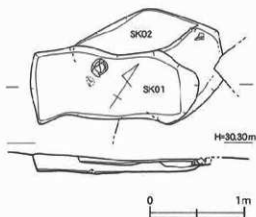
617はSB-41出土土器で、甕形土器である。

石器 〈第73図〉

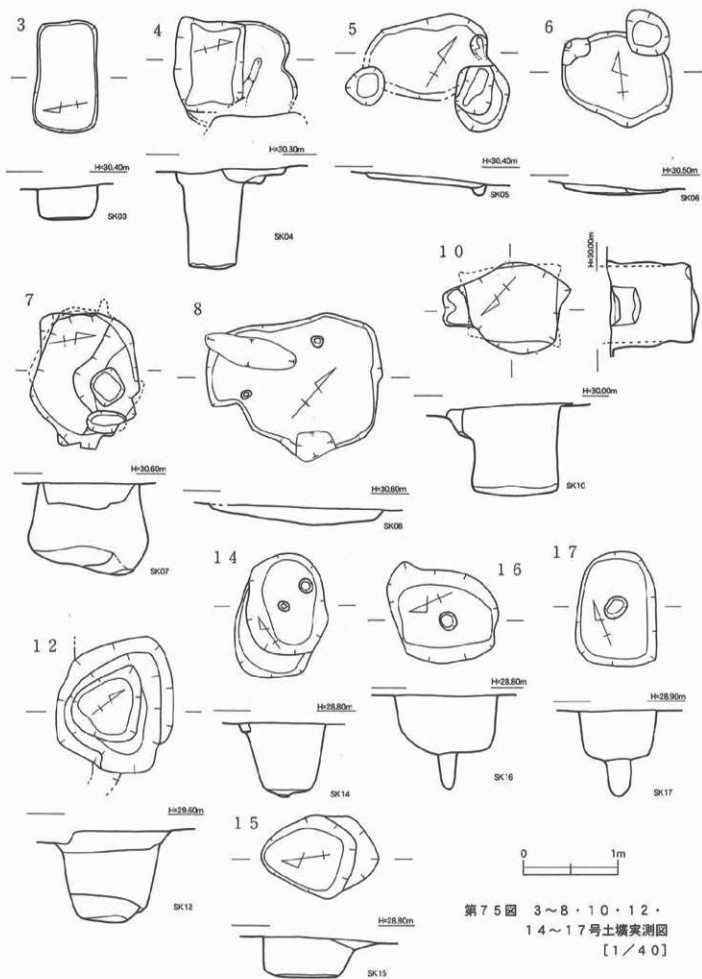
618はSB-10出土土器で、長三角形状を呈しており、端部に打撃痕が認められる。石斧と思われるが、叩き石の可能性もある。



第73図 10号掘立柱建物
出土石器実測図 [1/4]



第74図 1・2号土坑実測図 [1/40]



第75図 3~8・10・12・
14~17号土壤実測図
[1/40]

(3) 土壌 (SK)

1号土壌 (SK-01) 〈第74図〉

調査区北東端附近で検出したやや不整形の隅丸長方形を呈する土壌である。SB-01、SK-02を切る。長軸方位をN-49°-Eに取る。規模は1.78m×0.66m、深さ0.2mを測る。ほぼ平坦な底面直上には須恵器坏身・蓋のセットが1対正置し、その上から丹塗り高坏が倒置した状態で埋納されていた。調査当初、土壌墓であると判断していたが、土器が土壌の中心付近に埋置されている事などから、祭祀用土壌の可能性も捨てきれない。本事例は、筑後地区内では初現である。須恵器は小田羅年のⅢB期を示している。

2号土壌 (SK-02) 〈第74図〉

調査区北東端附近で検出したやや不整形を呈する土壌である。SK-01に切られる。長軸方位を東西に取る。規模は1.52m×1.24m、深さ0.1mを測る。底面直上から器台、石包丁が出土した。

3号土壌 (SK-03) 〈第75図〉

調査区北東端附近で検出した隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-83°-Wに取る。規模は1.18m×0.64m、深さ0.36mを測る。土壌の規模や形態から中・近世墓と考えられるが、判断材料に乏しい。出土品は確認出来なかった。

4号土壌 (SK-04) 〈第75図〉

調査区北東端附近で検出した長方形を呈する土壌である。SK-03に隣接する。

長軸方位をN-76°-Wに取る。規模は1.0m×0.7m、深さ1.0mを測る。土壌の規模や形態から中・近世墓と考えられるが、判断材料に乏しい。出土品は確認出来なかった。

5号土壌 (SK-05) 〈第75図〉

調査区北東端附近で検出した不整形を呈する土壌である。非常に浅く、土壌とする事に戸惑いを感じたが、掘り方の状況から土壌として考えた。長軸方位をN-59°-Eに取る。規模は1.32m×0.86m、深さ6cmを測る。出土品は確認出来なかった。

6号土壌 (SK-06) 〈第75図〉

調査区北東端附近で検出した不整形を呈する土壌である。SK-05同様、非常に浅く土壌とする事に戸惑いを感じたが、掘り方の状況から土壌として考えた。長軸方位をN-84°-Wに取る。規模は1.14m×1.02m、深さ0.12mを測る。弥生時代前期に属する土器が出土した。

7号土壌 (SK-07) 〈第75図〉

調査区東端附近で検出した楕円形を呈する土壌である。長軸方位をN-81°-Wに取る。規模は1.42m×1.14m、深さ0.98mを測る。土壌の形状や出土品の状況等から、弥生時代中期の貯蔵穴と考えられる。

8号土壌 (SK-08) 〈第75図〉

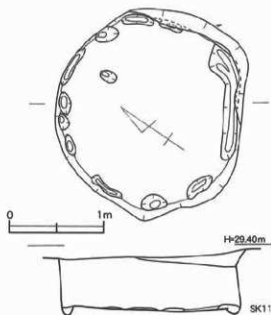
調査区東側で検出した不整形を呈する土壌である。長軸方位をN-48°-Eに取る。規模は1.84m×1.44m、深さ0.18mを測る。弥生時代中期に属する土器細片が少量出土した。

9号土壌 (SK-09)

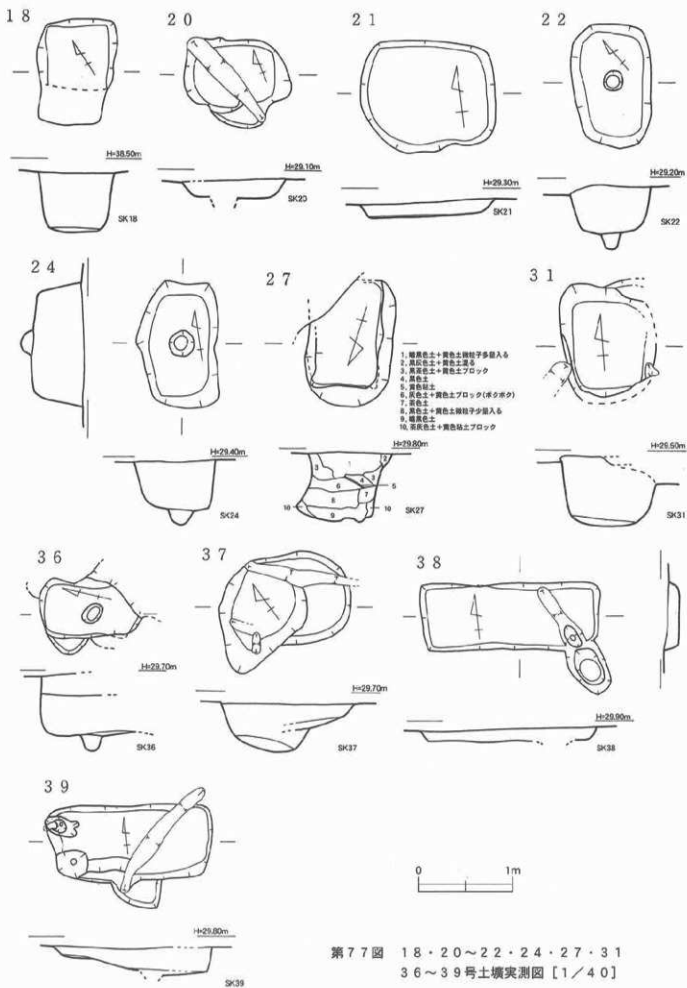
調査区北東端で検出した楕円形を呈する土壌である。SB-02を切る。長軸方位をN-18°-Eに取る。規模は1.88m×1.10m+α、深さ0.25~0.52mを測る。

10号土壌 (SK-10) 〈第75図〉

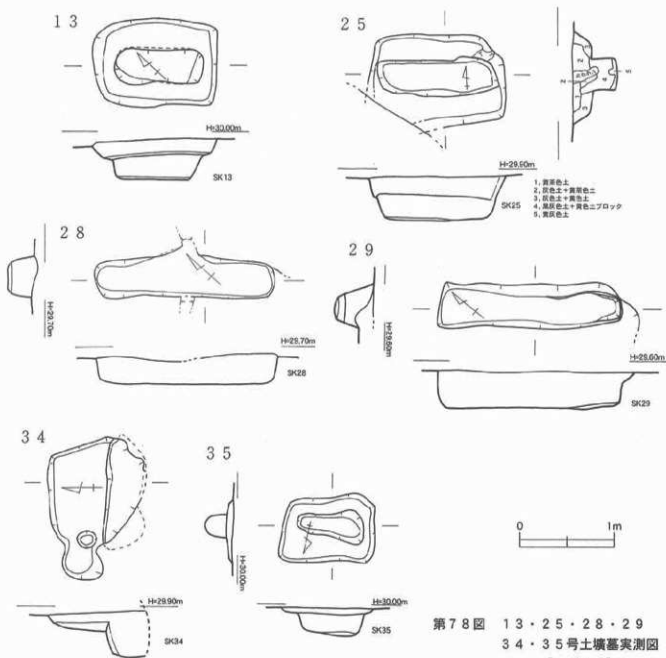
調査区北東で検出した方形を呈する土壌である。長軸方位をN-48°-Eに取る。規模は1.22m×0.92m、深さ0.96mを測る。北東壁に階段状テラスを有する等、土壌の形状や出土品の状況等から、弥生時代中期の貯蔵穴と考えられる。出土品については、細片の爲図示していない。



第76図 11号土壌実測図 [1/40]



第77図 18・20~22・24・27・31
36~39号土坑実測図 [1/40]



11号土墳 (SK-11) 〈第76図〉

調査区北東で検出した円形を呈する土墳である。規模は直径2.0m～2.24m、深さ0.6mを測る。壁面直下に板状の痕跡が明瞭に遺存している事から、壁面全体に板壁が存在していたと思われる。土墳の状況等から貯蔵穴の可能性もあるが、断言出来ない。別用途も視野に入れねばならないか。

12号土墳 (SK-12) 〈第75図〉

調査区北西で検出した不整三角形を呈する土墳である。長軸方位をN-23°-Wに取る。規模は1.44m×1.28m、深さ0.98mを測る。調査当初、SB-15内のベッド状遺構を切り込むようにあり、非常に規模が大きい為、別遺構の土墳と捉えていたが、出土品等から同住居の屋内土墳の可能性が高い。弥生時代後期の土器が出土している。

13号土墳 (SK-13) 〈第78図〉

調査区中央で検出した隅丸長方形を呈する土墳墓である。検出時、隣接するSB-23を切っているものと思われたが、実際は逆の状況であった。長軸方位をN-43°-Wに取る。規模は、掘り方が1.32m×0.94m、深さ0.98mを測り、主体部は0.94m×0.38m、深さは掘り方底面より0.23mを

測る。石蓋や木蓋の痕跡は認められず、直葬と思われる。出土土器は細片であったが、概ね弥生時代中期中～後半頃と考えられる。

14号土墙 (SK-14) 〈第75图〉

調査区西端で検出した不整長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-37°-Eに取る。規模は1.36 m×0.96 m、深さ0.76 mを測る。埋土にはやや軟質の黒色土が密にあった。逆茂木状の柱穴は認められなかったが、状況から落とし穴状遺構と考えられる。出土品は確認出来ず、時期の特定は困難である。

15号土塘 (SK-15) (第75图)

調査区西側で検出した不整楕円形を呈する土壌である。長軸方位を $N-8^{\circ}-E$ に取る。規模は $1.24\text{ m} \times 0.88\text{ m}$ 、深さ 0.6 m を測る。埋土には、やや軟質の黒色土が密にあった。逆茂木状の柱穴は認められなかったが、状況から落とし穴状遺構と考えられる。出土品は確認出来ず、時期の特定は困難である。

16号土壤 (SK-16) (第75图)

調査区西端で検出した不整楕円形を呈する土壌である。長軸方位をN-25°-Eに取る。土壌中央には小穴が穿たれており、逆茂木状の柱が立っていたと考えられる。規模は1.18m×1.0m、深さは土壌底面までが0.6m、柱穴部は0.38mを測る。埋土には、やや軟質の黒色土が密にあった。状況より落とし穴状遺構と考えられる。出土品は確認出来ず、時期の特定は困難である。

17号土墙 (SK-17) (第75图)

調査区西側で検出した隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-22°-Eに取る。土壌中央には小穴が穿たれており、逆茂木状の柱が立っていたと考えられる。規模は1.2m×0.86m、深さは土壌底面までが0.5m、柱穴部は0.35mを測る。埋土には、やや軟質の黒色土が密にあった。状況より落とし穴遺構と考えられる。出土品は確認出来ず、時期の特定は困難である。

18号土塘 (SK-18) (第77图)

調査区北西端で検出した長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-35°-Eに取る。規模は1.14 m×0.82 m、深さは土壌検出面より0.61 mを測る。埋土には、やや軟質の黒色土が密にあった。逆茂木状の柱穴は認められなかったが、状況から落とし穴状遺構と考えられる。出土品は確認出来ず、時期の特定は困難である。

19号土塘 (SK-19)

調査区中央北側で検出した不整楕円形を呈する土壌である。未掘の為、詳細不明。検出面規模は2.8 m×2.3 mを測る。

20号土壤

(SK-20)

〈第77図〉

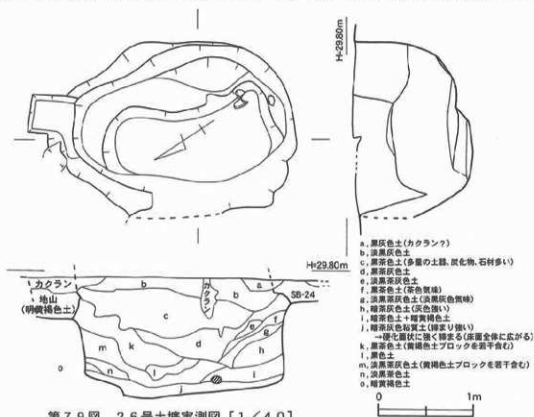
調査区中央で検出した隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-67°-Wに取る。規模は1.14m×0.72m、深さ0.19mを測る。土壌の内容は不明。出土品は確認出来なかった。

21号十塘

(SK-21)

〈第77図〉

調査区中央で検出した隅丸方形を呈する土壌である。長軸



第79图 26号土壤实测图 [1/40]

方位をN-85°-Wに取る。規模は1.42m×1.2m、深さ0.17mを測る。土壌の内容は不明。出土品は確認出来なかった。

22号土壌(SK-22) 〈第77図〉

調査区中央で検出した隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-39°-Eに取る。土壌中央には小穴が穿たれており、逆茂木状の柱が立っていたと考えられる。規模は1.34m×0.86m、深さは土壌底面までが0.48m、柱穴部は0.16mを測る。埋土には、やや軟質の黒色土が密にあった。状況より落とし穴状遺構と考えられる。出土品は確認出来ず、時期の特定は困難である。

23号土壌(SK-23)

調査区中央で検出した不整長方形を呈する土壌である。検出規模は1.2m×0.5mを測る。立地状況より落とし穴状遺構と考えられるが、詳細は不明である。

24号土壌(SK-24) 〈第77図〉

調査区中央で検出した隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-8°-Eに取る。土壌中央には小穴が穿たれており、逆茂木状の柱が立っていたと考えられる。規模は1.32m×0.86m、深さは土壌底面までが0.55m、柱穴部は0.14mを測る。埋土には、やや軟質の黒色土が密にあった。状況より落とし穴状遺構と考えられる。出土品は確認出来ず、時期の特定は困難である。

25号土壌(SK-25)

〈第78図〉

調査区中央で検出した掘り方ブランが隅丸長方形、主体部平面ブランが縦長長方形を呈する土壌墓である。SB-23に切られる。長軸方位を東西に取る。規模は、掘り方が1.44m×1.04m、深さ0.16mを測り、主体部は1.26m×0.38m、深さは掘り方底面より0.3mを測る。石蓋や木蓋の痕跡は認められず、直葬と思われる。出土土器は概ね弥生時代中期～後期を示す。

26号土壌(SK-26) 〈第79図〉

調査区中央で検出した楕円形を呈する土壌である。SB-23に上半部を切られる。長軸方位をN-34°-Eに取る。規模は2.64m×1.9m、深さ1.28mを測る。

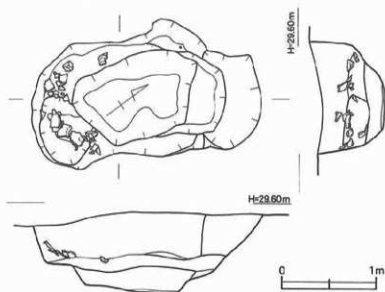
西側壁面には、初段階の流入埋土上に硬化面形成が確認出来、土壌掘削当初は貯蔵穴に類する利用が行われていたものと考えられる。しかし、その後土砂の堆積が進み、埋土上層に多量の破損土器が集中していた事から、使用末期には廃棄土壌として利用され、その役割を終えたものと思われる。ただ、出土した廃棄土器はほぼ形状を同じくする甕形土器の底部破片が極めて多く、単なる廃棄土壌ではないのかも知れない。出土土器は概ね弥生時代中期前半を示す。

27号土壌(SK-27) 〈第77図〉

調査区中央で検出した隅丸長方形を呈する土壌である。SB-23に切られる。長軸方位をN-15°-Wに取る。規模は1.36m×0.88m、深さ0.66mを測る。埋土には、やや軟質の黒色土が密にあった。逆茂木状の柱穴は認められなかったが、状況から落とし穴状遺構と考えられる。出土品は確認出来ず、時期の特定は困難である。

28号土壌(SK-28) 〈第78図〉

調査区中央で検出した縦長長方形を呈する土壌墓である。SB-23に切られており、掘り方部分が欠失している。長軸方位をN-41°-Wに取る。規模は1.9m×0.38m、深さ0.28mを測る。石蓋や木蓋の痕跡も欠失しているが、バラレルの位置にあるSK-29の状況から木蓋土壌墓の可能性が高いと思われる。出土土器は無いが、概ね弥生時代後期以前と思われる。



第80図 30号土壌実測図【1/40】

29号土壌 (SK-29) 〈第78図〉

調査区中央で検出した縦長長方形を呈する土壌墓である。SK-28同様、SB-23に切られているが、僅かに掘り方部分を残している。長軸方位をN-40°-Wに取る。規模は掘り方部分が1.96m×0.5m、深さ0.19mを測り、主体部分が1.96m×0.46m、深さ0.21mを測る。木蓋の痕跡は明確ではなかったが、木蓋土壌墓の可能性が高いと思われる。弥生式土器細片が出土しているが、細片の為、図示していない。概ね弥生時代後期以前と思われる。

30号土壌 (SK-30) 〈第80図〉

調査区中央で検出した隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-36°-Eに取る。規模は2.42m×1.34m、深さ0.82mを測る。北側壁面は若干スロープ状に下り、南側壁は急角度をもって立ち上がっている。北側が入口部で南側は奥側となるか。南側壁面にはテラス状の痕跡を残す部分があり、多数の弥生式土器と共に、炭化した堅果類の種子（主にドングリ）や米が比較的多く出土した。貯蔵穴である可能性が高い。

31号土壌 (SK-31) 〈第77図〉

調査区中央で検出した隅丸方形を呈する土壌である。長軸方位をN-4°-Eに取る。規模は1.2m×1.02m、深さ0.73mを測る。埋土には、やや軟質の黒色土が密にあった。逆茂木状の柱穴は認められなかったが、状況から落とし穴状遺構と考えられる。出土品は土器の細片のみであった為図示していない。時期の特定は困難である。

32号土壌 (SK-32)

調査区中央で検出した隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-41°-Wに取る。規模は1.36m×0.9m、深さ0.2mを測る。逆茂木状の柱穴は認められなかったが、状況から落とし穴状遺構の可能性もある。流入品と思われるが、出土品の中には弥生時代中期の土器もあり、時期の特定は非常に困難である。

33号土壌 (SK-33)

調査区中央で検出した隅丸方形を呈する土壌である。長軸方位をN-15°-Wに取る。規模は2.86m×2.36m、深さ0.2mを測る。土壌の内容は不明。出土品は確認出来なかった。

34号土壌 (SK-34) 〈第78図〉

調査区中央で検出した掘り方平面プランが縦長長方形を呈する土壌墓である。竪坑状の掘り方底面部の片側長辺部分に入口を設け、更にそこから横穴状に主体部を設ける形態を呈しており、ここでは半地下式土壌墓と仮に呼んでおきたい。主体部入り口部分は割石又は板木により閉塞するようであるが、本遺構は後者であろう。長軸方位をN-85°-Wに取る。規模は掘り方部分が1.18m×0.62m、深さ0.15mを測り、主体部分が1.18m×0.42m、深さ0.29mを測る。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代後期以前と思われる。

35号土壌 (SK-35) 〈第78図〉

調査区中央で検出した隅丸長方形を呈する土壌墓である。主体部入り口部分は板木により閉塞するようである。長軸方位をN-7°-Eに取る。規模は掘り方部分が1.0m×0.68m、深さ4cmを測り、主体部分が0.7m×0.22m、深さ0.2mを測る。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代後期以前と思われる。

36号土壌 (SK-36) 〈第77図〉

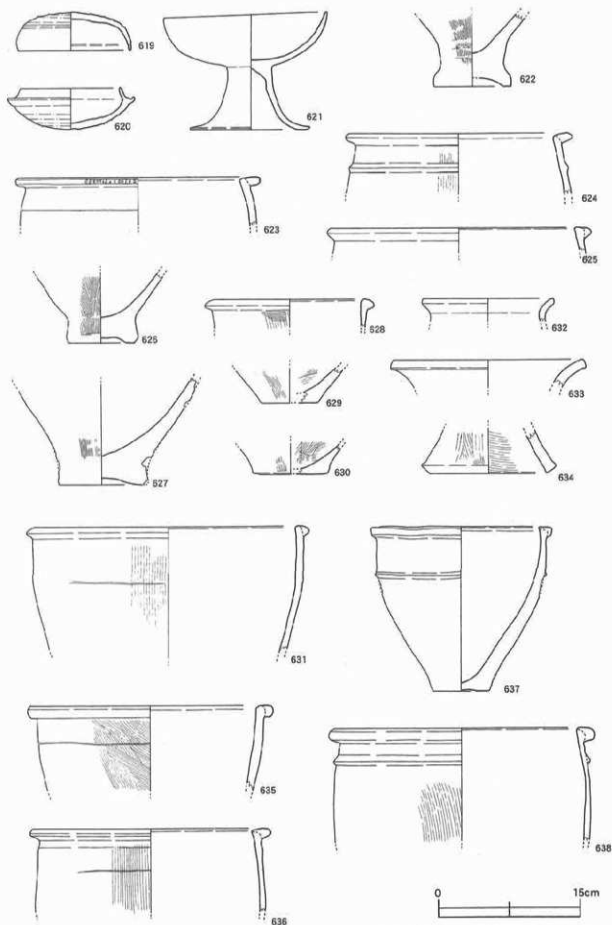
調査区中央で検出した隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-13°-Wに取る。土壌中央には直径2.2cmの小穴が穿たれており、逆茂木状の柱が立っていたと考えられる。規模は1.06m×0.74m、深さは土壌底面までが0.63m、柱穴部は0.14mを測る。埋土には、やや軟質の黒色土が密にあった。状況より落とし穴状遺構と考えられる。出土品は確認出来ず、時期の特定は困難である。

37号土壌 (SK-37) 〈第77図〉

調査区中央で検出した楕円形を呈する土壌である。長軸方位をN-54°-Wに取る。規模は1.4m×0.96m、深さ0.2~0.5mを測る。出土遺物より弥生時代中期前半の時期が考えられる。

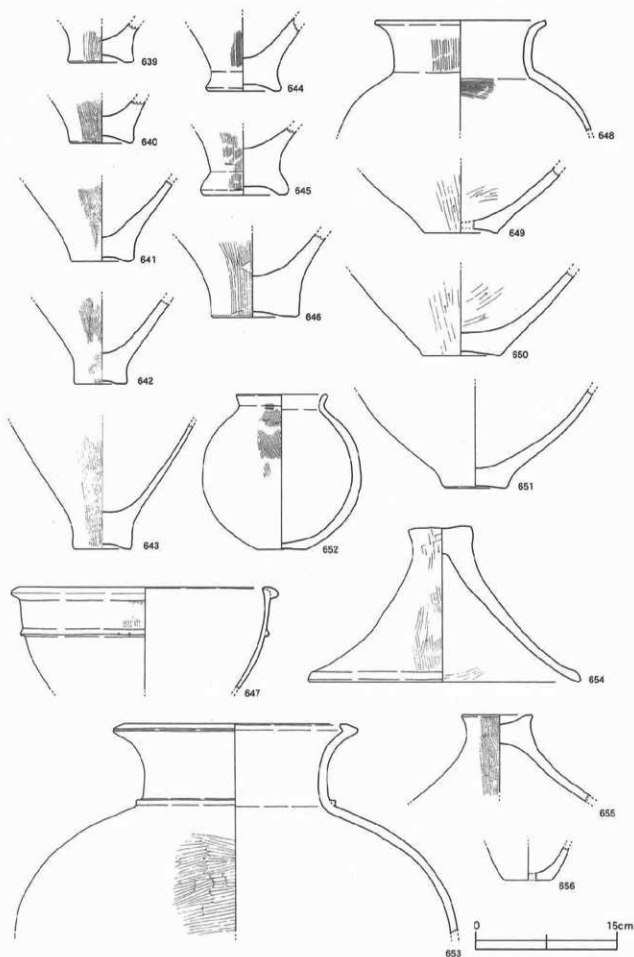
38号土壌 (SK-38) 〈第77図〉

調査区西側で検出した長方形を呈する土壌である。SX-02を切る。長軸方位をN-85°-Wに取る。

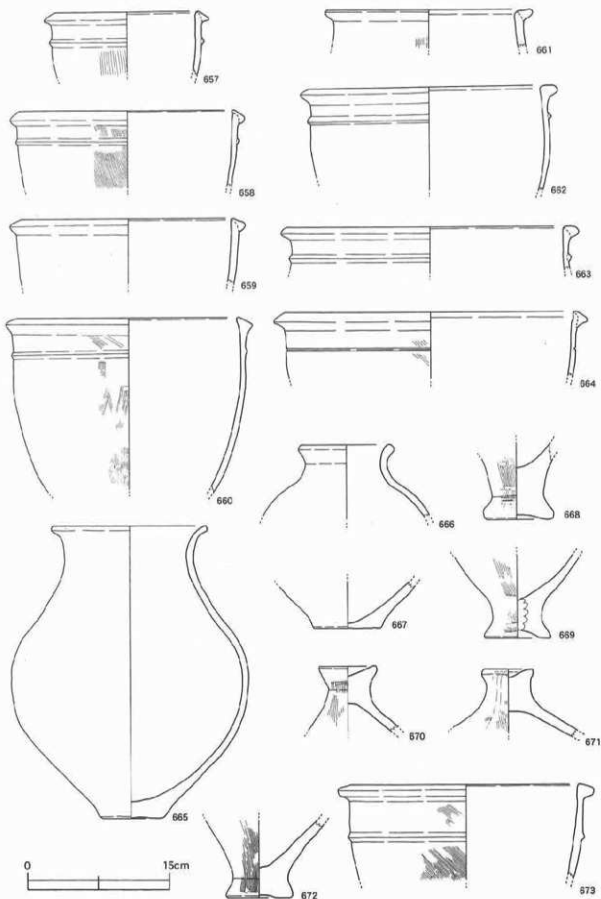


第81図 1・2・6～8・12・13・25・26号土墳(墓)出土土器実測図【1/4】

規模は1.88m×0.68m、深さ0.17mを測る。土墳の規模や形態から土墳墓と考えられるが、判断材料に乏しい。出土品は確認出来なかった。



第82图 26号土坑出土土器实测图 [1/4]



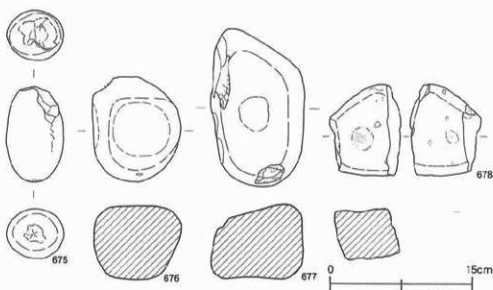
第83図 30・32・37号土壌出土土器実測図 [1/4]

39号土壌 (SK-39) 〈第77図〉

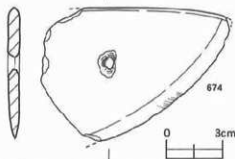
調査区中央で検出した長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-84°-Wに取る。規模は1.78m×0.78m、深さ0.24mを測る。出土品は確認出来なかった。



第86図 37号土層
出土石器実測図【2/3】



第85図 26号土層出土石器実測図【1/4】



第84図 2号土層出土石器実測図
【1/2】

土層出土遺物

土器 〈第81図～83図〉

619～621はSK-01出土土器で、619は須恵器坏蓋、620は坏身。小田福年ⅢB期を示すが、619はやや古い。621は高坏で、内外面とも赤色顔料を塗布している。6世紀後半代のものである。

622はSK-02出土土器で、甕形土器底部破片。623はSK-06出土土器で、弥生時代前期末の甕形土器。624・625はSK-07出土土器で、弥生時代前期末の甕形土器。626・

627はSK-08出土土器で、厚みのある上げ底の底部破片。

628～630はSK-12出土土器で、全て甕形土器。628は流れ込みの土器か。

631はSK-13出土土器で、口縁部下に非常に浅い沈線が1条入る。

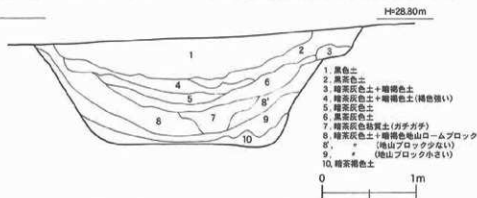
632～634はSK-25出土土器で、632・633は甕形土器。634は器台脚部か。

635～656はSK-26出土土器で、635～646は甕形土器。635～638の口縁部下には沈線が巡るもの、又は、突帯が巡るものの2種類がある。639～646は底部破片で、脚端部が垂直なものと外方に踏ん張るものの2種類がある。いずれもやや上げ底を呈す。647は鉢形土器で、胴部突帯は垂下し、僅かに刻目が遺存する。648～653は甕形土器。648・652はSB-24からの混入品か。653は土層上層から出土した。中期の土器である。655は蓋の天上部破片である。端部に向かい大きく開く。656は鉢形土器か。SB-24からの混入品と思われる。

657～671はSK-30出土土器で、657～660・664は口縁端部が垂下し、口縁部下は突帯・沈線が巡るものと無条の3種類がある。661～663の口縁端部は水平を成す。665・666は甕形土器で、665の肩部沈線は見当たらない。667～669は甕形土器底部破片。668は極端な上げ底。

670・671は蓋で、671は外方に広く開いている。

672はSK-32出土土



第87図 2号溝Dトレンチ北東土層断面実測図【1/40】

器。673はSK-37出土土器で、ともに壺形土器。

石器 〈第84図～86図〉

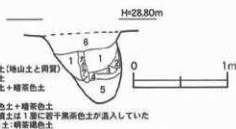
674はSK-02出土石器で、片岩製の石包丁である。1/2を欠失する。

675～678はSK-26出土石器で、すべてC層から出土したものである。675は叩き石、676は台石。677は砥石又はすり石。678は両端部を欠損した窪み石である。679は腰岳系の黒曜石を用いた凹基式石鏃で、長さ2.9cm、幅1.9cm、厚さ3mmを測る。

(4) 溝状遺構 (SD)

1号溝 (SD-01)

調査区北側を東西方向に長く延びる溝。規模は検出全長8.9m、幅1.3m～1.6m、深さ0.21m～0.29mを測る。旧地形に沿って掘削された為、検出面からの深さに大差は無いが、溝底面レベルの絶対標高は東西で100cmの差をみる。等高線から見た調査区内の標高差も同様の結果である。出土遺物はあまり多くなく、土師器や瓦器碗の破片が少量出土したにとどまった。本調査区の南側の2次調査区内に展開する中世遺構群との関連が強く考えられる。



第88図 3号溝土層断面実測図 [1/40]

2号溝 (SD-02) 〈第87図〉

調査区西側を南北方向に長く延び、等高線に直行しながら掘削された環濠である。規模は検出全長7.5m、幅2.6m～4.0m、深さ0.87m～1.2mを測る。旧地形の高低差に沿って掘削された為、溝底面レベルの標高は南北で126cmの差をみる。本調査区は馬の背状に小高い尾根が東西に延び、その南北に谷状地形があるが、環濠はこの地形を横断する形で掘削されている。しかし、南進してきた環濠は尾根線にあわせ突如西進し、その後再び南進しつつ谷状地形に向かい下っている。土木工事にかかる労力を節減する為の措置であろうか。興味深いことに、環濠が西進する地点を境にして北側と南側の断面形が若干異なるようになる。断面形は共に逆台形を呈しているが、北側断面はやや底面幅が狭く検出面幅と底面幅の比率は2:1を測る。対し南側は1.6:1又は1.43:1と幅広になっている。掘削工事に従事した労働者単位の差である可能性もあり、注意したい。遺物は弥生式土器、石材等があったが概して出土量は少ない。弥生時代後期中頃～後半の土器群である。

3号溝 (SD-03) 〈第88図〉

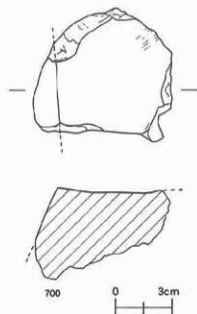
調査区西側を北方向に延び、等高線に直行しながら掘削された溝である。規模は検出全長11.5m、幅1.0m～1.54m、深さ0.3m～0.42mを測る。旧地形の高低差に沿って掘削された為、溝底面レベルの標高は南北で61cmの差をみる。本溝は、SD-02の底面から北側壁面沿いに50cm上部でやや斜角をもって接続し、底面レベルを減しながら北側の谷状地形に向かっている。立地条件から排水施設とは考えにくく、弦状溝のような区画に主眼を置いた溝であると考えたい。遺物は弥生式土器があったが概して出土量は少ない。弥生時代後期中頃～後半を示す。

4号溝 (SD-04)

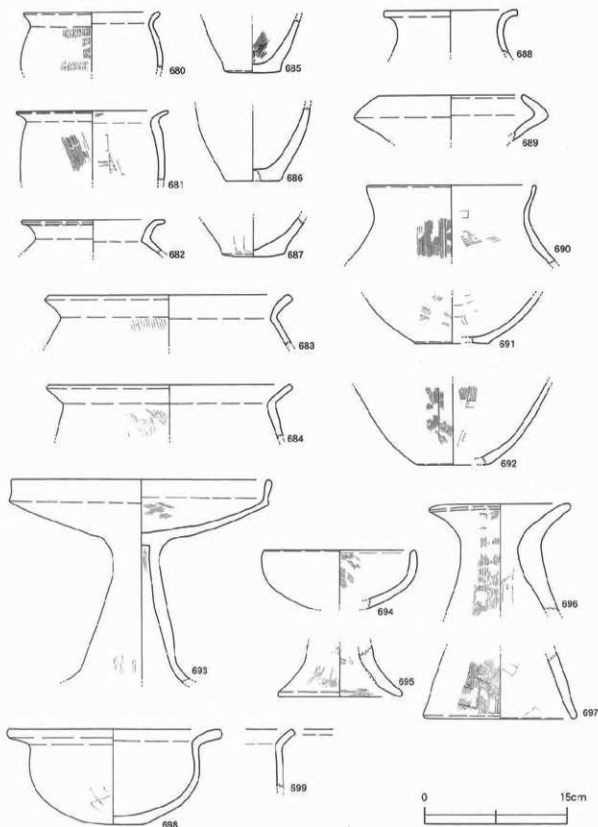
調査区中央南側を南北方向に延びる溝である。規模は検出全長8.5m、幅0.94m～1.08m、深さ6m～17mを測る。南端部は調査区外に出ているが、続く2次調査においても本溝の延長部分は検出出来なかった為、1次調査検出部分のみの遺構と思われる。溝としての機能以外を考えなければならないか。出土遺物はごく少量出土したが、細片の為図示していない。

5号溝 (SD-05)

調査区南側の掘立柱建物群内を蛇行しながら南側の谷状地形に向かう溝である。規模は検出全長2.9m、幅0.34m～0.36m、深さ5cm～6cmを測る。南端部は調査区外に出

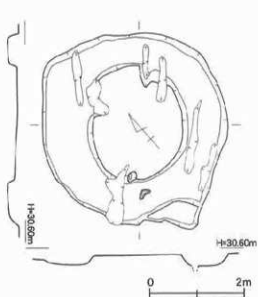


第89図 2号溝出土土器
実測図 [1/2]

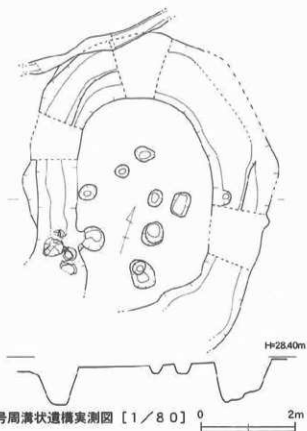


第90図 2・3号溝出土土器実測図【1/4】

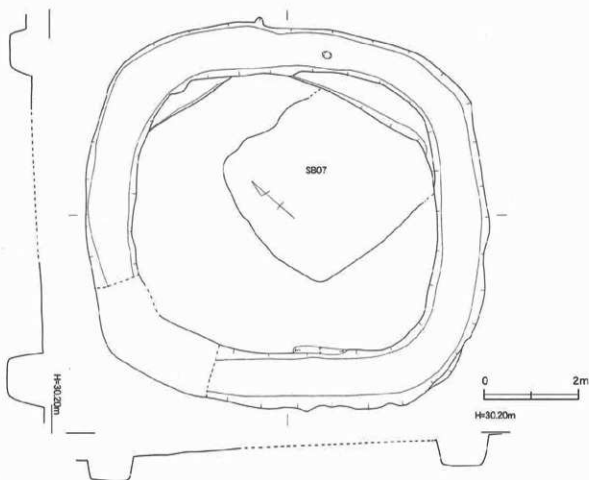
ているが、続く2次調査においては延長部分は検出出来なかった為、1次調査検出分だけの遺構と思われる。SB-39やSB-46の一部ピットに切られているが、概ね建物群を東西に分かつ区画溝であると思われる。南端付近でSX-08を切る。出土遺物はごく少量出土したが、細片の為図示していない。



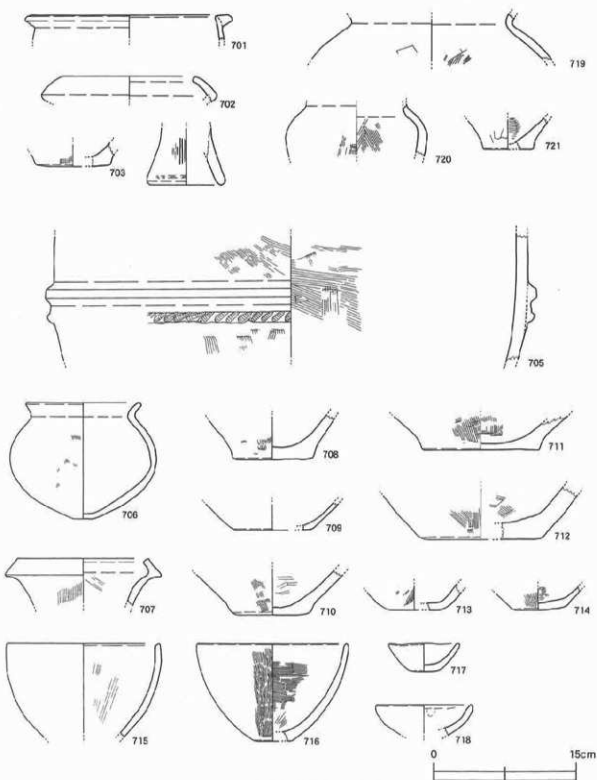
第91図 1号周溝状遺構
実測図 [1/80]



第92図 8号周溝状遺構実測図 [1/80]



第93図 2号周溝状遺構実測図 [1/80]



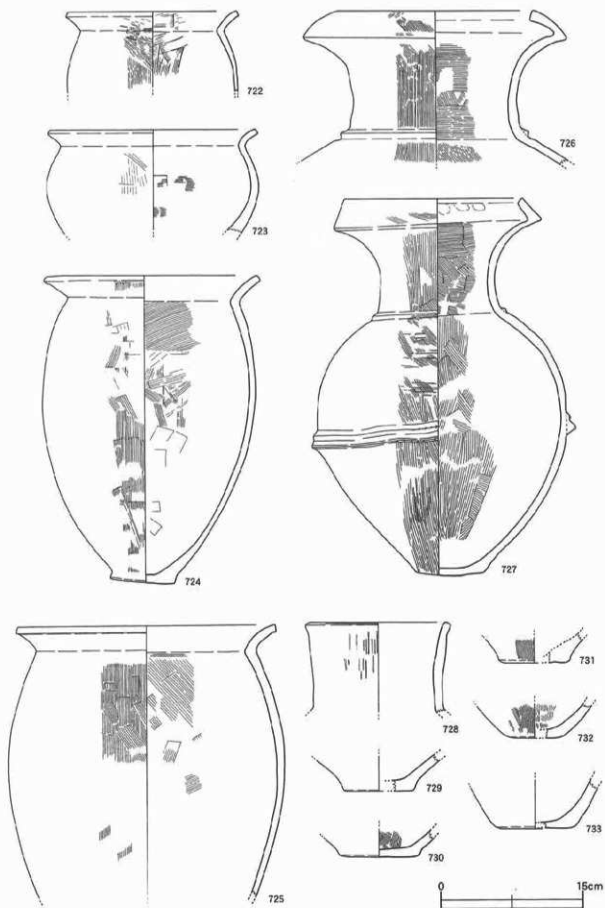
第94図 1・2・4号周溝状遺構出土土器実測図〔1/4〕

溝状遺構出土遺物

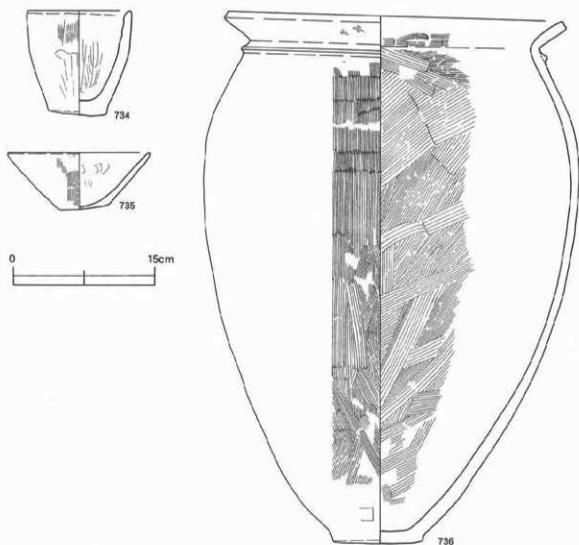
土器 〈第90図〉

680～697はSD-02出土土器で、680～687は甕形土器。685は鉢形土器底部か。口縁部内側の稜線は不明瞭なものが多い。底部の一部には僅かにレンズ状を呈するものがある。688～692は壺形土器。689の口縁端部の稜線は鈍く、やや丸みをもつ。693～695は高坏で、693は浅い受け部に張り付けの口縁部が直立する。696・697は器台。口縁部を強く外方に屈曲させる。

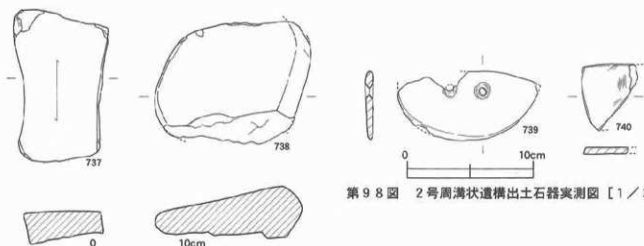
698・699はSD-03出土土器で、698は中期の名残りを引く口縁部をもつ。699は甕形土器の口縁部破片である。



第95図 8号周溝状遺構出土土器実測図〔1/4〕 その1



第96図 8号周溝状遺構出土土器実測図 [1/4] その2



第98図 2号周溝状遺構出土石器実測図 [1/3]

第97図 2号周溝状遺構出土石器実測図 [1/4]

石器 (第89図)

700はSD-02出土石器で、砂岩製の砥石である。使用痕は表・側面の2面で、残りは欠損している。

(5) その他の遺構

1号周溝状遺構 (SX-01) 〈第91図〉

調査区東側で検出した楕円形を呈する周溝状の遺構である。長軸を北東に取る。規模は直径3.9m～4.06m、幅0.66m～1.06m、深さ0.12m～0.29mを測る。SB-03を切る。

2号周溝状遺構 (SX-02) 〈第93図〉

調査区東側で検出した隅丸長方形を呈する周溝状の遺構である。長軸を北西に取り、SB-05～07、SX-03を切り、SK-38に切られる。規模は8.54m×7.24m、幅0.84m～1.24m、深さ0.37m～0.71mを測る。周溝部の掘り方断面は逆台形を呈しているが、壁は垂直近くに着る。底面はほぼフラットのまま全周する。傾向として、東側底面は標高が高く、西側は低い。出土遺物は弥生式土器、鉄片、石材等多岐に渡るが、その大半は周囲の堅穴式建物と切り込んだ際に流入したものである。弥生時代後期後半頃と考えられる。

3号周溝状遺構 (SX-03)

調査区東側で検出した楕円形を呈する周溝状の遺構である。長軸を北東に取る。規模は直径4.5m、幅は不明、深さ0.16mを測る。SB-05・08、SX-02に切られる。詳細は不明。

4号周溝状遺構 (SX-04)

調査区中央で検出した隅丸長方形を呈する周溝状の遺構である。長軸を北西に取る。遺存状況は極めて悪いが、現状での規模は7.2m×5.2m+α、幅0.36m～0.66m、深さ6cmを測る。方向性や規模、形状等からSX-02との関連性が考えられる。

5号不明遺構 (SX-05)

調査区北西端で検出した長方形を呈する不明遺構である。長軸を北北東に取る。規模は現状で9.8m×3.0m、深さ0.38～0.56mを測る。底面のやや西寄りに、北方向に延びるレール敷設跡が検出された。残されていた枕木跡の幅は狭く、恐らくトロコレールの痕跡と思われる。敷設された時期は判然としないが、戦時中又は戦後間もなくのものと思われる。この場合の戦争とは、第2次世界大戦を指す。

6号不明遺構 (SX-06)

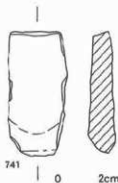
調査区中央北側のやや広い範囲で検出した不明遺構である。調査当初、人為的な遺構として考えていたが、トレンチを入れ確認したところ、地形上の窪みに軟質黒色土が覆った自然遺構であった。時期については不明であるが、弥生時代以前ではなかろうか。

7号不明遺構 (SX-07)

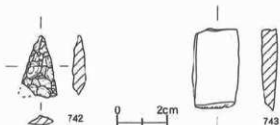
調査区中央南側で検出した不明遺構である。調査当初、堅穴式建物と考えていたが、掘削の結果地形上の窪みに埋土が覆った自然遺構である事が判明した。時期については不明。

8号周溝状遺構 (SX-08) 〈第92図〉

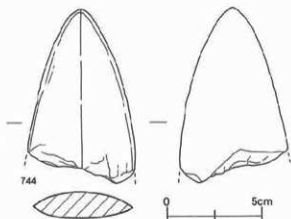
調査区南側端で検出した長円形を呈する周溝状の遺構である。長軸を北北西に取り、SD-05、SB-40に切られる。規模は直径5.36m～6.88m、周溝幅1.0m～1.46m、深さ0.63m～0.77mを測る。周溝部の掘り方断面は逆台形を呈している。傾向として、東側底



第99図 14号ピット (小穴)
出土石器実測図 [2/3]



第100図 検出時表面採集石器実測図 [2/3]



第101図 排出土中出土石器実測図 [1/2]

面は標高が高く、西側は低くなっているが、これは旧地形に沿って掘削された結果であろう。出土遺物として、弥生式土器等がある。弥生時代後期中頃と考えられる。

その他の遺構出土遺物

土器 〈第94図～96図〉

701～704はSX-01出土土器で、701・703は甕形土器、702は壺形土器、704は器台である。702の口縁端部はやや丸みをもつ。

705～718はSX-02出土土器で、705は大型の甕形土器。胴部に付く2条の突帯の内、下部の突帯には押圧施文が施される。西新期の特徴を示す。706・707は壺形土器で、707の口縁部は非常に強く屈曲する。708～714は甕形・壺形土器底部で、いずれも底部～胴部へのくびれは比較的明瞭である。715～718は鉢形土器。717・718は小型品で、祭祀用か。

719～721はSX-04出土土器で、719・720は壺形土器。721は小型の甕形土器底部か。

722～736はSX-08出土土器で、722～725・736は甕形土器。長胴化しているものの、胴部には未だ膨らみをもつ。726～728は壺形土器で、727の複合口縁壺は胴部突帯がやや下がり、口縁部もシャープに屈曲する。728は直口壺口縁部。729～733は甕形・壺形土器の底部で、732はやや丸みをもつ。734・735は鉢形土器。735の口縁部は直線的に外方に延びる。

(※727はSD-02出土品である事が後に判明)

石器 〈第97図～101図〉

737～740はSX-02出土石器で、737・738・740は砂岩製の砥石。739は片岩製の石包丁。背面部分に丸味をもつ。

741はSP-14出土石器で、両側面の中央に挟りが入り擦痕が認められる。また、刃部の形成も見られる事から石鑿と考えられる。

742・743は遺構面検出時表採遺物で、742は平基式石鋸。743は石鑿で、刃部の右上から左下に向かい擦痕が認められる。

744は排土中出土の石器で、石剣の切先部分である。粘板岩製。

遺構名	平面プラン	長軸方位	長軸長(m)	短軸長(m)	出土遺物	備考
S B-01	長方形	N-74°-E	5.4	4.62	鉄片、弥生式土器、磁石等	鍛冶関連遺構。弥生後期
S B-02	楕円形		直径6.2	6.64	弥生式土器	弥生中期
S B-03	隅丸方形	N-53°-E	3.36	2.74	弥生式土器	弥生後期
S B-04	縦長長方形	N-52°-W	5.46+ α	3.6+ α	鉄片、弥生式土器、磁石等	鍛冶関連遺構。弥生後期
S B-05	正方形	N-22°-E	3.94	3.6	鉄片、弥生式土器、磁石	鍛冶関連遺構。弥生後期
S B-06			4.4+ α	2.24+ α	弥生式土器、磁石	鍛冶関連遺構。弥生後期
S B-07	長方形	N-77°-W	3.86+ α	3.34	鉄片、弥生式土器、磁石	鍛冶関連遺構。弥生後期
S B-08	横長長方形	東西	4.88+ α	4.36	鉄片、弥生式土器、石器	鍛冶関連遺構。弥生後期
S B-11	横長長方形	N-72°-E	5.4+ α	4.22	弥生式土器、磁石	弥生後期
S B-12	不整形	N-6°-E	5	4.46	弥生式土器	弥生前期、住居の可能性低い
S B-13	楕円形		4.6~5.3			
S B-14	横長長方形	N-50°-E	6.24	3.84	弥生式土器、石包丁	弥生中期?
S B-15	横長長方形	N-37°-E	7.54	5.46	鉄器、弥生式土器、磁石	弥生後期
S B-16	長方形?	N-9°-E	4.6	4.24	弥生式土器、磁石	弥生後期
S B-17		N-66°-W	5.62	4.32	弥生式土器、石器	弥生中期
S B-18	長方形		5.9	3.7	弥生式土器、磁石	A・D区、鍛冶関連遺構
S B-19	長方形	N-32°-E	4.8	3.5	弥生式土器、石器	弥生後期
S B-20	楕円形		直径6.7		弥生式土器	弥生中期
S B-21	縦長長方形	N-12°-E	4.96	4.44	鉄片、銅鏡、弥生式土器	弥生後期
S B-23	横長長方形	N-40°-E	7.22	4.52	鉄片、弥生式土器、土製品	火災住居? 弥生後期
S B-24	横長長方形	N-37°-E	7.08	5.02	弥生式土器、石包丁	1対の側置土器。弥生後期
S B-25					弥生式土器	詳細不明
S B-26	横長長方形	N-37°-E	5.62	3.96	弥生式土器	
S B-27	横長長方形	N-45°-E	5.16	3.84	弥生式土器、石包丁	
S B-28	横長長方形	N-71°-E	5.8	3.64~4.08	鉄器、弥生式土器	
S B-29			約5.7	2.46~3.14	弥生式土器	住居重複の可能性大
S B-30	横長長方形	N-29°-E	5.9	4.58	弥生式土器	鍛冶関連遺構。弥生後期
S B-31	横長長方形	N-34°-E	3+ α	4.32	弥生式土器	弥生後期?
S B-32	横長長方形	N-44°-W	約4.8	3.56	弥生式土器	弥生後期?
S B-42	長方形	N-23°-E	5.76	3.86	弥生式土器、ミニチュア	弥生後期

第1表 西山ノ上遺跡 1次調査 竪穴式住居(建物)一覧表

遺構名	規模(間)	長軸方位	長軸長(m)	短軸長(m)	床面積(m ²)	出土遺物	備考
S B-09	2×1	N-14°-W	4	3.2	12.8	弥生式土器	弥生後期
S B-10	2×1					弥生式土器	
S B-33	1×1	N-10°-W	3.1~3.6	1.8	6	弥生式土器	弥生中期
S B-34	1×1	N-28°-E	2.4	1.8	4.3	弥生式土器	弥生中期?
S B-35	1×1	N-6°-E	3	3	9	弥生式土器	弥生後期
S B-36	2×1	N-73°-W	4.06	2.6~2.96	11.3	弥生式土器	弥生中期?
S B-37	2×1	東西	4.4	3.2	14.1	弥生式土器	弥生後期
S B-38	2×1	N-83°-W	3.94	2.7	10.6	鉢形ミニチュア	弥生後期
S B-39	1×1	N-55°-W	3.16	2.2	7		
S B-40	1×1	東西	3.48	3.06	10.6	浅・深鉢形ミニチュア	弥生後期?
S B-41	1×1	N-37°-E	2.96	2.48	7.3	弥生式土器	弥生後期
S B-44	1×1	東西	2.6	2.46	6.4		
S B-45	2×1	N-55°-W	3.9	2.48	9.7		
S B-46	2×1	N-64°-W	3.38	2.5	8.5		

第2表 西山ノ上遺跡 1次調査 掘立柱建物一覧表

遺構番号	平面形	長軸方位	短軸長 (cm)			出土遺物	推定時期
			長軸長	短軸長	深さ		
SK-01	隅丸長方形	N-49°-E	178	66	20	Ⅲ B 期の土壌墓?	古墳時代後期
SK-02	不整形	東 西	152	124	10		弥生時代中期
SK-03	隅丸長方形	N-83°-W	118	64	36	近世墓?	
SK-04	長方形	N-76°-E	100	70	100	近世墓?	
SK-05	不整形	N-59°-E	132	86	6		
SK-06	不整形	N-84°-W	114	102	12		弥生時代前期
SK-07	楕円形	N-81°-W	142	114	98	貯蔵穴?	弥生時代中期
SK-08	不整形	N-48°-E	184	144	18		弥生時代中期
SK-09	楕円形	N-18°-E	188	110 + α	25~52		
SK-10	方形	N-48°-E	122	92	96	貯蔵穴?	弥生時代中期
SK-11	円形	直径200~220			60	壁面直下に板状痕跡	弥生時代前期
SK-12	不整形三角形	N-23°-W	144	128	98	S B - 1 5 の屋内貯蔵穴?	弥生時代後期
SK-13	隅丸長方形	N-43°-W	132	94	20	掘り方 土壌墓	弥生時代中期
			94	38	23	主体部 S B - 2 3 に切られるか。	
SK-14	不整形長方形	N-37°-E	136	96	76	落とし穴状土壌か?	
SK-15	不整形楕円形	N- 8°-E	124	88	60	落とし穴状土壌か?	
SK-16	不整形楕円形	N-25°-E	118	100	60	柱穴部深さ 3 8 cm の落とし穴状土壌。	
SK-17	隅丸長方形	N-22°-E	120	86	55	柱穴部深さ 3 5 cm の落とし穴状土壌。	
SK-18	長方形	N-35°-E	114	82	61	落とし穴状土壌。	
SK-19	不整形楕円形		280	230		未掘削	
SK-20	隅丸長方形	N-67°-W	114	72	19		
SK-21	隅丸長方形	N-85°-W	142	120	17		
SK-22	隅丸長方形	N-39°-E	134	86	48	柱穴部深さ 1 6 cm の落とし穴状土壌。	
SK-23	不整形長方形		120	50			
SK-24	隅丸長方形	N- 8°-E	132	86	55	柱穴部深さ 1 4 cm の落とし穴状土壌。	
SK-25	隅丸長方形	東西	144	104	16	掘り方	弥生時代中期
	縦長長方形		126	38	30	主体部 S B - 2 3 に切られる。	
SK-26	楕円形	N-34°-E	264	190	128	S B - 2 4 に切られる廃棄土壌。	弥生時代中期
SK-27	隅丸長方形	N-15°-E	136	88	66	落とし穴状土壌、S B - 2 3 に切られる。	
SK-28	縦長長方形	N-41°-W	190	38	28	土壌墓。	弥生時代中期
SK-29	縦長長方形	N-40°-W	196	50	19	掘り方	弥生時代中期
				46	21	主体部 木蓋土壌墓	
SK-30	隅丸長方形	N-36°-E	242	134	82	テラスを持つ貯蔵穴。	弥生時代前期
SK-31	隅丸長方形	N- 4°-E	120	102	73	落とし穴状土壌。	
SK-32	隅丸長方形	N-41°-W	136	90	20	落とし穴状土壌?	弥生時代
SK-33	隅丸長方形	N-15°-W	286	236	20		
SK-34	長方形	N-85°-W	118	62	15	掘り方	横穴状土壌墓
	隅丸長方形			42	29	主体部	
SK-35	隅丸長方形	N-77°-E	100	68	4	掘り方	土壌墓
			70	22	20	主体部	
SK-36	隅丸長方形	N-13°-W 106 + α	74		63	柱穴部深さ 1 4 cm の落とし穴状土壌	
SK-37	楕円形	N-54°-W	140	96	20~50		弥生時代前期
SK-38	長方形	N-85°-W	188	68	17	近世墓?	
SK-39	長方形	N-84°-W	178	78	24		

SB-18 (B・C区)	楕円形	N-62°-E	推定直径534		鉄器、鉄片、大型石材、弥生式土器多数 断面すり鉢状の廃棄土壌	弥生時代後期
-----------------	-----	---------	---------	--	-----------------------------------	--------

第3表 西山ノ上遺跡 1次調査 土壌一覧表

棟号	土層番号	土層名称	土質	形状	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	型名	色調、土質、焼成	備考
42	1	318	SE-01	弥生式土器	カメ	19.2		外タテハケ	淡黄褐色も1~3mm砂粒	
*	2	310	*	*	カメ	21.8		ナデ	暗黄褐色、1~3mm砂粒	
*	3	306	*	*	カメ		4.8	外タテハケ、内ナデ	暗黄灰褐色、砂粒	
*	4	304	*	*	カメ		5.0	外ナデ、底部ヘラ調整	淡褐色、細砂粒	
*	5	120	*	*	カメ		7.0		小礫片含む	
*	6	307	*	*	カメ		6.4	内ハケ	暗茶褐色	
*	7	122	*	*	カメ		5.8	内ナデ	暗黄褐色	
*	8	315	*	*	ツボ	23.6		内ミガキ	淡黄灰褐色、1~4mm砂粒	
*	9	314	*	*	ツボ	-	-	内ヨコナデ	淡茶褐色、1~3mm砂粒	
*	10	316	*	*	無頸ツボ	9.2		外ミガキ、内ヨコナデ	明黄茶褐色、1~5mm砂粒	胴部上半に一条の突起
*	11	119	*	*	高台	12.0		外タテハケ、内ヨコハケ、ナデ	暗黄褐色	
*	12	533	SE-02	*	カメ	19.0		外ハケ、内ナデ	暗黄褐色、1~5mm砂粒	
*	13	124	*	*	カメ	20.0		外タテハケ、内斜ヘラ調整	暗褐色	
*	14	125	*	*	カメ	23.6		外タテハケ、内ナデ	暗黄灰褐色、砂粒	胴部下に一条の波線
*	15	262	*	*	カメ	25.8		外ヨコナデ、内ナデ	暗黄灰褐色、1~3mm砂粒	
*	16	263	SE-03	*	ツボ	11.6		外ヨコナデ、内ナデ	暗黄灰褐色	
*	17	264	*	*	カメ	23.2		ナデ	黄褐色	
*	18	265	*	*	カメ		7.8	外タテハケ、内ナデ	黄茶褐色、1~6mm砂粒	上げ底
43	19	266	SE-04	*	カメ	15.8		内ナデ、内ナデ	淡黄褐色	
*	20	272	*上層埋土	*	カメ	18.0		内外斜ハケ	乳灰褐色	
*	21	284	*下段床面	*	カメ	26.0		内ヨコハケ	黄灰褐色	瘤部下方つまみ出し、瘤部平堀
*	22	274	*	*	カメ	-	-	外ヨコナデ	暗黄褐色	
*	23	283	*下段床面	*	カメ		10.2	内ハケ	黄灰褐色	
*	24	278	*	*	カメ	-	-	外ハケ	暗黄灰褐色	
*	25	279	*下段床面	*	鉢	16.0		内ハケ	黄灰褐色	
*	26	260	*屋内土坑	*	カメ		4.5	外タテハケ、内ナデ	茶黄褐色	黒斑有
*	27	325	SE-05	*	カメ	18.4			茶褐色	
*	28	319	*	*	カメ		6.9	外ヘラ調整、内ナデ	淡黄灰褐色	
*	29	320	*	*	カメ		8.2	内ハケ	暗黄灰褐色	内面黄茶褐色
*	30	332	*	*	ツボ		2.2	内外ハケ	暗黄茶褐色	
*	31	326	*	*	ツボ	12.0		ナデ	暗黄灰褐色、内面黄褐色	
*	32	321	*	*	鉢	14.1		内タタキ、ナデ、外ヨコナデ、ハケ	暗茶黒灰褐色	
*	33	328	*	*	鉢		6.2	内ヘラ調整、外ハケ	淡黄褐色	
*	34	322	*	*	高坪	22.0		内ヨコナデ	暗黄茶褐色、1~3mm砂粒	
*	35	58	SE-06	*	ツボ	19.6		外タテハケ、内ヘラ調整	黄茶褐色、内黄褐色	
*	36	56	*	*	鉢		6.2	外ハケ、内ナデ	黄褐色	
*	37	70	*	*	鉢	19.0		ヨコナデ、外一壁ハケ	暗茶褐色	
*	38	57	*	*	カメ	20.0		外ハケ	黄赤茶褐色、小石混ざる砂粒	
*	39	289	SE-07	*	ツボ	15.6		外ハケ、内ヘラ調整	黄灰褐色	
*	40	290	*	*	ツボ		7.6	外タテハケ、内ヨコハケ	外黄灰褐色、内茶褐色	
*	41	60	*	*	カメ		6.2	外ナデ、内ハケ	外暗黄茶褐色、内暗黄灰褐色	
*	42	59	*	*	カメ	-	-	内ハケ	外茶褐色、内黄茶褐色	
*	43	286	*	*	カメ		7.4	外タテハケ、内ナデ	外黄褐色、内黄茶褐色	
*	44	291	*	*	鉢	18.0		内ヨコハケ、外タテハケ	黄褐色	
*	45	292	*	*	高坪		20.0	外ハケ、ナデ	*	
*	46	288	*	*	高坪		21.6	外ヨコナデ	茶黄褐色	
44	47	65	SE-08	*	カメ	19.8		外タテハケ	外暗黄茶褐色、内黄茶褐色	スス付着
*	48	67	*	*	カメ		7.5	ハケ	暗黄茶褐色	
*	49	69	*	*	カメ		7.6	外ハケ、内ナデ	外暗灰褐色、内黄褐色	
*	50	62	*	*	ツボ		5.8	外ヘラ調整、内ナデ	外暗茶褐色、内茶褐色	スス付着
*	51	66	*	*	鉢	13.8	5.3	外ヘラ調整、内ナデ	暗黄茶褐色	
*	52	84	SE-11	*	カメ	25.2	6.4	内ハケ	暗黄灰褐色	
*	53	72	*	*	カメ	23.8	6.4	内ヨコハケ	暗黄茶褐色	
*	54	79	*	*	カメ	26.2		外タテハケ、内ヨコハケ	暗黄灰褐色(外)、黄灰褐色(内)	(調整は(外)は外面、(内)は内面を示す)

第4表 西山ノ上遺跡 1次調査 竪穴式住居(建物)出土土器観察表 その1

採掘 場所	土層 番号	実層 番号	出土 遺構	種類	機種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調整	色調・胎土・焼成	備 考
44	55	75	S B-11	弥生式土器	カメ	23.6			外タテハク、内タテハク	暗黄褐色(外)、淡灰黄褐色(内)	
*	56	81	*	*	ツボ		5.4		外タテハク、内タテハク	黒茶褐色、黄茶褐色	
*	57	78	*	*	カメ		10.9		外タテハク、内ヘラ調整	暗黄茶褐色	
*	58	73	*	*	鉢	13.2	5.2	6.1	外タテハク、内ヨコハク	暗茶褐色	
*	59	85	*	*	ツボ		5.6		外タテハク、内ヘラ調整	赤茶褐色	
*	60	74	*	*	蓋台	14.2			外タテハク	黄茶褐色	
45	61	338	S B-12	*	カメ	19.8			内ナデ	暗黄褐色	
*	62	337	*	*	カメ	—			内ヨコナデ	*	
*	63	341	S B-14	*	カメ	31.4				黄灰褐色、1~3mm小石多混砂粒	
*	64	339	*	*	カメ	21.0			外タテハク、内ナデ	淡黄褐色	
*	65	349	S B-15	*	カメ	11.8			内ナナデ	茶褐色	
*	66	352	*	*	カメ	16.0			外斜ハク、内ヨコハク	暗茶黄褐色	
*	67	351	*	*	カメ	18.0			外斜ハク、内ヨコハク	暗黄灰褐色	
*	68	345	*上層埋土中	*	カメ	24.0			外ナデ、内斜ハク	暗黄褐色、スス付量	
*	69	362	*	*	カメ	24.0			外ハク、内ナデ	黄褐色	
*	70	348	*	*	カメ		7.0		外ナデ、内ハク	暗黄灰褐色	
*	71	369	*	*	カメ		5.2		外ヘラ調整、内ハク、ヘラ	暗黄褐色	
*	72	367	*	*	ツボ		6.0		外ナデ、内斜ハク	淡黄褐色	
*	73	365	* P-4	*	ツボ		7.2		外内ナデ	暗茶褐色	
*	74	365	*	*	ミニファ土器		5.6		外タテハク、内ナデ	暗黄褐色	
*	75	364	*	*	ミニファ土器		3.5		外ヘラ、内ナデ	*	
*	76	363	*	*	ミニファ土器		2.9		外ヘラ、内ナデ	*	
*	77	343	*	*	ツボ	18.0			外タテヨコハク、内ヨコナデ指線痕	暗茶褐色	
*	78	344	*	*	ツボ	10.4			外ハク、内ナデ、押圧痕	暗黄褐色	
*	79	563	*	*	ツボ	8.7	14.1	7.4	外ハク、内ナデ	淡黄褐色	黒河有
*	80	363	*	*	鉢	14.0			外タテハク、内ナデ	暗黄褐色	黒河有
*	81	354	*	*	鉢	18.0			ナデ	暗茶灰褐色	
*	82	357	*	*	蓋杯		16.0		外タテハク、内ヨコハク	淡黄灰褐色	
46	83	408	S B-16	*	鉢		6.0		外ハク、内ナデ	黄褐色	黒河有
*	84	404	*	*	鉢	15.6	3.6	5.5		*	
*	85	407	*	*	蓋杯		21.0		外ハク、内ナデ	*	
*	86	413	S B-17	*	カメ	14.0			外タテハク、内ナデ	黄灰褐色	
*	87	414	*	*	カメ	21.4			*	茶褐色	胴部・一条の欠損
*	88	411	*	*	蓋台		7.6		外ヘラ、内ナデ	黄褐色	
*	89	89	S B-18	*	カメ	20.0			外ナデ、外ヘラ	黄茶褐色	D区、スス付量
*	90	87	*	*	鉢	6.0			ナデ	暗茶褐色	D区
*	91	377	*	*	鉢	14.0			外タテハク、内ナデ	*	A区
*	92	91	*	*	鉢		3.4			黄茶褐色	D区、黒河有
*	93	376	*	*	ツボ	10.0			ハク	淡黄褐色	A区
*	94	381	*	*	ツボ	8.8			外ハク、内ヘラ調整	淡黄灰褐色	A、D区
*	95	88	*	*	ツボ	10.2			外タテハク、内ヨコハク	黄茶褐色	D区
*	96	382	*	*	蓋台	12.8			*	黄茶褐色	A、D区
*	97	525	*	*	カメ	18.0			ナデ	暗黄褐色	
*	98	442	*	*	カメ	19.8			*	黄褐色	C区
*	99	431	*	*	カメ	20.0				淡黄褐色	C区
*	100	419	*	*	カメ	18.0			外ハク	*	C区
*	101	532	*	*	カメ	16.6			外不明、内ナデ	暗黄褐色	B区
*	102	444	*	*	カメ	—			ハク	*	C区
*	103	519	*	*	カメ	13.6			ハク	*	B区
*	104	395	*	*	カメ	18.0			内ナデ	暗茶褐色	B区
*	105	439	*	*	カメ	18.0			内ヘラ調整	黄褐色	C区
*	106	418	*	*	カメ	16.0			外、内ともにタテハク	灰黄褐色	C区
47	107	428	*	*	カメ	21.4				*	C区

(調整は(外)は外面、(内)は内面を示す)

第4表 西山ノ上遺跡 1次調査 竪穴式住居(建物)出土土器観察表 その2

採掘	土器	時期	出土遺跡	種類	図種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調、胎土、焼成	備考
47	108	394	S B-18	弥生式土器	ツボ	23.4			外ヨコハケ、内タテヨコハケ	淡黄褐色	B区
48	109	216	*	*	ツボ	12.6	7.7	22.4	外タテハケ、内ハケ	黄褐色	黒斑有
49	110	372	*	*	ツボ	19.8			外タテハケ、内ヨコハケ	暗黄褐色	黒斑有
50	111	443	*	*	カメ	20.0			※、内ハケナデ	茶褐色	C区
51	112	397	*	*	二重口甕	15.0			内ハケ	黄褐色	B区
52	113	436	*	*	甕又は壺		5.0		ハケ	暗黄褐色	C区
53	114	427	*	*	甕又は壺		8.0			黄灰褐色	C区
54	115	446	*	*	甕又は壺		7.2		ハケ	茶褐色	C区
55	116	387	*	*	甕又は壺		8.4		外ナデ、内ヨコハケ	暗黄灰褐色	
56	117	400	*	*	甕又は壺		6.6		外、内ともタテハケ	暗黄褐色	B区
57	118	421	*	*	甕又は壺		3.6		内ナデ	赤黄褐色	C区
58	119	517	*	*	甕又は壺		5.5		内ハケ、後ヘラ調整	暗茶灰褐色	
59	120	386	*	*	甕又は壺		6.4		外ハケ、内ヘラ調整	赤茶灰褐色	B区
60	121	448	*	*	甕又は壺		6.0		外ハケ、内ナデ	茶褐色	
61	122	519	*	*	甕又は壺		7.0		内ナデ	暗茶褐色	
62	123	384	*	*	甕又は壺		6.8		外ナデ、内ナデハケ	淡黄灰褐色	B区
63	124	527	*	*	甕又は壺		7.6		外ナデ、内ハケ後ヘラ調整	暗黄茶褐色	
64	125	523	*	*	甕又は壺		6.0			淡黄褐色	
65	126	385	*	*	甕又は壺		6.8		外ナデ、内ヘラ調整	暗黄灰褐色	B区
66	127	435	*	*	高坏		14.0		外ヘラ調整、内ナデ	赤茶褐色	C区
67	128	392	*	*	高坏		14.0		外タテハケ、内ナデ	暗黄褐色	B区
68	129	374	*	*	高坏		14.6			明黄灰黄褐色	B区
69	130	502	* 下層	*	高坏	24.6			外、内ともタテハケ	黄褐色	B区
70	131	455	*	*	器台	6.6			外ハケ後ヘラ調整、内ヘラ調整	黄褐色	C区
71	132	393	*	*	支脚		7.3		外ヨコハケ	茶褐色	B区
72	133	391	* 検出面黄緑	*	支脚	6.9	10.4	9.2	外ヘラ調整、内ナデ	黄褐色	
73	134	566	*	*	高坏	26.5	17.0	23.6	外ヘラ調整、内ヨコナデ	暗黄灰褐色	B区、脚部に穿孔有
74	135	521	*	*	脚付壺		8.8			*	B区
75	136	501	* 上層	*	鉢	8.0			指押え	暗茶黄褐色	
76	137	513	* ベルト上層	*	三つ口甕	7.7	6.5	4.6	ハケ	黄褐色	
77	138	508	*	*	甕					淡黄褐色	
78	139	161	*	*	カメ	22.0			ナデ	暗黄黄褐色	
79	140	415	*	*	鉢	21.4			外ハケ	淡黄灰褐色	
80	141	303	*	*	カメ (復原図)	15.5	6.2	19.2	外タテハケ、内ヘラ調整	黄褐色	黒斑有
81	142	172	*	*	カメ	39.8				暗黄褐色	
82	143	416	*	*	カメ		8.3			茶黄褐色	
83	144										欠番
84	145	165	S B-19	*	カメ		5.6		外ヘラ調整、内タテハケ	淡褐色	
85	146	157	*	*	カメ		4.0		外タテハケ、内ヨコハケ	黄褐色	
86	147	155	*	*	鉢		5.8		ナデ	暗茶灰褐色	
87	148	613	*	*	鉢	8.0			内外ヘラナズリ	黄褐色	
88	149	164	*	*	鉢	14.6			外斜ハケ、内ヘラ調整	淡黄褐色	黒斑有
89	150	132	*	*	鉢		4.0		外タテハケ、内ヘラ調整	暗茶褐色	
90	151	158	*	*	ツボ		7.0		*	暗黄褐色	
91	152	207	*	*	支脚	5.3	10.0	9.5	外タテハケ、内ヨコハケ	暗茶褐色	
92	153	149	*	*	器台		12.8		外タテハケ、内ヨコハケ	暗茶褐色	
93	154	129	*	*	器台		12.2			暗黄褐色	
94	155	148	*	*	器台	10.0	13.8	15.5	外押圧痕、内シボリ痕	暗茶黄褐色	
95	156	210	S B-20	*	カメ	24.0			ナデ	黄褐色	
96	157	211	*	*	カメ	24.4			ナデ	黄褐色	
97	158	209	*	*	カメ	23.6			ナデ	暗黄褐色	
98	159	174	*	*	カメ	23.6			ナデ	暗黄褐色	B区
99	160	170	*	*	カメ	32.4			ナデ	暗黄茶褐色(スズ付)	内面暗黄褐色

(調整は(外)は外面、(内)は内面を示す)

第4表 西山ノ上遺跡 1次調査 堅穴式住居(建物)出土土器観察表、その3

序	土器番号	発掘期	出土遺構	種類	機種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	調整	色調・胎土・焼成	備考
49	161	169	S B-2 0	赤生式土器	カメ	—				暗黄褐色(黒褐色有)	D区
*	162	168	*	*	カメ			9.1		暗茶褐色	
*	163	232	S B-2 1	*	カメ	14.0			内ナデ	黄灰褐色	
*	164	94	*	*	カメ	15.8			内ハケ	暗黄褐色	
*	165	230	*	*	カメ	19.0			外タテハケ、内斜ハケ	灰黄褐色	黒斑有
*	166	52	*	*	カメ	27.4				黄茶褐色	
*	167	53	*	*	カメ	22.0			外タテハケ、内不明	暗黄茶褐色	
*	168	179	*	*	カメ		7.4		外内とも不定方向ハケ	明黄褐色(一部黒褐色)	
*	169	187	*	*	カメ		8.8			暗茶褐色	
*	170	186	*	*	カメ		7.8		ヘラ調整	暗黄褐色	
*	171	213	*	*	カメ		6.0		外ヘラ調整、内ナデ	*	
*	172	227	*	*	カメ		8.4		外ナデ、内ハケ	黄灰褐色	
50	173	188	*	*	ツボ	13.0			外ハケ	淡黄褐色	
*	174	175	*	*	ツボ	8.6			外タテハケ、内ヨコハケ、ナデ	暗茶黄褐色	黒斑有
*	175	214	*	*	ツボ		7.0			暗黄褐色	
*	176	234	*	*	甕		4.6		外ハケ、内ハケ	暗茶褐色	
*	177	50	*	*	高坏		12.1		外ハケ、内斜ハケ、ナデ	暗黄赤茶褐色	
*	178	180	*	*	鉢	13.0			外ナデ、内ナデ	暗灰黒褐色	
*	179	222	*	*	鉢	13.6			外タテハケ、内ヨコハケ	黄褐色	
*	180	224	*	*	鉢又は椀	18.0	5.4	5.7	外ナデ、内ヨコナデ	*	
*	181	177	*	*	器台	14.4			外タテハケ	暗黄褐色	
*	182	176	*	*	器台	14.8			外タテハケ、内ナデ	黄茶褐色	
*	183	223	*	*	高坏	28.0				黄褐色	
*	184	243	S B-2 3	*	カメ	18.0			外内ハケ	茶黄褐色	
*	185	242	*	*	カメ	22.8			外ヘラ調整、内タテハケ	暗黄褐色	
*	186	41	*	*	カメ	29.8			外タテハケ、内斜ハケ	暗黄茶褐色	
*	187	44	*	*	カメ		6.0		外ハケ、内ヨコハケ	黄茶褐色	
*	188	254	*	*	カメ		7.6		外内ともハケ	淡黄褐色	
*	189	47	*	*	カメ		6.0		外タテハケ、内ハケナデ	暗黄茶褐色	
*	190	246	*	*	カメ		8.0		外タテハケ、内斜ハケ	黄灰褐色(スス付量)	
*	191	252	*	*	ツボ	19.0			ナデ	黄褐色	
*	192	49	*	*	ツボ	9.9			外不明、内ヨコナデ	黄赤茶褐色	黒斑有
51	193	259	*	*	ツボ	10.4	5.9	11.0	外ハケ、内ヘラ調整	暗黄黒褐色	
*	194	48	*	*	鉢	19.8	7.5	14.5	外内ナデ	黄茶褐色	黒斑有
*	195	40	*	*	鉢	13.4	5.6	10.0	外ヘラテズリ、内ナデ	黄赤茶褐色	黒斑有
*	196	562	*	*	高坏	29.1			ヨコナデ	茶褐色	
*	197	45	*	*	高坏		13.8		外ハケ、内ナデ	赤茶褐色	
*	198	256	*	*	支脚	6.5	9.9	9.1	外ヘラ調整、内ナデ指圧痕	黄茶褐色	
*	199	258	*	*	内面型土製品					黒褐色	
*	200	143	S B-2 4	*	カメ	15.4			外タテハケ、内ヨコハケ、ナデ	暗黄褐色	
*	201	143	*	*	カメ				*	*	
*	202	193	*	*	カメ	15.8			ヨコナデ	暗黄褐色	
*	203	132	*	*	無頸ツボ	16.0			外側ハケ、内斜ハケ	*	黒斑有
*	204	140	*	*	カメ又はツボ		2.8		ナデ	茶灰褐色	
*	205	137	*	*	カメ又はツボ		7.0		ナデ	明黄褐色(底部黒褐色)	
*	206	138	*	*	カメ又はツボ		7.0		外ハケ、内ハケ摩耗	淡黄褐色	
*	207	141	*	*	カメ又はツボ		8.0		外ナデ、内不定方向ハケ	*	
*	208	136	*	*	カメ又はツボ		8.0		外タテハケ、内不明	暗黄褐色	黒斑有
*	209	564	*	*	鉢	25.1		13.3	外ハケ、内ハケ、ヘラ調整	淡黄褐色	
*	210	524	*	*	鉢	24.1	8.5		ハケ	暗黄茶褐色	
52	211	196	S B-2 5	*	カメ	18.1			ナデ、内ハケ	暗褐色、スス付量	
*	212	197	*	*	カメ		7.8		ナデ	暗黄茶褐色	
*	213	199	*	*	ツボ		6.4		ハケ	暗黄褐色	黒斑有

(調整は(外)は外面、(内)は内面を示す)

第4表 西山ノ上遺跡 1次調査 竪穴式住居(建物)出土土器観察表 その4

棟号	土器番号	調査番号	出土遺構	種類	形状	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調整	色調、胎土、焼成	備考
52	214	200	S B-2 5	弥生式土器	支脚		8.0		外ヘラ、内ナデ	暗黄褐色	
	215	97	S B-2 6	*	カメ	15.6			ハケ	黄褐色	
	216	100	*	*	カメ	17.6			内ナデ	赤茶褐色	
	217	96	*	*	カメ		7.4		ハケ	黄茶灰褐色、スス付着	
	218	95	*	*	鉢	14.7	7.0	14.8	外タテハケ	黄褐色	黒斑有
	219	620	*	*	鉢		5.2		内ヘラ調整	黒黄褐色	黒斑有
	220	603	*	*	鉢		5.2		ナデ	暗黄褐色	
	221	98	*	*	鉢	13.6	4.0	7.0	外ヘラ調整、内ナデ	黄灰茶褐色	
	222	301	*	*	高坏調		33.8		外ハケ、内ナデ	暗茶褐色	
	223	612	S B-2 7	*	カメ	18.0			内ナデ	明茶色	
	224	611	*	*	カメ	20.0			ナデ	明黄茶褐色	
	225	609	*	*	カメ		6.0			暗赤茶褐色	
	226	608	*	*	鉢	18.0				*	
	227	614	S B-2 8	*	カメ	12.0	4.5	13.3	外ハケ、内ヘラケズリ、ハケ	暗黄茶灰褐色	黒斑有
	228	615	*	*	カメ		6.6		外ハケ、内ヘラ調整	黒黄褐色	
	229	618	*	*	ツボ		4.6		外ナデ、内ヘラ調整	黄茶褐色	A区
	230	613	*	*	器台	12.0			外タテハケ、内ヨコハケ	*	C区
53	231	623	S B-2 9	*	カメ					暗黄褐色	
	232	624	*	*	カメ				内ナデ	*	
	233	625	*	*	鉢	17.8	4.8	8.1		黄茶褐色	
	234	633	S B-3 0	*	カメ	14.2			外ハケ、内ナデ	暗黄灰褐色、スス付着	
	235	636	*	*	カメ	13.0			ハケ	茶褐色	
	236	637	*	*	カメ	23.4			外ハケ	暗黄褐色	
	237	465	*	*	カメ		6.5		内外ハケ	黄褐色	
	238	626	*	*	カメ		8.2		外ナデ、内ヘラ調整	*	
	239	629	*	*	カメ	23.6			内外ハケ、刳目	*	
	240	449	*	*	カメ		5.5		外ヘラ調整	黄茶褐色	上げ底
	241	638	*	*	器台	12.0			外ハケ、内ヨコナデ	*	
	242	466	*	*	鉢	13.6			外タテハケ、内ヘラ調整	黒黄褐色	
	243	631	*	*	小鉢	6.7	3.4	3.2	ヘラ調整	黄茶灰褐色	
	244	642	S B-3 1	*	カメ	23.0			内外ヨコナデ	黄褐色	
	245	641	*	*	カメ	22.0			外ヨコナデ、内ナデ	黄褐色	
	246	644	*	*	カメ		7.4		外タテハケ、内ナデ	*	
	247	639	*	*	カメ		7.5		外ハケ、ヨコナデ、内ナデ	黄茶褐色	
	248	643	*	*	カメ		9.5		外ハケ、内ナデ	暗茶褐色	
	249	640	*	*	鉢	12.2			*	黒茶褐色	
	250	649	S B-3 2	*	カメ				外ヨコナデ、内ナデ	黄灰褐色	
	251	647	*	*	ツボ		2.4			暗黄灰褐色	
	252	646	*	*	ツボ		6.0		外ヘラ調整、内ナデ	黄赤茶褐色	
54	253	473	S B-4 2	*	カメ	36.0			外鉢ハケ、内ヨコハケ	淡黄灰褐色	
	254	535	*	*	カメ	38.0			外タテハケ	淡黄茶褐色	黒斑有
	255	553	*	*	カメ		13.0		外タテハケ、内ヘラ調整	淡黄明茶褐色	
	256	549	*	*	カメ		6.2		*	暗黄褐色	黒斑有
	257	477	*	*	カメ		5.6		内外ハケ	茶黄褐色	
	258	474	*	*	カメ		5.8		外タテハケ、内ヘラ調整	黄褐色	黒斑有
	259	469	*	*	ツボ		5.9		外タテハケ、内タテ、ヨコハケ	灰黄褐色	
	260	479	*	*	ツボ	9.0	4.6	21.9	外内ハケ、外平行流線、重底文、刳目	暗茶褐色	黒斑有
	261	561	*	*	ツボ				外ハケ、内ハケ、ナデ	淡黄褐色	黒斑有
	262	555	*	*	高坏	25.2			外ハケ、内ナデ	*	
	263	552	*	*	高坏		17.1		外タテハケ、内ヨコハケ、ナデ	淡黄茶褐色	黒斑有
	264	326	*	*	支脚	8.0	12.7	10.1	外ヘラ調整、内ナデ、指圧痕	淡黄褐色	
	265	554	*	*	支脚	5.6	13.6	11.8	外タテハケ、内ヨコハケ	暗黄茶褐色	
	266	559	*	*	器台		13.6		外タテハケ、内ヨコハケ、指圧痕	暗黄褐色	黒斑有
	267	558	*	*	器台	14.0			外タテハケ、内ヨコハケ、ヘラ調整	黄茶褐色	(調整ハケ外)は外面、(内)は内面を示す

第4表 西山ノ上遺跡 1次調査 竪穴式住居(建物)出土土器観察表 その5

棟号	土層番号	発掘番号	出土遺構	種類	機種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調整	色調、粘土、焼成	備考
72	591	286	S B-0 9	カメ		21.6			外タテハ、内ナデ	淡黄褐色	
592	285	*		ツボ		20.0				灰黄褐色	
593	297	*		ツボ又は鉢			3.3			黄褐色	
594	299	*		ツボ又は鉢			—		外ハケ、内ナデ	*	
595	300	*		鉢			2.3		ナデ	*	
596	402	*		鉢		8.2	3.3	5.3	ナデ	暗茶褐色	
597	403	*		鉢		9.0	2.1	4.2	ナデ	黄褐色	
598	334	S B-1 0		カメ		19.4			内ナデ	淡黄褐色	黒斑有
599	336	*		ツボ		24.0			外タテハ、内ヨコハ	暗茶褐色	
600	333	*		ツボ			5.2		外ナデ	淡黄褐色	
601	457	S B-3 5		カメ		18.0			ヨコナデ	暗黄茶褐色、スス付着	
602	456	*		カメ			7.0		外ナデ、内ヘラ調整	暗黄褐色、スス付着	
603	538	S B-3 6		カメ		25.4			内ヨコナデ	暗黄褐色	
604	451	*		カメ		29.0			外ヨコナデ、内ナデ	淡黄褐色、スス付着	
605	537	*		ツボ		17.6			外ナデ、内ミガキ	暗茶黒褐色	
606	539	*		鉢			5.8		内ハケ	黄褐色	
607	540	*		器台			11.8		タテハ	黄褐色	
608	549	S B-3 7		カメ又はツボ			7.6		外タテハ、内ナデ	淡黄灰褐色	
609	548	*		カメ又はツボ			3.4		外ヘラ調整、内ナデ	茶褐色	
610	545	S B-3 8		ツボ		10.0			外タテハ、内ヨコナデ	暗黄褐色	
611	543	*		高坏			13.8			暗茶褐色	
612	542	*		支脚		6.6			外タテハ、内ナデ	黄褐色	
613	544	*		鉢		7.3	1.1	3.0	ヘラ調整	黄茶褐色	
614	546	*		鉢		6.7	1.9	4.0	ナデ	*	
615	462	S B-4 0		鉢		9.8			外ナデ、内ヨコナデ	灰褐色	
616	461	*		鉢		7.2	2.0	6.7	外タテハ、ナデ、内ナデ	暗灰褐色	
617	468	S B-4 1		カメ					外ハケ、内ヘラ調整	暗黄褐色	
81	619	201	S K-0 1	須恵器灰		11.9		4.0	外田板ヘラ削り、内ナデ	暗灰色	天井部ヘラ記号
620	202	*		* 坏身		10.5		4.4	外田板ヘラ削り、内ヨコナデ	暗灰色	底盤ヘラ記号
621	203	*		丹塗高坏		17.2	12.6	12.2	外丹塗、内丹塗ヨコナデ	茶褐色	
622	106	S K-0 2		カメ			8.2		外タテハ、ヨコナデ	暗黄茶褐色	上げ底
623	107	S K-0 6		カメ		25.8			外ナデ、刻目	暗黄褐色	
624	482	S K-0 7		カメ		24.0			外タテハ、内ヨコナデ	淡黄灰褐色	胴部二条の沈線
624	483	*		カメ		23.0			ヨコナデ	暗黄褐色	
626	108	S K-0 8		カメ			7.0		外タテハ、内ナデ	暗褐色	上げ底
627	109	*		カメ			9.3		外タテハ、ヘラナデ、内ナデ	赤茶暗褐色	上げ底
628	487	S K-1 2		カメ		16.0			外ハケ、内ナデ	黄灰褐色	
629	484	*		カメ			6.0		外タテハ、内タテヨコハ	淡黄灰褐色	
630	485	*		カメ			8.0		*	黄灰褐色	
631	488	S K-1 3		カメ		28.0			外タテハ、内ナデ	茶黄褐色	黒斑有
632	490	S K-2 5		カメ		14.0				*	
633	489	*		カメ		20.0			ヨコナデ	黄灰褐色	
634	493	*		器台			12.4		外タテハ、内ヨコハ	茶黄褐色	
635	500	S K-2 6		カメ		25.4			外タテハ	黄褐色	
636	580	*		カメ		24.8			外タテハ	暗黄茶褐色	
637	575	*		カメ		16.6	6.0	17.4	内タテ方向にミガキ	黄茶褐色	
638	569	*		カメ		27.0			外タテハ、内ナデ	暗黄褐色、スス付着	
62	639	499	*	カメ			7.0		外タテハ、内ナデ	黄褐色	上げ底
640	112	*		カメ			6.4		外タテハ	暗黄茶褐色	*
641	111	*		カメ			6.8		外タテハ、内ナデ	暗黄褐色	*
342	116	*		カメ			5.4		*	黄茶褐色	*
643	572	*		カメ			6.0		外タテハ	淡黄褐色	*

(調整は(外)は外面、(内)は内面を示す)

第4表 西山ノ上遺跡 1次調査 竪穴式住居(建物)土塊 出土土器観察表 その6

群団	土器番号	発掘番号	出土遺構	種類	装飾	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調、胎土、焼成	備考
82	644	496	SK-26		カメ		3.0		外タテハケ	茶褐色	上げ底
●	645	705	*		カメ		3.6		*	黄灰褐色	
●	646	494	*		カメ		10.0		*	黄灰茶褐色	
●	647	581	*		鉢	26.6			外タテハケ、割目、内ナデ	黄茶褐色	
●	648	568	*		ツボ	18.9			割付ハケ、ナデ、内ヘラ調整	暗黄褐色	
●	649	576	*		ツボ		7.8		ヘラ調整	淡黄灰褐色	
●	650	570	*		ツボ		8.1		ヘラ調整後ミガキ	黄赤茶黒褐色	
●	651	583	*		ツボ		6.7		外ナデ、内ヘラ調整	暗黄褐色	
●	652	577	*		ツボ	9.4	5.2	16.3	外ハケ、内ナデ	黄茶褐色	黒斑有
●	653	117	*		ツボ	26.0			外ヨコナデ、ヘラミガキ、内ミガキ	暗黄褐色	黒斑有、口縁部に沈線
●	654	204	*		蓋	28.8	6.6	16.2	外タテハケ、ヘラ調整、内ナデ、ヨコナデ	黄灰褐色	
●	655	582	*		蓋		7.2		外ハケ、内ナデ	黄明茶褐色	
●	656	115	*		鉢		4.8		ナデ	暗黄褐色	
83	657	592	SK-30		カメ	14.8			外タテハケ、内ナデ	暗黄茶褐色、スス付量	
●	658	590	*		カメ	23.0			外タテハケ、ナデ、内ナデ	黄黒褐色	
●	659	587	*		カメ	22.4			ナデ	暗褐色、スス付量	
●	660	724	*		カメ	26.1			外タテハケ、内ナデ	暗赤黄褐色、内面にスス付量	
●	661	595	*		カメ	21.6			外ハケ、内ナデ	暗黄褐色	
●	662	723	*		カメ	25.5			ナデ	黄茶黒褐色、スス付量	
●	663	593	*		カメ	30.0			外ヨコナデ、内ナデ	暗黄褐色	黒斑有
●	664	598	*		カメ	31.0			外斜ハケ、内ナデ	淡黄暗褐色、スス付量	頸部下に一条の沈線
●	665	586	*		ツボ	16.0	6.5	30.8		明黄茶褐色	
●	666	716	*		ツボ	9.6				黄茶褐色	
●	667	715	*		カメ		7.0		内ナデ	茶黄褐色	
●	668	711	*		カメ		7.2		外ハケ	暗黄褐色	
●	669	717	*		カメ		7.0		外ハケ	淡黄灰褐色	
●	670	718	*		蓋		6.0		外タテハケ、ヨコナデ	黄褐色	黒斑有
●	671	591	*		蓋		5.0		外ハケ、内ナデ	暗黄褐色	黒斑有
●	672	720	SK-32		カメ		7.0		外タテハケ、内ナデ	暗黄茶褐色	*
●	673	722	SK-37		カメ	24.4			外斜ハケ、内ナデ	黄茶灰褐色	*
90	680	04	SD-02		カメ	14.2			外タテハケ、内ナデ	黄茶褐色	
●	681	26	*		カメ	16.0			外ハケ、内ヘラ調整	*	
●	682	17	*		カメ	15.2			外ヨコナデ、内ヘラナズリ	茶褐色	
●	683	33	*		カメ	26.6			外ハケ	黄褐色、スス付量	
●	684	05	*		カメ	25.6			外斜ハケ、内ヨコナデ	茶褐色	
●	685	02	*		カメ又は鉢		5.9		外ヘラ調整、内ハケ	暗黄茶褐色	
●	686	15	*		カメ		5.6		外ヘラ調整、内ヘラナデ	黄茶褐色	
●	687	06	*		カメ		6.6		、内ナデ	暗黄褐色	
●	688	35	*		ツボ	14.0			ヨコナデ	黄褐色	
●	689	31	*		長頸ツボ	15.4				黄赤茶褐色	
●	690	21	*		ツボ	17.6			外タテハケ、内ヨコハケ	茶褐色	
●	691	36	*		ツボ		7.8		外ハケ、内ヘラ調整	暗黄褐色	
●	692	18	*		ツボ		8.0		外タテハケ、ナデ、内ヘラナズリ、ハケ	黄茶褐色	
●	693	01	*		高杯	27.4			外ヨコナデ、割付ハケ、内ヨコハケ、ヨコナデ	黄褐色	
●	694	30	*		高杯	16.0			外ナデ、内斜ハケ、ナデ	暗茶褐色	
●	695	16	*		高杯		13.0		外タテハケ、内ヨコハケ	黄灰褐色	
●	696	10	*		器台	14.9			外、内ヘラ調整	赤茶褐色	
●	697	11	*		器台		15.8		*	黄茶褐色	
●	698	101	SD-03		鉢	23.0		10.0	外ヘラ調整、内ナデ	暗黄赤茶褐色	
●	699	105	*		カメ	-	-		内ナデ	暗褐色	

(調整は(外)は外面、(内)は内面を示す)

第4表 西山ノ上遺跡 1次調査 土塊、溝状、遺構 出土土器観察表 その7

測点	土器番号	発掘層	出土遺構	種類	機種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調、胎土、焼成	備考
94	701	650	S X-01		カメ	22.0			ヨコナデ	暗茶褐色	
	702	652	*		ツボ	14.0			*	黄褐色	
	703	651	*		カメ		7.8		外ハケ、内ナデ	暗褐色	
	704	653	*		器台		8.4		外タテヨコハケ、内ヨコナデ	黄褐色	
	705	671	S X-02		大形壺				外ハケ、押広口、内タテヨコハケ	黄茶褐色	
	706	664	*		ツボ	12.2	2.0	12.3	外ハケ、内ナデ	明茶黄褐色	
	707	659	*		ツボ	13.8			外タテハケ、内ハケ調整	黄褐色	
	708	655	*		カメ又はツボ		8.4		ハケ	黄茶褐色	
	709	662	*		カメ又はツボ		8.2		外ナデ	黄褐色	
	710	656	*		カメ又はツボ		8.3		外ハケ、内ヘラケズリ	黄茶褐色	黒斑有り
	711	670	*		カメ又はツボ		12.2		外斜ハケ、内タテハケ	淡黄灰褐色	
	712	675	*		カメ又はツボ		12.8		外内不定方向ハケ	黄茶褐色	
	713	668	*		カメ又はツボ		5.4		外斜ハケ、内ナデ	暗茶褐色	
	714	665	*		カメ又はツボ		5.6		外斜ハケ、内ヨコ斜ハケ	暗黄灰褐色	
	715	663	*		鉢	16.0			外ナデ、内ハケ	黄灰褐色	黒斑有り
	716	658	*		鉢	16.0	4.0	10.3	外タテハケ、内ヨコハケ	明茶黄褐色、スス付量	
	717	666	*		鉢	7.2	3.0	3.0	ナデ	暗茶褐色	
	718	660	*		鉢	10.2			*	*	内面指跡痕
	719	778	S X-04		ツボ	-	-	-	外ヘラ調整、内ハケ	黄褐色	
	720	777	*		ツボ	-	-	-	外内斜ハケ	黄茶褐色、スス付量	
	721	676	*		カメ		5.4		外ヘラ調整、内ヨコハケ	暗黄茶褐色	
95	722	693	S X-08		カメ	18.2			外内タテ斜ハケ	暗灰黄褐色	黒斑有り
	723	690	*		カメ	21.5			外タテハケ、内ヨコハケ	暗黄茶褐色	
	724	697	*		カメ	22.7	6.6	32.5	外タテハケ、内ヨコハケ、ヘラ調整	暗黄茶灰褐色	スス付量
	725	55	*		カメ	27.0			外タテハケ、内斜ハケ	*	*
	726	54	*		ツボ	20.3			外タテハケ、内ヨコハケ	黄褐色	
	727	576	S D-02		ツボ	18.9	7.3	39.6	外側、外ヨコハケ、内側、内ヨコハケ	黄茶褐色	黒斑有り
	728	687	S X-08		ツボ	15.2			外タテヨコハケ、内ナデ	*	
	729	684	*		カメ又はツボ		7.4		外ヨコナデ、内ナデ	暗黄灰褐色	
	730	689	*		カメ又はツボ		8.4		外ナデ、内ハケ	淡黄褐色	
	731	696	*		カメ又はツボ		7.6		外タテハケ	暗黄灰褐色	
	732	691	*		カメ又はツボ		5.4		外内ハケ	暗黄褐色	
	733	688	*		カメ又はツボ		8.4		外内ナデ	黄褐色	
96	734	686	*		鉢	10.7	6.1	11.0	外ヘラ調整、タテハケ、内ヘラ調整	暗灰褐色	
	735	663	*		鉢	14.9	5.3	6.0	外タテハケ、内ヘラ調整	黄茶褐色	
	736	659	*		カメ	35.2	9.5	55.9	外タテハケ、内斜ハケ	暗黄茶灰褐色	黒斑有り

(調整は(外)は外面、(内)は内面を示す)

第4表 西山ノ上遺跡 1次調査 周溝状遺構、不明遺構 出土土器観察表 その8

押図	実測番号	出土遺構	種 別	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
268	3	SB-01	石包丁未製品	片 岩	7.4	5	0.5	30	
269	4	"	"	"	9.8	5.2	0.9	75	
270	8	"	"	"	11.6	6.2	1.2	120	
271	14	"	"	"	12.8	6.7	1.4	160	
272	2	"	"	"	11.4	6.5	1.4	145	
273	13	"	砥 石	砂 岩	5.8	7.2	4.2	230	上端部に多量の鉄錆
274	11	"	"	"	7.2	8.5	4.7	300	一部に鉄錆
275	6	"	"	"	5.5	5.5	3.9	125	
276	12	"	"	泥 岩	3.6	2.6	1.5	15	
277	1	"	"	片 岩	20.3	18.7	2.4	1355	側辺の一部に鉄錆
278	104	SB-04	砥 石	片 岩	8.8	6.6	1.4	95	溝状砥ぎ跡に鉄錆
279	101	"	"	砂 岩	5.1	3.4	1.1	40	両側辺中央に挟り状の使用痕
280	107	"	"	泥 岩	6.8	5.7	4.6	250	
281	106	"	"	"	14.2	5	3.6	240	屋内土壌? 出土
282	105	"	敲打石	"	15.4	11.6	5.2	1490	両端に敲打痕
283	143	SB-05	砥 石	片 岩	24.2	17.2	1.5	1500	砥面、側辺部に鉄錆
284	110	"	"	泥 岩	10	5	2.6	165	
285	109	"	"	砂 岩	11.1	5.7	0.8-3.7	220	全面に鉄錆
286	18	SB-06	砥 石	片 岩	35.6	9	5	3500	
287	26	SB-07	砥 石	砂 岩	12.4	10.4	5.1	855	側辺部に鉄錆
288	25	"	"	"	8.2	3.1	3.1	90	砥面、側辺部に多量の鉄錆
289	15	"	砥石細片	"	5.6	4.1	1.2	35	砥面、及び、側辺に鉄錆
290	23	"	"	片 岩	5.6	5.7	1.1	30	用途不明
291	17	"	"	"	8.7	5	3	230	屋内土壌出土。鉄錆付着
292	16	"	"	"	9.9	4.4	3.2	215	両端に敲打痕
293	112	SB-08	被熱石	"	11	12.4		1635	全面に被熱痕
294	116	SB-11	被熱石	"	11.4	9.1	5.7	840	鉄錆?
295	115	"	砥 石	砂 岩	5.6	4.4	2.8	95	3面使用
296	24	SB-14	砥 石	片 岩	7.5	3.8	0.6	35	一部に鉄錆
297	21	"	石包丁	"	4.4	5.1	0.6	20	P-7出土
298	20	"	"	"	5.2	3.8	0.4	10	
299	27	"	石 鏃	サヌカイト	2.6	2.6	0.55		P-1出土。先端欠損
300	119	SB-15	石 匙	サヌカイト	4.1	4.8	0.9	20	両側辺に挟り。刃部は押圧剥離
301	118	"	砥 石	泥 岩	6.2	4.4	1.35	40	
302	53	"	磨 石	"	19.5	10.6	7.5	3000	屋内土壌出土。
303	52	"	"	"	11.9	8.5	9.1	1345	屋内土壌出土。
304	120	"	磨 石	"	23.6	29.8	6.7	7000	屋内土壌出土。作業台石?
305	117	"	砥 石	片 岩	7.8	7.7	1.4-2.3	150	2面使用
306	122	SB-16	砥 石	砂 岩	3.9	2.8	0.7	15	裏面に剥片状の鉄錆
307	121	SB-17	石 錐	サヌカイト	4.8	1.8	1.1	5	
308	33	SB-18	石包丁未製品	片 岩	10.8	6	1	100	C区出土
309	30	"	磨 石	"	9.6	7.5	5	500	A区出土。一部に鉄錆
310	31	"	被熱石	"	16.5	10	8.4	2500	側片部に鉄錆
311	124	"	被熱石	"	11.2	13.6	8	1670	一部黒色化
312	32	"	砥 石	砂 岩	16.6	12	2.5	830	
313	129	"	"	片 岩	19	10.5	1.2	425	AD区屋内土壌出土。側片に鉄錆
314	34	SB-19	石包丁未製品	片 岩	11.8	5.8	0.6	70	床面直上出土
315	35	"	石包丁	"	11.2	6	0.5	55	紐穴間2.3cm
316	37	SB-21	砥 石	片 岩	12.8	7.9	1	180	側片部を砥面 (U字形砥面)
317	40	SB-23	石包丁未製品	片 岩	12.1	5.8	1	120	
318	39	"	石包丁	片 岩	13.2	5.7	0.65	75	紐穴間1.9cm
319	145	"	砥 石	砂 岩	10.9	8.6	1.4-2.2	370	
320	55	"	"	"	24.5	9.4~11	2.7	1255	3面使用
321	56	SB-24	凹 石	"	11.6	8.9	5.3	870	両面に窪み

第5表 西山ノ上遺跡 1次調査 出土石器観察表 その1

採回	実測番号	出土遺構	種別	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
322	57	SB-24	磨石		11.3	9.4	7.5	1085	
323	146	"	砥石	片岩	27.2	16	3.3	2500	
324	41	"	石包丁	"	11.1	4.5	0.7	50	紐穴間1.75cm
325	142	SB-26	台石		15.8	15.9	4.1	1465	表面に窪み
326	42	SB-27	石包丁	片岩	13	4.8	0.8	65	紐穴間2.2cm
327	29	SB-28	磨石		9.4	9.5	8.6	1080	球状
618	114	SB-10	石斧?		14.5	4.8	1.1	105	下端に片側押圧剥離
674	48	SK-02	石包丁	片岩	10	7.1	0.6	60	紐穴間3.2cm以上
675	62	SK-26	敲打石		10.1	6.1	5.3	420	C層出土。下端部に敲打痕
676	63	"	磨石		11.1	9.2	7.8	1240	C層出土
677	47	"	"		16.6	10	6.4~7.9	1890	C層出土
678	151	"	凹石		9.6	7.5	5.1	640	C層出土
679	157	SK-37	石鏃	黒曜石	2.8	1.9	0.35		凹基式。腰岳系
700	133	SD-02	砥石	砂岩	7	7.3	2.7~4.9	280	被熱あり
737	135	SX-02	砥石	砂岩	16	7.7~10	2.3~3.3	980	SB-08由来か。全面に鉄錆
738	134	"	"	"	12.9	16.6	2.5~5.5	1260	SB-08由来か。
739	51	"	石包丁	雲母片岩	11.1	5.5	0.6	55	紐穴間2.0cm
740	50	"	砥石	砂岩	5.2	4.5	0.5	15	
741	155	SP-14	石盤	泥岩	4.95	2.3	0.8~1.1	25	砥石の転用品
742	156	表探	石鏃		2.5	1.4	0.5		両脚欠損
743	154	表探	石盤	砂岩	3.15	1.8	0.6		
744	49	排土中	石剣	片岩?	9.2	5.7	1.35	80	下部以下欠損。風化著しい。

第5表 西山ノ上遺跡 1次調査 出土石器観察表 その2

採回	実測番号	出土遺構	種 類	分 類	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
328	13	SB-01	鑿?		4	0.75	0.7	8.5	鉄16
329	12	SB-01	鏃		2.6	1.3	0.15	2.2	鉄15
330	11	SB-01	長三角形鉄片	A2a	2.6	1	0.1	1.6	④
331	10	SB-01	長四角形鉄片	B2a-4	3	1.15	0.3	4	鉄13
332	8	SB-01	#	B2b-1	4.7	0.6		3.7	鉄11
333	4	SB-01	#		4	0.6		5.5	④
334	9	SB-01	不整形鉄片	Fb	2.9	1.4	0.1	2.5	鉄12
335	2	SB-01	#		3.7	1.8		4.6	②
336	7	SB-01	#	Fd	2.4	1		0.7	鉄10
337	266	SB-04	鑄造鉄斧		7.6	3.1	0.85	60	上層埋土⑥、ソケット側辺部
338	271	SB-04	#		7.9	2.9	0.8	57	鉄6、ソケット側辺部
339	270	SB-04	#		6	5.5	2.1	108	層内土層1、鉄5、ソケット部破片、NYU-2
340	267	SB-04	#		3.5	8.9	1.2	100	上層埋土9、刃部幅が非常に広い、NYU-1
341	269	SB-04	#		2.8	8.3	0.8	75	鉄3、刃部破片
342	264	SB-04	鉄斧刃部		2	4.3	0.7	21	上層埋土1
343	16	SB-04	鏃		5.9	3.9	0.2	17.1	
344	265	SB-04	板状不明鉄器片		5.1	3.5	0.5	23	上層埋土7
345	268	SB-04	#		3.9	3.4	0.6	19	下層埋土12
346	15	SB-04	#		4.7	3.6	0.4	14.9	
347	22	SB-04	#		5.8	1.4	0.4	13.4	鉄4
348	21	SB-04	不明鉄器		2.7	1.1	0.5	3.8	鉄2
349	18	SB-04	長三角形鉄片	A2a	3.5	0.9	0.1	2.1	鉄10
350	30	SB-04	三角形鉄片	A1c	2.3	1.3	0.1	0.9	
351	19	SB-04	四角形鉄片	B1c	2.2	2	0.15	3	鉄11、湾曲強い
352	27	SB-04	長四角形鉄片	B2a-1	3	1.2		3.3	
353	28	SB-04	#		2.1	0.7	0.15	1.2	
354	24	SB-04	針状鉄片	Ca	3.7	0.25	0.2	2	
355	20	SB-04	不整形鉄片	Fa	3.3	1.4	0.1	2	鉄1
356	25	SB-04	#	Fd	3.1	0.9	0.1	1.2	
357	17	SB-04	#	#	5.5	2.6	0.2	15.6	
358	23	SB-04	#	#	4.3	1.9	0.3	8.2	
359	244	SB-05	鏃		2.2	1.15		1.6	鉄23
360	248	SB-05	鏃		3.2	2.1	0.1	1.1	鉄27、中央下半に目釘穴
361	242	SB-05	長三角形鉄片	A2a-1	3.1	0.4	0.1	1.2	鉄20
362	243	SB-05	#	#	2.9	0.6	0.1	1.2	鉄21
363	168	SB-05	#		3.1	0.8		1.4	鉄45
364	164	SB-05	#	A2c-3	2.2	1.2	0.2	1.4	鉄40
365	96	SB-05	三角形鉄片	A1c	1.7	1.1	0.1	0.8	鉄3
366	305	SB-05	四角形鉄片	B1c	2.1	1.4	0.2	2.5	鉄11
367	158	SB-05	#	#	2	1.1	0.1	0.8	鉄33
368	167	SB-05	長四角形鉄片	B2a-1	2	0.8	0.2	1.3	鉄44
369	162	SB-05	棒状鉄片	Dd	2.6	0.7		1.5	鉄37、ゼンマイ状に巻く
370	98	SB-05	不整形鉄片	Fd	2.5	0.9	0.1	0.8	鉄5
371	159	SB-05	#	#	1.5	1.3	0.3	1.7	鉄34
372	166	SB-05	#	#	1.7	1.4	0.1	1.2	鉄43
373	165	SB-05	#	#	2.6	1.3	0.1	1.5	鉄42
374	307	SB-05	#	#	1.9	1.2	0.1	0.8	鉄19
375	35	SB-06	ヤリガンナ		2.5	1.1	0.1	1	鉄5、刃部破片
376	32	SB-06	長三角形鉄片	A2c-1	2.3	1		1.8	鉄2
377	33	SB-06	長四角形鉄片	B2a-1	2.6	0.9	0.15	1.4	鉄3
378	34	SB-06	不整形鉄片	Fc	2.8	1.4	0.2	1.2	鉄4
379	31	SB-06	#	Fd	3.2	2.2	0.1	3.6	鉄1
380	51	SB-07	鏃		5.5	2.5	0.2	15	鉄15、基部破片、NYU-6
381	43	SB-07	鏃		4.1	3.05	0.15	7	鉄4、目釘穴不明、NYU-4

第6表 西山ノ上遺跡 1次調査 堅穴式建物等 出土鉄器観察表 その1

押図	実測番号	出土遺構	種類	分類	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
382	273	SB-07	鑄造鉄斧		3.6	5.4	1.2	53	鉄8、ソケット〜刃部破片
383	272	SB-07	板状不明鉄器片		7.25	5	0.7	77	鉄1
384	59	SB-07	"		5	2.8	0.4	16.6	カクラン出土
385	63	SB-07	三角形鉄片	A1a	0.9	1.1	0.1	0.2	
386	62	SB-07	"	"	1.2	0.8	0.1	0.5	
387	58	SB-07	"	"	2	1.2	0.1	2.4	鉄2 5、NYU-10
388	36	SB-07	"	"	2	1.3	0.1	0.6	鉄2
389	52	SB-07	長三角形鉄片	A2a	1.9	0.6		0.7	鉄1 6
390	53	SB-07	"	"	3.6	1.3	0.15	3.1	鉄1 8、NYU-7
391	47	SB-07	四角形鉄片	B1a	2	1.2	0.25	1.5	鉄9
392	61	SB-07	長四角形鉄片	B2a-1	2.1	0.6	0.1	0.8	
393	37	SB-07	"	"	2.4	0.9		1.5	鉄2
394	42	SB-07	長四角形鉄片	B2a-1	2	1	0.15		鉄3
395	55	SB-07	"	B2a-3	3.6	1.7	0.2	3.8	鉄2 2、NYU-9
396	46	SB-07	"	"	4.3	1.9	0.1	5	鉄7、NYU-5、鉄削
397	41	SB-07	"	B2c-3	4.2	1.4	0.2	4.9	鉄3、側辺部に工具痕、NYU-3
398	56	SB-07	棒状鉄片	D	1.4	0.3	0.2	0.4	鉄2 3
399	48	SB-07	"	Dd	2.5	0.6	0.1~0.2	1.1	鉄1 0、ゼンマイ状に巻く
400	40	SB-07	不整形鉄片	Fa	2.6	1.5	0.1	2	鉄2
401	38	SB-07	"	"	2.7	0.7		1.6	鉄2、三日月状
402	39	SB-07	"	"	3.3	0.9	0.1	1.5	鉄2、三日月状
403	54	SB-07	"	"	2	2.4		4.2	鉄2 1、NYU-8
404	50	SB-07	"	Fb	2.7	0.8	0.1	1	鉄1 2、三日月状
405	45	SB-07	"	Fd	1.5	1.9	0.1	1	鉄5
406	212	SB-08	三角形鉄片	A1a	2	2.4	0.15	1.9	鉄3
407	213	SB-08	四角形鉄片	B1a	1.9	1.5	0.1	1.6	鉄4
408	216	SB-08	長四角形鉄片	B2a-1	1.7	0.4		0.3	屋内土境内
409	217	SB-08	"	"	2.1	0.5	0.2	0.8	床面直上
410	211	SB-08	針状鉄片	Ca	1.6	0.25	0.15	0.2	鉄2
411	220	SB-15	鏃		4.4	2	0.1	4.6	鉄4、目釘穴不明
412	219	SB-15	"		6.1	3.3	0.1	8.2	鉄3、矢の装着痕有、目釘穴不明
413	274	SB-15	鏃		14.7	0.9	0.7	42	鉄1
414	202	SB-16	板状不明鉄器片		6.3	1.6	0.1	6.3	P-4出土
415	91	SB-18	鏃		4.5	2.6	0.2	11.7	鉄5 7
416	89	SB-18	"		3.1	2.7	0.15	3.7	鉄3 8、穂摘鏃?
417	93	SB-18	"		4.9	2.2	0.2	8.1	
418	87	SB-18	"		5.3	2.5	0.2	11.5	鉄3 8、直鏃?
419	148	SB-18			3.5	1.6	0.2	6.5	鉄5 3
420	133	SB-18	棒状不明鉄器片		3.6	1	0.8	8.6	鉄2 8
421	153	SB-18	板状不明鉄器片		6.4	1.6	0.25~0.5	10.6	鉄4 7、明瞭な段差有
422	143	SB-18	"		6.3	3.1	0.35	25.9	鉄4 4
423	67	SB-18	三角形鉄片	A1a	1.4	2	0.2	1.5	鉄5、NYU-11
424	84	SB-18	"	"	2.1	2.7	0.15	4.1	鉄3 1
425	77	SB-18	長三角形鉄片	A2a	2.6	1.1	0.1	1.2	鉄1 5
426	65	SB-18	"	"	3	2.2	0.1	4.1	鉄3
427	82	SB-18	"	"	3.3	1.7	0.15	1.8	鉄1 9
428	154	SB-18	長三角形鉄片	A2a	5.3	1.7		5.9	鉄4 9
429	64	SB-18	"	"	1.4	1.1		0.9	鉄1
430	130	SB-18	"	"	2.2	1	0.15	1.3	鉄2 1
431	150	SB-18	"	"	2.6	1.2	0.15	2.4	鉄5 6、ヤリガンナ刃部?
432	78	SB-18	"	A2b	2.9	1.5	0.1	1.5	鉄1 6
433	76	SB-18	"	A2a	2.4	0.4	0.1	0.8	鉄1 4
434	68	SB-18	"	"	3.6	0.7	0.1	1.2	鉄6、NYU-12
435	146	SB-18	"	A2a-2	4.9	0.85	0.4	6.4	鉄5 1、NYU-16

第6表 西山ノ上遺跡 1次調査 竪穴式建物等 出土鉄器観察表 その2

押回	実測番号	出土遺構	種類	分類	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
436	141	SB-18	長三角形鉄片	A2b-3	3.3	0.8~2.1	0.15	2.7	鉄43
437	135	SB-18	"	"	3.4	0.9~1.9	0.15	2.4	鉄29
438	149	SB-18	"	A2b-4	5	1.2	0.35	8.1	鉄54、NYU-17
439	134	SB-18	四角形状鉄片	B1a	2.2	1.3	0.2	1.4	鉄25
440	129	SB-18	"	"	2.1	2.1	0.2	2.2	鉄20
441	140	SB-18	"	"	2.5	1.65	0.15	2.2	鉄42
442	92	SB-18	"	"	3.5	2	0.35	8.8	鉄58
443	107	SB-18	"	"	2.2	1.3		2.1	I、バタフライ形状
444	151	SB-18	"	"	2.2	1.5	0.2	2.5	鉄56、バタフライ形状
445	90	SB-18	四角形状鉄片	B1a	2.4	1.3	0.1	1.5	鉄39
446	152	SB-18	"	"	2.6	2.1	0.3	6.2	鉄46
447	136	SB-18	"	B1b	2.5	1.3	0.15	1.8	鉄40、ヤリガンナ刃部?
448	138	SB-18	長四角形状鉄片	B2b-2	7.7	1	0.15~0.3	7.7	鉄41、(鋸歯片?)明瞭な段差有
449	139	SB-18	"	B2c-1	2.5	0.8	0.15	1.2	鉄41、若干湾曲する。
450	83	SB-18	"	B2c-3	4.2	1.6	0.15	4.2	鉄30、刃部?
451	137	SB-18	"	B2b-3	4.8	1.1	0.15	2.7	鉄40
452	147	SB-18	"	B2c-3	4.7	1.3	0.2	5.6	鉄52、バタフライ形状
453	66	SB-18	"	B2c-4	5.5	1.6~2.5	0.15~0.3	13.4	鉄4
454	80	SB-18	棒状鉄片	D	2.7	0.4	0.3	1.2	鉄18
455	75	SB-18	"	"	2	0.45	0.55	1.5	鉄13
456	70	SB-18	"	"	2.3	0.4	0.3	1.6	鉄8
457	73	SB-18	"	"	2.5	0.35	0.35	2.1	鉄11
458	81	SB-18	"	"	3.6	0.4	0.4	3.3	鉄18
459	74	SB-18	"	"	3.7	0.5	0.4	2.7	鉄12
460	71	SB-18	二又状鉄片	E	2.6	2.9	0.15	3.5	鉄9、強く湾曲する
461	142	SB-18	"	"	3.4	3.4	0.2	6	鉄43
462	86	SB-18	二又状鉄片	E	4.3	3.5	0.1	5.7	鉄37
463	72	SB-18	"	"	3.1	3.9	0.2	9.7	鉄10、NYU-13
464	144	SB-18	不整形鉄片	Fb	3.3	0.8	0.1	1.5	鉄1
465	131	SB-18	"	Fb-3	3.8	2.5		6.1	鉄22
466	79	SB-18	"	Fa-3	3.6	2.1	0.15	4	鉄17、明瞭な切断痕、NYU-14
467	145	SB-18	"	Fa-4	3.2	1.3	0.4	6.4	鉄50
468	117	SB-18	鎌		1.9	1.2	0.1	1	Q、両脚部欠損
469	116	SB-18	"		2.2	1.3	0.15	1.1	Q、両脚部欠損
470	102	SB-18	"		5.2	2.9	0.2	8.7	B、右側脚部に工具痕?
471	285	SB-18	袋状鉄斧		2.3	2.4	0.3	23.3	V
472	279	SB-18	鑿状鉄器		3.3	1.2	0.85		
473	122	SB-18	袋状鉄斧		5.3	3	0.3	23.2	鉄59、ソケット部を若干しぼる、NYU-19
474	282	SB-18	鎌		3.3	2.3	0.3	11.1	O、Z
475	106	SB-18	鑿状鉄器		4.6	3.4	0.4	42.4	O、Z (①、②)
476	110	SB-18	刀子状鉄器		4.5	1.4	1	7.2	G、バタフライ形状?
477	276	SB-18	鎌(左)		5.7	1.8			
478	283	SB-18	鎌(右)		7.7	2.4		45.1	M、N 別個体の鎌2本サビ着
479	275	SB-18	鑄造鉄斧		8.4	2.7			
480	114	SB-18	板状不明鉄器片		3.4	6.8	1.1	68	鉄46、刃部破片
481	284	SB-18	"		1.8	7.1	0.8	20.1	O、Z (③)、刃部破片
482	286	SB-18	"		1.7	7.4	0.6	17	鉄32、刃部破片
483	278	SB-18	"		9.1	1.2~3.8	0.2	22.5	P、ハンマー形状。一部湾曲
484	277	SB-18	"		8.4	1~1.8	0.3~0.5	17.4	R、右端部に切断痕
485	128	SB-18	"		5.3	3.1	0.8	21.2	W、わずかに湾曲する
486	281	SB-18	"		7.8	2.9	0.55	28.9	鉄55、短辺側が若干薄い、NYU-18
					5.1	7.9	0.5	66.5	鉄48、素材片?、NYU-15
					4.7	3.4	0.3	13.3	b
					5.4	2.3	0.6	25.9	H

第6表 西山ノ上遺跡 1次調査 竪穴式建物等 出土鉄器観察表 その3

押図	実測番号	出土遺構	種類	分類	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
487	113	SB-18	三角形鉄片	A1a	1.3	2.3		1.4	M, N
488	111	SB-18	長三角形鉄片	A2a-1	2.4	0.5	0.15	0.6	M, N
489	127	SB-18	"	A2c-3	3.7	1.2	0.15	3.5	O, Z
490	124	SB-18	長四角形鉄片	B2a-1	2	0.8	0.15	1.1	O, Z
491	125	SB-18	"	"	2.7	0.4	0.15	0.7	O, Z
492	126	SB-18	"	"	1.5	0.45	0.15	0.4	O, Z
493	112	SB-18	"	"	2.2	0.55	0.15	0.8	M, N
494	115	SB-18	四角形鉄片	B1a	3.1	2.1	0.25	7.5	Q、下部に工具痕
495	103	SB-18	"	B1c	2.4	1.8	0.3	4.7	B
496	101	SB-18	長四角形鉄片	B2a-4	4.3	1.2	0.45	7.7	A
497	119	SB-18	"	B2b-2	4.8	1.3		7.5	U、一部に段差有
498	104	SB-18	"	B2a-3	4.4	2.3	0.25	9	C、上部に工具痕?
499	108	SB-18	"	B2b-5	3.1	1.1	0.15	2	J、左端部に屈折部有
500	105	SB-18	台形状鉄片	B3a	3.6	2.2	0.4	7.8	F
501	118	SB-18	不整形鉄片	Fc	4.3	2.6	0.2	10.4	S、明瞭な切断痕
502	121	SB-18	"	"	6	3.4	0.2	17.7	a
503	109	SB-18	"	"	4.5	1.9	0.2	6.6	K
504	280	SB-18	"	Fd	3.7	3.9	0.45	16.1	E、直径3.7cmの円盤状
505	120	SB-18	棒状鉄片	D	3.1	0.35	0.2	1	X
506	170	SB-21	鏃		2.6	2	0.15	2.1	鉄92、先端・右脚部欠損
507	292	SB-21	ヤリガンナ		2.9	0.9	0.2	1.6	鉄84-b、基部?
508	332	SB-21	"		4.4	1.1	0.1	4.9	鉄112
509	262	SB-21	"		3.8	0.9	0.1	2.9	鉄49、端部に折り返しのふくらみ有
510	349	SB-21	"		4.8	1.1	0.1	2.6	鉄30
511	333	SB-21	長方形鉄片		5.2	1.1	0.3	4.1	鉄113、上端部に折り返しのふくらみ有
512	327	SB-21	不明鉄器		3.3	2	0.2	5.4	鉄106、刃部破片?
513	346	SB-21	不明鉄器		4.9	2.6	0.2	11.3	鉄26、刃部破片?
514	293	SB-21	鏃		2.9	1.1	0.8	6.5	鉄91
515	294	SB-21	板状不明鉄器片		7	2.1	0.8	36.9	鉄110、NYU-22
516	289	SB-21	"		5.7	2	0.5~0.8	15.7	鉄55、上下端部が若干薄い
517	221	SB-21	"		11	2.6~4.6	0.25	50.9	鉄77、素材片?
518	192	SB-21	棒状不明鉄器片		6.1	0.8	0.3	5.7	鉄59
519	287	SB-21	"		4.1	1.1	0.55	4.9	鉄20、NYU-20
520	288	SB-21	"		4	1.1	1	10.2	鉄48、左端部に打撃状段差、NYU-21
521	336	SB-21	三角形鉄片	A1a	0.8	1.7	0.1	0.4	鉄118
522	326	SB-21	"	"	1.9	2.8	0.15	3.4	鉄105
523	195	SB-21	"	"	2.4	0.8	0.1	0.7	鉄60
524	188	SB-21	長三角形鉄片	A2a-1	2.4	0.8	0.1	0.6	鉄52
525	365	SB-21	"	"	3.1	1.1	0.1	2.7	鉄70
526	338	SB-21	"	"	4	0.8	0.1	2.4	鉄120
527	251	SB-21	"	"	3.5	0.7	0.1	1.1	鉄4
528	176	SB-21	"	"	2.1	0.55	0.2	0.9	鉄121
529	358	SB-21	"	"	2.2	0.75	0.1	0.9	鉄61
530	179	SB-21	"	A2a-3	3.2	1.3	0.2	3.1	鉄11
531	315	SB-21	"	A2b-1	3.3	1.2	0.1	2.2	鉄83、三日月形状
532	185	SB-21	"	"	2.7	1	0.2	1	鉄18、三日月形状
533	360	SB-21	"	"	2.4	0.6	0.1	0.6	鉄63、三日月形状
534	254	SB-21	"	"	2.7	0.6		0.7	鉄7、三日月形状
535	187	SB-21	"	"	1.8	0.45	0.1	0.3	鉄51、三日月形状
536	180	SB-21	"	A2c-1	3.8	0.5~1.3	0.15	1.7	鉄12
537	345	SB-21	四角形鉄片	B1a	1.6	1.5	0.1	2.6	鉄28
538	182	SB-21	"	"	2.7	1.9	0.2	4.3	鉄13
539	173	SB-21	"	"	2.2	1.4	0.2	2.4	鉄95、若干湾曲
540	331	SB-21	"	"	2.4	1.4	0.1	4.2	鉄111

第6表 西山ノ上遺跡 1次調査 竪穴式建物等 出土鉄器観察表 その4

採回	実測番号	出土遺構	種 類	分 類	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
541	337	SB-21	四角形状鉄片	B1d	2	1.6	0.15	2.4	鉄119
542	291	SB-21	"	"	3.9	2.7	0.5	14.4	鉄84-a、右下端が若干湾曲
543	323	SB-21	長四角形状鉄片	B2a-1	2.5	0.6~0.9	0.1	1	鉄101、バタフライ形状?
544	330	SB-21	"	"	2.5	0.65	0.1	1.4	鉄109
545	355	SB-21	"	"	2.6	0.6	0.1	0.9	鉄38
546	172	SB-21	"	"	2.7	0.65	0.15	1.2	鉄94
547	259	SB-21	"	"	3.2	0.75		2.1	鉄44
548	178	SB-21	"	"	2.8	0.6	0.15	1.1	鉄125
549	334	SB-21	"	"	1.8	0.65	0.1	0.9	鉄116
550	311	SB-21	"	"	2.2	0.6	0.1	1	鉄78
551	169	SB-21	"	"	1.9	0.6	0.15	1	鉄90
552	257	SB-21	"	"	2.6	0.6	0.1	1.2	鉄41
553	260	SB-21	"	"	2.6	0.7	0.1	1.1	鉄45
554	308	SB-21	"	"	3.7	0.6	0.1	2.7	鉄74
555	181	SB-21	"	"	1.7	0.85	0.15	0.9	鉄12
556	339	SB-21	"	"	1.6	1	0.1	1.7	鉄21
557	314	SB-21	"	B2a-2	3.3	0.9	0.25	5.4	鉄82
558	319	SB-21	"	"	5.8	1.1	0.25	10	鉄88
559	348	SB-21	"	B2a-3	2.4	1.4	1.1	1.5	鉄29
560	263	SB-21	"	"	2	1.2	1.1	1.5	鉄50
561	341	SB-21	"	B2b-1	2.6	1.7~1.3	1.1	2.3	鉄23
562	310	SB-21	"	"	2.7	0.9	1.1	3.4	鉄76
563	250	SB-21	"	B2c-3	3.3	1.3	0.2	4.6	鉄2
564	324	SB-21	"	B2d-5	4.5	1.2	0.1	5.1	鉄103、右側辺部屈曲
565	184	SB-21	台形状鉄片	B3	4	1.8		12.2	鉄17
566	363	SB-21	"	"	1.6	1.9	0.1	2	鉄68
567	356	SB-21	"	"	1.9	2.2	0.1	2.6	鉄40
568	255	SB-21	"	"	1.7	1.8	0.1	1.6	鉄8
569	335	SB-21	"	"	1.7	2.2	0.1	2.2	鉄117
570	252	SB-21	"	"	1.9	2		2.4	鉄5
571	320	SB-21	針状鉄片	Cd	3.5	0.2	0.1	1	鉄89
572	347	SB-21	"	"	2.3	0.15	0.15	0.2	鉄29
573	364	SB-21	"	"	1.4	0.2	0.1	0.2	鉄69
574	194	SB-21	棒状鉄片	Da	2.1	0.3	0.2	0.5	鉄72
575	191	SB-21	"	"	3	0.5	0.35	2	鉄54
576	318	SB-21	"	"	4.2	0.45	0.4	4	鉄87、先端部鋭利
577	175	SB-21	"	Db	1.9	0.5	0.4	1.9	鉄97、若干左右に屈曲
578	189	SB-21	二又状鉄片	E	1.8	2	0.15	1.8	鉄52
579	183	SB-21	"	"	2.4	1.9	0.15	1.5	鉄15、わずかに湾曲
580	329	SB-21	不整形鉄片	Fa	2	1.5	0.1	1.3	鉄108
581	171	SB-21	"	"	3.3	1.8	0.15	2.3	鉄93
582	186	SB-21	"	"	2.4	2.5	0.2	6	鉄19
583	290	SB-21	"	Fb	3.1	2.4	0.5	13.7	鉄57
584	309	SB-21	"	"	3.7	1.2	0.1	3.4	鉄75
585	313	SB-21	"	"	3	1.7	0.1	4.1	鉄81
586	344	SB-21	"	Fc	2.6	2	0.1	2.2	鉄27
587	322	SB-21	"	"	2.8	1.5	0.1	2.4	鉄100
588	317	SB-21	"	Fd	2.7	1.9	0.1	1.5	鉄86
589	312	SB-21	"	"	4.6	2.2	0.1	6.3	鉄79

第6表 西山ノ上遺跡 1次調査 竪穴式建物等 出土鉄器観察表 その5

〔 2 次調査 〕

3 【2次調査】

概要

1次調査同様、2次調査区内は面積が広く、弥生時代前期（不確定ではあるが縄文時代も含まれるか）から鎌倉時代にいたる遺構が検出された。検出された遺構は竪穴式住居、掘立柱建物、環濠、周溝状遺構、土塹（土塹含む）、甕棺墓、溝、落とし穴状遺構の他、井戸状の遺構、近代の排水溝、等がある。

特記すべきは、調査区西側で墓群を形成している土塹墓を中心とした列状墓の検出と、調査区のほぼ中央にある1町四方ほどもある区画溝と、それに関連性を持った遺構群の検出である。前者は弥生時代前期から中期にかけて形成された墓域の1つと考えられ、室岡遺跡群の中心的存在である亀ノ甲遺跡と形成時期が重なる事から、その関わりが注目される。また、その後形成される環濠や竪穴式住居等の弥生時代後期に属する遺構群の存在は、弥生期を通じた室岡遺跡群内の変遷を掴む格好の資料となった。後者は、とくく弥生時代に注意が惹かれがちな室岡遺跡群内においても中世以降の遺跡が内包されている1つの証明になった事に加え、平安時代末期から鎌倉時代前半にかけて、室岡台地上には輸入陶磁器等を一定量保有出来る集団が存在し得た状況が看取出来、注目に値する。

1) 遺構と出土遺物

(1) 竪穴式住居 (SB)

3号竪穴式住居 (SB-03) 〈第103図〉

調査区北側で検出した隅丸長方形の竪穴式住居である。規模は $3.34\text{m} \times 2.9\text{m}$ 、深さ 0.2m を測る。主柱は2本。住居中央には地炉が認められ、北西隅には土塹が付設される。出土遺物は弥生式土器の甕、壺形土器、高杯が出土した。弥生時代後期中頃。

7号竪穴式建物 (SB-07) 〈第104図〉

調査区北側で検出した横長長方形の竪穴式住居である。SB-05に切られる。規模は $4.3\text{m} \times 2.74\text{m}$ 、深さ 0.4m を測る。主柱は2本で、柱間が 1.1m と非常に狭い。住居中央には地炉がなく、北西隅には土塹、東壁中央には屋内土塹が付設される。中央炉がなく、出土遺物も極めて少ない事から通常の住居とは考えにくく、居住以外の用途に用いられた建物と判断した。出土遺物は弥生式土器の細片が出土した。

8号竪穴式住居 (SB-08) 〈第105図〉

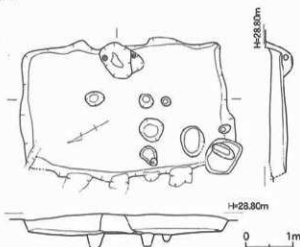
調査区北側で検出した横長長方形の竪穴式住居である。SB-13を切っている。規模は $5.24\text{m} \times a \times 4.5\text{m}$ 、深さ 0.25m を測る。主柱は2本。住居中央には地炉の痕跡が認められるが、その殆どを削平されている。東壁中央には屋内土塹が付設される。南側主柱穴周辺には多量の焼土や炭化物が散在しており、火災により焼け落ちた焼失住居であると考えられる。出土遺物は弥生式土器の甕、壺、鉢形土器、石包丁が出土した。

9号竪穴式住居 (SB-09) 〈第106図〉

調査区北側で検出した隅丸方形の竪穴式住居である。SD-01、SB-09に切られている。規模は $7.56\text{m} \times 6.2\text{m}$ 、深さ 0.33m を測る。現代建物の基礎によって荒らされているが、主柱は4本または6本と考えられる。中央炉は住居中央からやや東寄りに位置しており、断面楕円鉢状、平面楕円形状の掘り方の中に3基の被熱面（西側被熱面は暗赤色硬化面）をもつな



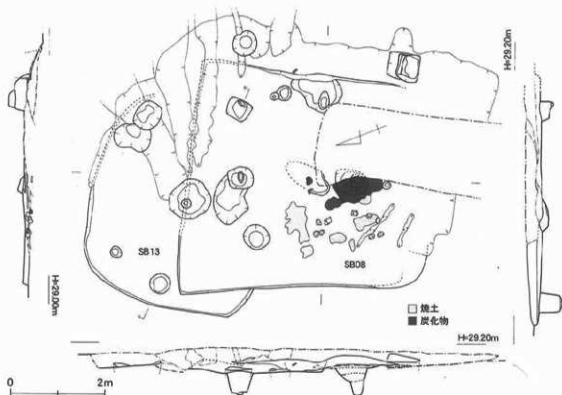
第103図 3号竪穴式住居実測図
[1/80]



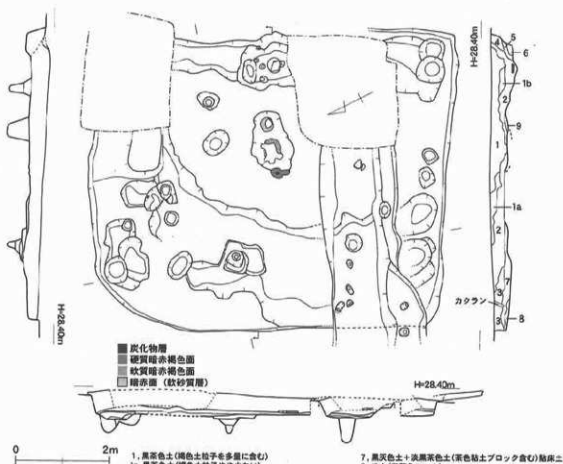
第104図 7号竪穴式建物実測図 [1/80]



第102図 西山ノ上遺跡 2次調査 遺構配置図 [1/500]



第105図 8号・13号竪穴式住居実測図 [1/80]

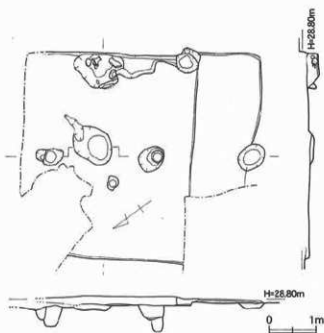


1. 黒茶色土(褐色土粒乎を多量に含む)
 1a. 黒茶色土(褐色土粒乎やや少ない)
 1b. 黒茶色土(若干、黒色気味)
 2. 淡黒茶色土(黄茶色土ブロック含む、若干黄灰色気味)
 3. 淡黒茶色土
 4. 黄茶色土(若干、灰色気味)
 5. 黒色粘質土
 6. 黒灰色土+黄茶色粘質土
7. 黒灰色土+淡黒茶色土(茶色粘土ブロック含む)粘床土
 8. 赤山(黄灰色ローム)
 9. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 10. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 11. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 12. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 13. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 14. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 15. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 16. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 17. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 18. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 19. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 20. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 21. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 22. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 23. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 24. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 25. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 26. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 27. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 28. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 29. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 30. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 31. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 32. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 33. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 34. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 35. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 36. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 37. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 38. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 39. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 40. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 41. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 42. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 43. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 44. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 45. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 46. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 47. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 48. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 49. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 50. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 51. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 52. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 53. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 54. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 55. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 56. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 57. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 58. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 59. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 60. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 61. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 62. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 63. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 64. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 65. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 66. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 67. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 68. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 69. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 70. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 71. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 72. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 73. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 74. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 75. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 76. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 77. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 78. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 79. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)
 80. 赤黒色土(伊内様土→炭化物含む)

第106図 9号竪穴式住居実測図 [1/80]



第107図 10号竪穴式住居実測図 [1/80]



第108図 11号竪穴式住居実測図 [1/80]

どの特徴を有す。主柱列と中央炉の軸線は住居本体の短軸線とは異なっているが、両者はほぼ同一方向である。東壁中央には屋内土壌、北壁の一部にはベッド状遺構が付設されている。出土遺物は弥生式土器の甕、壺形土器、丹塗土器破片の他、中央炉埋土より青紺色のガラス小玉が27個出土した。

10号竪穴式住居 (SB-10) <第107図>

調査区中央南側で検出した横長長方形の竪穴式住居である。規模は4.76m×3.2m、深さ0.58mを測る。主柱は2本。北東壁にベッド状遺構を持ち、その隅には円形の土壌を有す。ベッド状遺構は段差と壁溝状の溝によりその境を分かたれているが、住居中央付近で途絶え、不整形な土壌に連結している。住居中央に地炉があり、炉とベッド状遺構周辺には黄茶色硬化面が広がる。南東壁中央には屋内土壌が付設される。出土遺物は弥生式土器のミニチュア鉢形土器が出土した。

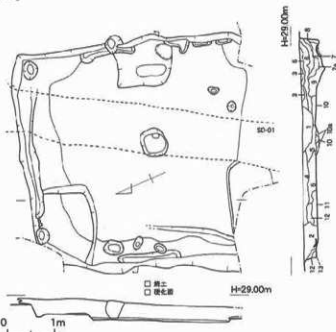
11号竪穴式住居 (SB-11) <第108図>

調査区東側で検出した横長長方形の竪穴式住居である。規模は4.6m×4.36m、深さ0.22mを測る。主柱は2本。南西壁にベッド状遺構があり、段差により境としている。住居中央にやや浅い地炉があり、南東壁には屋内土壌が付設される。北東壁のベッド状遺構の有無については掘乱著しく、不明。

出土遺物は弥生式土器の甕、鉢形土器、屋内土壌より高坏が出土した。

12号竪穴式住居 (SB-12) <第109図>

調査区東側で検出した横長長方形の竪穴式住居である。SD-01に切られる。規模は5.36m×4.94m、深さ0.36mを測る。主柱は2本。西壁の南北隅にベッド状遺構があり、北側のベッドは一部板状痕跡により切り込まれている。板状痕跡は遺存する3壁全てに見られ、当時は入り口を除き全周していたものと考えられる。住居中央には地炉があり、一部焼土を遺存している。主柱穴は炉を挟んで南北にあると思われるが、南側柱穴は時



1. 淡黄灰色土(暗褐色土壌) SD-01埋土
2. 黄灰色土
3. 淡黄灰色土
4. 黄灰色土+茶褐色土ブロック
5. 黄灰色土+茶褐色土ブロック
6. 黄灰色土+茶褐色土ブロック(少量・黄灰色土)
7. 淡黄灰色土+茶褐色土ブロック
- 7a. 同質・同色(若干暗褐色土見舞)
8. 黄灰色土
9. 淡黄灰色土(散在の茶褐色土と硬化面)
10. 黄灰色土
11. 黄灰色土(若干暗褐色土見舞)
12. 淡黄灰色土(少量の茶褐色土見舞)
13. 淡黄灰色土
14. 淡黄灰色土

第109図 12号竪穴式住居実測図 [1/80]

問的制約から掘削出来ず、北側柱穴は筆者の力量不足により検出出来なかった。ベッド状遺構を含む住居床面のほぼ全域に黄茶色硬化面が広がっており、SD-01はこの硬化面を切り込んではいない。住居南壁の状況については攪乱著しく、不明。出土遺物は弥生式土器の壺形土器、屋内土壌より大型の台石が底面に貼り付く状態で出土した。

13号竪穴式住居 (SB-13) 〈第105図〉

調査区北側で検出した隅丸長方形を呈すやや胴張りの竪穴式住居である。SB-08に切られている。規模は4.74m + a × 4.0m + a、深さ0.32mを測る。主柱は2本。住居中央には直径90cmの円形地炉があり、炉を挟んだ東西に主柱穴がある。住居全体の半分以上を攪乱されており、詳細は不明。出土遺物は弥生式土器の甕、壺、鉢形土器、支脚、ミニチュア土器が出土した。

14号竪穴式住居 (SB-14)

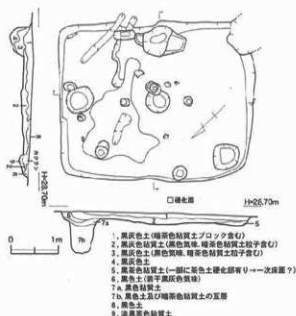
〈第110図〉

調査区北側で検出した長方形の竪穴式住居である。SB-15を切り、SB-18の北東ビットに切られている。規模は4.16m × 3.38m、深さ0.23mを測る。主柱は2本。住居中央には直径50cmの小型円形地炉があり、炉を挟んだ南北に直径20cmの主柱穴がある。掘り方は確認出来なかった。住居北側の一部には黄茶色硬化面が広がる。北壁中央、南西隅に土壇があり、東壁中央には屋内土壌が付設される。出土遺物は弥生式土器の甕、鉢形土器、器台が出土した。

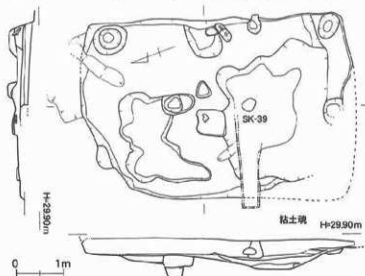
15号竪穴式住居 (SB-15)

〈第111図〉

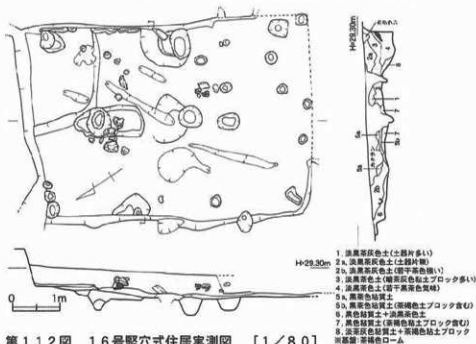
調査区北側で検出した横長長方形の竪穴式住居である。SK-39を切り、SB-14の北東隅に切られている。規模は5.8m × 3.76m、深さ0.36mを測る。主柱は2本。住居中央に地炉の痕跡は見当たらず、炉を挟んだ南北に予想された主柱穴も北側分のみの検出にとどまった。ただ、南側柱穴予想位置に白色粘土の塊があり、この最下レベルと北側柱穴の検出面が同レベルであることから、南側の主柱は直置きであった可能性もある。途中、不整形



第110図 14号竪穴式住居実測図 [1/80]



第111図 15号竪穴式住居実測図 [1/80]



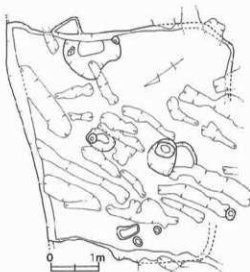
第112図 16号竪穴式住居実測図 [1/80]

のSK-39を検出した為、東西方向にトレンチを設定し前後関係の把握に努めた。出土遺物は弥生式土器の甕、壺、鉢形土器、高坏、器台、支脚、ミニチュア土器、線刻土器片等、多種多様な遺物が出土した。

16号竪穴式住居 (SB-16) <第112図>

調査区北端で検出した横長長方形の竪穴式住居である。住居北壁は調査区外に出ている。規模は5.9m $\times$ 4.1m、深さ0.46mを測る。主柱は2本。住居中央に地炉と思われる痕跡があり、炉を挟んだ南北に主柱穴が穿たれる。北東隅にはベッド状遺構と板状痕跡が確認出来るが、これ以外では見当たらない。東壁中央付近に付設された屋内土壌には、底面に向かって傾く大型の片岩があった。屋内土壌との間違いが興味深い。

出土遺物は弥生式土器の甕、壺、鉢形土器、高坏、器台、支脚、ミニチュア土器等、多種多様な遺物が投棄された状態で埋土上層から出土した。



第113図 17号竪穴式住居実測図

[1/80]

17号竪穴式住居 (SB-17) <第113図>

調査区北端で検出した横長長方形の竪穴式住居である。住居北壁は調査区外に出ている。規模は4.8m $\times$ 4.34m、深さ0.26mを測る。主柱は2本か。住居中央に地炉と思われる痕跡があるが、焼土等は確認出来なかった。炉を挟んで南北に主柱穴が穿たれたものと思われるが、北柱穴は調査区外に出ている。東壁には屋内土壌が付設される。攪乱特に著しく、ベッド状遺構等の他遺構は全く確認出来なかった。特記事項として、平面形がややバタフライ形状を呈している点が挙げられる。出土遺物は弥生式土器の甕、壺、鉢形土器、高坏が出土した。

遺構名	平面プラン	長軸方位	長軸長(m)	短軸長(m)	出土遺物	備考
SB-03	隅丸長方形	N-25°E	3.34	2.9	弥生式土器	
SB-07	横長長方形	N-28°E	4.3	2.74		
SB-08	横長長方形	N-22°E	5.24 $\pm$ α	4.5	弥生式土器	
SB-09	隅丸方形	N-34°E	7.56	6.2	弥生式土器(丹塗土器含)	
SB-10	横長長方形	N-58°E	4.76	3.2	ミニチュア土器	
SB-11	横長長方形	N-36°E	4.6 $\pm$ α	4.36	弥生式土器	
SB-12	横長長方形	N-67°W	5.36 $\pm$ α	4.94	弥生式土器	
SB-13	隅丸長方形	N-44°W	4.74 $\pm$ α	4 $\pm$ α	弥生式土器、ミニチュア土器	
SB-14	長方形	N-44°E	4.16	3.38	弥生式土器	
SB-15	横長長方形	N-19°E	5.8	3.76	弥生式土器、ミニチュア土器	
SB-16	横長長方形	N-33°E	5.9 $\pm$ α	4.1	弥生式土器、ミニチュア土器	
SB-17	横長長方形	N-42°E	4.8 $\pm$ α	4.34	弥生式土器	

第7表 西山ノ上遺跡 2次調査 竪穴式住居一覧表

竪穴式住居出土遺物

土器 <第114図～118図>

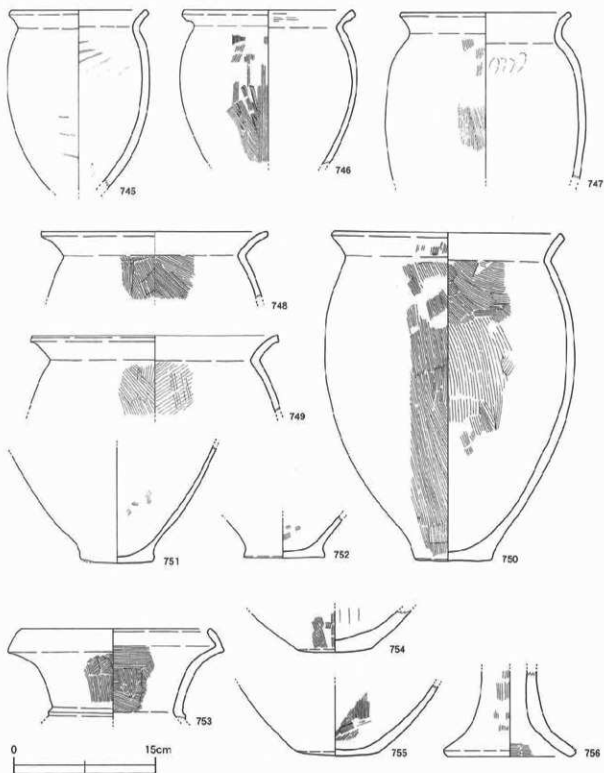
745～756はSB-03出土土器で、745～752は甕形土器。口縁部はあまり直立せず、内面の稜線も明瞭ではない。底部のくびれは明瞭に残っている。753～755は壺形土器で、753の頸部は短い。755の底部はやや盛り上がりを見せる。756は器台脚部。

757～766はSB-08出土土器で、757～761は甕形土器。口縁部は直立気味になり、胴部の膨らみがなくなり長胴になる。底部も一部レンズ底気味になる。762～765は壺形土器で、762～764の複合口縁壺はそれぞれが時期差を持つ。765は無頸壺。766は小型の鉢形土器か。

767～781はSB-09出土土器で、767～769の複合口縁壺は若干中期の名残りを見せる。780・781は甕形土器。

782はSB-10から出土したミニチュアの鉢形土器。

783～790はSB-11出土土器で、783・784は甕形土器。785～788は小型の鉢形土器



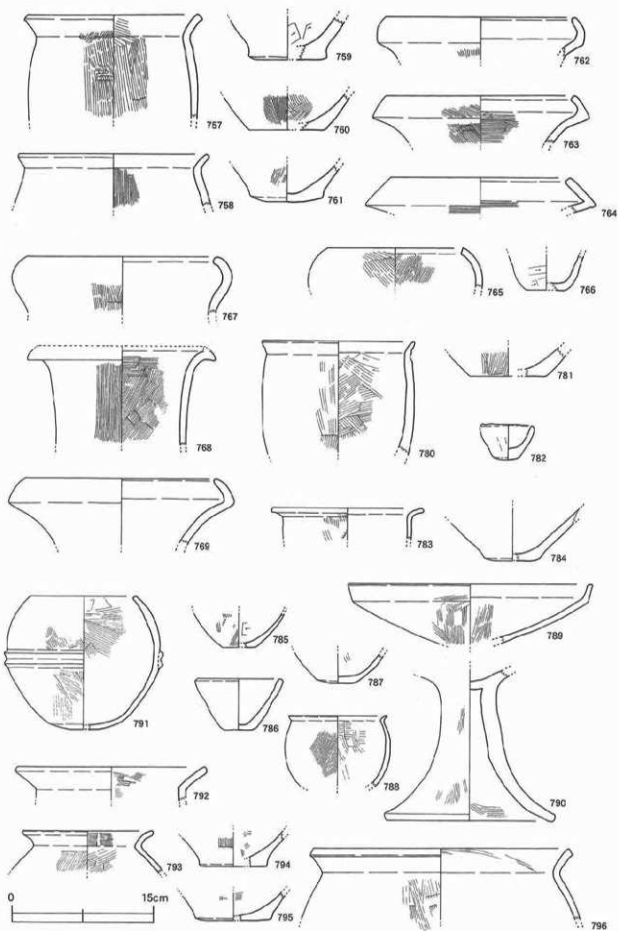
第114図 3号竪穴式住居出土土器実測図【1/4】

で、①体部が直線的に外方に延びるもの②体部が内湾しつつ外方に延びるもの③内湾した体部から口縁端部のみ外方へ屈曲させたもの、の3種類がある。使用目的の差であろうか。789・790は高杯。同一個体かと思われる。

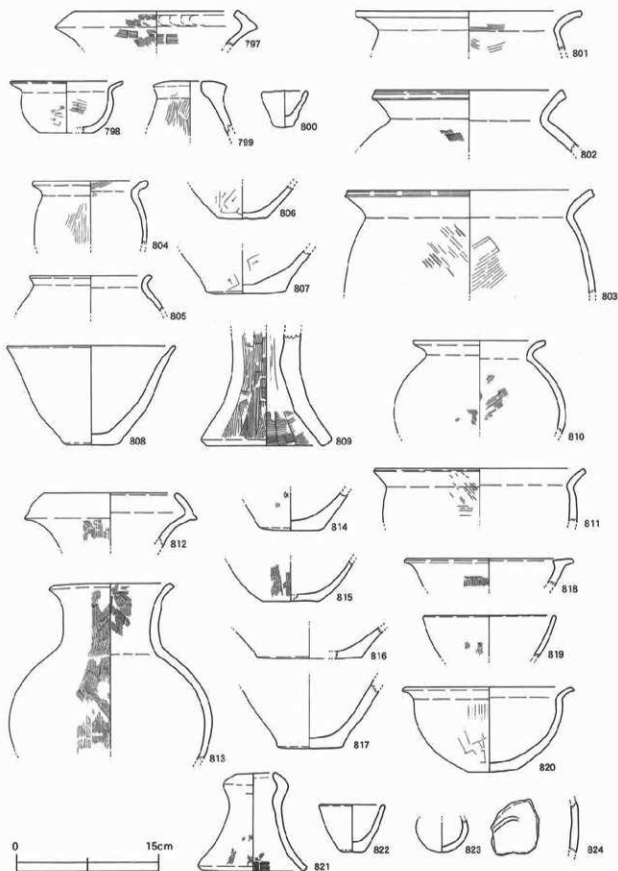
791はSB-12から出土した無頸壺で、胴部最大径の直下に2条の突帯が付く。

792～800はSB-13出土土器で、792～796は甕形土器。口縁端部に丸みを持たせるものと、上端面を平らに仕上げるものの2種類がある。底部は明瞭な平底。797は複合口縁壺。798は鉢形土器。799は支脚で、800はミニチュアの鉢形土器。

801～809はSB-14出土土器で、801～807は甕形土器。802・803は口縁端部を僅か



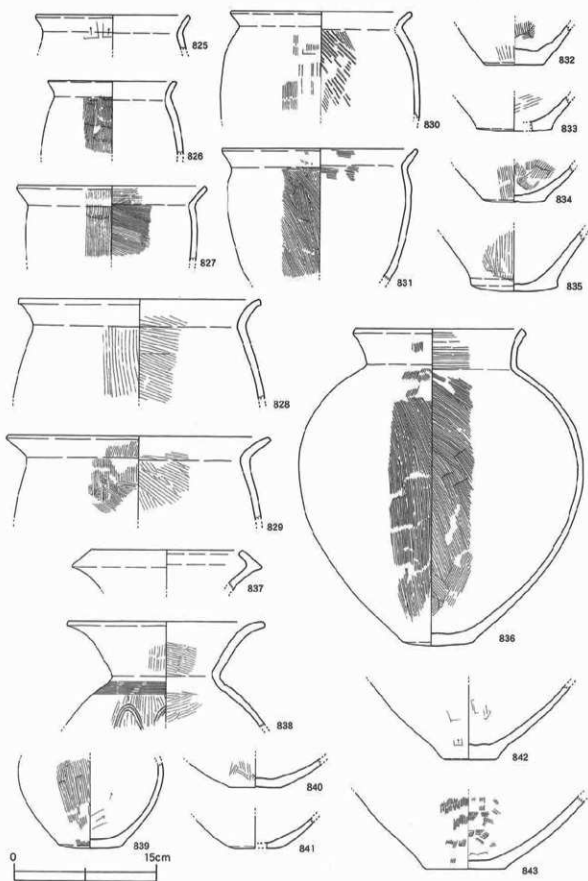
第115图 8号~13号竖穴式住居出土土器实测图 [1/4]



第116図 13号～15号竪穴式住居出土土器実測図 [1/4]

につまみ出す。804・805は小型の甕形土器。6・807は明瞭な平底。808は鉢形土器で、胴部は直線的に延びる。809は器台脚部。口縁部が強く屈曲するタイプ。

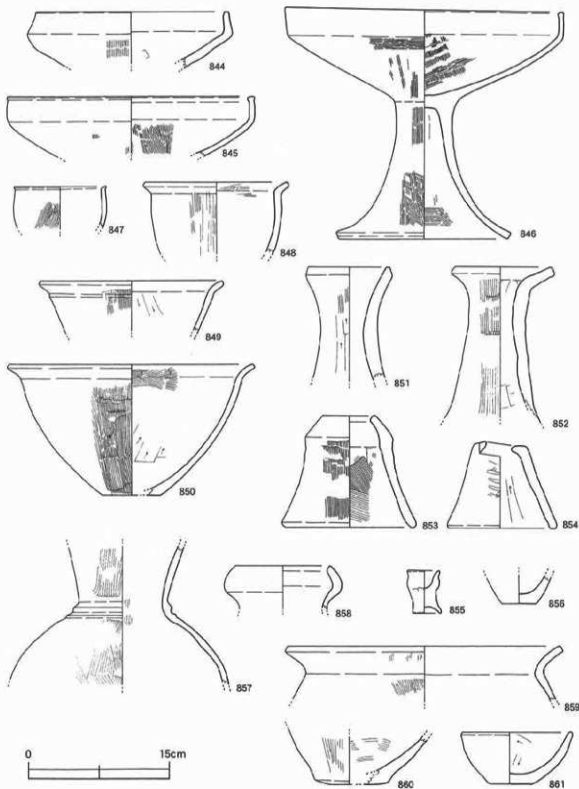
810～824はSB-15出土土器で、810・812・813は壺形土器。810の口縁部は極端に屈曲する。813は長頸壺。811・814～817は甕形土器。811の口縁端部は若干つまみ気味。底



第117図 16号竪穴式住居出土土器実測図【1/4】

部は全て平底で、くびれも明瞭。818～820は鉢形土器。818は口縁部が觚先状になる中期の土器。821は支脚。822・823は鉢形のミニチュア土器。824の土器片には2本の線刻が入っていた。

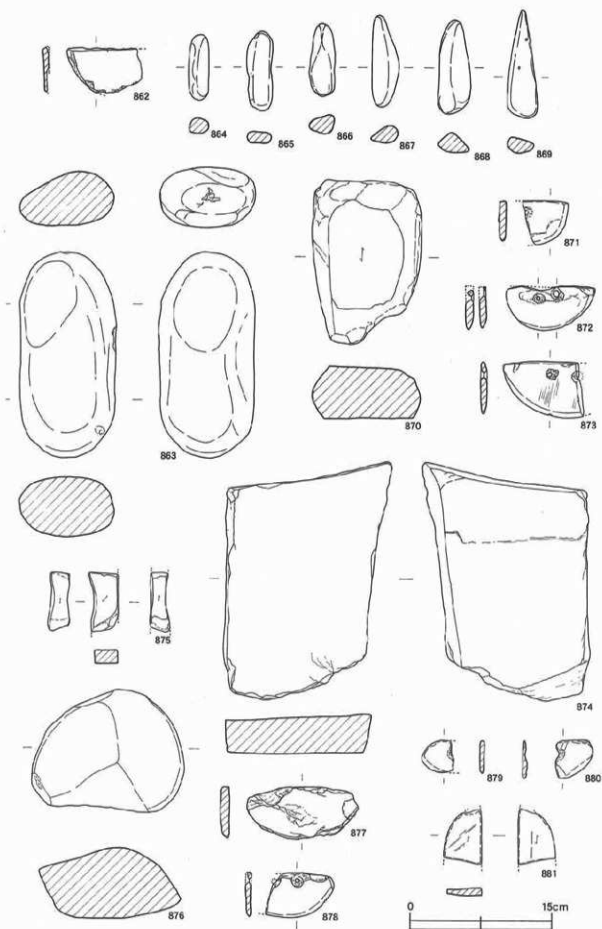
825～856はSB-16出土土器で、825～835は甕形土器。口縁端部が丸みをもつものと平坦



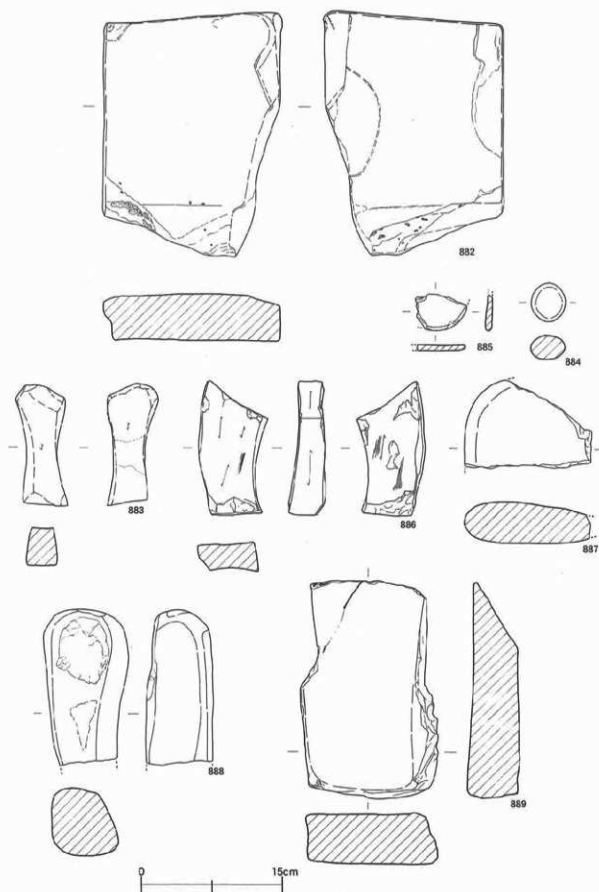
第118図 16・17号竪穴式住居出土土器実測図【1/4】

に仕上げるものがある。小型品の口縁部はやや直立気味。底部は全体的に平底だが、一部レンズ状を呈するものがある。836～843は壺形土器で、836・838などはやや新期の様相を呈しているが、口縁端部の刻目や内面のヘラ削りなどは見られない。844～846は大型の高坏で、若干内湾しながら外方に延びた受け部に直立した口縁部がつく。845・846は端部を僅かにつまみ出す。脚部はなだらかに外反し下方へ延びる。847～850は鉢形土器。851・852は器台で、852は口縁部が強く屈曲し、極端に細長く安定感に欠ける。853・854は支脚で、854の外面調整にタタキが出現する。内面は縦方向のナデ。855は器台形の手づくね土器。856はミニチュアの鉢形土器か。

857～861はSB-17出土土器で、857・858は壺形土器。857は複合口縁壺の頸部付近の破



第119图 3·7~9·12·15号竖穴式住居(建物)出土石器实测图[1/4]



第120圖 15号~17号竪穴式住居出土石器実測図【1/4】

片で、頸部に2条の突帯が貼られている。859・860は寛形土器で、底部はややレンズ底状。861は鉢形土器。

石器 (第119図・120図)

862はSB-03出土石器で、石包丁未製品か。片岩製。

863はSB-07出土石器で、4面の平滑面と1面の打撃痕跡を残す面がある。

864~870はSB-08出土石器で、864~869は1箇所から集中して出土した棒状の石材で用途は不明。祭器の一種か。870は砂岩製の砥石で、3面の使用である。

871~876はSB-09出土石器で、871は石包丁未製品。872・873は石包丁製品。いずれも片岩製。874・875は砥石。874は雲母片岩製の大型品で、4面に使用痕がある。875は泥岩製(淡黄緑色)の小型品で、下端部以外の5面に使用痕がある。876の一部に擦痕があり、すり石として使用されたものか。

877・878はSB-12出土石器で、片岩製の石包丁。877は未製品。

879~883はSB-15出土石器。879・880は突孔を試みた痕跡があるが用途は不明。石包丁に似た形状を成すが、周辺部に未製品のような荒さは残っていない。881~883は砥石で、881は泥岩製の小型品。4面の使用がある。882は雲母片岩製の大型品。一部に鉄錆が付着しており、鉄器の研摩に使用したものだろう。3面の使用がある。883は砂岩製で、両端部以外は全面使用。

884~888はSB-16出土石器で、884は用途不明の円礫。全体を研摩している。885は緑泥片岩製、886は泥岩製の砥石で、886は下端部以外の5面を使用している。887・888はすり石か。887は全面に平滑面を持つ。共に被熱した痕跡をもつ。

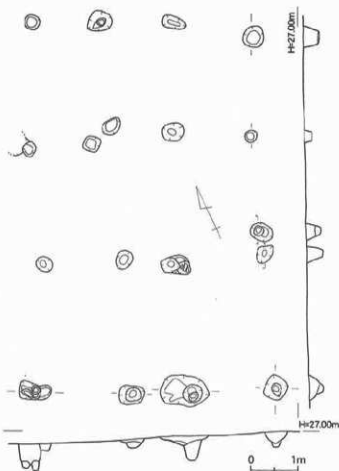
889はSB-17出土石器で、1面の使用痕をもつ大型の砥石。雲母片岩製で、上半部の一部に鉄錆が付着している。鉄器を研摩したものか。

(2) 掘立柱建物(SB)

1号掘立柱建物(SB-01)

(第121図)

調査区北西端附近で検出した16本柱の掘立柱建物である。長軸方位をN-22°-Eに取る3間×3間の総柱建物である。柱穴内から出土遺物が殆ど無い為、建築時期の決定根拠は多少曖昧であるが、SD-01と長軸方位がほぼ一致する事から、13世紀前半前後の建築であると考えたい。規模は7.2m×4.7m~5.06m、床面



第121図 1号掘立柱建物実測図 [1/80]

- 1, 淡黄褐色土
- 2, 暗茶色土+暗灰色土
- 3, 黒色土
- 4, 黒灰色+暗茶色土ブロック

- 1, 黒灰色土+暗茶色土ブロック
- 2, 暗茶色土
- 3, 暗茶色土 (一部に暗色土ブロック)
- 4, 暗茶色土 (若干粘り性)
- 5, 暗茶色土+黒色土
- 6, 1層と粘り性土 (若干粘り性)
- 7, 淡黄褐色土
- 8, 淡黄褐色土+暗茶色土
- 9, 黒灰色土
- 10, 黒色土

第122図 2号掘立柱建物実測図 [1/80]

積 35.1 m^3 を測る。柱穴堀方プランは円形で、柱穴規模は小さい。柱痕跡は判然としなかった。少なくとも、2回以上の建て替えを行っている。柱穴堀方より甕形土器が出土したが、細片の為図示していない。

2号掘立柱建物 (SB-02) 〈第122図〉

調査区北側で検出した6本柱の掘立柱建物である。長軸方位を $N-81^{\circ}-W$ に取る1間 $\times$ 2間の側柱建物である。西緩斜面に対し、直角を取る。規模は $4.0\text{ m}\times 2.72\text{ m}\sim 2.86\text{ m}$ 、床面積 11.4 m^2 を測る。柱穴堀方プランは隅丸方形で、一辺が 70 cm 程の規模をもつ。柱穴の一部には内面に水平方向の小穴が穿たれており、主柱を立てる際の痕跡と思われる。これにより、側柱は建物の外側から柱穴に差し込み立てたものと想定出来る。柱痕跡は明瞭に遺存していた。出土遺物は弥生式土器の甕形土器が出土している。

5号掘立柱建物 (SB-05)

〈第123図〉

調査区北側で検出した4本柱の掘立柱建物である。北東柱穴がSB-18に切られるか。長軸方位を $N-25^{\circ}-W$ に取る1間 $\times$ 1間の建物である。西緩斜面に対し、やや斜角を取る。規模は $2.74\text{ m}\times 2.54\text{ m}$ 、床面積 7.0 m^2 を測る。南東の2柱穴には礎板の痕跡が見られた。柱痕跡は不明。出土遺物として弥生式土器の甕形土器が出土している。

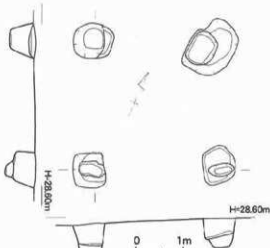
6号掘立柱建物 (SB-06)

〈第124図〉

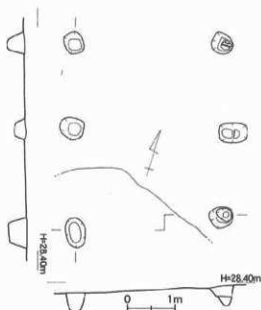
調査区北側で検出した6本柱の掘立柱建物である。南西柱穴がSB-09を切っている。長軸方位を $N-17^{\circ}-W$ に取る1間 $\times$ 2間の側柱建物である。西緩斜面に対し、側柱が平行となる。規模は $3.6\text{ m}\times 3.9\text{ m}\times 3.2\text{ m}$ 、床面積 12 m^2 を測る。柱穴堀方プランは円形、又は、隅丸方形で、一辺が $40\text{ cm}\sim 60\text{ cm}$ 程の規模をもつ。北北東の柱穴には礎板の痕跡が見られた。柱痕跡は不明。出土遺物は弥生式土器の甕形、鉢形土器が出土している。

18号掘立柱建物 (SB-18) 〈第125図〉

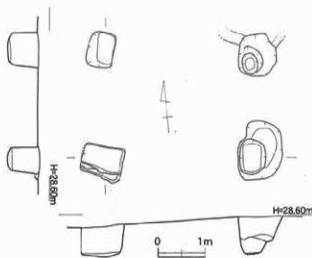
調査区北側で検出した4本柱の掘立柱建物である。南東柱穴がSB-05を切っているか。長軸方位を $N-84^{\circ}-W$ に取る1間 $\times$ 1間の建物である。西緩斜面に対し、やや斜角を取る。規模は $3.0\text{ m}\times 1.95\text{ m}$ 、床面積 5.9 m^2 を測る。4柱穴中、南西柱穴のみが他の3穴と異なり、掘り方の軸を東西方向にとる特異な形態を呈す。掘り方平面プランは長方形で、 $90\text{ cm}\times 60\text{ cm}$ の規模をもつ。柱痕跡は不明。出土遺物として弥生式土器の甕形土器が出土しているが、細片の為図示していない。



第123図 5号掘立柱建物実測図
[1/80]



第124図 6号掘立柱建物実測図
[1/80]



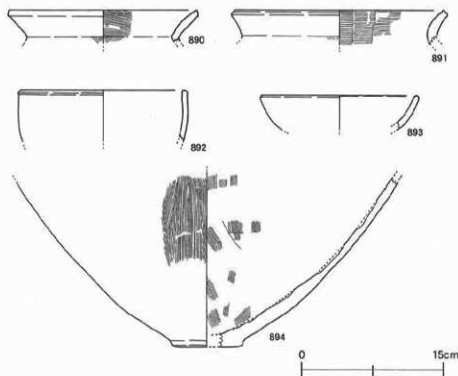
第125図 18号掘立柱建物実測図
[1/80]

掘立柱建物出土遺物

土器〈第126図〉

890・891はSB-05出土土器で、甕形土器の口縁部破片である。口縁部内面に横方向のハケ調整が施されている。

892～894はSB-06出土土器で、892は鉢形土器か。893は高坏の受け部で、外面に丹塗りが施される。894は大型の甕形土器底部の破片。底径が胴部に比して非常に小さい。



第126図 5・6号掘立柱建物出土土器実測図 [1/4]

(3) 土壌 (SK)

1号土壌 (SK-01)

〈第128図〉

調査区北側で検出した長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-9°-Eに取る。規模は1.8m×1.18m、深さ0.16mを測る。ほぼ平坦な底面を成す。出土遺物は確認出来なかった。

遺構名	規模(間)	長軸方位	長軸長(m)	短軸長(m)	床面積(m ²)	出土遺物	備考
SB-01	3×3	N-22°-E	7.2	4.7~5.06	35.1	弥生式土器細片	2回以上の建替え
SB-02	2×1	N-81°-W	4	2.72~2.86	11.4	弥生式土器	
SB-05	1×1	N-25°-W	2.74	2.54	7	弥生式土器	
SB-06	2×1	N-17°-W	3.6~3.9	3.2	12	弥生式土器細片	SB-09を切る
SB-18	1×1	N-84°-W	3	1.96	5.9		

第8表 西山ノ上遺跡 2次調査 掘立柱建物一覧表

2号土壌 (SK-02) 〈第128図〉

調査区北側で検出したやや長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-13°-Eに取る。規模は1.68m×1.18m、深さ0.14mを測る。出土遺物は確認出来なかった。

3号土壌 (SK-03) 〈第128図〉

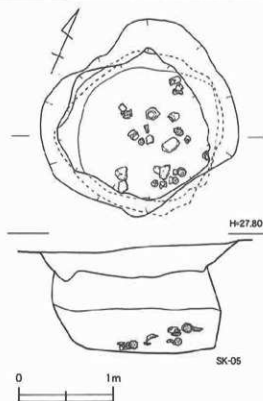
調査区北西端附近で検出した楕円形を呈する土壌である。長軸方位をN-17°-Eに取る。規模は1.4m×1.12m、深さ0.14mを測る。弥生時代前期の土器が出土したが、細片の爲図示していない。

4号土壌 (SK-04) 〈第128図〉

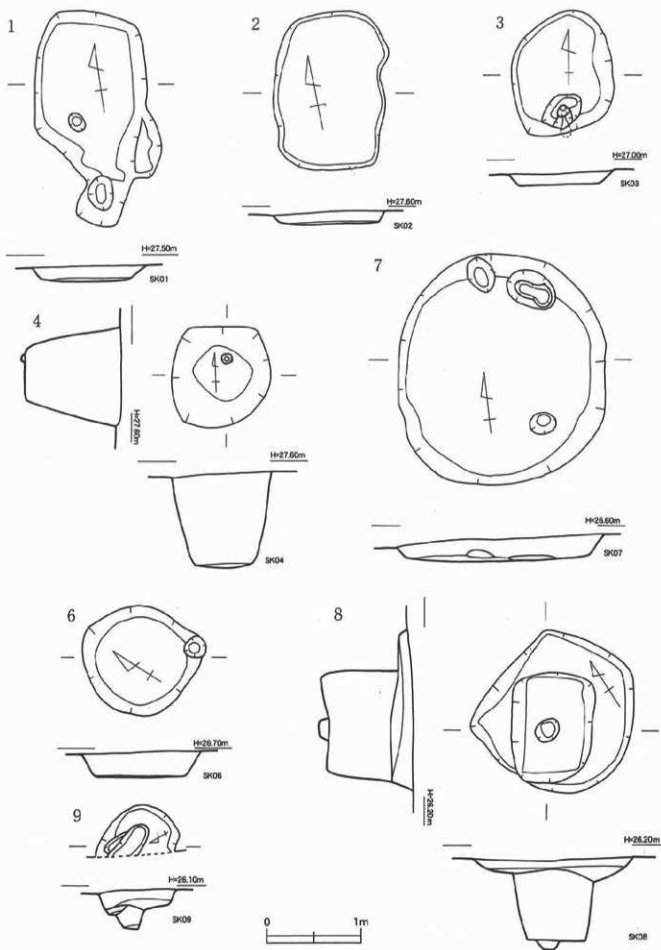
調査区北端附近で検出した楕円形を呈する土壌である。規模は直径1.08m、深さ1.02cmを測る。土壌の規模や形態から井戸跡と考えられるが、判断材料に乏しい。出土品は確認出来なかった。

5号土壌 (SK-05) 〈第127図〉

調査区中央で検出した楕円形を呈する土壌である。底面プランは円形を呈し、断面形はフラスコ状となる。規模は直径2.1m、深さ1.14mを測る。出土遺物として弥生式土器の甕、壺



第127図 5号土壌実測図 [1/40]



第128図 1~4・6~9号土墳(墓)実測図 [1/40]

形土器が多量に出土した。また、その中には投弾も含まれていた。土壌の形状や出土遺物状況等から弥生時代前期末頃の貯蔵穴だと考えられる。

6号土壌 (SK-06) <第128図>

調査区中央で検出した円形を呈する土壌である。規模は直径1.2m、深さ0.29mを測る。出土遺物は確認出来なかった。

7号土壌 (SK-07) <第128図>

調査区中央西端で検出した楕円形を呈する土壌である。規模は直径2.2m～2.44m、深さ0.24mを測る。緑黄色の釉薬がかかった陶器皿や土師器皿の破片が出土した。

8号土壌 (SK-08) <第128図>

調査区西側で検出した長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-33°-Eに取る。土壌中央には小穴が穿たれており、逆茂木状の柱が立っていたと考えられる。規模は1.16m×0.86m、深さは土壌底面までが0.86m、柱穴部は0.1mを測る。埋土には、やや軟質の黒色土が密にあった。状況より落とし穴状遺構と考えられる。出土品は確認出来ず、時期の特定は困難である。

9号土壌 (SK-09) <第128図>

調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する土壌墓である。北西半分は調査区外に出ている。長軸方位をN-24°-Wに取る。規模は、掘り方が0.8m+α×0.72m+α、深さ0.2mを測り、主体部は0.5m+α×0.23m、深さは掘り方底面より0.22mを測る。掘り方等の状況から木蓋土壌墓と思われる。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代前期～中期前半頃と考えられる。

10号土壌 (SK-10)

調査区西端で検出した不整形を呈する土壌である。ほぼ平坦な底面を成し、墓坑等の痕跡は見当たらなかった。土壌内からは片岩製の大型扁平石材1点が出土した。石材置き場か。

11号土壌 (SK-11)

調査区西端で検出した不整形楕円形を呈する土壌である。ほぼ平坦な底面を成し、墓坑等の痕跡は見当たらなかった。土壌内からは片岩製の大型扁平石材2点が出土した。SK-10と隣接している事から、同様の石材置き場と思われる。

12号土壌 (SK-12) <第129図>

調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する土壌墓である。長軸方位は掘り方がN-26°-W、主体部がN-24°-Wに取る。規模は、掘り方が1.22m×0.86m、深さ0.17mを測る。主体部は平面楕円形を呈し、規模は0.86m×0.6m、深さは掘り方底面より0.4mを測る。掘り方等の状況から直葬が考えられる。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代前期～中期前半頃と考えられる。

13号土壌 (SK-13) <第129図>

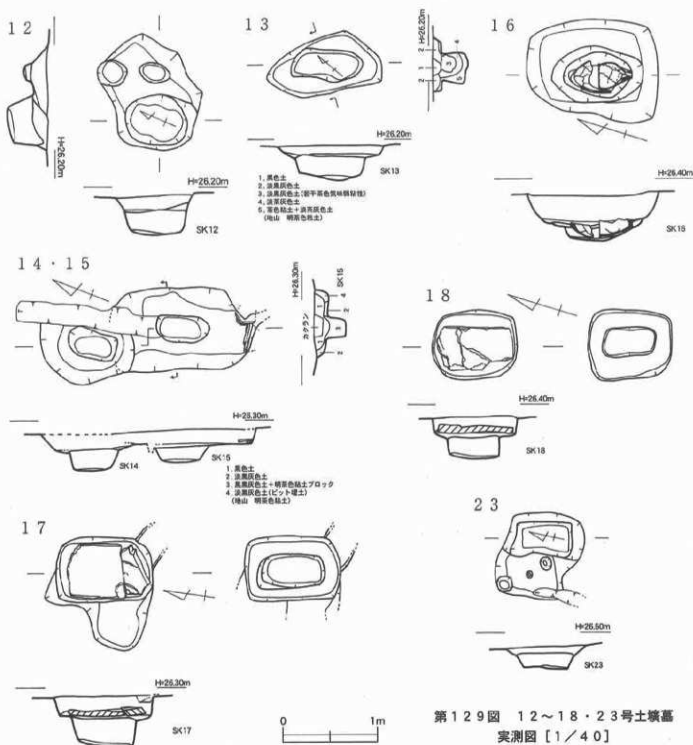
調査区西端で検出した不整形円形を呈する土壌墓である。長軸方位は掘り方がN-50°-W、主体部がN-41°-Wに取る。規模は、掘り方が1.2m×0.6m、深さ0.12mを測る。主体部は隅丸長方形を呈し、規模は0.76m×0.3m、深さは掘り方底面より0.3mを測る。掘り方、及び、埋土の堆積状況から木蓋土壌墓が考えられる。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代前期～中期前半頃と考えられる。

14号土壌 (SK-14) <第129図>

調査区西端で検出した楕円形を呈する土壌墓である。SK-15に切られる。長軸方位はN-4°-Wに取る。規模は、掘り方が1.06m×0.62m+α、深さ0.2mを測る。主体部は隅丸長方形を呈し、規模は0.58m×0.28m、深さは掘り方底面より0.22mを測る。掘り方の状況から円形状の木蓋を使用した木蓋土壌墓と思われる。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代前期～中期前半頃と考えられる。

15号土壌 (SK-15) <第129図>

調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する石蓋土壌墓である。SK-14を切る。長軸方位はN-23°-Wに取る。規模は、掘り方が1.4m+α×0.88m、深さ0.19mを測る。主体部は隅丸長方形を呈し、規模は0.56m×0.28m、深さは掘り方底面より0.16mを測る。擾乱により元位置から動いているが、土壌南側小口の基盤土に突き刺さる片岩は、元の石蓋と考えられる。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代前期～中期前半頃と考えられる。

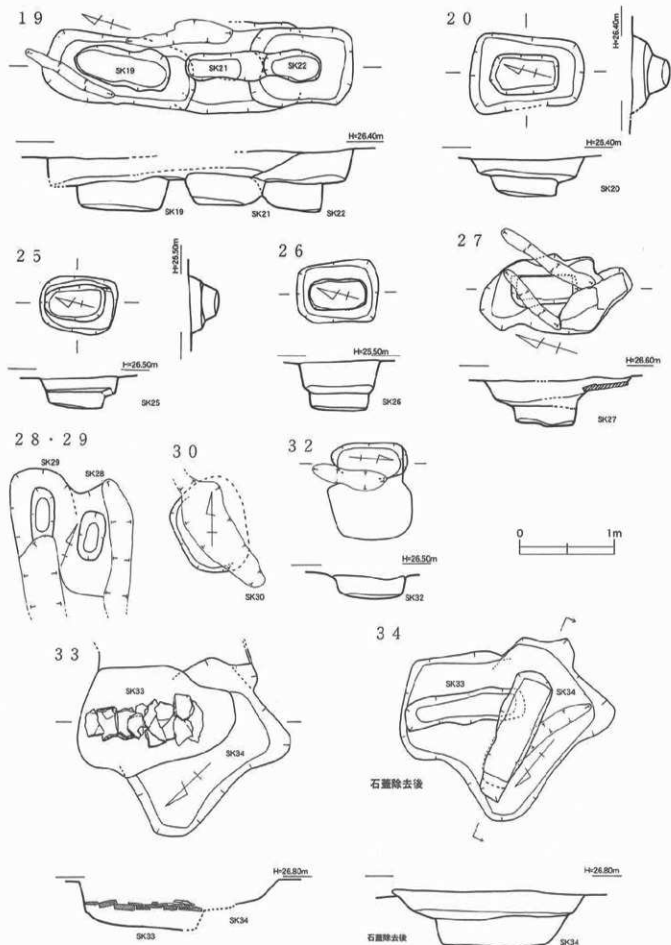


16号土壌 (SK-16) 〈第129図〉

調査区西端で検出した掘り方平面が隅丸長方形を呈する小児用甕棺墓である。規模が1.38m×1.0m、深さ0.34mを測る。掘り方のやや西寄りに甕棺埋置用の墓穴を掘込み、ほぼ水平に甕棺を埋置する。墓穴は長円形を呈し、規模は0.98m×0.6m、深さは掘り方底面より0.16mを測る。上甕が下甕を覆い被す、いわゆる呑口式甕棺で、上甕の下半分は埋葬当初から打ち欠かれ存在しない。甕棺の主軸方位はN-11°-W。弥生時代中期初頭。

17号土壌 (SK-17) 〈第129図〉

調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する石蓋土壌墓である。長軸方位はN-8°-Wに取る。規模は、掘り方が1.02m+α×0.68m、深さ0.24mを測る。主体部は隅丸長方形を呈し、規模は0.72m×0.36m、深さは掘り方底面より0.3mを測る。石蓋は2点あり、内1点は一辺が59cmもある大きな片岩である。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代前期~中期頃と考えられる。



第130図 19~22・25~30・32~34号土墳墓実測図 [1/40]

18号土壌 (SK-18) <第129図>

調査区西端で検出した隅丸方形を呈する石蓋土壌墓である。長軸方位は $N-19^{\circ}-W$ に取る。規模は、掘り方が $0.9\text{m} \times 0.76\text{m}$ 、深さ 0.22m を測る。主体部は隅丸長方形を呈し、規模は $0.56\text{m} \times 0.3\text{m}$ 、深さは掘り方底面より 0.24m を測る。石蓋は1点で、 $80\text{cm} \times 44\text{cm}$ もある大きな片岩である。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代前期～中期頃と考えられる。

19号土壌 (SK-19) <第130図>

調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する土壌墓である。SK-19、SK-20、SK-21が連なるように切り合いをもち、本土壌墓が最も新しい。長軸方位は $N-6^{\circ}-W$ に取る。規模は、掘り方が $1.6\text{m} \times 0.72\text{m}$ 、深さ 0.28m を測る。主体部は隅丸長方形を呈し、規模は $1.02\text{m} \times 0.4\text{m}$ 、深さは掘り方底面より 0.32m を測る。掘り方、及び、埋土の堆積状況から木蓋土壌墓が考えられる。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代中期頃以降と考えられる。

20号土壌 (SK-20) <第130図>

調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する土壌墓である。長軸方位は $N-16^{\circ}-W$ に取る。規模は、掘り方が $1.2\text{m} \times 0.7\text{m} \sim 0.86\text{m}$ 、深さ 0.2m を測る。主体部は隅丸長方形を呈し、規模は $0.72\text{m} \times 0.42\text{m}$ 、深さは掘り方底面より 0.2m を測る。埋土の堆積状況から直葬が考えられるが、木蓋土壌墓の可能性も残る。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代中期前半頃と考えられる。

21号土壌 (SK-21) <第130図>

調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する土壌墓である。長軸方位は $N-19^{\circ}-W$ に取る。規模は、掘り方が $1.24\text{m} + \alpha \times 0.96\text{m}$ 、深さ 0.26m を測る。主体部は隅丸長方形を呈し、規模は $0.82\text{m} + \alpha \times 0.3\text{m}$ 、深さは掘り方底面より 0.3m を測る。掘り方、及び、埋土の堆積状況から木蓋土壌墓が考えられる。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代中期頃と考えられる。

22号土壌 (SK-22) <第130図>

調査区西端で検出した隅丸方形を呈する土壌墓である。長軸方位は $N-19^{\circ}-W$ に取る。規模は、掘り方が $1.1\text{m} \times 0.82\text{m}$ 、深さ 0.35m を測る。主体部は楕円形状を呈し、規模は $0.62\text{m} \times 0.34\text{m}$ 、深さは掘り方底面より 0.3m を測る。掘り方の状況から木蓋土壌墓が考えられる。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代中期前半頃と考えられる。

23号土壌 (SK-23) <第129図>

調査区北側で検出した土壌である。当初、単独の土壌墓と考え調査を行ったが、その後重複する2つの土壌の可能性が出て来た為、ここでは同一遺構番号ながら東側土壌、西側土壌に分け報告を行う。

東側土壌は長軸方位を $N-12^{\circ}-W$ に取る長方形を呈する土壌墓である。規模は $0.84\text{m} \times 0.44\text{m} + \alpha$ 、深さ 0.24m を測る。墓横断面は蒲鉾形を成す。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代中期前半頃と考えられる。

西側土壌は長軸方位を $N-5^{\circ}-W$ に取る隅丸方形を呈する土壌である。規模は $0.72\text{m} \times 0.48\text{m} + \alpha$ 、深さ 0.13m を測る。土壌横断面はほぼ水平を成す。東側土壌に比してやや横軸が北にずれている事から、掘り方部分ではないものと思われる。切り合い、及び、時期については不明。

24号土壌 (SK-24)

調査区西端で検出した掘り方平面が隅丸方形を呈する土壌墓である。長軸方位は $N-5^{\circ}-W$ を取る。掘り方の規模は $0.9\text{m} \times 0.6\text{m}$ を測る。小児用の甕棺を半分に打ち欠き、蓋として使用していた。

調査者の不注意により詳細図の作成が未完のままであった。強く反省したい。

25号土壌 (SK-25) <第130図>

調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する土壌墓である。長軸方位は掘り方が $N-7^{\circ}-W$ 、主体部が $N-15^{\circ}-W$ に取る。規模は、掘り方が $0.82\text{m} \times 0.6\text{m}$ 、深さ 0.14m を測る。主体部は平面隅丸長方形を呈し、規模は $0.64\text{m} \times 0.38\text{m}$ 、深さは掘り方底面より 0.17m を測る。掘り方、及び、埋土の堆積状況から直葬が考えられる。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代中期前半頃と考えられる。

26号土壌 (SK-26) <第130図>

調査区西端で検出した平面隅丸方形を呈する土壌墓である。長軸方位は $N-15^{\circ}-W$ に取る。規模は、掘り方が $0.88\text{m} \times 0.66\text{m}$ 、深さ 0.32m を測る。主体部は隅丸長方形を呈し、規模は $0.62\text{m} \times 0.3\text{m}$ 、

深さは掘り方底面より0.2mを測る。掘り方、及び、埋土の堆積状況から木蓋土墳墓が考えられる。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代中期前半頃と考えられる。

27号土墳 (SK-27) 〈第130図〉

調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する石蓋土墳墓である。長軸方位は $N-17^{\circ}-W$ に取る。規模は、掘り方が $1.2m \times 0.7m$ 、深さ0.26mを測る。主体部は隅丸長方形を呈し、規模は $0.7m \times 0.3m$ 、深さは掘り方底面より0.21mを測る。攪乱により元位置から動いているが、土墳南側小口の基盤土に突き刺さる片岩は、元の石蓋と考えられる。石蓋は1点で、 $8.8cm \times 4.2cm$ もある大きな片岩である。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代中期中頃と考えられる。

28号土墳 (SK-28) 〈第130図〉

調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する土墳墓である。長軸方位は $N-10^{\circ}-W$ に取る。規模は、掘り方が $1.18m \times 0.6m + \alpha$ 、深さ0.19mを測る。主体部は隅丸長方形を呈し、規模は $0.5m \times 0.28m$ 、深さは掘り方底面より0.2mを測る。掘り方の形状から直葬が考えられる。出土遺物は確認出来なかった。時期については不明。

29号土墳 (SK-29) 〈第130図〉

調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する土墳墓である。長軸方位は $N-20^{\circ}-W$ に取る。規模は、掘り方が $0.98m + \alpha \times 0.62m + \alpha$ 、深さ0.16mを測る。主体部は隅丸長方形を呈し、規模は $0.56m + \alpha \times 0.24m$ 、深さは掘り方底面より0.18mを測る。隣接するSK-28同様、掘り方の形状から直葬が考えられる。出土遺物は確認出来なかった。時期については不明。

30号土墳 (SK-30) 〈第130図〉

調査区西端で検出した平面楕円形を呈する土墳墓である。長軸方位は不明。規模は、掘り方が $0.82m + \alpha \times$ 推定0.8m、深さ0.12mを測る。主体部は隅丸長方形(?)を呈し、規模は推定 $0.76m \times$ 推定0.26mを測る。深さは不明。掘り方の形状から木蓋土墳墓が考えられるが、SD-07に切られている事に加え攪乱著しく、時期や詳細については不明と言わざるを得ない。出土遺物は確認出来なかった。

31号土墳 (SK-31) 〈第134図〉

調査区西端で検出した楕円形を呈する土墳である。ほぼ平坦な底面を成し、墓壕等の痕跡は見当たらなかった。土墳内からは片岩製の大型扁平石材3点が出土した。同様の石材置き場と考えられるSK-10、11と隣接している事から、本土墳も石材置き場と思われる。

32号土墳 (SK-32) 〈第130図〉

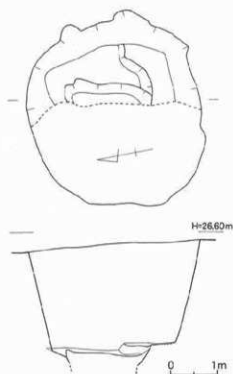
調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する土墳墓である。長軸方位は $N-5^{\circ}-W$ に取る。規模は $0.8m \times 0.36m$ 、深さ0.22mを測る。上部を削平されている為、埋葬方法について特定する材料がない。出土遺物は確認出来なかった。時期については不明。

33号土墳 (SK-33) 〈第130図〉

調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する石蓋土墳墓である。SK-34を切る。長軸方位は $N-43^{\circ}-E$ に取る。規模は、掘り方が $1.2m + \alpha \times 1.08m + \alpha$ 、深さ0.3mを測る。主体部は隅丸長方形を呈し、規模は $1.16m + \alpha \times 0.34m$ 、深さは掘り方底面より0.2mを測る。蓋として用いられている石材数は12点で、 $30cm \times 20cm$ 程の小振りの片岩である。南側から北側に向かい石蓋の幅が意図的に減じられている点は、本被葬者の南西頭位を示唆している。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代中期～後期頃と考えられる。

34号土墳 (SK-34) 〈第130図〉

調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する土墳墓である。SK-33に切られる。長軸方位は掘り方が $N-4^{\circ}-E$ 、主体部が $N-18^{\circ}-W$ に取る。規模は、掘り方が $1.76m \times 1.2m$ 、



第131図 35号土墳実測図 [1/80]

深さ0.22mを測る。主体部は平面隅丸長方形を呈し、規模は1.42m×0.44m、深さは掘り方底面より0.38mを測る。掘り方の状況から木蓋土壌墓が考えられる。出土遺物は確認出来なかったが、概ね弥生時代中期後半頃と考えられる。

35号土壌

(SK-35)

〈第131図〉

調査区中央西端で検出した楕円形を呈する井戸状遺構である。規模は直径3.6m~3.86

m、深さ2.82m+αを測る。壁面崩落の可能性もあった為、掘削途中で調査を断念した。底面付近の埋土は上位層の堅く締まった自然堆積層とは異なり、黒色土と軟質の黄色粘土が不規則な互層となって厚く堆積していた。自然堆積とは考えにくく、人為的な堆積とみたい。出土品はその殆どが上位層からのもので、陶磁器、土師器、石鍋等が細片となって出土した。下位層からの出土は確認出来なかった。

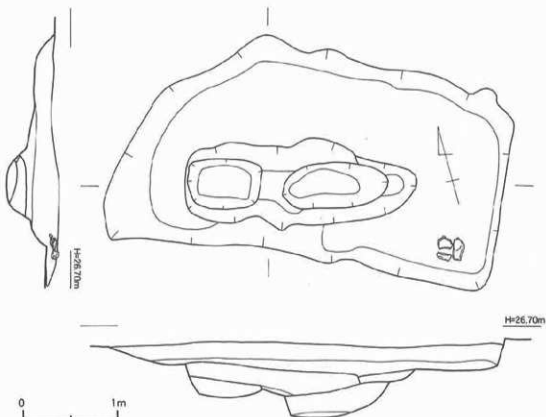
36号土壌 (SK-36) 〈第132図〉

調査区西端で検出した平面隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位はN-67°-Wに取る。規模は、4.2m×2.2m、深さ0.3mを測る。土壌中央部には規模が2.48m×0.84m、深さ0.34m~0.74mの平面長円形を呈する土壌が掘削されている。SX-01の中心遺構と考えられ、周辺のピット配置状況や土壌内に流入している焼土等の状況等から、本来土壌上に建物があったものと推定される。

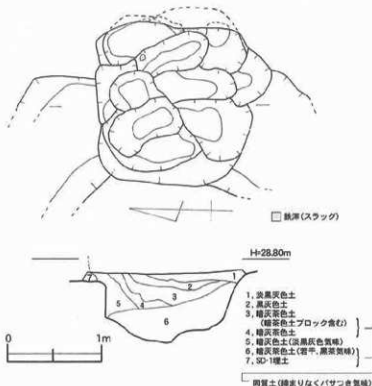
土壌南東隅から出土した白磁碗は、流入した焼土の真下に位置していた事から、この土壌の下限を示す貴重な資料である。他に出土した土師器等ともあわせ、13世紀初頭頃の所産と考えられる。

38号土壌 (SK-38) 〈第133図〉

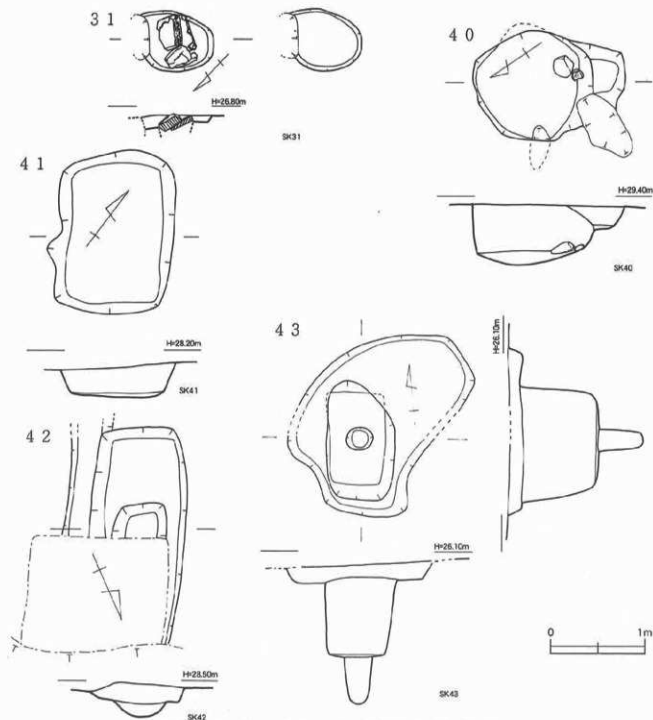
調査区東側で検出した不整形を呈する土壌である。SD-01を切る。長軸方位はN-87°-Wに取



第132図 36号土壌実測図 [1/40]



第133図 38号土壌実測図 [1/40]



第134図 31・40～43号土坑実測図 [1/40]

る。規模は、1.72m×1.68m、深さ0.8m～0.97mを測る。性格付けは非常に困難だが、土坑底面は非常に荒い凹凸があり、通常の土坑掘り方とは異なっている事、壁面の形状も一定でない事、土坑掘削直後に一気に埋まっている事、等から考えて粘土採掘坑をその候補の1つとして挙げておきたい。

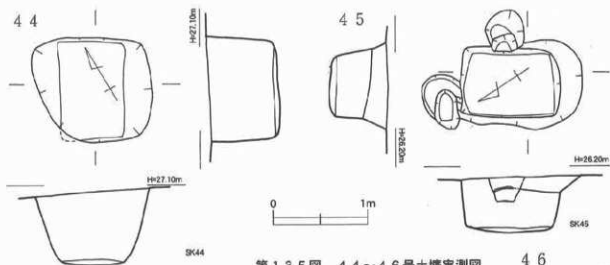
出土遺物として、白磁、土師器、瓦器、石鍋、スラッグが出土した。スラッグは北側からの流れ込みで、土坑と時期を同一にするか否かは判別出来なかった。白磁や土師器等から13世紀前半頃の所産の土坑と思われる。

39号土坑 (SK-39)

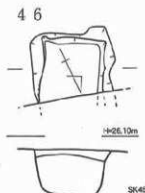
調査区北側で検出した不整形を呈する土坑である。SB-15に切られる。長軸方位はN-62°-Wに取る。規模は、2.94m×2.36m、深さ0.24mを測る。性格不明。

40号土坑 (SK-40) 〈第134図〉

調査区北側で検出した円形を呈する土坑である。底面プランは円形を呈し、壁面の一部は直立する。規模



第135図 44～46号土壌実測図
[1/40]



は直径1.16m～1.28m、深さ0.64mを測る。出土遺物として弥生式土器の甕、壺形土器等が出土している。土壌の形状や出土遺物状況等から弥生時代前期末頃の貯蔵穴だと考えられる。

41号土壌 (SK-41) 〈第134図〉

調査区中央で検出した隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-35°-Wに取る。規模は1.74m×1.24m、深さ0.36mを測る。出土遺物は確認出来なかった。

42号土壌 (SK-42) 〈第134図〉

調査区中央で検出した隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-27°-Eに取る。規模は2.3m×1.02m、深さ0.2m～0.31mを測る。土壌中央部に隅丸長方形(?)の段落ちがあり、そこから弥生時代前期末の甕形土器の底部のみが出土した。

43号土壌 (SK-43) 〈第134図〉

調査区中央西側で検出した隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-6°-Eに取る。土壌中央には小穴が穿たれており、逆茂木状の柱が立っていたと考えられる。規模は1.26m×0.74m、深さは土壌底面までが0.96m、柱穴部は0.5mを測る。埋土には、やや軟質の黒色土が密にあった。状況より落とし穴状遺構と考えられる。出土品は確認出来ず、時期の特定は困難である。

44号土壌 (SK-44) 〈第135図〉

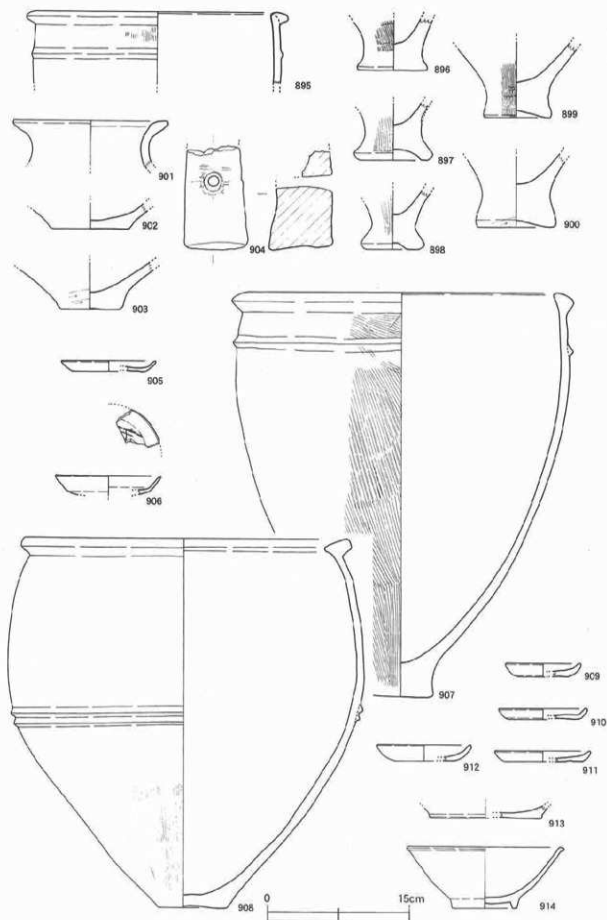
調査区中央で検出した隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-31°-Eに取る。規模は1.12m×1.16m、深さ0.79mを測る。埋土には、やや軟質の黒色土が密にあった。逆茂木状の柱穴は認められなかったが、状況から落とし穴状遺構と考えられる。出土品は確認出来ず時期の特定は困難である。

45号土壌 (SK-45) 〈第135図〉

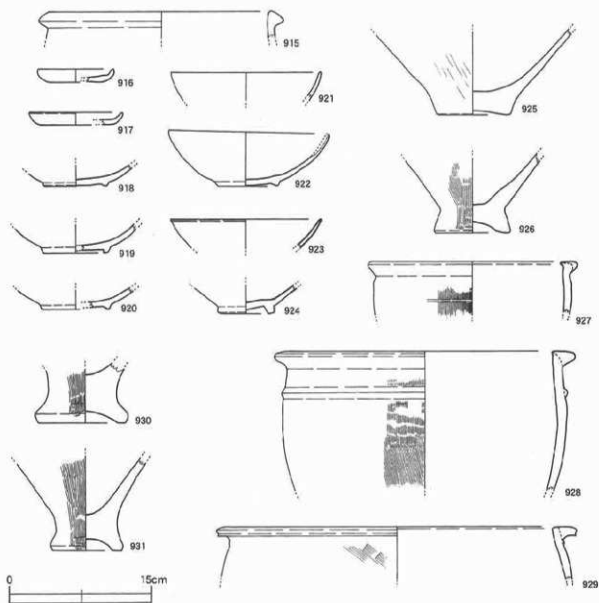
調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-33°-Eに取る。規模は1.3m×0.9m、深さ0.62mを測る。埋土には、やや軟質の黒色土が密にあった。逆茂木状の柱穴は認められなかったが、状況から落とし穴状遺構と考えられる。出土品は確認出来ず時期の特定は困難である。

46号土壌 (SK-46) 〈第135図〉

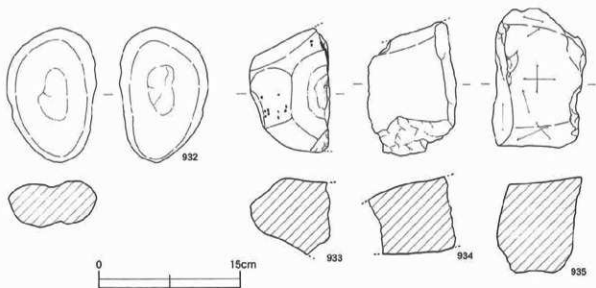
調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する土壌である。北側半分は調査区外に出る。長軸方位をN-28°-Eに取る。規模は0.72m×0.88m、深さ0.57mを測る。埋土には、やや軟質の黒色土が密にあった。逆茂木状の柱穴は認められなかったが、状況から落とし穴状遺構と考えられる。出土品は確認出来ず、時期の特定は困難である。



第136圖 5・7・16・24・36号土壙出土土器実測図【1/4】



第137图 38·40·42号土坑出土石器实测图 [1/4]



第138图 5·38号土坑出土石器实测图 [1/4]

土器出土遺物

土器 〈第136図・137図〉

895～904はSK-05出土土器で、895～900は甕形土器。895は少し長めの貼付口縁に低い胴部突帯が付く。896～900は底部で、平底のもの(896)、上底で脚端部が大きく外方に張り出すもの(897・898)、低い上底にあまり外方に張り出さずやや締まりの無い脚部がつくもの(899・900)の3種がある。901～903は壺形土器で、901の頸部は短く外方に延びている。904は支脚で、突孔部表面には堅く鋭利な道具による横方向の擦痕(切り傷状)が複数認められる。

905・906はSK-07出土土器で、905は土師器杯。

906は同安楽系の青磁皿で、I-2類である。

907はSK-16甕形墓の上甕で、やや垂下した断面三角形の口縁に胴部突帯が貼付き、若干細めの底部がつく等の特徴から橋口福年のKⅡa式併行期のものと考えられる。

908はSK-24甕形墓の甕棺で、やや内傾した口縁部に若干張り気味の胴部がつく。最大径はやや上半にあり、小さな平底をもつ。諸特徴から橋口福年のKⅡb式併行期のものと考えられる。

909～914はSK-36出土土器で、909～911は土師器皿で、底部は糸切り。910・911は糸切り後にナデを施す。912は瓦器の皿。913は土師器の杯で、底部には明瞭な糸切り痕が見られる。914は白磁碗で、口縁部は外反し端部は平坦。内面見込みには蛇ノ目状の軸刺ぎが施される。軸は体部中位下半まで、高台・畳付けは無施釉。色調は淡緑灰色である。碗Ⅶ-1類。

915～924はSK-38出土土器で、915は弥生時代中期の甕形土器。916～920は土師器で、916・917は皿、918～920は杯。921は瓦器碗の口縁部破片。922は黒色土器B類で、上半部分は復元による。

923・924は白磁碗の破片。924の内面見込みには蛇ノ目状の軸刺ぎが施される。軸は体部中位まで、下半部や高台・畳付けは無施釉。色調は淡緑灰色である。碗Ⅶ-2類。

925～929はSK-40出土土器で、925・926は壺形土器。926は甕形土器の底部破片か。927～929は甕形土器口縁部で、929は928などに比して口縁端部が細長くなり、逆L字状口縁に近づいており、僅かに新相を呈している。

930・931はSK-42出土土器で、甕形土器の底部破片である。

石器 〈第138図〉

932はSK-05出土石器で、両面使用の窪石である。

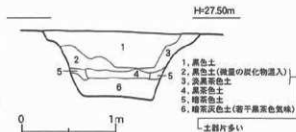
933～935はSK-38出土石器で、933は被熱した片面使用の窪石。934は被熱石。935は砥石である。

(4) 溝状遺構(SD)

1号溝(SD-01) 〈第139図・141図〉

調査区中央の3方向を囲む鎌倉時代前半頃に掘削されたと考えられる区画溝である。南側延長部は調査区外になっており今回の調査では検出していないが、隣接する国道442号線バイパス建設事業地内にある西山ノ上遺跡における発掘調査により検出されている。全容についての記述は今回報告では割愛させていただき、バイパス建設事業に係る発掘調査報告にその詳細を委ねたい。本報告中では、当該調査区において既検出分についてのみ報告を行う事とする。

規模は検出全長120.4m、幅1.28m～1.42m、深さ0.26m～0.56mを測る。旧地形に沿って掘削された為か、検出面からの深さに差は無いが、溝底面レベルの絶対標高は東西で200cmの差をみる。等高線から見た調査区内の標高差も同様の結果である。溝の断面形は概して逆台形を成しているが、中央より西側は底面に対し約45°のなだらかな壁面を呈し、逆に東側では70°の急角度な壁面を呈している。埋土は黒茶色土を基本に自然堆積しており、掘り返し等で生じる乱土層等の所見は特に認められな



第139図 1号溝E土層断面
実測図 [1/40]

遺構番号	平面形	長軸方位	短軸長 (cm)			出土遺物	推定時期
			長軸長	短軸長	深さ		
SK-01	長方形	N-9°-E	180	118	16		
SK-02	長方形	N-13°-E	168	118	14		
SK-03	楕円形	N-17°-E	140	112	14		
SK-04	楕円形		直径	108	102	井戸？	弥生時代前期
SK-05	楕円形		直径	210	114	貯蔵穴。投彈 2 個出土	
SK-06	円形		直径	120	29		弥生時代前期
SK-07	楕円形		直径	220~244	24		
SK-08	長方形	N-33°-E	116	86	86	柱穴部深さ 10cm の落とし穴状土壌	鎌倉時代
SK-09	隅丸長方形	N-24°-E	80+α 50+α	72+α 23	20 22	掘り方 主体部 小児用土壌墓。直葬？	弥生時代中期
SK-10						石材置き場？ 片岩製大型石材 1	
SK-11						石材置き場？ 片岩製大型石材 2	
SK-12	隅丸長方形	N-26°-E	122	86	17	掘り方 土壌墓	別遺構の可能性 弥生時代
SK-13	不整形円形	N-50°-W	120	60	12	掘り方 主体部	木蓋土壌墓？ 弥生時代
SK-14	隅丸長方形	N-41°-W	76	30	30	掘り方 主体部	SK-15 に切られる。 直葬？ 弥生時代
SK-15	隅丸長方形	N-23°-W	140+α	88	19	掘り方 主体部	SK-14 を切る。 石蓋土壌墓 弥生時代
SK-16	隅丸長方形	N-11°-W	138	100	34	弥生時代中期前半の香口式甕棺墓	弥生時代中期
SK-17	隅丸長方形	N-8°-W	102	68	24	掘り方 主体部	石蓋土壌墓 弥生時代
SK-18	隅丸長方形	N-19°-W	90	76	22	掘り方 主体部	石蓋土壌墓 弥生時代
SK-19	隅丸長方形	N-6°-W	160	72	28	掘り方 主体部	木蓋土壌墓 弥生時代
SK-20	隅丸長方形	N-16°-W	120	70~86	20	掘り方 主体部	直葬？（木蓋の可能性有） 弥生時代
SK-21	隅丸長方形	N-19°-W	124+α	96	26	掘り方 主体部	木蓋土壌墓？ 弥生時代
SK-22	隅丸長方形	N-19°-W	110	82	35	掘り方 主体部	木蓋土壌墓？ 弥生時代
SK-23(前)	長方形	N-12°-W	84	44+α	24	土壌墓	弥生時代
SK-23(后)	隅丸長方形	N-5°-W	72	48+α	13	土壌墓？	
SK-24	隅丸長方形	N-5°-W	90	60+α		小児用甕棺墓	弥生時代
SK-25	隅丸長方形	N-7°-W	82	60	14	掘り方 主体部	木蓋土壌墓 弥生時代
SK-26	隅丸長方形	N-15°-W	88	66	32	掘り方 主体部	木蓋土壌墓 弥生時代
SK-27	隅丸長方形	N-17°-E	120	70	26	掘り方 主体部	石蓋土壌墓 弥生時代
SK-28	隅丸長方形	N-10°-W	118	60+α	19	掘り方 主体部	直葬？（木蓋の可能性有） 弥生時代
SK-29	隅丸長方形	N-20°-W	98+α 56+α	62+α 24	16 18	掘り方 主体部	直葬？ 弥生時代
SK-30	楕円形		82+α	推定80	12		
SK-31	隅丸長方形		推定76	推定26		木蓋土壌墓？ 片岩製大型石材 3	弥生時代？
SK-32	隅丸長方形	N-5°-W	80	36	22	土壌墓（直葬又は木蓋）	弥生時代
SK-33	隅丸長方形	N-43°-E	120+α	108+α	30	石蓋土壌墓。SK-34 を切る。	弥生時代
SK-34	隅丸長方形	N-4°-E	116+α 176	34 120	20 22	木蓋土壌墓？SK-33 に切られる。	弥生時代
SK-35	楕円形	N-18°-W	142	44	38	掘り方 主体部	282+α 自然堆積。土層に焼土 鎌倉時代
SK-36	隅丸長方形	N-67°-W	420	220	30	青磁甕出土 土師器出土	80~97 鎌倉時代
SK-37	長円形	N-76°-W	248	84	34~74	磁器、石鎚、スラッグ出土。粘土探掘？	鎌倉時代
SK-38	不整形	N-87°-W	172	168	80~97		
SK-39	不整形	N-62°-W	294	236	24		
SK-40	円形		直径116	~128	64	弥生時代前期の土器群	弥生時代
SK-41	隅丸長方形	N-35°-W	174	124	36		
SK-42	隅丸長方形	N-27°-E	230+α	102	20~31	弥生時代前期の甕形土器底部のみ	弥生時代
SK-43	隅丸長方形	N-6°-E	126	74	96	落とし穴状土壌（柱穴深さ50）	
SK-44	隅丸長方形	N-31°-E	112	116	79	落とし穴状土壌（柱穴なし）	
SK-45	隅丸長方形	N-33°-E	130	90	62	落とし穴状土壌（柱穴なし）	
SK-46	隅丸長方形	N-28°-E	72+α	88	57	落とし穴状土壌（柱穴なし）	

第9表 西山ノ上遺跡 2次調査 土壌一覧表

った。また、土色観察時に下層～中層にかけて一部に焼土、及び、炭化物の混入が見られた事、等とあわせて、本溝は掘削後、比較的短い時間経過の中で主体たる区画内部の建物等を火災等で使い、自然に埋没していったものと考えられる。但し、溝底面の一部には水の滞留を示唆する黒色土が認められ、極端な短時間でその機能を失ったわけではないようだ。出土遺物は、青磁・白磁片、土師器や瓦器等の出土の他、U字形銅先刃部や小型の有袋鉄斧が見られた。出土遺物から、12世紀中頃～後半にかけて掘削され、13世紀前半頃に埋没したものと思われる。

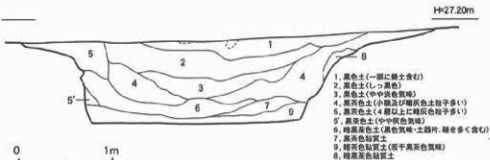
2号溝 (SD-02) <第140図>

調査区中央を南北方向に長く延び、南西緩斜面に向かい等高線に斜交しながら掘削された環濠である。SD-01、03、05、SX-01に切られる。規模は検出全長49m、幅3.44m～3.62m、深さ1.02mを測り、1次調査とあわせた検出全長は124mになる。旧地形の高低差に沿って掘削された為、溝底面レベルの標高は南北で52cmの差をみる。詳細は1次調査報告の折に触れた為、本項では割愛する。遺物は弥生式土器、石材等があったが概して出土量は少ない。弥生時代後期中頃～後半の土器群である。

3号溝 (SD-03) <第141図>

調査区中央を鍵状に屈曲しながら延びる溝である。規模は検出全長39m、幅0.8m～1.16m、深さ0.21m～0.49mを測る。溝底面の標高は東端と西端で37cmの差をみる。等高線から見た調査区内の標高差も同様の結果である。

溝の断面形はほぼ箱形を成しており、90°近い急角な壁面を呈している。埋土には近辺では見られない白色、又は、黄白色の砂礫土が堆積しており、人為的に埋められている事を示唆している。一部に掘り返し等で生じる乱土層が認められるが、詳細については不明。出土遺物はあまり多くなく、弥生式土器や土師器破片、鋳造鉄器片の他、近現代の磁器類破片が少量出土したにとどまった。現代に掘削された排水路であろうか。



第140図 2号溝B土層断面実測図 [1/40]

4号溝 (SD-04)

調査区中央西側を鍵状に屈曲し南側に延びる溝である。規模は検出全長14m、幅0.48m、深さ0.1mを測る。溝底面の標高は北端と南端で10cmの差があり、南に向かいレベルを下げる。削平著しく、溝としての痕跡は殆ど認められない。SD-03同様、埋土には近辺では見られない白色、又は、黄白色の砂礫土が溝のコーナー付近に堆積しており、人為的に埋められている事を示唆している。コーナー付近はSD-03と等間隔で平行しており、同時性が非常に強い溝である。



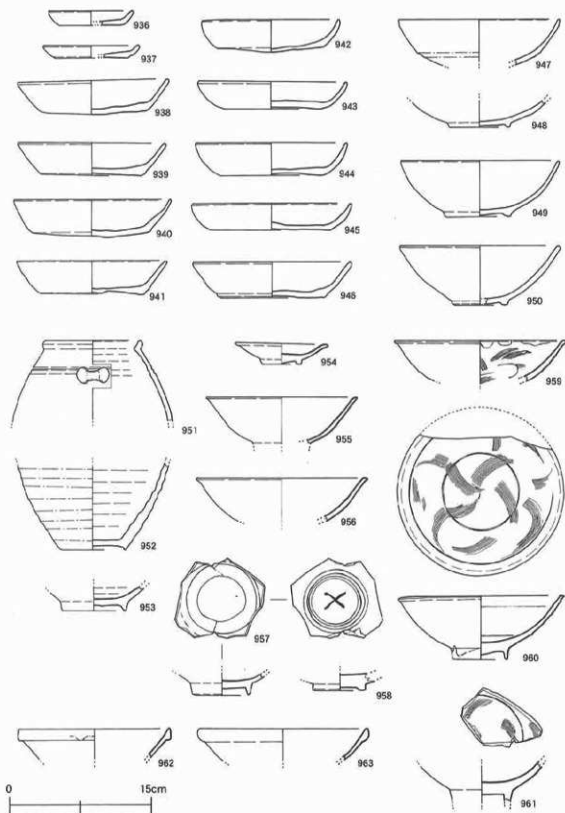
第141図 1・3・5号溝土層断面実測図 [1/40]

5号溝 (SD-05) <第141図>

調査区中央西側を東側に延びる溝である。SD-01を切り、SD-03、04、06、09に切られている。規模は検出全長18m、幅0.92m、深さ0.17m～0.26mを測る。溝底面の標高は西端と東端で34cmの差があり、西に向かいレベルを下げる。SD-03とはほぼ重複し、その詳細は不明。SD-06、09とぶつかった所で延長部は姿を消す。

6号溝 (SD-06)

調査区中央を鍵状に延びる溝である。調査区内の全ての遺構を切る。調査区を南進した後、南端近くで直角に折れ西進する。規模は検出全長53m、幅0.56m～0.86m、深さ0.2mを測る。溝底面からはプラスチックの破片等も出土しており、ごく最近に埋没した現代溝である。



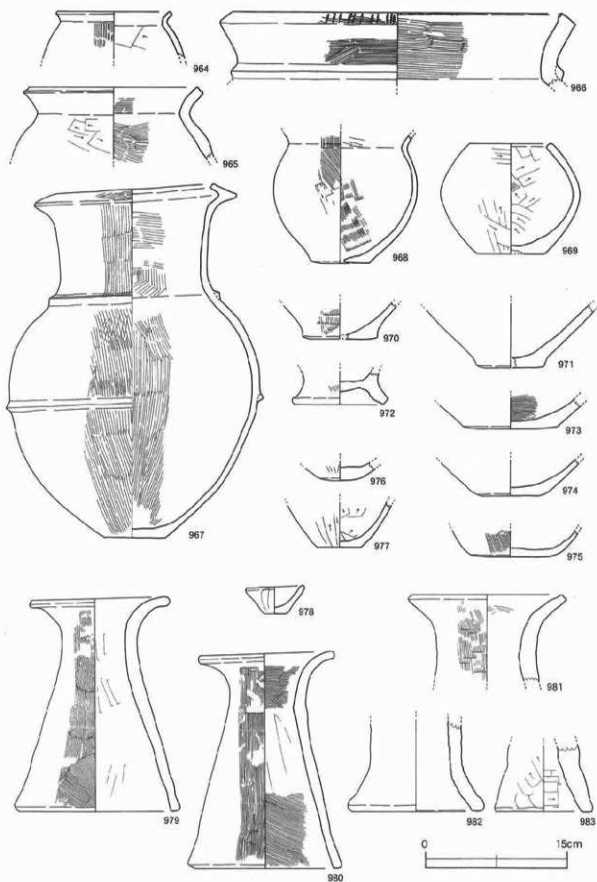
第142図 1号溝出土土器実測図 [1/4]

7号溝 (SD-07)

調査区西側を東西方向に延びる溝である。SD-01を切る。規模は検出全長2.8m、幅0.62m～0.86m、深さ0.15mを測る。溝内埋土は明灰色粘質土で、底面レベルは西に向かい下がってゆく。出土遺物は確認出来なかった。

8号溝 (SD-08)

調査区中央東側を南北方向に延びる溝である。北端は攪乱により失っており、南端は調査区外に延びてい



第143图 2号溝出土土器实测图 [1/4]

る。規模は検出全長15m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。底面レベルは南に向かい下がってゆく。

出土遺物は確認出来なかった。

9号溝 (SD-09)

調査区中央を南北方向に延びる溝である。SD-06にその殆どを切られ詳細は不明である。規模は検出全長7m、幅0.7m $\pm$ 、深さ0.1mを測る。底面レベルは南に向かい下がってゆく。出土遺物は確認出来なかった。

溝状遺構出土遺物

土器 <第142図・143図>

936~963はSD-01出土土器で、936・937は土師器の小皿である。径は9cm~10cm程で非常に浅い。937は底部に板目瓦痕が認められる。938~946は土師器の坏で、体部が直線的なものと内湾するものがある。口径は15cm~17cmとやや大型で、底部は糸切りとヘラ切りが混在する。947~950は瓦器碗。951・952は灰釉陶器で、同一個体と思われる。二耳壺、又は、三耳壺で内外面共に淡白黄色を呈している。953~957・959~963は白磁で、953は碗Ⅲ類、954は皿Ⅲ類、956はV-4類、957は碗Ⅶ-1類で、外底面に「十」又は「×」字の墨書がある。959~961は同安窯系の碗で、960・961はV-4b類。962・963は口縁部に玉縁を有し、釉は体部上半までの施釉となっている。Ⅳ類か。

964~983はSD-02出土土器で、964・965は甕形土器。967~969は壺形土器で、967の複合口縁壺は頸部幅が非常に太い。970~977は甕形・壺形土器の底部破片で、974・975の底部から胴部への立ち上がりは丸みを帯びている。978はミニチュアの鉢形土器。979~982は器台で、979・980は平成14年11月に開催された親子遺跡発掘体験の折に、体験に参加した子供が溝底付近で掘り当てたものである。ほぼ完形の優品である。983は支脚の脚部か。

(5) その他の遺構

1号不明遺構 (SX-01)

調査区中央南端付近で検出した不整形を呈する不明遺構である。SD-02の一部を黒茶色系の粘質土が覆っている。周辺にはやや不規則気味ではあるが小ピットが配されており、一部ではあるがピット内埋土に焼土が見られた。また、SX-01の主体遺構であるSK-36内にも焼土が入っており、周辺の状況とあわせて442号線バイパス建設事業地内では大型の掘立柱建物が検出されており、関連づけた全容についての記述は今回報告では割愛させていただき、SD-01同様バイパス建設事業に係る発掘調査報告にその詳細を委ねたい。

2号周溝状遺構 (SX-02)

調査区中央南端で検出した周溝状の遺構である。長軸方向は不明。規模は検出全長5.0m $\pm$ 、幅2.8m $\pm$ 、深さ0.18m~0.33mを測る。南側延長部分は国道442号線バイパス西山ノ上遺跡側に延びており、詳細はバイパス建設事業に係る発掘調査報告に委ねたい。

3号周溝状遺構 (SX-03)

調査区北側で検出した隅丸長方形を呈する周溝状の遺構である。長軸をN-18°-E北西に取る。規模は7.8m $\times$ 6.7m~7.36m、深さ0.48m~0.56mを測る。周溝部の掘り方断面は逆台形を呈しているが、壁は垂直近くに落ちる。

底面はほぼフラットのまま全周する。傾向として、北西隅に向かい底面が広がり、北西の隅部は極端にその幅を広げ、やや張り出し気味の状況を示している。遺物は弥生式土器等が出土したが、器形が明確なものが少なく、図示はしなかった。弥生時代後期後半頃と考えられる。

持田	土器番号	発掘番号	出土遺構	種類	形状	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調・胎土・焼成	備考
114	745	120	S B-03	弥生式土器	カメ	14.2			外ヘラ調整、内ハケ	淡黄褐色	
*	746	03	*	*	*	17.5			外タテハケ、内ナデ	暗黄茶灰褐色	スス付量
*	747	106	*	*	*	17.3			外ハケ、内ナデ、押王痕	黄茶褐色	※、外底黒斑有
*	748	104	*	*	*	24.0			内外ヒモハケ	暗黒褐色	
*	749	103	*	*	*	26.0			*	暗黄黒褐色	スス付量
*	750	147	*	*	*	24.0	8.1	34.6	内ナデ	暗黄茶褐色	黒斑有、スス付量
*	751	07	*	*	*		7.7		内ハケ	暗黄茶褐色	スス付量
*	752	08	*	*	*		8.6		内ハケ	黄茶灰褐色	
*	753	146	*	*	二重口縁ナデ	20.2			内外タテヨコハケ	黄褐色	
*	754	06	*	*	ツボ		8.0		外タテハケ、内ヘラ調整	暗黄灰褐色	
*	755	04	*	*	ツボ		8.7		内ハケ	暗黄茶灰褐色	
*	756	11	*	*	器台		14.0		外タテハケ、内ナデ、ヨコハケ	茶褐色	
115	757	122	S B-08	*	カメ	18.0			外内ヒモタテハケ	暗褐色	黒斑有
*	758	127	*	*	カメ	20.0			内ナデ、内タテハケ	淡黄黒灰褐色	
*	759	131	*	*	カメ		8.3		外ナデ、内ヘラ調整	黄茶褐色	
*	760	121	*	*	カメ		8.0		外タテハケ、内斜ハケ	暗黄黒灰褐色	
*	761	119	*	*	カメ		7.6		外ハケ、内ナデ	淡黄灰褐色	
*	762	129	*	*	二重口縁釜	20.0			※、※	暗茶褐色	黒斑有
*	763	128	*	*	*	20.0			外斜ハケ、内ヨコハケ	黄茶褐色	
*	764	120	*	*	*	13.0			内外ヨコハケ	黄灰褐色	
*	765	124	*	*	無損釜	14.4			※ 斜ハケ	暗褐色	スス付量
*	766	126	*	*	鉢		4.0		外ヘラ調整、内ナデ	*	
*	767	138	S B-09	*	ツボ	20.2			外タテハケ、内ナデ	暗黄茶褐色	
*	768	136	*	*	ツボ	17.7			外タテハケ、内ヨコタテ	暗黄茶褐色	
*	769	141	*	*	二重口縁釜	20.2				淡黄褐色	
*	780	145	*	*	カメ	15.0			外タテハケ、内ヘラ調整、斜ハケ	暗黄茶褐色	
*	781	143	*	*	カメ				外タテハケ、内ナデ	暗黄褐色	
*	782	15	S B-10	*	ミニチュア				外ヘラ調整、内ナデ	黄茶褐色	
*	783	217	S B-11	*	カメ				外ハケ、内ナデ	*	
*	784	204	*	*	カメ				外ナデ	淡茶灰褐色	
*	785	216	*	*	鉢				外ハケ、内ヘラ調整	黄褐色	
*	786	215	*	*	鉢				内外ナデ	*	
*	787	203	*	*	鉢				外不明、ハケ	*	黒斑有
*	788	202	*	*	鉢				外斜ハケ、内タテヨコハケ	暗黄褐色	黒斑有
*	789	240	*	*	高坏				内外タテハケ、内ナデ	黄褐色	
*	790	239	*	*	高坏				※、※	*	
*	791	211	S B-12	*	無損釜				外タテハケ、内ヨコハケ	茶褐色	
*	792	21	S B-13	*	カメ				外ヨコナデ、内ヨコハケ	暗黄褐色	スス付量
*	793	19	*	*	カメ				外タテハケ、内ヨコハケ	黄茶褐色	*
*	794	23	*	*	カメ				外タテハケ、内ハケ	暗黄褐色	*
*	795	208	*	*	カメ				ハケ	*	*
*	796	210	*	*	カメ				外ハケ、内ナデ	淡黄褐色	*
116	797	20	*	*	壺				外ハケ、内ヨコハケ、ナデ	暗黄茶褐色	
*	798	22	*	*	鉢				ヨコハケ	*	黒斑有
*	799	209	*	*	支脚				外タテハケ、内ヘラ調整	黄灰褐色	
*	800	24	*	*	ミニチュア				ヨコナデ	黄茶灰褐色	
*	801	227	S B-14	*	壺				外不明、内ナデ、ハケ	黄褐色	スス付量
*	802	225	*	*	*				外ハケ、内ナデ	黄茶褐色	*
*	803	13	*	*	カメ				内外斜ハケ	暗黄灰褐色	*
*	804	222	*	*	カメ				外タテハケ、内ナデ	黄褐色	*
*	805	220	*	*	カメ				ナデ	茶黄褐色	
*	806	221	*	*	カメ				外ヘラ調整、内ナデ	茶褐色	黒斑有
*	807	231	*	*	カメ				内外ヘラ調整	黄灰褐色	

770～779まで欠番

(調整は(外)は外面、(内)は内面を示す)

坪図	土器番号	実測番号	出土遺構	種 類	機 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調 整	色調、胎土、焼成	備 考
116	808	12	S B-1 4	弥生式土器	鉢	17.6	5.8	10.5	外ハケ	茶褐色	
※	809	230	※	※	器台		12.8		外タテハケ、内ヨコハケ、(ハ)内ハ	暗赤灰褐色	
※	810	42	S B-1 5	※	ツボ	13.6			ハケ	黄茶褐色	
※	811	37	※	※	カメ	22.0			外ハケ、内ヨコナデ	黄茶灰褐色	
※	812	34	※	※	ツボ	14.0			外タテハケ	暗黄茶灰褐色	
※	813	52	※	※	長頸壺	12.4			外タテハケ、内ハケ	黄茶褐色	
※	814	45	※	※	カメ		6.5		外ハケ、内ナデ	※	
※	815	31	※	※	カメ		6.0		外タテハケ、内ナデ	暗黄褐色	黒斑有
※	816	30	※	※	カメ		11.0		ナデ	黄茶褐色	
※	817	44	※	※	カメ		6.9		ナデ	暗黄褐色	スス付着
※	818	48	※	※	鉢	18.0			外ハケ、内ナデ	※	
※	819	40	※	※	鉢	13.8			※、※	黄褐色	
※	820	25	※	※	鉢	17.5	5.3	9.0	外ヘラ調整、ハケ、内ナデ	※	黒斑有
※	821	43	※	※	支脚	4.0	10.5	10.3	外タテハケ、内ヨコハケ	暗黄茶褐色	
※	822	26	※	※	ミニチュラ	6.6	2.2	5.0	ナデ	赤茶褐色	
※	823	33	※	※	※				※	黄褐色	
※	824	32	※	※	※				※	※	
117	825	246	S B-1 6	※	カメ	16.0			外ヘラ調整、内ナデ	暗茶褐色	
※	826	159	※	※	カメ	13.6			外タテハケ、内ナデ	※	
※	827	154	※	※	カメ	19.8			外タテハケ、内ヨコハケ	暗黄褐色	黒斑有
※	828	150	※	※	カメ	25.4			※、※	淡黄褐色	
※	829	236	※	※	カメ	27.6			※、※	黄灰褐色	
※	830	14	※	※	カメ	18.8			※、内斜ハケ	赤茶褐色	
※	831	162	※	※	カメ	20.6			※、内ナデ、ヨコハケ	暗黄灰褐色	
※	832	166	※	※	カメ		6.1		ハケ	黄茶褐色	
※	833	165	※	※	カメ		8.0		外ナデ、内ハケ	暗褐色	スス付着
※	834	160	※	※	カメ		6.6		外タテハケ、内斜ハケ	暗黄褐色	黒斑有
※	835	233	※	※	カメ		9.1		外タテハケ	黄茶灰褐色	スス付着
※	836	171	※	※	ツボ	17.7	7.4	33.4	外タテハケ、内斜ハケ	淡黄茶褐色	黒斑有
※	837	55	※	※	ツボ	16.0			ヨコナデ	茶褐色	
※	838	161	※	※	ツボ	20.6			外タテハケ、ヘラ描、内ヨコハケ	暗黄褐色	外ヘラ描の浅い沁線
※	839	170	※	※	ツボ		6.8		外タテハケ、内ヘラ調整	※	
※	840	244	※	※	ツボ		5.4		外ハケ、内ナデ	黄茶褐色	
※	841	238	※	※	ツボ		5.8		ナデ	茶黄褐色	黒斑有
※	842	57	※	※	ツボ		5.5		ヘラ調整	黄茶褐色	※
※	843	56	※	※	ツボ		8.4		外タテハケ、内ヨコハケ	※	
118	844	54	※	※	高坏	20.4			外※、内ヘラ調整	茶褐色	黒斑有
※	845	53	※	※	高坏	26.2			外ハケ、内タテハケ	黄灰褐色	※
※	846	60	※	※	高坏	29.5	18.0	24.2	外内タテヨコハケ	黄茶褐色	
※	847	248	※	※	鉢	9.7			外ハケ、内ナデ	黄灰褐色	
※	848	235	※	※	鉢	15.0			外タテハケ、内ナデ	※	
※	849	153	※	※	鉢	19.2			外※、内ヘラ調整	明黄灰褐色	
※	850	158	※	※	鉢	25.6	6.2	13.7	※	暗黄灰褐色	
※	851	151	※	※	器台	8.6			外ハケ、ヘラ調整、内ナデ	暗黄茶褐色	
※	852	152	※	※	器台	10.1			外タテハケ、内ナデ、(ハ)内ヘラ調整	黄茶褐色	
※	853	146	※	※	支脚	5.6	14.2	11.8	※、内タテヨコハケ	※	
※	854	149	※	※	支脚	5.6	11.6	8.9	外タタキ、内ナデ	暗黄褐色	
※	855	59	※	※	鉢、手付	3.4	3.0	4.5	外ヘラ調整、内ナデ	茶褐色	
※	856	245	※	※	ミニチュラ		3.6		ナデ	暗褐色	
※	857	259	S B-1 7	※	ツボ	—	—	—	外タテハケ	黄灰褐色	
※	858	255	※	※	ツボ	10.0			ヨコナデ	暗茶褐色	
※	859	258	※	※	カメ	29.0			ハケ、ナデ	黄灰褐色	
※	860	257	※	※	カメ		7.7		外タテハケ、内ヨコハケ	淡黄褐色	

(調整は(外)は外面、(内)は内面を示す)

第10表 西山ノ上遺跡 2次調査 出土土器観察表 その2

採出 土器号	発掘 期別	出土 遺構	種 類	機 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調 整	色調、胎土、焼成	備 考	
118	861	256	S B-1 7	弥生式土器	鉢	11.6	4.4	5.5	外ナデ、内ヘラ調整	暗茶褐色	
126	890	109	S B-0 5 (竪立)	*	カメ	23.0			内ヨコハケ	淡褐色	
*	891	110	*	*	カメ	22.2		*	*	暗褐色	スス付量
*	892	113	S B-0 6	*	鉢	17.6			ナデ	暗灰色	
*	893	108	*	*	高杯	18.4			内ナデ	丹塗	
*	894	112	*	*	ツボ		7.6		タテハケ	暗黄茶褐色	
136	895	196	S K-0 5	*	カメ	25.8			外ハケ、内ナデ	淡黄褐色	
*	896	193	*	*	カメ		7.3		外ハケ、内ナデ	淡黄灰褐色	
*	897	182	*	*	カメ		7.1		外タテハケ	暗黄褐色	
*	898	187	*	*	カメ		6.3		外タテハケ、内ナデ	暗黄茶褐色	
*	899	184	*	*	カメ		6.9		*, *	黄茶褐色	
*	900	183	*	*	カメ		9.1		ナデ	暗黄褐色	
*	901	192	*	*	壺	16.4			外不明、ナデ	赤茶褐色	
*	902	191	*	*	ツボ		8.0		外内ナデ	淡黄褐色	
*	903	186	*	*	壺		6.5		外ヘラ調整、内ナデ	暗黄褐色	黒斑有
*	904	188	*	*	支脚				外ナデ、穿孔	黄褐色	
*	905	271	S K-0 7	土師器	杯	10.0	7.4	1.1	ナデ、糸切り	淡色	
*	906	272	*	黄磁	皿	11.0	8.6		底輪	淡黄色、光沢のある釉	内面に黒描き文様
*	907	302	S K-1 6	黄磁上覆		31.0	7.5	42.8	外タテハケ、内ナデ	暗茶褐色	黒斑有
*	908	294	S K-2 4	黄磁	皿	34.0	7.3	39.3	外みぎき、タテハケ、内みぎき	黄茶褐色	
*	909	276	S K-3 6	土師器	皿	8.0	5.4	1.4	ナデ、糸切り	淡黄灰褐色	
*	910	275	*	*	皿	9.4	7.2	1.1	ナデ、糸切り	淡黄色	
*	911	274	*	*	皿	10.0	8.2	1.1	ナデ、糸切り後板目目煮	淡黄褐色	
*	912	278	*	瓦器	皿	10.0	6.0	1.7		黒灰褐色	
*	913	277	*	土師器	杯		12.0		ナデ、糸切り	淡黄灰色	
*	914	279	*	白磁	椀	16.6	6.8	6.5	底輪、底部回転ヘラ削り	淡黄灰色、光沢あり	
137	915	290	S K-3 8	弥生土器	カメ	23.4			外ヨコナデ、内不明	黄灰褐色	
*	916	287	*	土師器	皿	8.0	5.4	1.4	内ナデ、外ヨコナデ、糸切り、板目目煮	黄褐色	
*	917	285	*	土師器	皿	9.8	7.4	1.3	ナデ	灰黄褐色	
*	918	284	*	土師器	杯		6.6		外不明、内ナデ	灰色	
*	919	283	*	土師器	杯		6.8		ナデ	灰黄褐色	
*	920	281	*	土師器	杯		7.2			淡黄褐色	
*	921	283	*	瓦器	椀	16.0			外ナデ	灰褐色	
*	922	292	*	黒色土器	椀	17.0	6.5	5.7	ナデ	黒黄褐色	
*	923	289	*	白磁	椀	16.0			外内底輪	灰色、光沢あり	
*	924	289	*	白磁	椀		6.0		底輪、底部回転ヘラ削り、内面一部削製	*, *	
*	925	70	S K-4 0	弥生土器	ツボ		7.8		外ヘラ調整、内ナデ	暗黄灰褐色	黒斑有
*	926	71	*	ツボ			8.0		外タテハケ、内ナデ	*	
*	927	73	*	*	カメ	22.2			*, *	暗黄茶褐色	スス付量
*	928	75	*	*	カメ	32.0			外タテハケ、内ナデ	暗黄灰褐色	
*	929	74	*	*	カメ	38.4			外ナデ、外ハケ、内ナデ	黄褐色	
*	930	197	S K-4 2	*	壺		9.1		外タテハケ、内ナデ	暗黄褐色	
*	931	198	*	*	壺		7.3		外タテハケ、内ナデ	*	

(調整は(外)は外面、(内)は内面を示す)

第10表 西山ノ上遺跡 2次調査 出土土器観察表 その3

採掘	調査年	発掘年	出土遺構	種類	形状	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調・土質・焼成	備考
142	936	409	SD-01	土師器	皿	9.0	6.4	1.4	外ナデ、板目圧痕、内ナデ	淡黄褐色	
*	937	410	*	土師器	皿	10.0	7.8	1.3	*、*、*	*	
*	938	407	*	土師器	杯	15.8	10.5	3.6	*、未切り、板目圧痕	暗黄灰褐色	スズ付蓋
*	939	297	*	土師器	杯	15.6	10.5	3.5	外ナデ、未切り、内ナデ	黄褐色	
*	940	66	*	土師器	杯	16.6	12.3	3.6	外コナデ、未切り・板目圧痕、内ナデ	黄茶褐色	
*	941	78	*	土師器	杯	15.9	11.1	3.5	外コナデ、ヘラ調整、内ナデ、コナデ	黄褐色	
*	942	80	*	土師器	杯	14.4	11.1	3.4	外コナデ、板目圧痕、内コナデナデ	*	
*	943	298	*	土師器	杯	15.5	10.2	3.0	外未切り、コナデ、内ナデ	淡黄灰褐色	黒斑有
*	944	299	*	土師器	杯	16.0	10.6	3.4	外ナデ、未切り・板目圧痕、内コナデナデ	淡黄褐色	
*	945	79	*	土師器	杯	16.8	12.7	2.8	外ナデ、未切り、内ナデ、コナデ	淡黄灰褐色	
*	946	330	*	土師器	杯	16.6	10.8	3.8	外ナデ、板目・未切り、板目圧痕、内コナデ	淡黄褐色	
*	947	82	*	瓦器	碗	9.0	6.4	1.4	外コナデ、ヘラ削り、内ナデ	*	
*	948	411	*	瓦器	碗			6.4	外コナデ、内ナデ	暗灰色	
*	949	61	*	瓦器	碗	16.8	6.8	5.9	*	黒灰乳灰色	
*	950	414	*	瓦器	碗	16.8	5.8	6.3	外コナデ、内ナデ	黒灰褐色	
*	951	84	*	陶器	甕	10.0			外コナデ、内ヘラ調整	淡黄灰褐色	胴部2条の文線(外)、胴部に取手付
*	952	76	*	陶器	甕		7.0		外胴部ヘラ削り、未切り・板目圧痕、内胴部ナデ	淡黄灰褐色	
*	953	413	*	白磁	碗		6.6		外国転ヘラ削り、内施釉	淡黄褐色、乳濁色の釉	
*	954	401	*	白磁	碗	9.8	4.0	2.2	*、*	淡灰色、淡灰色	
*	955	402	*	白磁	碗	16.0			内外施釉	淡灰色、透明	
*	955	415	*	白磁	碗	18.0			*	*、黄灰色	
*	957	300	*	白磁	碗		6.0		外国転ヘラ削り、内施釉	淡黄色	
*	958	416	*	龍泉?			5.6		施釉	灰色、緑灰色の釉	
*	959	332	*	白磁	碗	18.0			*	暗灰色、淡灰色の釉	
*	960	87	*	白磁	高台付椀	17.7	5.8	6.7	*、底部ヘラ削り	淡黄灰色、淡緑灰色釉	内面2条の文線
*	961	331	*	白磁	高台付椀				*、*	白灰色、淡灰青色の釉	内面彫刻文様
*	962	406	*	白磁	鉢(注口)	16.0			施釉	淡黄灰色、同色釉	
*	963	405	*	白磁	鉢(注口)	17.6			*	灰白色、灰色釉	
143	964	318	SD-02	弥生式土器	カメ	12.0			外タテハケ、内ヘラ調整	黄茶褐色	
*	965	324	*	*	カメ	17.8			外ヘラ調整、内コナデ	淡黄褐色	
*	966	315	*	*	カメ	34.5			外内コナデ、内圧痕	淡褐色	
*	967	322	*	*	ツボ	16.7	5.5	36.8	外タテハケ、胴底裏、内タテコナデ	黄明茶褐色	黒斑有
*	968	88	*	*	ツボ		5.2		外内ハケ	暗茶黄褐色	* 底部に突孔有
*	969	309	*	*	無縁壺	8.6	7.0	11.7	*、ヘラ調整	黄茶褐色	黒斑有
*	970	305	*	*	壺又は甕		8.0		外ハケ	暗黄褐色	
*	971	306	*	*	*		7.0		ナデ	淡黄褐色	
*	972	310	*	*	*		9.3		ハケ、ナデ	*	
*	973	327	*	*	*		10.0		外ナデ、内コナデ	暗黄褐色	
*	974	326	*	*	*		7.0			黄褐色	
*	975	312	*	*	*		9.1		外ハケ、内ナデ	淡黄灰褐色	
*	976	307	*	*	*		4.6		外ハケ、内ナデ	暗茶灰黒褐色	
*	977	320	*	*	*		4.5		内外ヘラ調整	暗茶褐色	
*	978	199	*	*	ミチユキ	5.8	2.4	2.9	*、ナデ	淡黄茶褐色	
*	979	101	*	*	器台	14.2	17.5	22.6	外タテハケ、内ナデ、ヘラ調整	暗黄茶灰褐色	
*	980	201	*	*	*	13.8	16.3	22.8	外タテハケ、内コナデ	黄茶赤褐色	
*	981	321	*	*	*	16.0			外タテハケ、内ナデ	暗黄褐色	
*	982	314	*	*	*		14.2		ナデ	淡黄褐色	
*	983	313	*	*	支脚		10.2		ヘラ調整	黄茶褐色	

(調整は(外)は外面、(内)は内面を示す)

第10表 西山ノ上遺跡 2次調査 出土土器観察表 その4

IV まとめ

西山ノ上遺跡の所在する室岡台地上は、以前より土器や石器の表出状況から弥生時代の遺構が密集する地区として知られていた。ここに調査のメスが入ったのは昭和37年・38年調査の亀ノ甲遺跡からであり、弥生時代後期の墳墓群と共に弥生時代前期後半頃の大溝（1号溝）が検出され、下層から今日「亀ノ甲タイプ」と呼ばれる刻目突帯文系土器群が多量に出土した。この発見は八女地方の農耕文化伝播・形成を考える上で不可欠な資料を提示したばかりでなく、亀ノ甲遺跡以北の台地上に大規模な弥生遺跡が存在する事を予見させるには十分のものであった。続く昭和46年には福岡県教育委員会の手により九州縦貫自動車道建設に係る事前発掘調査が台地西端部分で行われ、弥生時代後期前半～後半までの良好な土器資料が提示された。昭和56年には山ノ上遺跡（2次調査は昭和59年、3次は昭和61年）、昭和58年には北小路遺跡が発掘調査され、台地上は弥生時代全般に渡る遺跡群の宝庫である事が確実となった。

調査は当初の予想通り、堅穴・掘立柱の建物群の検出に終止した。特に9棟の堅穴式建物及び1基の土壇からは総数400点を超える鉄片類や大型砥石、被熱硬化面などの鍛冶関連遺物・遺構が検出され、又、調査区西部において同時に調査を行った南北方向に軸をとる長大な環濠の検出とあわせ、村上恭通氏の言われる弥生時代後期における「鉄器製作工房」の様相を呈した遺構群の発見として、極めて貴重な資料を得る事が出来た。

しかしながら、現在八女地方における弥生時代後期の土器形式の詳細な検討は今だ発展段階にあり、筆者の浅学も手伝って、鍛冶関連遺構の変遷過程を正確に把握する事が出来なかった。今後は調査精度の向上に加え、筑後地区の弥生後期土器を注意深く検討する必要性を強く感じた。

以下において、本調査により判明した事象について、いくつか言及したい。

1 堅穴式住居（建物）等出土土器概観

本調査（1次・2次）においては様々な遺構から多種多様な出土遺物が見られたが、本稿では堅穴式住居（建物）出土の土器を中心に概観を行い、その前後関係を把握する事に力点を置いて作業を進めた。

ただし、筆者の浅学さに起因する内容の希薄さは否定のしようがなく、後述する分類の疎雑さは弁解の余地も無い事を最初にこたわっておきたい。

まず、比較検討する資料の抽出であったが、検出された堅穴式住居としたものには9軒の堅穴式建物が含まれており、資料数の乏しさは否めなかった。幸いそれぞれの遺構に通ずる共通項がいくつか見いだせた為、これらを用い分類を行い、中型の甕形土器・小型の甕形土器については既に3分類、甕・甕形土器の底部（中型品以上を基準としたが、一部小型も含む）については4分類を行った。

中型甕形土器

- I-1 類 長く外方に延び、頸部は強く屈曲する。内面稜線は鈍い。
- I-2 類 口縁部形態はI-1類と大差ないが、頸部に1条の突帯がつく。
- II 類 長く外方に延び、内面稜線は鈍い。I-1類に比べやや口縁が立ち上がる。最大径は胴部上半にある。
- III 類 内面稜線は鋭く、明瞭な「く」の字を呈す。口縁部を若干肥厚させる。

小型甕形土器

- I 類 外方に長く強く屈曲。内面稜線はやや鈍い。胴部最大径は上半部にある。
- II-1 類 長く強く屈曲し「く」の字状を呈す。内面稜線は明瞭で、口縁端部は平滑。
- II-2 類 短く強く屈曲する。内面稜線は明瞭で、口縁端部は平滑。
- III 類 長く上方に延び、屈曲鈍く、頸部も明瞭でない。胴部は直線的に直下へ延びる。

底部

- I 類 完全な平底。

- Ⅱ 類 平底だが、端部に丸みを持つもの。
 Ⅱ-1 類: 端部立ち上がりが外反するもの。
 Ⅱ-2 類: 端部立ち上がりが内湾するもの。
 Ⅲ 類 僅かにレンズ状を呈するもの。
 Ⅳ 類 凸レンズ状を呈するもの。

前述した通り、本遺跡出土資料は数的に乏しく、完形を復元出来たものはごく僅かであった。しかし完形復元可能な一部の資料から、中型壺形土器の口縁Ⅱ類に底部Ⅱ-1類がセットとなり、胴部最大径は胴部の上半部にある事が分かった。この土器と相伴する資料には、高三瀹式と下大隈式の両要素をもつものがあり、時期区分にはそれらを基準として用いた。

	中型壺形土器(口縁部)	小型壺形土器(口縁部)	底部形態
A期	I-1, I-1	I, II-1	I
B期	II	II-2	II, III
C期	III	III	IV

第11表 西山ノ上遺跡 3期区分別土器対応表

2 竪穴式住居(建物)出土土器の時期について

八女・筑後地域においては、弥生時代後期における土器編年は未だ発展段階である事は前述したとおりであるが、先学の功績により狐塚遺跡(筑後市)、室岡遺跡群(八女市)においてその基準の一端が示されている。近年では鶴田西牛ヶ池遺跡(筑後市)の調査において力の入った報告が成されているが、後期初頭～後半までを網羅する資料については未だ潤沢に存在するとは言えない状況である。

本稿では、森貞次郎氏が提唱した「高三瀹式」・「下大隈式」・「西新式」の3期区分に、先学の編年を対照し、本遺跡内の竪穴式住居等から出土した土器の時期比定を行った。

結果的には弥生時代後期前半～後半までの資料を追加提示出来た事となり、今後の編年の研究に期待をよせるところである。

上述の時期比定を表に明示すると、以下の区分となる。

筑前地域	高三瀹式	下大隈式	西新式
室岡遺跡群	室岡Ⅰ式・室岡Ⅱ式	室岡Ⅲ式	
狐塚遺跡(上北島式)			上北島Ⅰ式・Ⅱ式
西山ノ上遺跡(1・2次調査)	A期	B期	C期

第12表 西山ノ上遺跡 時期区分表

3 出土土器による竪穴式住居(建物)の時期的区分について

前掲表に基づき、各遺構における時期的区分は以下の通りである。

A期	SB-04, 08, 16, 19, 23, 25
B期	SB-01, 03, 05, 07, 11, 15, 18(A・D), 24, 26, 27, 28, 42
C期	SB-21, 30, 29 [SB-18(B・C)]

第13表 弥生時代後期 竪穴式住居(建物)等 時期別一覧表 (1次調査分)

4 鍛冶関連遺構について

本遺跡内において検出した鍛冶関連遺構、及び、鉄器類を出土した竪穴式建物等は10遺構に及ぶ。この中には、鉄片類の出土は見られなかったものの、竪穴式建物の中央付近床面に高温で被熱したと考えられる黒紅色硬化面があり、又、この硬化面が村上恭通氏の言われる掘り窪み等の施設を殆ど持たないⅣ類炉の形

態に非常に近似していた点や、本来建物に伴うと考えられる地炉がこの硬化面とは別に検出されている事などから、ここでは鍛冶関連遺構の範疇に入れる事とした。時期別に見ると、14表の通りとなる。

また、遺構別にみた鉄器・鉄片類の出土内容を15表に示した。但し、表中の出土数は図化したものの内、分類に耐え得るものをセレクトした結果であり、微少な鉄片や分類不可のものは表中には出土数として反映していない。

A期	SB-04, 06, 08
B期	SB-01, 05, 07, 18(A・D)
C期	SB-21, 30 [SB-18(B・C)]

第14表 鍛冶関連遺構等 時期別一覧表

時期別の遺構内容を概観すると興味深い事象が抽出出来た。

まず、A期においては鑄造鉄斧片・板状不明鉄器片・製品（鎌・ヤリガンナ）の他、鉄片類ではA・B・C・F類が共通して出土しているが、D・E類の出土は認められなかった。また、SB-08において検出した比較的高い温度で形成されたと思われる被熱硬化面も、非常に小規模で脆弱なものであった。SB-04からは多量の鑄造鉄斧片と共に泥岩製の非常に目の細かい砥石が出土しており、状況的には中期後半頃までの再加工作品の存在をイメージさせるが、出土品中には認められなかった。

B期においては、引き続き鑄造鉄斧片や鎌・鍬・鋳の製品の出土が見られる他、鉄片類ではD類が出現するようになる。また、SB-01やSB-07で見られた被熱硬化面と鉄片類の同時出土遺構とは別に、被熱硬化面のみを有するSB-18A・D区が新たに出現する。当該期の堅穴式住居出土鉄器を概観すると鋳（完形、破片）の出土が目立ち、SB-28からは破損してはいるものの、袋部端部を折り曲げた有袋鉄斧（復元完形品）が1点出土している。

出土遺構	製品	板状不明鉄器片	棒状不明鉄器片	A1	A2	B1	B2	B3	C	D	E	F
SB-01	2	0	0	0	1	0	3	0	0	0	0	3
SB-04	7	4	0	1	1	1	2	0	1	0	0	4
SB-05	2	0	0	1	4	2	1	0	0	1	0	5
SB-06	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2
SB-07	3	2	0	4	2	1	6	0	0	2	0	6
SB-08	0	0	0	1	0	1	2	0	1	0	0	0
SB-18(A・D)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SB-18(B・C)	19	9	1	3	16	11	14	1	0	7	4	8
SB-21	8	3	3	3	13	6	22	6	3	4	2	10
SB-30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第15表 鍛冶関連遺構別 出土鉄片類一覧表

C期では鑄造鉄斧片を除くA・B期のほぼ全てを継承しつつ、一部で新たな要素が加わるようになる。

これまでの鉄器・鉄片類に加え、棒状不明鉄器片・鉄片E類が出現する。また、当該期における2棟1基の鍛冶関連遺構の内、SB-30はB期のSB-18A・D区と同様の被熱硬化面のみを有するもので、建物中央に位置する地炉とは形状・内容共に異なっている。被熱硬化した面は、若干硬化した盛土上にあり、黒紅色を呈し硬化度は非常に高い。被熱硬化面直上には木炭と思われる炭化物が遺存し、北西50cmには扁平円形の石材が床面直上に据えられている。鉄片類は出土していない。SB-21からは多種多様な鉄器・鉄片類が出土した。鉄片類のみ見れば、本遺跡で出土した全種類の鉄片が出土しており、その総点数も120点を超えている。建物中央には地炉とは異なる掘り窪みを持たない非常に弱い被熱痕跡が残っているものの、その性格については判然としない。SB-18B・C区は建物の略記号を用いているが、内容は楕円形を呈す断面掘り鉢状の土壌である。土壌内からは多量の被熱石材・大型石材・土器・石器群と共に、非常に多量の鉄器・鉄片類が出土した。散在状況を観察すると南東側からの投棄が考えられ、当土壌を弥生時代後期後半頃の廃棄土壌と判断した。

これから考えられる当遺跡内での鍛冶関連遺構における時期別特徴を示すと、

A期：①鉄器出土状況が、中期的なイメージを残すものと後期的様相を見せるものが見受けられる。

②SB-04に鑄造鉄器片が集中する傾向がある。

- ③SB-04を除き製品、板状不明鉄器片、棒状不明鉄器片が殆ど認められない。
- ④鉄片A類・B類は見られるものの、共に発生すると考えられるE類の出土が見られない。

B期：①被熱硬化面の認められるSB-07にのみ鑄造鉄器片が出土。また、A・B期を通じ種類の多様性と共に出土数位的優位性が見られる。

- ②鉄片類の出土なく、未還元被熱硬化面（円形）が存在する遺構の出現。
- ③A期同様、鉄片E類が見られない。
- ④鉄片D類の集中傾向。
- ⑤鏝・鏝の集中傾向。（当該期の住居群と同様）

C期：①鉄片類の出土なく、未還元被熱硬化面（双円形）が存在する遺構の継続。

- ②SB-21への一極集中傾向。特に鉄片B2類は数突出を見せる。
- 破鏡（内行花文鏡）の出土。
- ③鉄片E類、棒状不明鉄器片の出現。
- ④大型廃棄土壌の出現。
- ⑤SB-21、及び、SB-18（B・C区）における鉄片類出土状況の類似性。

以上の諸特徴を列記したが、時期の変化と共に遺構内で汲まれる鉄器・鉄片類に変化が見られ、また、各時期の遺構構成における変化は、遺構間における作業工程上の役割変化が存在していた事を示唆している。B期に見られる鉄片類を伴わない被熱硬化面の出現、及び、C期末頃と考えられる鍛冶関連遺物の廃棄土壌出現はとりわけ大きな変化であり、上述の内容を如実に捉えているものと思われる。

また、棒状不明鉄器片・鉄片B3・E類はSB-21とSB-18（B・C区）のみの出土であり、同時に鉄片A2・B1・B2類には数突出がある等、当該2遺構には鉄片類の出土数位的状況とその種類構成に特徴的な類似性があり、時間的な同時性と共に機能的リンクがあった事を示唆している。これらの点なども、遺構間の役割変化の更なる裏付けとして注目出来るのではないだろうか。

被熱硬化面については鉄片類や砥石等を伴うものとならないものに分けられる。鉄片類を伴わない被熱硬化面についての評価に関しては非常に苦慮するところであるが、鉄片類流入の可能性も完全には否定出来ないが、SB-01やSB-08のように建物床面上に貼付く状況で一部の鉄片類が検出される状況を見ると、本遺跡内検出の被熱硬化面については、鍛打を伴わない原始鍛冶内の一加熱工程を担う遺構であったと考えられはしないだろうか。

西山ノ上遺跡のA～C期を通じ、鍛冶関連遺構についていくつかの不明点も浮上して来た。

まず、各時期の中心遺構（建物）以外の遺構についての役割、A・B期には見られなかった鉄片E類がC期に集中して見られる事、C期の数位的優位性の原因、当地域のSB-18（B・C区）掘削当時の状況について等であるが、これらの点については紙面的・時間的制約もあり、言及はおろか触れる事も出来なかった。

反省の極みである。

V 結語

鍛冶関連遺構について、各遺構別の出土遺物状況における現状把握は行い得たものの、鍛冶関連遺構内での作業内容の復元や、当時、西山ノ上遺跡を取り巻いていた歴史的な背景等については全く言及出来なかった。特に鉄片類の分類結果と出土状況に係る因果関係を検証出来なかった事は、紙数的・時間的な制約があった事も事実であるが、なによりも自身の力量不足に拠る部分が大きく、各方面の方々に有益な御教示や御助言を頂いたにもかかわらず満足いく報告に成し得なかった事は、非常に悔やまれるところである。

作業内容等の検証については、今後の自身の大いなる課題として残させていただき、本文内容についての御批判・御叱責を出来るだけ多く賜りたい次第である。

最後になりましたが、株式会社 大石茶園の大石剛司社長、そして従業員の皆様には発掘調査から報告書作成に至るまで本当に厚い御協力を戴きました。感謝に耐えません。

VI 西山ノ上遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

九州テクノロジー・TACセンター

大澤正己

概要

弥生時代後期（約1900年前頃）に属する西山ノ上遺跡出土の鉄関連遺物を調査して、次の点が明らかになった。出土鉄器は古代中国の戦国時代以降に技術開発された鑄造系統なまし脱炭品で構成される。

鉄器の種類は、鑄造鉄斧、鑄造鉤（鉄削：脱炭処理）袋状鉄斧、鉄鏃、板状鉄素材及び鉄器製作時に鉄素材を鑿切りで派生した切片などである。これらの出土遺物から鉄器製作の鍛冶作業を想定すれば、羽口や鉄滓の出土は一切無くて、搬入鉄素材（棒・板状半製品）を鑿切り、火炙り曲げ加工、砥石研磨といった原始鍛冶的要素の強い性格である。

一方、鑄造品は器物中に鑄巣（ひけ巣）を生じたり、焼なまし脱炭品は脱炭不良品であり級外品の遺存であった。

1. いきさつ

西山ノ上遺跡は福岡県八女市大字室岡西山ノ上に所在する。国道442号線バイパス建設に関連した(株)大石茶園製茶工場移転工事に伴う事前調査で発見された遺跡である。

遺跡内は環濠を巡らせ、その中に調査区内で30軒近い竪穴住居跡の約半数から鉄器や切片が大量(約数百点)に出土した。

更に鉄器製作に関連する遺構や道具は、焼土面や作業台としての石、鑿や、砥石（粗・仕上含む）などであり、繰り返しになるが羽口や鉄滓は存在しない。

以上前述してきた鉄関連遺物を通して当時の鉄事情の実態を把握する目的から金属学的調査の運びとなった。なお供試材の選出に当っては福岡市教育委員会 長家伸氏の手を煩わせている。

2. 調査方法

2-1. 供試材

Table.1に供試材23点の履歴と調査項目を示す。

2-2. 調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の肉眼観察所見である。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の5倍、10倍もしくは20倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

滓中に品出する鉱物及び鉄部の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μ と1 μ で順を追って研磨している。なお金属組織の調査では腐食（Etching）液に5%ナイトル（硝酸アルコール液）を用いた。

(4) ビッカース断面硬度

滓中の鉱物と金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡を用いた。

(5) EPMA調査

別名X線マイクロアナライザーとも呼ばれる。

分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料をX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理して、データ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組成の微小域の組織同定が可能である。

3. 調査結果

(1) NYU-1. 鑄造鉄斧破片

平面が台形状の鑄造鉄器の破片で、ソケット部の痕跡を残す。鑄造鉄斧の刃部破片らしくもあるが、復元すると刃部幅が14cmを越えるため、鉄斧に断定するには些か懸念が生ずる。表面側は錆化するが芯部には金属鉄が遺存する。側面一部にクラックが発生していた。

Photo.14の1段目にマクロ組織を示す。組織は厚み6mm前後の鑄造鉄器の焼なまし脱炭品である。厚み中央に不定形の白色縁取りをもつ鑄果（ひけ果）が目をはく。この鑄果は鑄物内に空洞を生じたもので、この空洞は外部に通じており、焼なまし脱炭過程で酸素の供給があり、この為に強脱炭が局部的に進行し、この部分のみフェライト（Ferrite）化した現象を表わす。

一方、鑄果周辺は全面パーライト（Pearlite：フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織）の共析域（0.77% C）で、その上方に白色斑点状の個所は鑄込み時の白鑄鉄のレデブライト（Ledebulite：白色板状結晶は初晶のセメンタイトで、地はオーステナイト（常温でパーライトになる）とセメンタイトの共晶）を残存させる。

Photo.1の①～⑤に顕微鏡組織を示す。組織写真はマクロ組織で観察された鑄果を中央に置いて厚み方向全体を縦方向に撮影した。

⑤はマクロ組織の拡大である。一方①は研磨までナイタル腐食前の組織を示す。焼なまし脱炭としての900～950℃の加熱で白鑄鉄内部のセメンタイト（Cementite：Fe₃C）が凝集した後、黒鉛化した状態を示す。この塊状黒鉛の存在は、焼なまし脱炭組織の裏付け証拠となる。

②はマクロ組織で、白色斑点個所と称した白色部の硬度測定の結果を示す。値は418Hvと硬質でセメンタイト（Cementite：Fe₃C）に同定される。周辺に黒色部のパーライトが共存し、セメンタイトは鑄込み時の白鑄鉄レデブライトの残存と解釈される。③は鑄果周辺白色部フェライトの拡大である。白色フェライト基地に網目状の結晶粒界が観察される。硬度値は157Hvで、従来の70～80Hvに比較すると硬質となる。風化による時効劣化であろうか。

④は黒色緻密組織でパーライト域である。硬度値は353Hvとこちらも従来組織に比べて硬質な値となった。時効の他に硬化を目的に急冷処理、いわゆる焼入れが施された可能性も考えてよからう。外観でクラックの発生が指摘できたが、これも焼割れの現れであろうか。

Photo.23の1段目にEPMAによる反射電子像（COMP）と定量分析値を示す。製鉄原料の種類などの同定につながる鉄中の非金属介在物（鉄鋼中に介在する固形体の非金属不純物、つまり鉄やマンガ、珪素および燐などの酸化物、硫化物、珪酸塩などの総称、人間のDNA的なもの）の調査を目的としたかったが、該品には介在物が見付からず、頗る清浄な鉄との結論に加えて、内部クラックとその割れ目に発生した酸化鉄（FeO）の検出に止まった。定量分析値はCOMPに7の番号をつけた茶褐色多角形状結晶で87.8%FeOが得られた。減衰（げんすい）された値であるが、このFeOは酸化にもとずく二次的な派生物で、介在物ではない。熱処理に際して加熱温度が高過ぎると変形や亀裂発生のある恐れがある。この辺の不具合が内部クラックの発生とFeO晶出原因に繋がったのではなかろうか。

以上の所見から該品は鑄込みままの白鑄鉄製品は硬くて脆い欠点を焼なまし脱炭で材質改善を目ざす、中国古代の紀元前5世紀代に技術開発された可鍛鑄鉄製品に分類される。

(2) NYU-2. 鑄造鉄斧片

鑄造鉄斧刃部破片として採り上げられた。刃幅の両側面が欠失し、復元形状が定まらないが、片側面が直線状となり、くびれや撥型（ばちがた）の広がりがなく、中国の凹字型鋤を連想させる形態である。川越哲志の鑄造鉄刀の例として挙げた福岡・下稗田遺跡の鑄造品（前期後半、前期後半～中期中葉）や佐賀・惣座遺

跡(後期後半)の刃部に近似する雰囲気にあるが⁽⁴¹⁾、その特定は難しい。

Photo.14の下段にマクロ組織を示す。錆膨れを外すと8mm厚みの断面をもつ。錆化鉄遺存部分は共晶組成の白鉄組成の痕跡である。焼なまし脱炭の痕跡は認められなかった。

Photo.2の①～③に顕微鏡組織を示す。錆化鉄の組織痕跡からの情報である。白色板状結晶の初晶セメントタイトと、地はオーステナイト(常温ではパーライト)とセメントタイトの共晶であるレデブライトで構成された共晶組成の白鉄組成の痕跡となる。表層部①の左側に焼なまし脱炭の痕跡は残さない。

弥生時代の中国東北部産の鑄造鉄斧類は過去の調査例において、その殆んどが焼なまし脱炭が施されている⁽⁴²⁾、朝鮮半島側の梯形鉄斧以外は非脱炭品に遭遇した例が無い。該品は非常に希な事例となる。なお、紙面の都合から断面硬度の圧痕写真の掲載を割愛したが、レデブライト部分で85～285HVと低値側の異常値が得られている。白色部の金属鉄にみえる部分も錆化鉄になっていた。

(3) NYU-3. 不整形四角形状鉄片

不整形で長方形形状の鉄片である。長軸43mm、短軸18mmで厚みは錆膨れを入れて4mmを測る。赤褐色の鉄錆に覆われて金属鉄の残存はない。端部の一部に鑿工具の切断痕跡を残す。

Photo.15の1段目にマクロ組織を示す。供試材は短軸からの切出しで、長さは錆膨れを外して10.5mmを測る。切り口断面はゲージサイト化して僅かに凸レンズ状を呈する。

Photo.2の④～⑧に顕微鏡組織を示す。④は端部⑤⑥は中央部の代表組織で、全体に錆化が激しくて金属組織の痕跡は掴み難い。⑦⑧は表層側の局部組織で、ここで辛うじてフェライト基地に網目状の結晶粒界の痕跡が捉えられた。極軟鋼で、鑿切りに抵抗の少ない材質である。切片であって鉄器ではなからう。展伸状介在物が点在し、鍛造品と見做される。

(4) NYU-4. 鉄鏃

2mm前後の薄板を鑿切りした無茎鉄鏃である。基部にえぐりをつけて両端が脚状を呈する。簡素な造りである。マクロ組織をPhoto.15の2、3段目に示す。2mm厚みの薄板は錆化が激しくて中核部は空洞化する。左端は鑿切りで生じた返りを残す。

Photo.3の①～③は顕微鏡組織である。①は返り部の拡大組織で、パーライトもしくは結晶粒界の痕跡が観察される。②③は微細フェライトの結晶粒界の痕跡を示す。明瞭な鍛打の鍛接線は見当たらない。素性が判り難い薄板である。鑿切り加工の容易な極軟鋼であることは間違いない。

(5) NYU-5. 長四角形状鉄片(鉄削: 鈍破片か)

最大身幅が21mm前後を測り、横断面が三日月形を呈するところから鈍が想定できる鉄片である。現存長さが44mmで、刃部と基部の両先端を欠失してる。刃と身の両方の横断面が三日月形なら鑄造品(鉄削)の可能性が高くなる。

Photo.15の4段目にマクロ組織を示す。横断面は端正な三日月形を呈し、錆膨れを除くと身幅は14mmを測る。鈍が想定できよう。ただし、該品も内部の錆化が著しく大きく空洞化する。

次にPhoto.3の④～⑧に顕微鏡組織を示す。錆化の進行が激しくて局所的な組織の提示となる。④はゲージサイト(α -FeO·OH)であるが僅かに片状黒鉛とパーライト痕跡を残す。⑤⑥は層状組織のパーライトがかなり鮮明に認められた。更に⑦⑧は塊状黒鉛らしい痕跡と、フェライト基地に脱炭パーライト痕が観察できる。鑄造品で焼なまし脱炭処理を施した可鍛鉄製品に分類される。中国産の鉄削の流れを汲む製品ではなからうか。⁽⁴³⁾ 鉄削の検出は列島内での初例となりそうだ。

(6) NYU-6. 鉄鏃

小型の鉄鏃で基部側を残し、刃先側を欠失して残存長さ56mmを測る破片である。基部幅は29mmで闊をもち、刃部とは明瞭に区別できる。また、刃部を下にして折り返しは右側にきて鈍角を呈し、厚みは2mm前後であった。

Photo.16の上段にマクロ組織を示す。刃先折損側より供試材を採取した。断面全体が繊維状に腐食され、金属組織痕跡を読み取るには厳しい状態にある。左下には瘤状の錆化鉄があり、一体ものか異種付着物か判

断に苦しむ突起をもつ。

Photo.4の①～⑤に顕微鏡組織を示す。マクロ組織で述べたように全体が錆化鉄のゲーサイトである。①～③はフェライト基地に0.15%前後のパーライト痕跡を止める。この組織の撮影はマクロ組織でみた左下瘤状個所である。この種の組織は本体側にも表われていたので紙面の都合からこちら側のみを提示した。④⑤は厚み方向で中央部に位置し、白錆鉄のレデブライトらしくも見えるが錆化模様にもとれて明瞭さを欠く。更に2mm厚みの鉄素材にレデブライト痕跡が存在するとは常識的には考えられぬ事で理解に苦しむ。板范に鉄鉄を流し込み、固化した後の焼まし脱炭を施した鋳鉄脱炭鋼製品の不良品(中途脱炭)であろうか。そうすると鑄としての成形以前に割れが発生しそうである。錆化材であり結論を出しかねる。

(7) NYU-7. 長三角形鉄片

鋭角的に伸びた長三角形の鉄片である。残存長さは35mm前後で底辺幅12mm、厚みは錆膨れで肥大するが1.5mm程度の薄板であろう。錆化が激しくて原形を損なう。

Photo.16の下段に底辺寄りに切出した供試材のマクロ組織を示す。断面は錆膨れから大きく変形して瓢箪(ひょうたん)型を呈し、内部は空洞化して黒錆も外縁部を薄く形成するのみの腐食であった。

Photo.4の⑥～⑧に顕微鏡組織を示す。錆化鉄のゲーサイトは、金属鉄組織の痕跡を消滅させるまでに侵食されていた。推測するに該品は極軟鋼で鉄器でなくて切片であろう。

(8) NYU-8. 不整形鉄片

不整形を称しているが本来は二等辺三角形が想定される鉄片である。錆膨れが形状を不鮮明にしているが一边が20～25mm前後を測る。厚みは不均一ながら最も厚い個所は錆を含めて7mm程度が観察される。緩くく字状に曲り、2方向からの切り込みがみられた。

Photo.17の1段目にマクロ組織を示す。金属鉄は遺存せず錆化鉄のゲーサイトである。断面の左側が本来厚みで4.0mm前後を呈し、右側へ移動すると僅かに湾曲して厚みも徐々に狭まる。こちらも外縁部に黒錆を残して内部は大きく侵食されて虫喰い状となる。

Photo.5の①～⑤に顕微鏡組織を示す。①に最厚部分の全面を提示した。側面の内部寄りに金属組織の痕跡を辛うじて残す。塊状黒鉛とパーライト痕跡から白錆鉄の焼まし脱炭品と判別できる。②③は①上方の拡大組織で4点の塊状黒鉛と層状間隔のひらいたパーライト痕跡が捉えられた。同じく④⑤は①下方の拡大でこちらも塊状黒鉛とパーライトが観察できる。

該品は古代中国の技術開発にもとずく板范鋳込の焼まし脱炭処理を施した鋳鉄脱炭鋼製品に分類される。

(9) NYU-9. 不整形形状鉄片

35×17mmの台形状で厚み2mm程度の鉄片である。側面は鋳切りの雰囲気にあるが、こちらも錆化が激しくて酸化による膨らみをもつ。外観からも金属鉄の遺存は望めない。

Photo.17の2段目にマクロ組織を示す。断面は長三角形の片減りで内部は完璧に空洞化し、外縁部は薄く黒錆を残して形状を辛うじて保持する状態である。左側の最厚部分で2mmを測る。

顕微鏡組織をPhoto.6の①～⑤に示す。組織はすべて錆化鉄のゲーサイトになる。フェライト基地に極く微量のパーライトの析出が観察されて、炭素量は0.15%前後の極軟鋼に分類される。製造履歴の特定は難しい錆化であった。

(10) NYU-10. 三角形鉄片

13×21mmの錆化の激しい小鉄片である。赤褐色錆膨れ含みで厚みは3.5mm前後を測る。鋳切りの切片であろう。

Photo.17の3段目にマクロ組織を示す。断面は錆化鉄が楕円状に埋め、内部は2重に空洞化され、厚みは3.5mmを測る。

Photo.6の⑥～⑧に顕微鏡組織を示す。フェライト基地に極く微量のパーライトの析出した極軟鋼の痕跡だった。該品も残された錆化鉄断面からの製造履歴の特定は難しい。

(11) NYU - 11-1. 三角形鉄片

12×20mmで錆膨れを入れて6mm厚み程度の小型三角形鉄片である。鋳切り残片の可能性が高い。

Photo.18の1段目にマクロ組織を示す。断面は錆膨れを外すと2mm程度の内部に割れ口をもつ薄板である。全面が錆化されて金属鉄は残存しない。Photo.7の①～③が顕微鏡組織で、錆化鉄のゲーサイトになる。フェライト基地にパーライトが析出した痕跡で、炭素量が0.15～0.20%程度想定される。軟鋼レベルの鋳切りが容易な材質であった。

(12) NYU - 11-2. 板状鉄片 (異常錆膨れ品)

板状鉄片が異常な錆膨れを起して塊状にみえる供試材である。大きさは15×10×7mm程度となる。

Photo.18の2段目にマクロ組織を示す。断面は板厚が3mmを測る板状錆化鉄である。注目すべきは錆化した錆膨れが2段生じて空洞化している。この空洞の形状が一つは楕円状に、もう一つは三角形状である。2片の鉄片の固着かとも思われたが、詳細に観察すると同一固体からの発生であった。

Photo.7の④～⑧に顕微鏡組織を示す。錆化鉄のゲーサイトに錆化進行過程で生じたい白色斑点酸化鉄が点在するなかに、微小網目状フェライト痕跡に層状パーライト析出が認められる。マクロ組織で観察された楕円形状空洞化母材と、三角形空洞化母材ではフェライト結晶サイズに大差なく、両者は同一固体と考えられる。該品も極軟鋼に分類されて鋳切り素材として問題のない材質であった。

(13) NYU - 12. 長三角形鉄片

平面は鉄の茎を連想させるような長三角形の鉄片である。しかし、表面は平滑で、薄い鉄板状素材の鋳切りから派生した残片らしくも見える。現存長さ38mmで、底辺幅8mm、厚さは2mmを測る。

Photo.18の3段目にマクロ組織を示す。断面は板厚中央部の局部に空洞化をみるがその面積は狭く、黒錆の残存は良好の部類に属する。厚みはマクロ組織を実測すると2mmで表面荒れを僅かにもつが平坦度は保つ。Photo.8の①～③に顕微鏡組織を示す。金属組織は残さず錆化鉄のゲーサイトで、弱いながらもフェライト結晶粒の痕跡が読み取れる。該品も極軟鋼に分類されて、鋳切り成型の素材として問題のない材質であろう。

(14) NYU - 13. 二変状鉄片

無茎鉄線の切出し残材か、それとも鉄先端側の欠失を連想させる二変状鉄片である。現存長さ30mm、幅40mm、厚みは錆を含めて3mm前後を測る。供試材は縦方向の片側面より垂直に切出した。

Photo.19の1段目にマクロ組織を示す。錆化が著しく断面の中核部は腐食されて空洞化する。板厚を形成する外縁部は0.6mm程度の黒錆で外形が支えられている。

顕微鏡組織をPhoto.8の④～⑧に示す。フェライト基地には微細フェライトの結晶粒界が網目状に痕跡を残す。この場合の結晶粒界は腐食の具合で黒線⑥と白線⑧に分かれている。後者が錆化は軽い。該品も鋳切り成型には抵抗の少ない材質である。

(15) NYU - 14. 不整形鉄片

鋳切りで派生した残片の可能性をもつ不整形鉄片である。台形状残片の一部は棒状突出部をもち、ここは鈍角状の切り込み跡を呈する結果となった。棒状突出部を含めて長さは35mm、幅が20mm、厚さ3mmを測る小切片である。

Photo.19の2段目にマクロ組織を示す。断面内部は、著しく侵されて空洞化する。黒錆の残存は外縁部であって、これをもって錆化鉄は保持される。

Photo.9の①～③は顕微鏡組織である。錆化鉄のゲーサイトはフェライト基地に僅少量のパーライト痕跡が観察される。組織は不明瞭ながら極軟鋼の可能性をもち、鋳切り成型の容易な材質が想定される。

(16) NYU - 15. 長方形鉄板破片 (鉄素材)

厚手の鉄素材が想定できる供試材である。幅80mm、長さは破損して現存長さ50mmで、これは幾分伸びる可能性をもち、厚みを5mm前後を測る板材である。ただし幅を想定した側面のコーナー部に外圧にもとづく弯曲がみられ、鋳切り痕跡らしくもあり、更に対面側には鋳状工具痕らしき窪みが観察されて、切り

出し側の様相をそなえて、幅と長さの計測値が逆転するのかも知れぬ。いずれにしろ厚手の板状鉄素材の可能性は動かぬところのものである。

以上の如く外観形状からみると、板状范に溶銑（ようせん）を流し込み、固化した後に焼なまし脱炭を施した板状鑄鉄脱炭鋼製品の鉄素材が想定できる。

さて、内部構造をみてゆこう。Photo.19の3段目にマクロ組織を示す。断面は腐食を受けながら辛うじて一部に金属鉄を残す。具体的には錆化鉄がサンドイッチ状に両表層を覆う中核部に、白色基地のフェライト層が遺存する。ここで注目しておきたいのは、白色基地のフェライトに塊状黒鉛からなる黒色斑点の点在を残す。ただし、塊状黒鉛は脱炭孔から酸化されて錆化した痕跡に止まる。この塊状黒鉛痕跡の存在は白鑄鉄製品を950℃前後の温度に加熱して白鑄鉄中のセメントイト（Cementite: Fe_3C ）が凝集黒鉛化して脱炭反応の起きた跡と解釈される。古代中国で開発された鑄鉄脱炭鋼製品の有力な証拠写真が捉えられた。

次に顕微鏡組織からなる鑄鉄脱炭鋼製品としての検証である。組織写真をPhoto.10の①～⑧に示す。①は鉄中の非金属介在物である。写真の中央に1μ前後の点として表われた硫化マンガン（ MnS ）である。鉄中の硫化物系介在物は鑄鉄などに含有される高温製錬で派生するものである。更に該品にはまったく大型介在物の酸化第1鉄（ FeO ）や鉄かんらん石（Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）は存在しない。Photo.23の2段目にこの種介在物の5000倍に拡大した反射電子像（COMP）を示す。淡黄褐色の微小介在物である。8の番号の定量分析値が66.0% MnO -30.2% S で硫化マンガン（ MnS ）が同定される。これには15.2% FeO が固溶する。砂鉄特有元素のチタン（ Ti ）やバナジウム（ V ）、ジルコニウム（ Zr ）などは含まない。鉱石原料の鉄である。

次に対象をPhoto.10の顕微鏡組織に戻す。②～⑧は金属鉄をナイトル腐食（etching）を施した後の組織である。②④は残存した厚み方向全面にフェライト結晶粒が現われたところを示す。②は50倍、④は100倍である。左側に位置するフェライトは、結晶粒界が細くて通常みられる組織であるが、右側へ移動すると粒界線は肥大して黒くなる。パーライトの粒界析出と一部は粒界腐食を起しているらしい。過去の調査で類例のなかった現象である。更に右側へ進むと、結晶粒は細粒化して結晶粒界の肥大化傾向はそのまま残る。

いずれにしろ鑄込み時の白鑄鉄組織は脱炭されて消滅し、フェライト基地に変化する。該品は約1900年以上の歳月を経ており、一見健全な金属鉄にとらえられたが、実は可成りの風化ダメージを受けていた。例えば硬度値をみると⑥の細線結晶粒個所（通常組織）で143Hv、⑦の粒界パーライト少量析出で肥大結晶粒界個所が166Hv、⑧の細粒個所で178Hvであった。本来組織の値に比べると70～80Hvが2倍以上にまで上昇し、時効劣化もしくは風化の影響が強く現われた。このように硬度値は異常値を呈したが焼なまし脱炭組織は確実で、該品は紛れもなく板材の鑄鉄脱炭鋼製品に分類できる。

(17) NYU-16. 長三角形鉄片

平面が長三角形形状を呈する条材である。現存長さ48mm、底辺幅9mmで、厚みが5mmを測る。前述したNYU-15長方形鉄板の厚みに近似する。断面形状に崩れがあって、更に大きく弯曲がみられ、鋸切りされた鉄素材が考えられる。供試材は先端側20mm程度より横断面に切出した。

Photo.19の上段にマクロ組織を示す。断面形状は正確な方形や長方形ではなくて不整形形状に崩れている。錆化が激しくて外縁輪郭を残して内部の一部は腐食空洞化を起し、残る錆化鉄もダメージが大きい。

顕微鏡組織をPhoto.9の④～⑧に示す。④は外縁部の錆化鉄組織である。フェライト基地に極く少量のパーライト痕跡を留めた極軟鋼が判明した。⑤⑥は内部に比較的良好に遺存した局部組織であって、フェライト結晶粒が網目状に走り、パーライト部分が侵食される。⑦⑧もやはり内部組織であるが、こちらは暗黒部側の撮影となる。組織の特徴は微小片状黒鉛の痕跡からわずかに鑄鉄に分類される。外縁部はフェライト基地に少量パーライトだったので、鑄鉄の焼なまし脱炭材となる。こちらも鑄鉄脱炭鋼製品に分類されよう。

(18) NYU-17. 長三角形鉄片

前述長三角形鉄片よりは基部幅に拡がりをもつ不整形長三角形鉄片である。こちらも僅かに弯曲気味で、現存長さ50mm、底辺面は破損して斜め割れを起し、幅は16mm、厚みは錆込みで5.0mm前後を測る。錆化の進んだ鉄片で金属鉄の残留は望めない。供試材は先端側15mmの横断面から採取した。

Photo.20の下段にマクロ組織を示す。断面は錆化鉄による長方形の輪郭を残して、内部は完全に消滅空洞化する。マクロ組織からみた厚みは4.5mmであった。顕微鏡組織をPhoto.11の①～③に示す。①は外縁部

を形成する錆化鉄のゲージサイトである。ここにはフェライトやパーライト痕跡は消滅して跡形も無い。②③は擬似金属鉄らしき白色部分が存在したが、ナイトルエッチ液に反応せず、こども酸化されていた。その中に勾玉状の異物が存在したので、EPM A調査を行なった。この異物には3層の色調差が認められたので、それらの定量分析値を求めてみた。まず3の番号をつけた箇所は、63.2%FeO-34.5%P₂O₅組成で錆化鉄(Fe₃P)が同定された。次に4と5の番号の箇所は減衰気味で前者が75.6%FeO-4.14%P₂O₅、後者が61.6%FeO-5.0%P₂O₅の組成が得られた。こちらも錆化鉄系の検出となる。残念ながら当介在物から該品の製造履歴を言及するまでの情報は想い浮かばない。

(19) NYU - 18. 長方形鉄板

長さ75mm、幅30mm、厚み3mm前後の長方形の鉄板である。鉄素材の可能性をもつ。該品は鋳切り時の加圧を受けたのか、長軸方向に湾曲する。また、全体が錆化鉄となり、金属鉄は遺存しない。供試材は短軸方向の約1/2あたりから斜め(2等辺三角形)に切出した。

Photo.21の1段目にマクロ組織を示す。断面は錆膨れがあるものの内部に空洞化までの侵食はなかった。マクロ組織の断面からみた板厚は3mm程度であった。

顕微鏡組織をPhoto.11の④～⑧に示す。金属鉄の残存はなく、全面が錆化鉄のゲージサイトである。組織痕跡は網目状フェライトに少量のパーライトが認められる。炭素量は0.15%前後が想定されて軟鋼レベルとなる。鋳切りで支障のない材質である。該品には鍛打による鍛接線や展伸状の非金属介在物の痕跡が見当らない。清浄な鉄ではあるがその素性を探る手掛かりがない。錆鉄炭脱鋼製品の可能性は否定できない。

(20) NYU - 19. 袋状鉄斧

現存長さ50mmで刃部側を欠損し、刃幅側30mmの小型袋状鉄斧である。袋は基部側を僅かに引伸ばして楕円形状に曲げている。袋幅は刃部幅より僅かに小さい。また、折り返しは密着せずに大きく開く。供試材は刃部側を斜めの三角形に切出した。

Photo.21の2段目にマクロ組織を示す。断面写真からみて厚みは約3mm程度となる。また内部の一部に金属鉄を残すがナイトルエッチ後の組織なので、炭素量が共析鋼(C:0.77%)レベルのため黒い色調となり、その位置が不明瞭となった。

顕微鏡組織をPhoto.12の①～⑤に示す。鉄中の非金属介在物が見当らずに、ナイトルエッチを施すと、焼入れ・焼戻して析出するソルバイト(Sorbite)が確認された。組織は①～③に示すように、微細な炭化物の凝集があってマルテンサイトの形骸は殆んど残さない。ソルバイトはマルテンサイトをやや高温で焼戻して炭化物が粒状に析出成長したフェライトと炭化物の混合組織である。

硬度値は①の圧痕写真でみられるように414Hvが測定された。袋状鉄斧は、工具としての鋭利性を目論み、強度と硬さを維持させて靱性を富ませる熱処理が施されていたことになる。

④⑤は表層側の錆化鉄の組織である。両方共に亀裂が走り、残留歪を有した様相である。なお、外観的にも袋部に亀裂の発生があったことを書き忘れていたが観察されたことをここに記しておく。

(21) NYU - 20. 棒状鉄破片

現存長さ40mm、幅が不均一で5mmから10mmまでの拡がり、ネクタイ状の平面をもつ鉄片である。厚みは4mmを測り、不整形ながら棒状鉄片の名称がつく。断面割れ口は歪んで切断痕もしくは打撃が加えられた跡と見受けられる。

Photo.21の3段目にマクロ組織を示す。断面形は長方形で白く縁取られて内部は暗黒色を呈するが両方共に錆化鉄のゲージサイト(α -FeO·OH)である。なお、断面内部に不明瞭ながら網目状の白線微細線が走る。セメントタイトとレデブライイト(塊状)の痕跡で顕微鏡組織になると鮮明になる。これは焼なまし脱炭が施された組織であるが完全脱炭ではなく脱炭不足の組織となる。

顕微鏡組織をPhoto.12の④～⑦に示す。⑤はマクロ組織の右寄りの厚み方向縦断面の拡大組織である。④は⑤右側レデブライイト組織の拡大、⑥⑦は⑤左側の拡大組織を示す。白色不連続部がレデブライイト痕跡で、基地白色部には層状パーライト組織の痕跡が観察できる。粉れもなく焼なまし脱炭組織であるが前述マクロ組織で発言した如く、中途脱炭に止まるため、材質に粘りなく脆さを残す。該品はネクタイ状と不自然な表

現をとった歪な破片であった。紙面の都合から硬度測定の圧痕写真は割愛したが白色板状セメントは598Hvが測定された。ただし銹化鉄の値であって参考迄に挙げておく。

(22) NYU - 21. 棒状鉄破片

現存長さ40mmで長軸側両端共に破面、幅は約10mm、厚みは9mm前後の棒状鉄破片である。断面形は菱形を呈し、製品の可能性はうすい。4面中の1面に明瞭な段差があり、打撃痕と考えられる。製品加工中の破損品であろうか。供試材は段差側より採取した。該品も銹化鉄となり金属鉄の遺存はない。

Photo.22の上段にマクロ組織を示す。銹化鉄組織である。段差をもつ面が右側面となる。逆コの字状に表層膜が形成されているのに対して、1面は表層膜を欠落する。一方、内部組織は白銹鉄レデブライト痕跡と塊状黒鉛が歪んだ形状で点在される。焼なまし脱炭材ながら中途脱炭で、鍛打された加圧が塊状黒鉛に表われた。塊状黒鉛は本来は球状を呈するが該品は楕円状気味である。

顕微鏡組織をPhoto.13の①～③に示す。①は逆コの字状を形成する表層膜部分の銹化鉄組織である。フェライト基地に層状パーライト痕跡を残す。焼なまし脱炭組織が検出された。②③は中核部に遺存する塊状黒鉛及び白色板状セメントとレデブライトの白銹鉄組織の痕跡を示す。白色板状セメントは硬度測定を行なった。圧痕写真は割愛するが値は662Hvが得られた。酸化鉄の自然腐食で表われたもので信頼度は落ちるが参考までに挙げておく。

以上の如く、該品は製品加工に際して小割りか鍛打の時点で完全脱炭品でないで硬質で粘りがなく、使用に耐えずに廃棄された可能性をもつ。

(23) NYU - 22. 長方形板状鉄片

不整形長方形板状鉄の破片とでも表現するのが適切であったのかも知れない試料である。現存長さ70mmは両端共に長軸方向は破面に更に伸びる可能性をもち、幅は20mm前後、厚み7～8mmと、非常に厚いが全面に湾曲した部分が認められる。外圧のあった痕跡であろう。

元は鑄造鉄斧とも思われず、奇異な形状をとる。廃鉄器で鉄素材となるのだろうか。供試材は長軸方向の鋭角破面側から採取した。

Photo.22の下段にマクロ組織を示す。該品も断面の銹化鉄表層膜の3面を残して下段の1面が剥落する。更に左側面表層膜は直角とならずに内側へ食い込み、外圧のかかった痕跡を残す。また、白銹鉄の焼なまし脱炭で生じた塊状黒鉛も本来組織の球状ではなくて伸び痕跡が窺われる。これも鍛打の外圧を裏付ける情報となろう。

顕微鏡組織をPhoto.13に示す。⑤～⑧にみられる全面パーライト基地に塊状黒鉛が存在する組織は、銹化鉄表層膜内側のナイタルエッチ腐食後のものである。塊状黒鉛形状乱れは、加圧の影響とマクロ組織で指摘した通りである。この組織の硬度測定の圧痕を⑧に示した。値は280Hvで若干高め傾向ながらパーライトに同定できよう。

前後した④に鉄中非金属介在物を示す。大きさは1～2μと非常に小さい銹鉄特有の硫化物である。この介在物のEPM A調査結果をPhoto.23の4段目に示す。反射電子像 (COMP) に6の番号をつけた個所の定量分析値は61.1%FeO-38.7%MnO-18.0%S組成が得られた。介在物が小型で鉄の影響が強く現われた可能性もあるが、硫化マンガン (MnS) と硫化鉄 (FeS) の混合組成が考えられる。砂鉄特有成分のTi、V、Zrの量はいたって少なく鉍石系の原料が想定される。

該品も焼なまし脱炭不良品の鍛冶使用前段階で材質不良から廃棄された雰囲気である。

4. まとめ

弥生時代後期 (約1900年前頃) が比定される西山ノ上遺跡の4軒の竪穴住居跡 (SB-04、07、18、21) から出土した鉄製品や小鉄片 (切片) など23点を調査した。その個々のまとめをTable.2に示す。

調査試料の約半数は古代中国の技術開発にもとずく、硬くて脆い欠点をもつ鑄造品を軟化改善した焼なまし脱炭品であった。製品としては、(i) 可鍛銹鉄製品 (紀元前5世紀頃の開発、白銹鉄鑄物製品をつくり、これを950℃前後×2～3日保定焼なまし脱炭して鋼に近い機械的性質に変換したもの。) → 鑄造鉄斧 (NYU-1)、鉄鉋 (鉄削: NYU-5)、(ii) 半製品で板・棒 (条材) の銹鉄脱炭鋼製品 (紀元前3世紀頃の開発、

板状范や棒状范に溶鉄を流し込み、固化したところで焼なまし脱炭を加えて鍛冶原料鉄とする。こちらも鋳物の材質を鉄鋼に変えて鍛造鉄の供給が鋳鉄技術から接続された。)→板状鉄素材(NYU-15、18)、棒状(条材)鉄素材(NYU-16、17、20、21、22)などがある。

(i) (ii) は共に白鋳鉄の焼なまし脱炭品で、脱炭反応式は次の通りである。

- (1) Fe_3C (Cementite) $\rightarrow 3\text{Fe}$ (Austenite) + C (黒鉛)
- (2) オーステナイト(Austenite) $\rightarrow$ Ferrite (純鉄) + C (黒鉛)
- (3) オーステナイト(Austenite) $\rightarrow$ Pearlite + Ferrite (純鉄)

(1)(2)(3)の反応式に現われた各金属組織が複数共伴する条件に加えて、高温還元操作で生成される鉄中非金属介在物の硫化物(FeS, MnS)が存在すれば白鋳鉄由来の焼なまし脱炭品と認定できる。勿論大陸側依存の産物であり、産地同定が問題となる。焼なまし脱炭技術は朝鮮半島側への伝播定着を否定的に考えているが、今後共検討が必要であろう。⁽³⁴⁾

次に西山ノ上遺跡の出土鉄関連遺物で、もう一つの特徴は数百点にのぼる小鉄片や鑿切り断痕を残す切片の存在である。この切片の具体的形状は三角形鉄片(NYU-7、10)、長四角形状鉄片(NYU-3、9)、不定形状鉄片(NYU-8、14)、二又鉄片(NYU-13)などがある。これらは例えば無茎鉄鏃(NYU-4)や鏃(NYU-6)などの製作時に鑿切りして派生した残材の可能性は大きい。材質は2mm前後の軟質材(<0.15% C)であって、鑿切り成型は容易に成し遂げられる。

一方、当時としては貴重な鉄資源と考えられる切片らは、堅穴住居跡に放置(遺棄)か、時にはSB-18堅穴住居跡にみられるような清掃集積廃棄⁽³⁵⁾があり、これらを溶融再生(リサイクル鍛冶)された痕跡は残さない。いわゆる古墳時代以降に存在する鍛錬鍛冶に伴う羽口や鉄滓の出土は一切見当たらない。

鍛冶作業は、専(もっぱら)搬入された板状や棒状(条材)の半製品を鑿切り成型、火炙り曲げ加工、砥石研磨の初歩的鍛冶と言うか原始的鍛冶の世界である。弥生時代の鍛冶が原始鍛冶であることは、島根県平田遺跡の報告(2000年)以来述べてきた。⁽³⁶⁾ 当遺跡においても原始鍛冶の傍証遺物となる数百点の切片らと鑿、作業台石、砥石(粗、仕上げ)などの検出がある。

更に今回調査の成果の一つに鍛冶原料鉄となる板状製品(素材)が2種類発見された事である。1つは4~5mm厚みの幅80mm材、残るもう1つは2mm厚みの30mm幅材である。前者は塊状黒鉛痕跡とフェライト組織から焼なまし脱炭された鋳鉄脱炭鋼製品に分類できる。この厚手材は当遺跡内で鍛打素延べ加工がなされたか否かが注目されるが、薄手2.0mm材の方は腐食が激しくて、残念ながらこの問題を正確に把握することは出来なかった。しかし、弥生時代後期以降になると、今回の高温還元間接製鋼法にもとづく鋳鉄脱炭鋼製品と、低温還元直接製鋼法の塊煉鉄系のあることが明らかになってきた。⁽³⁷⁾

最後に弥生時代後期に属する可鍛鋳鉄製品・鍛造鉄斧の材質の問題である。弥生時代中期以前の鍛造鉄斧焼なまし脱炭品はフェライト基地に一部パーライトを残すところまで脱炭されている。それに対して今回調査のNYU-1鉄斧破片で観察された基地組織は全面パーライト基地に塊状黒鉛痕跡を残す。こちらは利器として韌性を備えて改善された材質となる。過去に調査した弥生時代後期以降の鉄斧事例で島根県上野Ⅱ遺跡⁽³⁸⁾、西分増井遺跡⁽³⁹⁾などでも同様の結果を得ている。明らかに熱処理の焼なまし脱炭サイクルに共通性が窺われた。産地が同じか、当時の技術レベルが寄与しているのか興味を呼ぶ現象である。幾つかの問題点を残したがここでひとまず筆を置く。

注

- (1) 川越哲志『弥生時代の鉄器文化』雄山閣 1993.11
- (2) 大澤正己『鉄分析からみた刀剣』『鉄器研究の方向性を探る』第9回鉄器文化研究集会 予稿集) 鉄器文化研究会、大手前大学史学研究所 2003. 11
- (3) 川越哲志 前掲書 (1)
- (4) 大澤正己『環日本海地域鉄の金相学的調査~弥生の鉄の様相~』『環日本海地域鉄文化の展開』(人間・社会・環境との新しい調和を求めて-X) 社会鉄鋼工学会 1999年度秋季シンポジウム論文集 社会法人日本鉄鋼協会 1999.11
- (5) 大澤正己『西分増井遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査』『西分増井遺跡Ⅱ』(新川川広域河川改修に伴う西分増井遺跡発掘調査報告書) (財) 高知県文化財埋蔵文化財センター 2004.3 ST-1堅穴住居跡でも

集積廃棄が報告されている。

(6) 大澤正己・鈴木瑞穂「平田遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『平田遺跡第Ⅲ調査区』（斐伊川広域一般改修工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書）島根県木次土木建築事務所・島根県木次町教育委員会 2000.3

(7) 大澤正己「上野Ⅱ遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『上野Ⅱ遺跡』～弥生後期集落及び鍛冶関連遺跡の調査～（中国横断自動車道建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 10）日本道路公団中国支社松江工事事務所・島根県教育委員会 2001.12

当報告のまとめに板状鉄素材の出土例を挙げているので関係部分を引用しておく。

(2)今回調査の板状鉄素材(UJEN-2)は厚み4.0mm、板幅6.0mmの短冊状製品である。列島内での弥生時代後期以降の流通板状鉄素材は4.0cm幅から6cm幅が一つの規格品となる傾向を示す。例えば鳥取県大山町所在妻木晩田遺跡松尾頭出土品は5.0cm幅⁽¹⁸⁾ 熊本県六嘉町所在二子塚遺跡出土品は4cm⁽¹⁹⁾ 程度である。いずれも軟鋼（C：0.3%以下）から極軟鋼（C：0.01%）の焼なまし材で、鑿切りの原始鍛冶に適した材質であった。これらは低温還元直接製鋼法にもとづく塊煉鉄製品である。

(8) 大澤正己・鈴木瑞穂「妻木晩田遺跡出土鉄製品の金属学的調査」『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅳ』～洞ノ原松尾城地区～大山スイス村リゾート発掘事業に伴う発掘調査報告Ⅳ（大山町埋蔵文化財調査報告書第17集）大山町教育委員会、大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団 2000.3

(9) 大澤正己「二子塚遺跡出土鉄器及び鍛冶関連遺物の金属学的調査」愛媛大学法文学部考古学研究室 村上恭通助教授へ提出原稿 近日中に熊本県教育委員会にて刊行予定の報告書

(10)大澤正己 前掲書 (7)

(11)大澤正己 前掲書 (5)

Part I 可鍛鑄鉄 (Malleable cast iron) (BC5C頃開発)

白鑄鉄製品 (二条凸帯鑄造鉄斧) を900~950℃の温度で焼きなまし脱炭

Fe_3C (Cementite) $\rightarrow$ 3Fe (Austenite) + C (黒鉛)

オーステナイト (Austenite) $\rightarrow$ Ferrite (純鉄) + C (黒鉛)

オーステナイト (Austenite) $\rightarrow$ Pearlite + Ferrite (純鉄)

形状特徴: 5cm前後の破片、板厚5mm程度が多い。(再加工・廃棄等後遺跡出土)

顕微鏡組織の特徴

- (1) 非金属介在物形状: 粒状5~10 μm 微小。
- (2) 非金属介在物組成: 硫化鉄(FeS) or 硫化マンガン (MnS)。
- (3) 金属組織: 黒鉛粒・脱炭孔を持つ。フェライト・パーライト
- (4) 鍛打痕跡なし。

可鍛鑄鉄の種類

- (0) 脱炭鑄鉄 (焼きなまし不足: 表層部のみ脱炭) …庄原遺跡出土品
- (1) 白心可鍛鑄鉄 (1回焼きなまし) …比恵遺跡第51次出土品
- (2) 黒心可鍛鑄鉄 (段階焼きなまし) …貝元遺跡出土品
- (3) パーライト可鍛鑄鉄 (2回再加熱焼きなまし) …向山遺跡、上野II遺跡出土品
[生産地側では年代の推移と共に (1) $\rightarrow$ (3) へと変化する]

Part II 鑄鉄脱炭鋼 (Iron casting decarbon steel) (BC3C頃開発)

棒状材や板状材に鉄を流し込み固化したものを酸化脱炭した半製品。鍛冶原料 (角・丸棒・板)

形状特徴: 切片や小型鉄製品 (鋸など)、板厚5mm前後で鋸切り痕跡あり。(加工・廃棄等後遺跡出土品)

顕微鏡組織の特徴

- (1) 非金属介在物形状: 粒状5~10 μm 微小
- (2) 非金属介在物組成: 硫化鉄 (FeS) or 硫化マンガン (MnS)
- (3) 金属組織: 脱炭孔を持つ場合もあり。フェライト・パーライト。
- (4) 鍛打痕跡なし。

Part III 炒鋼 (Puddling steel) (BC1C頃開発)

鉄を加熱溶融し、空気中で攪拌脱炭して鋼とする。

形状特徴: 半製品 (鉄素材)、剣など高級鉄製品。中国産・朝鮮半島産もある。

顕微鏡組織の特徴

- (1) 非金属介在物形状: 展伸状 (中型)。20 μm 以上。
- (2) 非金属介在物組成: 珪酸塩 (Si , Al , Ca , Mg , K , Na)。 (非晶質)
- (3) 金属組織: フェライト細粒 (齊粒)。
- (4) 鍛打痕跡濃厚、軟・硬貼り合わせ技術。(鍛接) 貼鋼技術。(合せ鍛え)

Part IV 塊錬鉄 (Sponge iron) (BC9C頃開発)

(弥生後期には朝鮮半島製の出土例もあり)

低温還元直接製鋼法

中国側としては最古の開発製品であるが、列島内での搬入製品の分析例では弥生時代後期のものでは確認されている。例えば向山遺跡袋状鉄斧。

形状特徴: 板状鉄斧など

顕微鏡組織の特徴

- (1) 非金属介在物形状: 不定形大型。
- (2) 非金属介在物組成: 酸化第1鉄 (FeO)。鉄・かんらん石 ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)。
- (3) 金属組織: フェライト粗大化傾向。
- (4) 鍛打痕跡あり。

参考資料 古代中国開発鉄鋼の金属学的調査時の観察ポイント

Table.1 供試材の履歴と調査項目

符号	通跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		磁量度	メタル度	調査項目								検出番号
					大きさ(mm)	重量(g)			顕微鏡 相違	マクロ 組織	ピカース 表面硬度	X線分析	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	
NYU-1	西山ノ上遺跡	SB-04	鑄造鉄斧刃部?	弥生時代後期	92×36×15	95.3		L	○	○	○		○				340
NYU-2		SB-04	鑄造鉄斧片	弥生時代後期	57×62×29	97.9		L	○	○	○						339
NYU-3		SB-07	長四角形状鉄片	弥生時代後期	18×43×4	4.9		H	○	○							397
NYU-4		SB-07	鉄鏃	弥生時代後期	26×16×3	6.6		H	○	○							381
NYU-5		SB-07	長方形形状鉄片?	弥生時代後期	21×44×5	5.0		H	○	○							396
NYU-6		SB-07	鏃	弥生時代後期	56×29×2	14.7		M	○	○	○						380
NYU-7		SB-07	長三角形形状鉄片	弥生時代後期	15×38×7	3.1		H	○	○							390
NYU-8		SB-07	不整形形状鉄片	弥生時代後期	25×20×7	4.2		H	○	○							403
NYU-9		SB-07	不整形形状鉄片	弥生時代後期	20×38×5	3.8		H	○	○							395
NYU-10		SB-07	三角形形状鉄片	弥生時代後期	13×21×6	2.4		H	○	○							387
NYU-11-1		SB-18	三角形形状鉄片	弥生時代後期	26×16×3	1.5		H	○	○							423
NYU-11-2		SB-18	板状鉄片	弥生時代後期	15×10×7				○	○							—
NYU-12		SB-18	長三角形形状鉄片	弥生時代後期	8×38×5	1.2		H	○	○							434
NYU-13		SB-18	二又状鉄片	弥生時代後期	40×38×9	9.7		M	○	○							463
NYU-14		SB-18	不整形形状鉄片	弥生時代後期	26×37×7	4.0		H	○	○							466
NYU-15		SB-18	鉄斧片	弥生時代後期	81×60×10	66.5		L	○	○	○		○				484
NYU-16		SB-18	長三角形形状鉄片	弥生時代後期	9×48×5	6.4		M	○	○							435
NYU-17		SB-18	長三角形形状鉄片	弥生時代後期	51×20×7	8.1		M	○	○			○				438
NYU-18		SB-18	板状素材か	弥生時代後期	35×75×8	28.9		L	○	○							483
NYU-19		SB-18	銃状鉄斧	弥生時代後期	32×53×14	23.2		L	○	○							472
NYU-20		SB-21	棒状鉄片	弥生時代後期	42×12×6	4.9		M	○	○	○						519
NYU-21		SB-21	棒状鉄片	弥生時代後期	41×12×9	10.2		M	○	○	○						520
NYU-22		SB-21	長四角形状鉄片	弥生時代後期	70×22×11	36.9		L	○	○	○		○				515

Table.2 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	所見
NYU-1	西山ノ上遺跡	SB-04	鋳造鉄斧刃部?	弥生時代後期	塊状黒鉛、精炭発生、フェライト、共析組織、鋳込み時のレデブライト残存	可鍛鉄鉄(焼なまし脱炭)製品、鋳物内に空洞に起因する錆痕を残し、鋳込みは組織
NYU-2		SB-04	鋳造鉄斧片	弥生時代後期	錳化鉄、共晶組織白鉄鉄組織痕跡	非脱炭白鉄鉄
NYU-3		SB-07	長四角形状鉄片	弥生時代後期	錳化鉄、フェライト痕跡	極軟鋼、鋳切痕跡切片か
NYU-4		SB-07	鉄鋸	弥生時代後期	錳化鉄、フェライト痕跡	極軟鋼、鋳切痕跡、無基鉄鋸
NYU-5		SB-07	長方形形状鉄片?	弥生時代後期	錳化鉄、片状黒鉛、塊状黒鉛、基体パーライト、焼なまし脱炭組織	横断面が三日月形、中国産鋳造鉄鋸の可能性
NYU-6		SB-07	鋸	弥生時代後期	錳化鉄、フェライト・パーライト、中央部レデブライト痕跡	鋳鉄脱炭鋼、板状の加工品の可能性? 錳化鉄組織で明確性に欠く
NYU-7		SB-07	長三角形形状鉄片	弥生時代後期	錳化鉄、フェライト・パーライト痕跡消滅	極軟鋼の可能性
NYU-8		SB-07	不整形形状鉄片	弥生時代後期	錳化鉄、塊状黒鉛痕跡、パーライト・レデブライト痕跡	鋳鉄脱炭鋼製品、4mm厚み板材からの切片の可能性
NYU-9		SB-07	不整形形状鉄片	弥生時代後期	錳化鉄、フェライト・パーライト痕跡	軟鋼 (0.15%C) レベルか
NYU-10		SB-07	三角形形状鉄片	弥生時代後期	錳化鉄、フェライト・パーライト痕跡	軟鋼 (0.15%C) レベルか
NYU-11-1		SB-18	三角形形状鉄片	弥生時代後期	錳化鉄、フェライト・パーライト痕跡	軟鋼 (0.15%C) レベルか
NYU-11-2		SB-18	板状鉄片	弥生時代後期	錳化鉄、フェライト・パーライト断片粒	軟鋼 (0.15%C) レベルか
NYU-12		SB-18	長三角形形状鉄片	弥生時代後期	錳化鉄、フェライト	極軟鋼
NYU-13		SB-18	二又状鉄片	弥生時代後期	錳化鉄、フェライト・パーライト痕跡、微細粒	極軟鋼
NYU-14		SB-18	不整形形状鉄片	弥生時代後期	錳化鉄、フェライト・パーライト痕跡	極軟鋼
NYU-15		SB-18	鉄斧片	弥生時代後期	介在物MnS、塊状黒鉛痕跡、フェライト、粒界パーライト	鋳鉄脱炭鋼製品板材の可能性、板状鉄素材か (5mm厚)
NYU-16		SB-18	長三角形形状鉄片	弥生時代後期	錳化鉄表面フェライト、中央部片状黒鉛	鋳鉄脱炭鋼製品素材か
NYU-17		SB-18	長三角形形状鉄片	弥生時代後期	錳化鉄、介在物硫化鉄 (FeS)	鋳鉄脱炭鋼製品素材か
NYU-18		SB-18	板状素材か	弥生時代後期	錳化鉄、フェライト・パーライト	層状介在物見当らず、鋳鉄脱炭鋼製品か (2.0mm厚)
NYU-19		SB-18	袋状鉄斧	弥生時代後期	一部金属遺存、ソルバイト (0.77%C前後)	焼入れ・焼戻し熱処理品、大陸側製品の可能性
NYU-20		SB-21	棒状鉄片	弥生時代後期	錳化鉄、パーライト痕跡にレデブライト	鋳鉄脱炭鋼製品、条材の可能性、焼なまし脱炭不良品
NYU-21		SB-21	棒状鉄片	弥生時代後期	錳化鉄、塊状黒鉛痕跡、フェライト、パーライト基地にレデブライト痕跡	鋳鉄脱炭鋼製品、条材の可能性、焼なまし脱炭不良品
NYU-22		SB-21	長四角形状鉄片	弥生時代後期	介在物MnS、パーライト基地に塊状黒鉛痕跡	鋳鉄脱炭鋼製品、条材の可能性、焼なまし脱炭不良品

NYU-1

鑄造鉄器

①×100、no etch

黒色精肉部、塊状黒鉛

②〜④×200、硬度圧痕

②418Hv、セメントライト

③157Hv、フェライト

④353Hv、パーライト

⑤×50、ナイトルetch

③〜⑤の組織を抱える

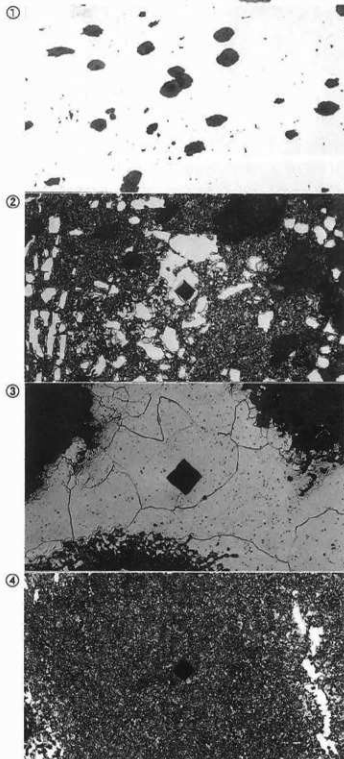


Photo.1 鑄造鉄器破片の顕微鏡組織

NYU-2

鑄造鉄片

①×100、錆化鉄

共晶組成白鑄鉄

②×200、④×400

白色部も錆化

レデブライト部硬度測定

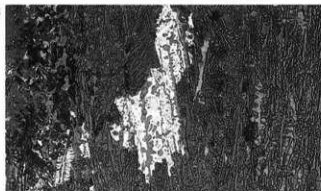
85~285Hvと異常値

硬度圧痕写真は割受



①

②



③

NYU-3

不整長方形鉄片

④×100、錆化鉄

ゲーサイト： $\alpha\text{-FeO}\cdot\text{OH}$

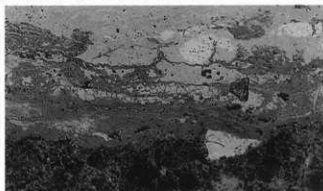
⑤×100、錆化鉄

断面中央部、ゲーサイト

⑦×100、⑧×400、

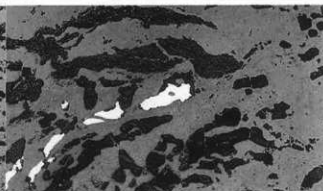
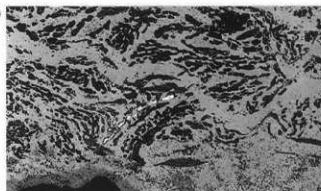
表層部、ゲーサイト

フェライト結晶粒界痕跡



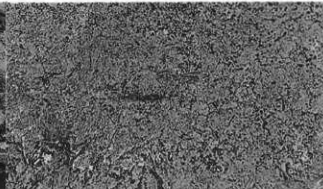
④

⑤



⑥

⑦



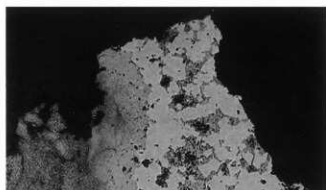
⑧

Photo.2 鑄造鉄器、不整長方形鉄片の顕微鏡組織

NYU-4

鉄 鋳

- ①×400、錆化鉄
パーライト痕跡か
②×100、③×400
微小フェライト痕跡



①



②

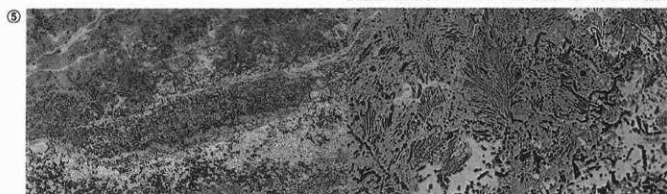
NYU-5

長方形鉄片
(鋳破片か)

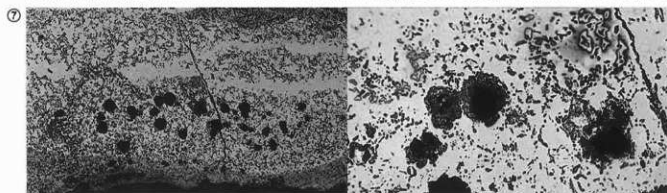
- ④×400、錆化鉄、片状黒鉛
基地はパーライト痕跡
⑤×100、⑥×400
パーライト痕跡
⑦×100、⑧×400
塊状黒鉛とパーライト
痕状：焼なまし脱炭



④



⑤



⑦

Photo.3 鉄鋳と鋳破片の顕微鏡組織

NYU-6

鉄 鎌

①×50 ②×100 ③×400

錆化鉄、バーライト痕跡

④×100 ⑤×400

レデブライト痕跡か

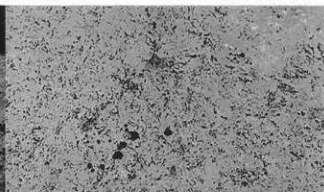
(焼なまし脱炭の可能性あるも錆化鉄のため特定できぬ)



①



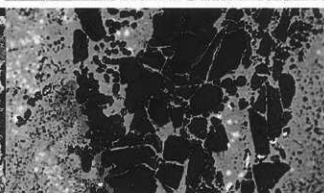
②



③



④



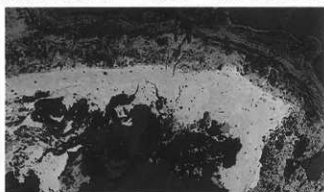
⑤

NYU-7

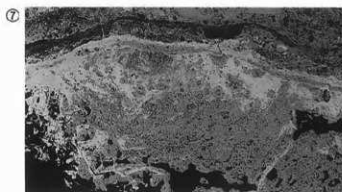
長三角形鉄片

⑥⑦×100 ⑧×400

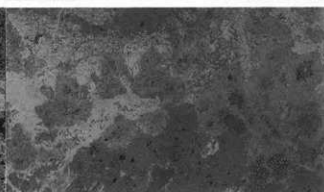
錆化鉄、ゲーサイト
(金属鉄組織痕跡不明瞭)



⑥



⑦



⑧

Photo.4 鎌と長三角形鉄片の顕微鏡組織

NYU-8

不整形鉄片

①×50、錆化鉄

ゲートサイト、パーライト痕跡

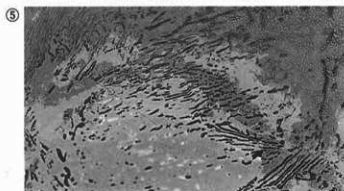
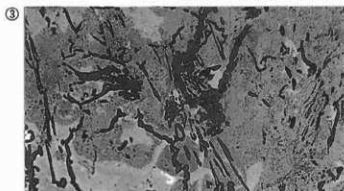
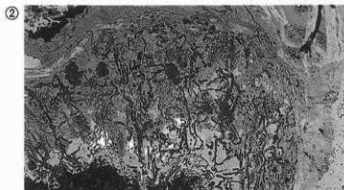
②×100、③×400

①上部拡大（塊状黒鉛）

④×100、⑤×400

① 下部拡大（塊状黒鉛）

（焼なまし脱炭品か）



①

←②③
拡大箇所

←④⑤
拡大箇所

Photo.5 不整形鉄片の顕微鏡組織

NYU-9

不整形形状鉄片

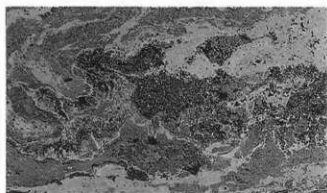
① ②×100、③×400

銹化鉄、ゲーサイト

④×100、⑤×400

同上

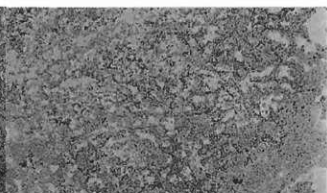
(フェライト基地に
パーライト痕跡)



①



②



③



④



⑤

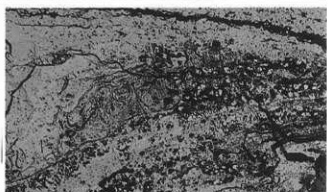
NYU-10

三角形状鉄片

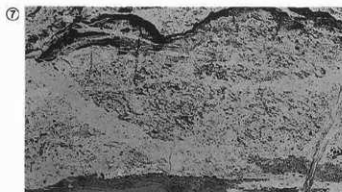
⑥ ⑦ ⑧×100

銹化鉄、フェライト基地

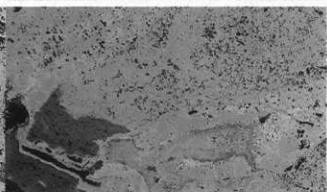
にパーライト痕跡



⑥



⑦



⑧

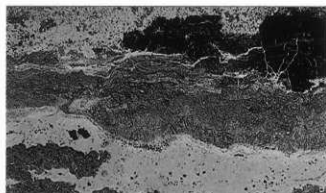
Photo.6 不整形形状鉄片と三角形状の顕微鏡組織

NYU-11-1

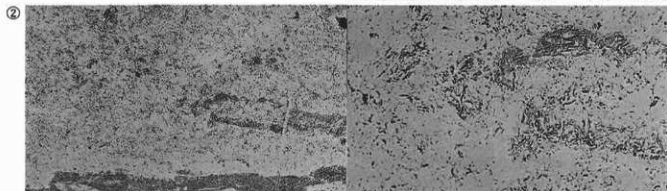
三角形状鉄片

① ②×100、③×400

錆化鉄、ゲーサイト
(フェライト基地に
パーライト痕跡)



①



②

③

NYU-11-2

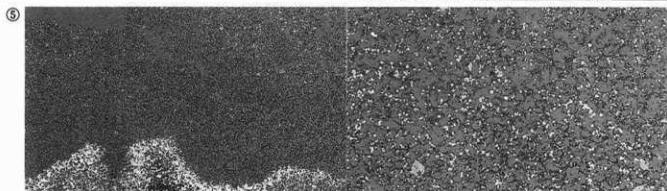
板状鉄片 (2片)

④×50、⑤×100、⑥×100

錆化鉄、ゲーサイト
微細フェライト基地にパー
ライト痕跡 マクロ組織の
上段鉄片組織
⑦×100、⑧×100
マクロ下段三角側フェラ
イト単層

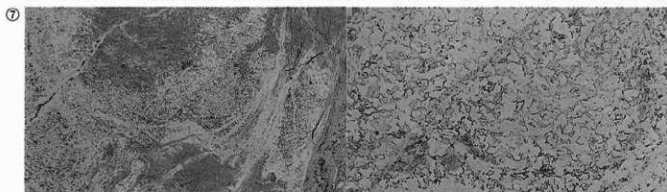


④



⑤

⑥



⑦

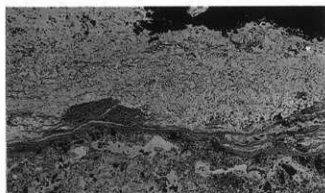
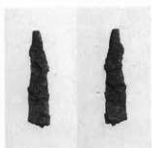
⑧

Photo.7 三角形状鉄片、板状鉄片の顕微鏡組織

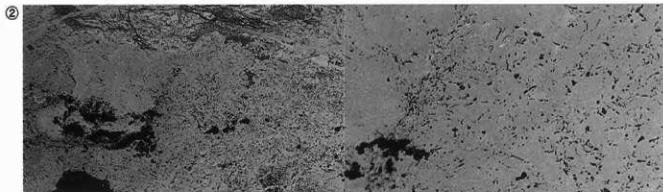
NYU-12

三角形状鉄片

① ②×100、③×400
 銹化鉄、ゲーサイト
 パーライト痕跡



①



②

③

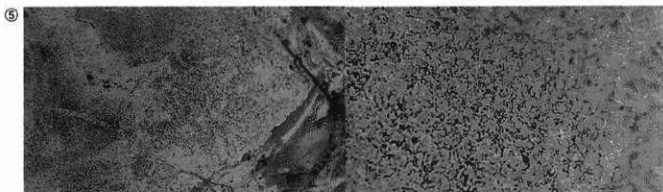
NYU-13

二又状鉄片

④ ⑤×100、⑥×400
 銹化鉄、ゲーサイト
 パーライト痕跡
 ⑦×100、⑧×400
 フェライト結晶粒界明瞭

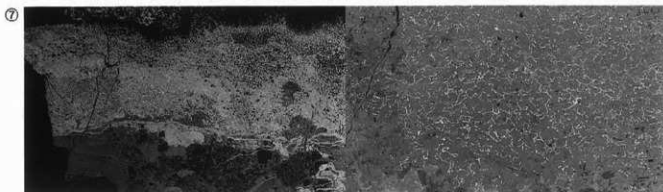


④



⑤

⑥



⑦

⑧

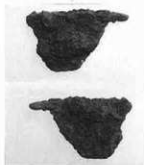
Photo.8 長三角形状鉄片、二又状鉄片の顕微鏡組織

NYU-14

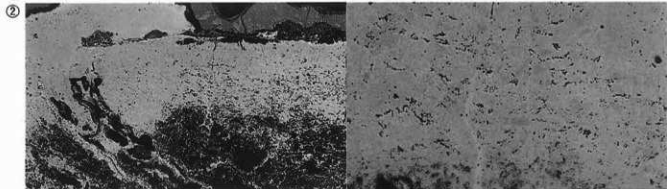
不整形鉄片

① ②×100, ③×400

錆化鉄、ゲーサイト、フ
ェライト基地にパーライ
ト痕跡



①

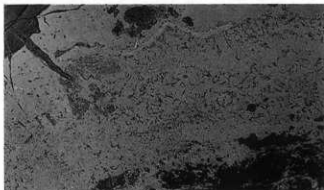
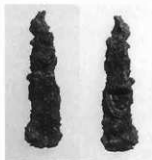


②

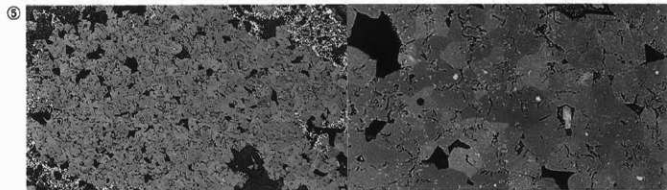
NYU-16

長三角形鉄片

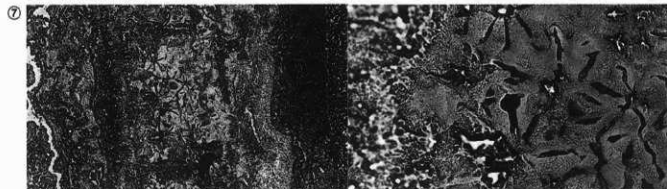
④×100、錆化鉄
フェライト基地にパーラ
イト外縁部組織
⑤×100、⑥×400
中央灰黒色部
フェライト基地
⑦×100、⑧×400
中央小片状黒鉛痕跡



④



⑤



⑥

Photo.9 不整形鉄片、長三角形鉄片の顕微鏡組織

NYU-15

①×100 介在物 (MnS)

②×50, ③×400

④×100 フェライト基地
塊状黒鉛痕跡あり

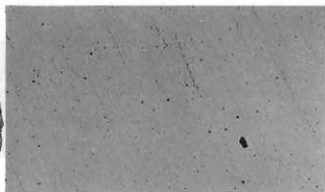
⑤×100 フェライト結晶粒

⑥~⑧×200、硬度圧痕

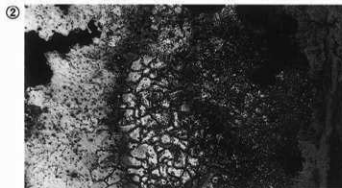
⑥143Hv

⑦166Hv

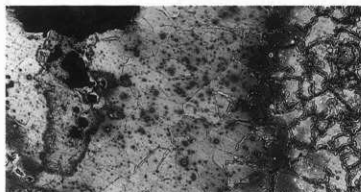
⑧178Hv



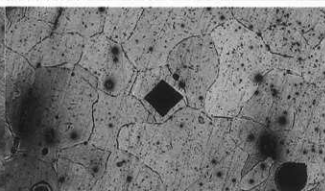
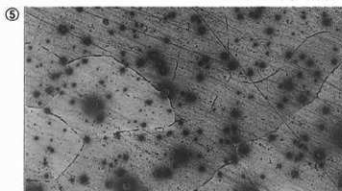
①



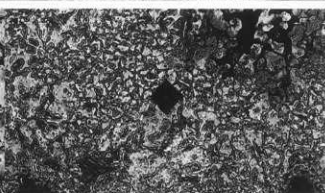
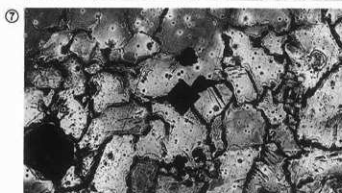
②



③



④



⑤

Photo.10 長方形鉄板の顕微鏡組織

NYU-17

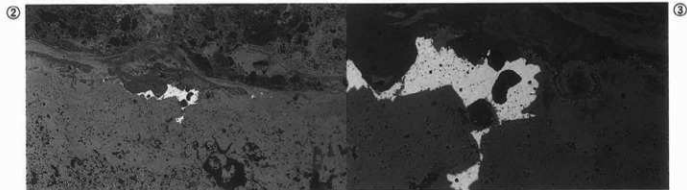
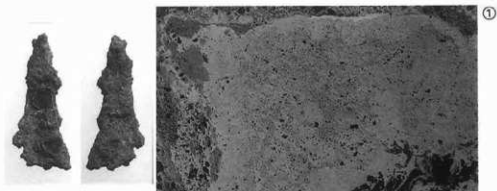
長三角形鉄片

①×100 錆化鉄、フェライト・パーライト痕跡不明瞭

②×100、③×400

疑似金属鉄

介在物：燐化鉄



NYU-18

長方形鉄板破片

④×400、フェライト痕跡

⑤×100、⑥×400

フェライト・パーライト痕跡

⑦×100、⑧×400

同上

フェライト細粒化

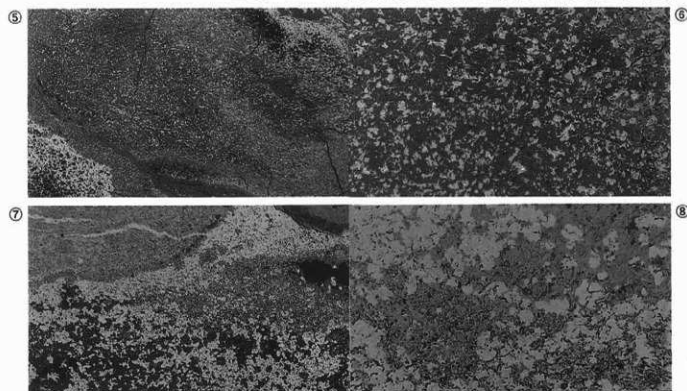


Photo. 11 長三角形鉄板と長方形鉄板破片の顕微鏡組織

NYU-19

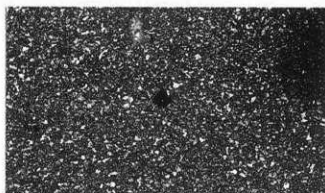
袋状鉄片

①×200、硬度圧痕

414Hv ソルバイト

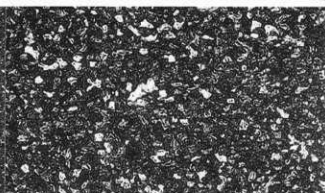
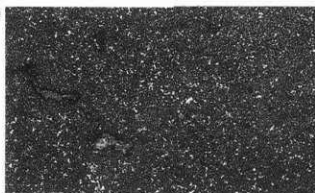
②×100、③×400

ナイトルetch、ソルバイト



①

②



③

NYU-20

棒状鉄片

錆化鉄

④×400、レデブライト

⑤×50、厚み方向全面

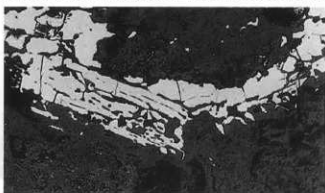
⑥×400、⑦×400

⑤の左側拡大

レデブライトとパーライト

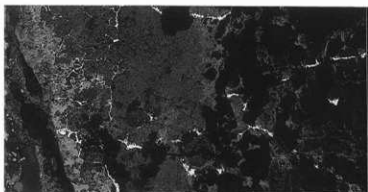
痕跡

鋳鉄脱炭鋼製品（脱炭不足）

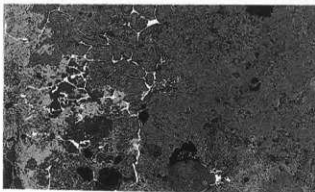


④

⑤



⑥



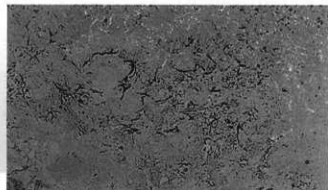
⑦

Photo.12 袋状鉄片と棒状鉄片の顕微鏡組織

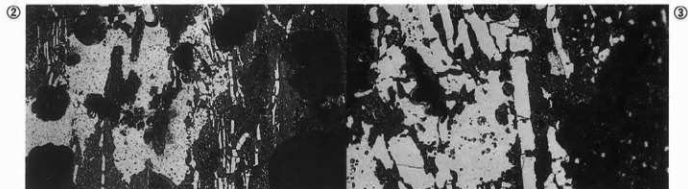
NYU-21

棒状鉄片

- ①×400 錆化鉄
パーライト痕跡
②×100、③×400
塊状黒鉛とレデブライト
痕跡、焼なまし脱炭材
(中途脱炭)



①



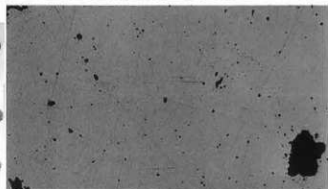
②

③

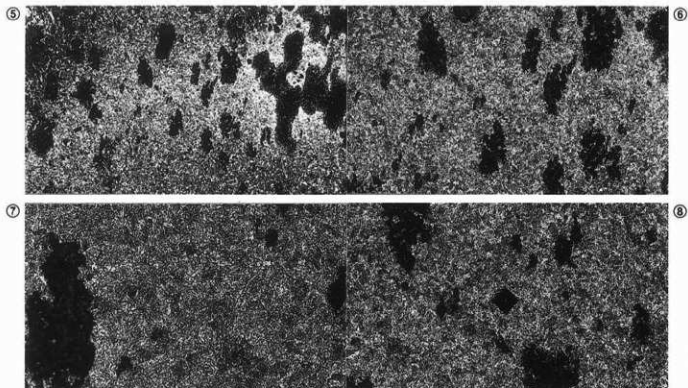
NYU-22

長方形板状鉄片

- ④×100 介在物
(FeS,MnS混合組成)
⑤×50、⑥×100
⑦×400
パーライト基地に塊状黒
鉛痕跡
⑧×200、硬度圧痕
280Hv/パーライト



④



⑤

⑥

⑦

⑧

Photo.13 棒状鉄片と長方形板状鉄片の望遠鏡組織



鑄造鉄斧 焼なまし脱炭品

▼ Photo.1 ⑤撮影箇所



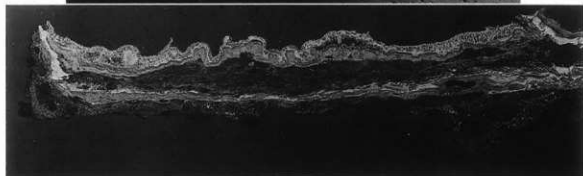
鑄造鉄器 非脱炭品

Photo.14 鑄造鉄器のマクロ組織 (X 10)、上段 NYU-1, 下段 NYU-2



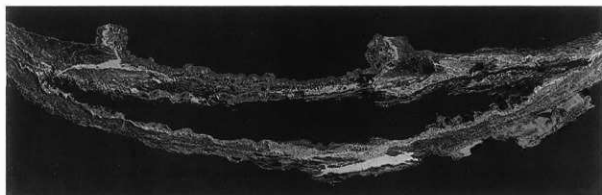
不整長方形鉄片

NYU-3 ×10



鉄 鱗

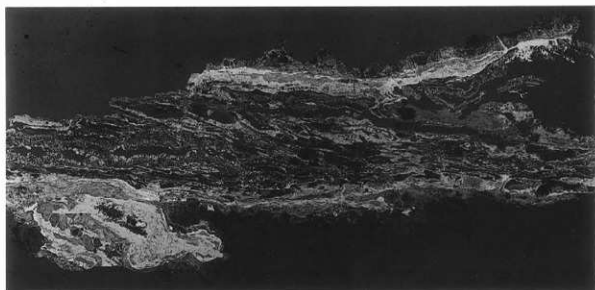
NYU-4 上×5 下×10



不整長方形鉄片 (施破片か)

NYU-3 ×10

Photo.15 不整長方形鉄片，鉄鱗，施のマクロ組織



鉄 隄

NYU-8 ×20



長三角形鉄片

NYU-7 ×20

Photo.16 鉄隄、長三角形鉄片のマクロ組織



↓ 不整形鉄片
Photo.5 ①撮影箇所

NYU-8 ×10



四角形状鉄片

NYU-9 ×10



三角形鉄片

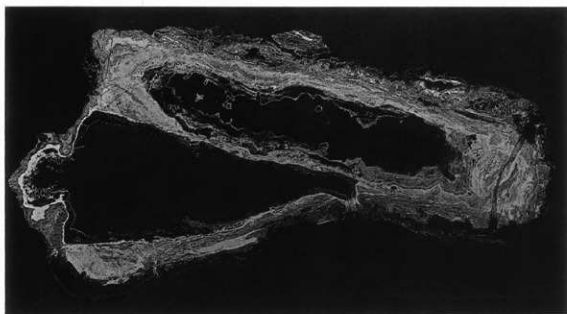
NYU-10 ×10

Photo.17 各種鉄片のマクロ組織



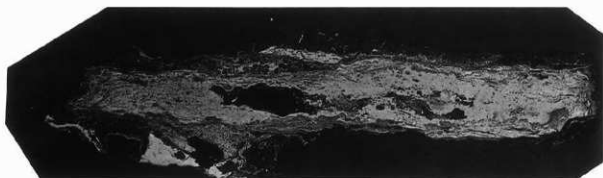
三角形状鉄片

NYU-11-1 ×10



板状鉄片（異常2段階膨れ発生）

NYU-11-2 ×10



長三角形状鉄片

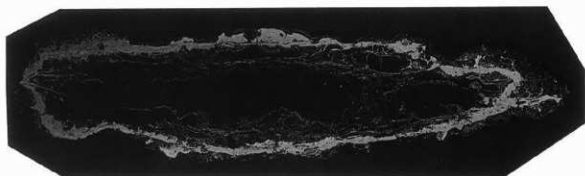
NYU-12 ×10

Photo.18 各種鉄片のマクロ組織



二又状鉄片

NYU-13 ×5



不整形鉄片

NYU-14 ×10



長方形鉄片

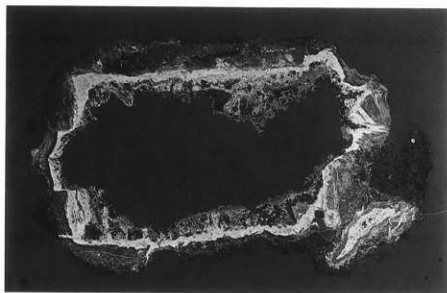
NYU-15 ×5

Photo.19 各種鉄片及び長方形鉄板のマクロ組織



長三角形鉄片

NYU-16 ×10



長三角形鉄片

NYU-17 ×10

Photo.20 長三角形鉄片のマクロ組織



長方形鉄片

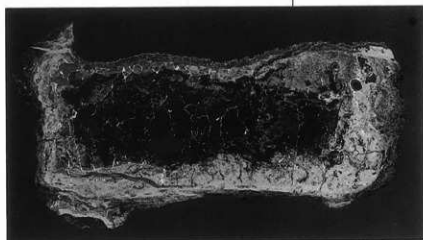
NYU-18 ×5



袋状鉄片

NYU-19 ×5

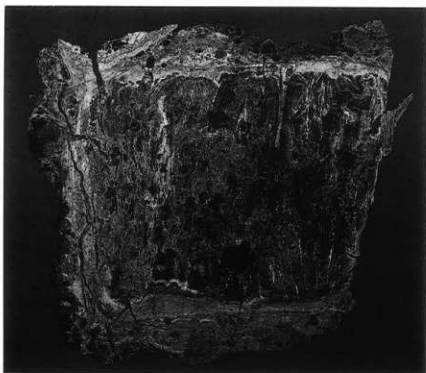
Photo.12 ⑤撮影箇所



棒状鉄片

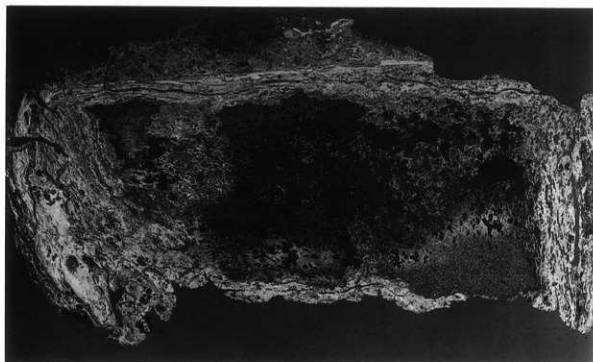
NYU-20 ×10

Photo.21 長方形鉄板，袋状鉄片，棒状鉄片のマクロ組織



棒状鉄片

NYU-21 × 10



長方形板状鉄片

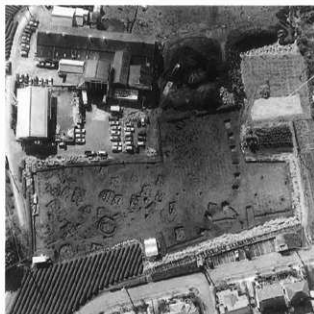
NYU-22 × 10

Photo.22 棒状鉄片と長方形板状鉄片の顕微鏡組織

COMP ×2000		Element 7 F — Na2O 0.114 MgO — Al2O3 — SiO2 0.161 P2O5 0.031 S 0.051 K2O 0.031 CaO — TiO2 — Cr2O3 — MnO 0.061 FeO 87.750 ZrO2 0.011 V2O3 0.049 As2O5 0.042 Total 88.270
COMP ×5000		Element 8 F — Na2O 0.020 MgO — Al2O3 0.015 SiO2 0.137 P2O5 — S 30.233 K2O 0.008 CaO — TiO2 0.520 Cr2O3 0.040 MnO 65.950 FeO 15.178 ZrO2 0.010 V2O3 0.417 As2O5 — Total 104.684
COMP ×1000		Element 3 4 5 F — — — Na2O — — — MgO — — — Al2O3 — 0.020 — SiO2 4.083 0.120 0.382 P2O5 34.535 4.140 4.978 S 0.008 0.025 0.054 K2O — — — CaO — — — TiO2 0.002 — — Cr2O3 0.045 — 0.004 MnO 0.850 0.180 0.104 FeO 63.209 75.622 61.596 ZrO2 0.099 0.047 — V2O3 0.064 0.032 0.018 As2O5 0.049 0.018 0.020 Total 102.409 80.198 67.143
COMP ×3000		Element 6 F — Na2O 0.038 MgO 0.008 Al2O3 — SiO2 0.239 P2O5 0.100 S 18.032 K2O — CaO — TiO2 0.328 Cr2O3 — MnO 38.670 FeO 61.092 ZrO2 0.024 V2O3 0.110 As2O5 — Total 114.141

Photo.23 EPMAによる反射電子象 (COMP) と定量分析値

図版 (P L A T E S)



(1) 西山ノ上遺跡 1次調査
全 景



(2) 西山ノ上遺跡 1次調査
鍛冶関連遺構集中域



(3) 西山ノ上遺跡 2次調査
1号溝 (撮影時は右側延長部分未掘削)



(2) 西山ノ上遺跡 2次調査
調査区西端部の弥生中期列状墓 (上部北)



(1) 1号竪穴式建物全景（南より） <1次調査>



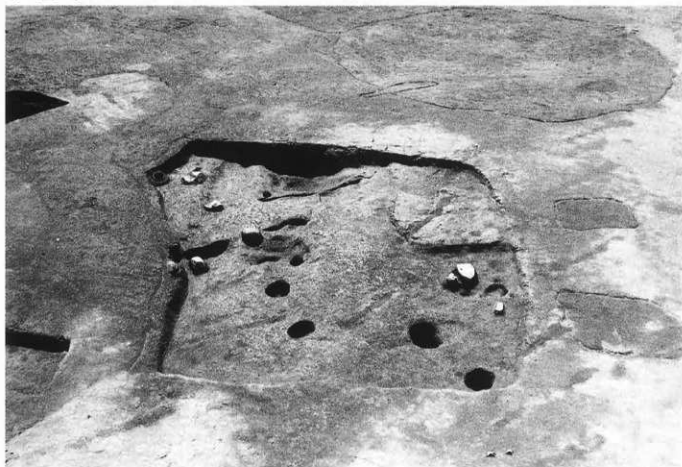
(2) 4号竪穴式建物全景（西より） <1次調査>



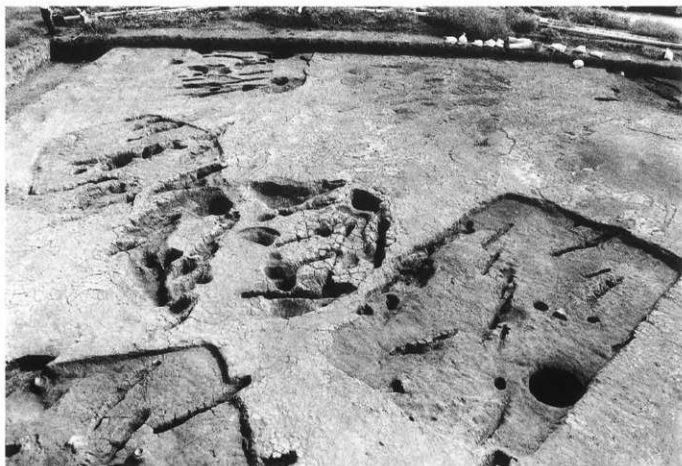
(1) 5号竖穴式建物全景（西より） <1次調査>



(2) 6号（奥）・7号（手前）竖穴式建物全景（北より） <1次調査>



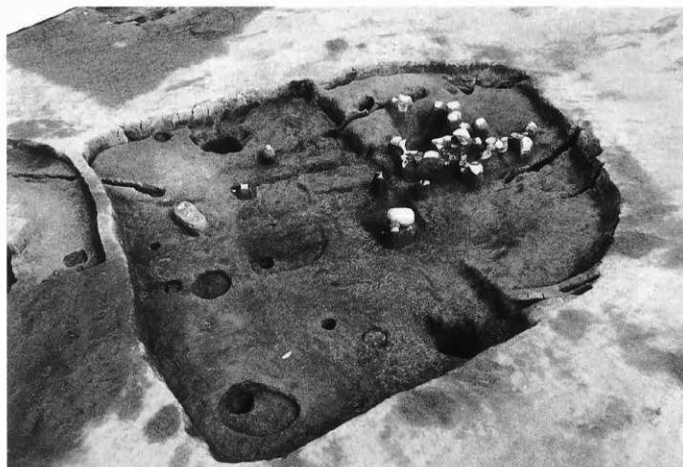
(1) 8号竪穴式建物全景（北より） <1次調査>



(2) 11号～14号・16号竪穴式住居全景（北より） <1次調査>



(1) 17号竪穴式住居全景（北より） <1次調査>



(2) 18号竪穴式建物（A・D区）、18号竪穴式土墳（B・C区）全景（南より） <1次調査>



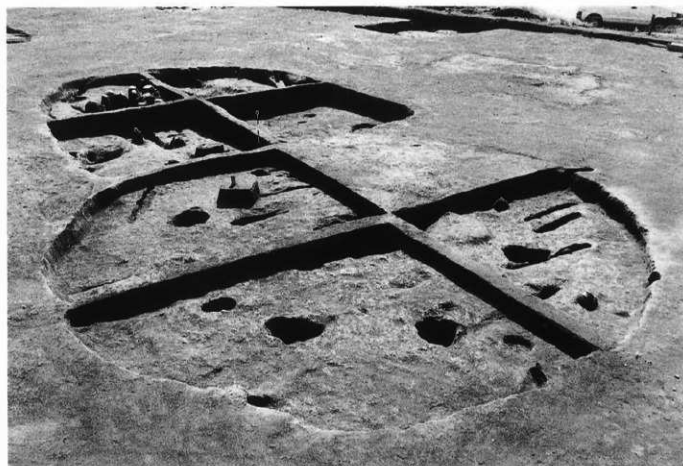
(1) 18号竪穴式建物 被熱硬化面 (奥), 地炉 (手前) <1次調査>



(2) 18号竪穴式建物 被熱硬化面近影 (西より) <1次調査>



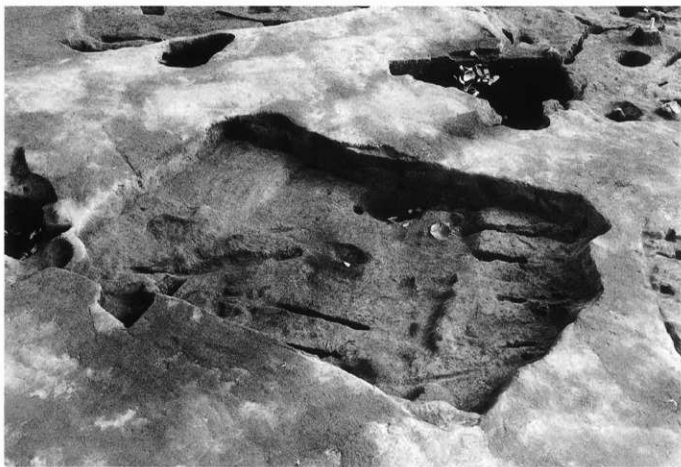
(1) 18号竪穴式土壇 鉄片集中部近影(北より) <1次調査>



(2) 20号竪穴式住居(手前)全景(北西より) <1次調査>



(1) 24号竪穴式住居全景（西より） <1次調査>



(2) 28号竪穴式住居全景（北西より） <1次調査>



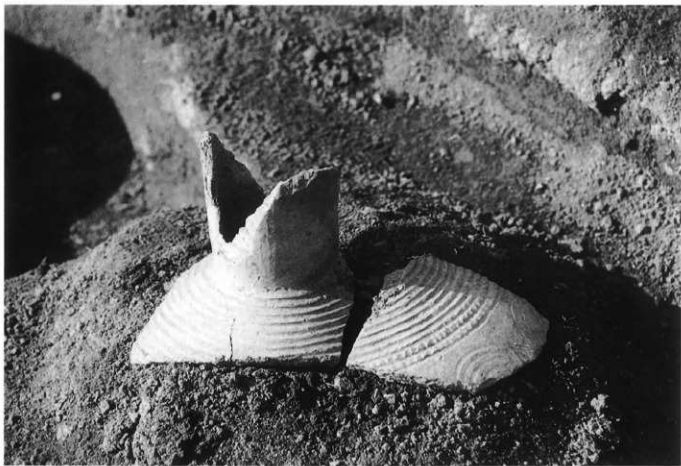
(1) 30号竪穴式建物全景（西より） <1次調査>



(2) 30号竪穴式建物 黒紅色被熱硬化面（中央） <1次調査>



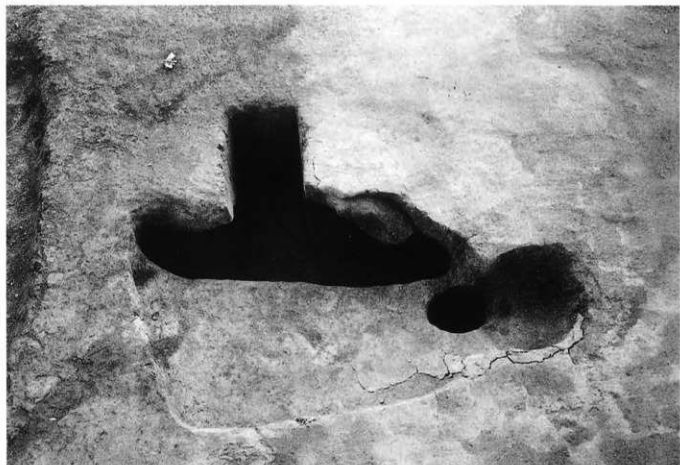
(1) 42号竪穴式住居全景（北西より） <1次調査>



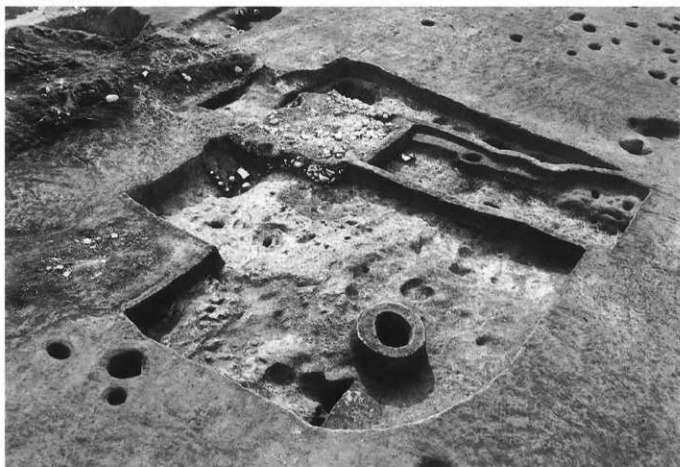
(2) 42号竪穴式住居出土 免田式長頸壺破片 <1次調査>



(1) 調査区南西側 掘立柱建物群遠景（西より） <1次調査>



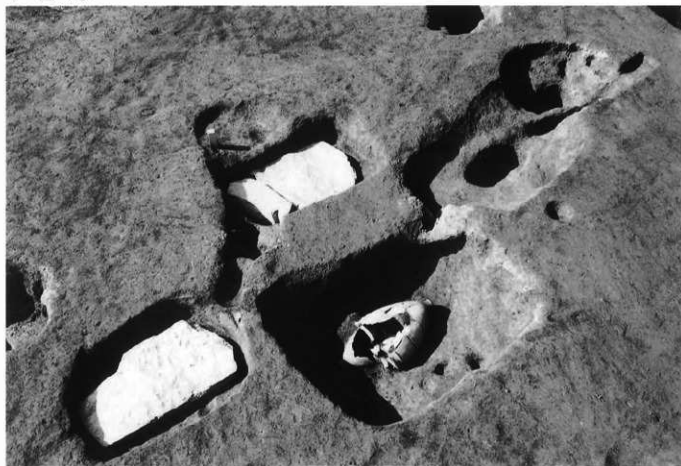
(2) 34号土壌墓全景（北より） <1次調査>



(1) 9号竪穴式住居全景（北西より） <2次調査>



(2) 調査区西端側
列状墓検出状況
（北より）
<2次調査>



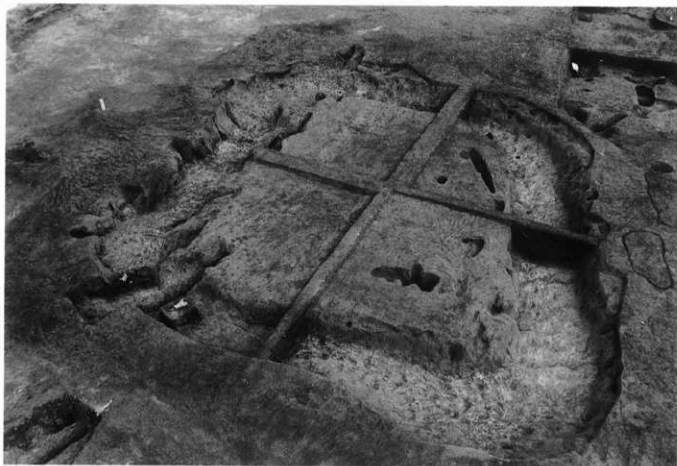
(1) 14号～18号墓（石蓋・木蓋土墳墓、壺棺墓）近影（南東より） <2次調査>



(2) 16号墓（壺棺墓）近影（北東より） <2次調査>



(1) 35号土坑(井戸状遺構)断面(東より) <2次調査>



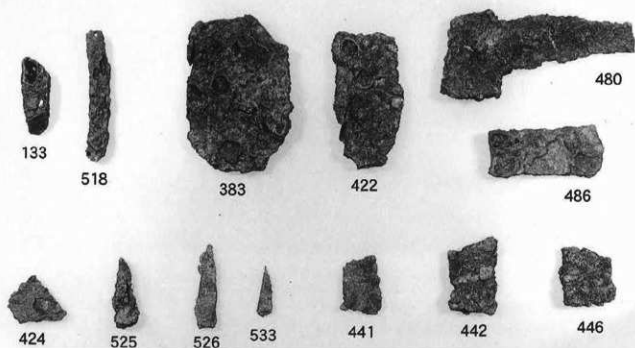
(2) 2号周溝状遺構全景(北より) <2次調査>



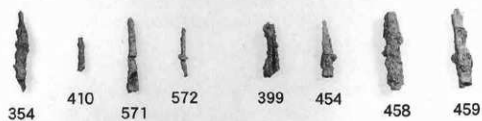
(1) 2号溝出土
大型器台・壺近影
〈2次調査〉



(2) 調査区北側
1号溝 (東より西)
〈2次調査〉



(1) 1次調査出土 鉄器・鉄片類



(2) 1次調査出土 鉄器・鉄片類

報告書抄録

ふりがな	にしやまのうえいせき							
書名	西山ノ上遺跡 (1・2次調査)							
福書名	福岡県八女市大字室岡所在遺跡の調査報告書							
巻次								
シリーズ名	八女市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 70 集							
編著者名	大塚 忠 治							
編集機関	八女市教育委員会							
所在地	834-8585 福岡県八女市大字本町647 TEL 0943-23-1982							
発行年月日	西暦 2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 " " "	東経 " " "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
にしやまのうえいせき 西山ノ上遺跡 (1・2次調査)	ふくおかけん 福岡県 やまうし ちやうむらか 八女市大字室岡 字西山ノ上	402109		33°12'47"	130°31'52"	2001 07 09 ～ 2001 12 28 2002 07 24 ～ 2003 02 13	約6,700㎡ 約6,500㎡	工場・店舗 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西山ノ上遺跡 (1・2次調査)	集落	弥生時代 鎌倉時代 平安時代	竪穴式住居 掘立柱建物 鍛冶関連遺構 環壕 土塙墓 溝状遺構 土塙 柱穴		弥生式土器 土師器 陶磁器 鉄器・鉄片類 砥石		弥生時代後期の鍛 冶関連遺構及び鉄 器・鉄片類の検出	

西山ノ上遺跡(1・2次調査)

八女市文化財調査報告書
第70集

平成16年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市大字本町647
印刷 (資) 東兄弟印刷所
八女市祈祷院563